

ジャン・パウル著『フィクスライン』、『シュメルツレ』翻訳

パウル, ジャン

恒吉, 法海

九州大学大学院言語文化研究院 : 名誉教授 : ドイツ文学

<https://hdl.handle.net/2324/2547327>

出版情報 : ジャン・パウル 研究書・翻訳書, pp.1-219, 2020-01-07
バージョン :
権利関係 :



ジャン・パウル著『フィクスライン』、『シュメルツレ』 翻訳
恒吉法海訳

Leben des Quintus Fixlein (1796, 1801)
Schmelzles Reise nach Flätz (1809)

恒吉法海・九州大学リポジトリ翻訳研究 14
2020 年 1 月 10 日

目次

『フィクスライン』

五級教師フィクスラインの生活

十五のメモ箱からのもの、ついでに一つの慰留分と若干の食卓にこぼれたブイヨン.....3

私の友人達へのメモ 序言の代わりに 4

五級教師フィクスラインの第二版のための私の序言の物語 7

少女達のための慰留分 26

1) ある天使の死 27

2) 月、一つの空想的な話し 30

我らの時代に至るまでの五級教師フィクスラインの生活 38

十五のメモ箱の形で

男性のための若干の固形ブイヨン 119

1. 想像力の自然的魔術について 120

2. 地方長官フロイデルの自らの呪わしい悪霊に対する告訴状 127

3. 利己的な愛もなく、自己愛もなく、ただ利己的な行動が存在するのみである 135

4. フェルベル校長とその一級生達のフィヒテルベルク[山地]への旅 140

5. 覚え書きの追伸 160

『シュメルツレ』

従軍牧師シュメルツレのフレッツ紀行

絶えず続く注と共に、ついでに或る政治家の許での悪魔の告解 162

序言 163

教理問答教授予定のアッティラ・シュメルツレの友人達宛ての回状。フレッツへの休暇旅行を含むもので、一つの序文と共に、先の従軍牧師としてに彼の遁走と度胸とに関するもの。 165

偉大な政治屋の許での悪魔の告解 205

解説 210

五級教師フィクスラインの生活
十五のメモ箱からのもの
ついでに一つの慰留分と若干の
固形ブイヨン
[食卓にこぼれたブイヨン説も]

私の友人達へのメモ
序言の代わりに

商人や著者や少女やクエーカー教徒は、自分達が交際するすべての人々を友人と呼ぶ。従って私の読者は、私の客人たる友、大学の友である。さて私は確かに数百人の友人に、同様に多くの数百の見本をプレゼントしており、――書店は各人に見本市の後、各人の分を、わずかな寸志や、植字工、印刷工等の人々への自発税と引き換えに、要求に応じて渡すよう依頼されているが、――しかし私は版全体を、フランスの著者のように製本工に送ることができなかった。それで当然先の部分の白い製本用紙片に欠けることになって、従って私は贈り物の受け手に何らお気に召すことを記すことができなかった。それ故私はタイトルの後、数頁白紙の部分を残すようにさせた。この白紙に今印刷させることにする。

私の本は、懺悔のように、三つの部分に分かれる。

最初の部分、所謂寡婦分は、二つの物語から成り立っていて、空想の帝国世襲台所管理女官が花の絵や花粉で（少なくとも私はそれをそのように定めている）飾ることになっていて、親愛なる友よ、私はこれを単に親愛なる女性の友人達に贈ることにする。まことに私は彼女達にこの二つの物語で、あたかもライブツィヒからこの見本市のプレゼントの代わりに、薔薇の花束形イヤリング―揃いを、あるいはオランダの紙に銀の縁取りの名刺を、

――あるいは喪の室内服を、それともメダル付きの白檀の扇を持参したかのように、大きな喜びを届けることになろう。彼女達は生来の花愛好者で、自ら良く描かれた花の絵であり、それ故本の中でも、自分達がよく水を注ぎ、刺繍し、手折るものを、――つまり小さな花々を愛している。運命は、道路監督官として、御身らの埃っぽい人生の舗装道路にそれらを差し込んで欲しいし、歓喜の薔薇が御身らの道路距離測定器、ロシアマイル里程標であって欲しい。私は、申し上げるが、御身らの慰める口ほどに、より良い吸入器を、つまり外科医のマッジがその名前の機械で和らげた、より深い胸の痛みに対するより良い吸入器、あるいは吸引器を知らない。まさにそれ故に、天は御身らに、我々の足裏が市民生活の火口の熱い砂の中を徒渉して行くとき、このヴェスヴィオ火山のより深い下の方に、静かな実り多い花々の地帯を恵んで欲しい、そして特に御身らの夫や父親に、暦を作る者達が太陽にそうするように、人間的顔を付与して欲しいものである。この顔は素敵な具合に男性的虹彩、太陽的虹彩を和らげるのである。

この本の第二の部分、最大の部分は、ある学校教師の生涯を含んでいる。これは――九、あるいは十の章を除いて、――すでに余り少女達に向いていない。それだけに少女達や私にとって、六とか五の他の章で私が勘違いしているならば、結構なことである。この伝記で著者は、親愛なる友よ、御身らに一つの満足を与えるというよりは、一つの満足を享受することを教えたいのである。まことにクセルクセスならば、新しい喜びの発明に対してではなく、古い喜びを享受するという立派な方法論、家政訓に対して褒賞を与えるべきであろう。

私は三つの方法しか、（幸福にではなく）より幸福になる道として見つけることができなかった。高みに行く第一の方法はこうで、つまり人生の集雲のはるか彼方へ上って行き、外的世界全体をその狼狽や納骨堂や避雷針と共にはるか足許に単に縮んだ子供用庭のように横たわっているのを見ることである。――第二の方法はこうで、つまり小庭に真っ直

ぐに落下して行き、溝の中に心地よく巣を作ること、その温かい雲雀の巣から外を覗くと、全く狼狽や納骨堂や止まり木は見えず、単に穂先は見えるだけで、その一つ一つが巣の中の鳥にとっては一つの木であり、一本の日傘、雨傘なのである。 — 最後に第三の方法、 — 私が最も難しく、賢いと思う方法はこうで、つまり両者を互いに交替させることである。 —

このことを今や人々に十分に良く説明したい。

英雄や — 宗教改革者や — ブルータス — ハワッド[John Howad(1726-90)、牢獄の衛生改善に取り組んだ] — 市民的嵐に感動している共和主義者、芸術的嵐に感動している天才 — 要するに一つの決心をした人間、あるいは単に多年生の情熱を抱いている人間、(たとえ最大のフォリオ判を書こうという情熱にすぎなくても)、すべてのこうした者達は、その内部世界でもって、外部世界の冷淡さや熱気に構える。狂人がより悪しき意味でそうするようなものである。すべての天才やすべての熱狂者を少なくとも周期的に支配するすべての固定観念は、人間を崇高に大地の食卓やベッドから、現世の[ナポリの有毒な]犬の洞窟、刺す茨、悪魔の壁から隔てて行く。 — 極楽鳥さながらその人間は飛びながら眠り、広げた翼の上で盲目にその高みで眠りながら、人生の地震や砕け波を、自らの理想の母国についての長く美しい夢を見ながらやり過ごす。...いやはや。この夢が恵まれる人は少ない。この少数の人々はしばしばさまよう犬ども^{*1}によって目覚めさせられる。 —

しかしこの昇天は人類の有翼の部分の為であり、ごく少数の為である。この昇天は哀れな事務職員に何の関係があろう。彼らの魂はしばしば翅鞘すら有せず、ましてやその下に羽を有することはない。 — あるいは最良の腹鰭、背鰭、耳鰭を持った束縛された人間、国家の魚槽に静かに立ち止まったままで、泳ぐべきでない人間にとって何の関係があろう。すでに岸边に長く繋がれた鎖あるいは国家が魚という名前で泳いでいて、泳げないのである。私は荷を課せられた国家の下僕、穀物書記、すべての部門の官房書記という常備軍、書記軍に、すべての国家の書記室のザリガニの背負い籠の中で上下に置かれたザリガニどもに、元気になるよう若干の刺草を被された者どもに、このような者どもに現世で浄福になるために一体どんな方法を示したら良からう。

単に私の第二の方法がそれである。これは即ち、組み立てた顕微鏡を手にして、それで覗くことである。自分達の数滴のブルゴーニュ酒は本来は紅海であり、蝶の鱗粉は孔雀の羽であり、薔薇は花咲く野原であり、砂は宝石の山であると覗くことである。この顕微鏡の楽しみは、すべての高価な鉱泉の楽しみよりも長持ちするものである。...しかし私はこれらの隠喩を新たな隠喩で説明しなければならない。何故私が『フィクスラインの生涯』をリュウベック書店へ送ったのか、その意図はまさに、この人生では — それ故このメモではそれをほとんど必要としないが、 — 全世界にこう打ち明けることなのである。つまりささやかな感覚的喜びを大きな喜びよりも高く、ナイトガウンをフロックコートよりも高く敬意を払わなければならない、[富の神の]プルートの五度当たり籤をその一度当たり籤よりも後回しに、某々金貨を非常用ペニヒ貨幣よりも後回しにしなければならない、

*1 吸血鬼はそう呼ばれる。

我々を幸せにするのは大きな幸運ではなく、単にささやかな幸運であるということなのである。―― このことが上手く行くと、私は私の本を通じて、後世に男達を教育することになる、つまりすべてのことで元気付くような、部屋やそのナイトキャップの温かさで、―― その枕元で、―― 聖なる三つの祭日で、―― 単なる使徒の日で、―― 夕方の自分達の妻の道徳的物語で、彼女達が午後外交官夫人としてどこかの未亡人の家を、夫を連れて行けない家を訪問したときの物語で、―― こうした彼らの短編女流作家の瀉血の一日で、―― 極寒の冬に備えて屠殺され、貯蔵され、塩漬けにされる等々の一日で元気付くような男達を教育することになるのである。お分かりのように私はこう主張する。人間は裁縫鳥になるべきで、これは轟々たる、嵐であちこち傾く人生の木の打ち合う枝の間に巣を造るのではなく、その葉の一つの上に巣を造って、その中で温もるのである。我々の世紀に対してなし得る最も必要な説教は、家に留まることという説教である。

第三の昇天の方法は、第一と第二の方法の交替である。先の第二の方法は、ここの現世で単に果実採取器となるばかりでなく、鋤の刃も両手にすべき人間にとって十分に結構な方法ではない。第一の方法は彼にとっては結構すぎる。彼は必ずしも、ルーゲンドス[Rugendas(1666-1742)、アウクスブルク出身の戦争画家]のように戦闘最中に戦争絵だけを描き、バックハイゼン[Ludolf Bakhuizen(1631-1709)、小舟で好んで危険な目に遭った]のように難破したとき難破を描くためにスケッチの板の他には板に手を伸ばさないという力を有していない。そのときには彼の痛みは彼の疲れ同様に長く続くのである。更になおしばしば力の余地が欠けていて、人生のごく微小な部分でさえ、働く魂に対して、アルプスや―― 革命、―― ラインの滝、―― ヴォルムスの帝国議会、―― クセルクセスとの戦争となってしまう。それで全体の為にはなお更に結構なことである。人生のより長い部分は三和土のように平板に叩かれた牧場で、崇高な[スイスの]ゴットハルト山を欠き、しばしば退屈な氷原となって、朝焼けで一杯の一つの氷河も欠いている。

しかしまさに歩行を通じて人間は上昇のために、小さな喜びと義務を通じて大きな喜びと義務のために、休憩し、休養することになる。勝利する執政官は戦闘の三月広場[シャン・ド・マルス公園のこと]を亜麻と蕪菁の畑に鋤直し、戦争劇場を一つの家庭劇場に改造する術を心得ていなければならず、その後彼の子供達が、『子供の友』[Felix Weiße(1726-1801)による子供向け雑誌]からの若干の立派な作品を上演するのである。彼がこうできるならば、彼は立派に天才的幸福の道から家庭的幸福の道へ入って行ける。かくてこの人は私自身と余り異ならず、私は今―― それを述べることは謙虚さが私に禁ずる筈のものであるが、―― 私は、申し上げるように、このメモを記している最中に、なおこう思い出すことができたのである。つまりメモができたなら、この著者の為にバターで焼いているローストの薔薇とニワトコの実もできあがるのだ、と。

私はこのメモに対し、更に追伸を（この本の最後に）付け加えるつもりなので、それで私は更にこの作品の第三の、半ば諷刺的、半ば哲学的部分について言及すべきであろう若干のことを、意図的に追伸の為に取っておくことにする。

ここで著者は、メモの権利に対する敬意から、自らの半端な匿名性を破棄して、初めて自分の本当の名前の全てと共に署名することにする。フォークトラントのホーフにて、一七九五年六月二十九日[聖ペトロと聖パウロの使徒日]

ジャン・パウル・フリードリヒ・リヒター

五級教師フィクスラインの
第二版のための
私の序言の物語

第二版のための 序言の物語

あるスイス人は（シュトルベルクの報告によれば）かつてできるだけ激しく部屋から安楽椅子に飛び乗り、またその椅子から下へ飛び降りた。ー そのことを尋ねられたとき、彼はこう答えた。「元気になるのだ」。ー しかし私のようなノルマン人は熱くなって、一つの章の案を上手く企画しようと思ったら、すでに半日の旅を必要とする。すでにエラスムスは彼の『痴愚神札賛』を鞍上で（イタリアへ旅したとき）仕上げた。そしてイギリス人の作家サヴィジ[Richard Savage(1697-1743)]はその悲劇『オーヴァベリー』をロンドンの露地で仕上げた。ー もっとも彼の生涯そのものが一つの悲劇で、市民的悲劇ではなく、貴族的悲劇で、彼は自分を非嫡子で生んだ母親、マックルズフィールド伯爵夫人から毎年二百ポンド支払って貰っていたのである。彼女に誹謗文を書かないためであって、まさにそうすることが単に彼女に対する誹謗文となるであろうからである。しかし私についてはまさに知られていることは、数年前大旅行をして[実際は空想旅行]、その結果若い殿方に似て『ミイラ』『見えないロッジ』の副題]の設計図、骨格と共に帰還できたということである。いや私がいつか『オデュッセイア』のような叙事的作品に取りかかる決心をしたら、この歌い手は多分主人公自身と同様に長い絵のように美しい発見の旅に出かけなければならないことだろう。

これに対し第二版のための一つの序言の産出にはホーフからバイロイトへの徒歩旅行、三つの郵便宿駅を越える猫の二つ飛び以上のものは必要ないと私は思った。しかし私は後世とその先祖を驚かすに足るものとしては、私が二つのものをバイロイトの舗装道路に携帯していながらー その序言の織機に閉じ込められて、織工の梭を使用しつつ、ー 出掛ける道路に携帯していながら、まともなものを仕上げられないでいると申し上げて、若干の足しとしている。つまり私は眼前に開けっ広げの写字板を有していて、序言が文ごとに思い浮かぶと、そこに序言を記していたのである。しかしその序言でかくも妨害された著者は少ない。詳しく語ることにしよう。

人間の倫理的歩行はその身体的歩行に似ていて、これは連続した墮落に他ならない。

その下の許で国道税が徴収され、税を払ったあるレディーの対面馬車の背後に降りて来たホーフの国境棒が、序文の頭を強く猛禽類かゆで卵置きのように当たった。私はこのレディーの先を行って、彼女の顔を見たいと思ったのである。それ故先に行きながら序言を織り上げることをほとんど考えていなかった、もっとも対面馬車の後を追っても甲斐はなかったのであるが。未知の女性は未知の本とは全く違う。私はまだ読んでいない本を、つまりぬ本という予告を批評家のように前提とせずには、両手に取ることはない。これに対して未知の女性の場合には、どの男性も、仮にすでに三万人の偶像崇拜的女神と知り合いになり、忘れることにしたとしても、新たにこう仮定するものである。この三万一人目の女神は初めて真の紛れもない聖なる乙女、ー 主を生む女性、ー 女神そのものである、と。このことを私も同様に車道で仮定した。少なくとも私は、その髪粉をかけられ、巻き毛の後頭部に曙光がはっきりと降り注いでいる一人の女性を私は教養ある女性の頭部の一つと数えることができた。これらの頭部はー ルソーによれば、鉄と穀物とがヨーロッパ人を文化人化したということなので[『人間不平等起源論』参照]、ー その両者

からのより繊細な製品、つまり髪針と髪粉というものはかの教養のお蔭なのである。この教養は、望むらくは、市民階級の女性的頭部にあってはすでに何か普通のものであろう。一人の女性のこうした外面的文化に対しては、夫たるもの反対すべきではない。自分の妻の許で、立派にできたパパンの料理機械[Dionys Papin(1680年発案)]、――シェーファアの洗濯機械、――イギリスの紡績機械、――ギルタナー[Christoph Girtanner(1760-1800)、医師]の呼吸機械を所有したい夫なら反対すべきではない。さもないと夫はこう示していることになる。自分は無邪気な教養を内的無垢と、そもそもこんなものは名士夫人達は全く免れているというのに、混同している、と。文化は砒素と同じで、鉛溶解や外科医にとって、単に外面的に用いられるならば、幾らか立派なもの、治療するものとなる。容易に燃え上がる女性の頭の内部では、夫は明かりを用心から芯切りし、吹き消すものである。丁度同じ用心から夜、ウィーンの皇帝の図書館では物理的明かりを許さないようなものである。

そのとき何と森がレディーを呑み込んでしまった。私は空しく公道に残っていた。失望して私は第二版のための序言を思い出した。私は写字板に序言を始めた。ここで私がホーフ近くに至るまでに仕上げた序言が続いている。

第二版のための序言

「詩人はしばしば焼かれた去勢雄鶏のようにその翼の下に、その翼で詩人は学的世界のすべての大入りの窓の前で上昇するのであるが、右側にその胃を、左側にその肝臓を有している。そもそも人間は百度も考えるものである、自分は古いアダムを脱出した、と。しかし彼はアダムを押し戻したにすぎない。人々がハムの黒い外皮を薄く削って巻き上げるが、しかし一緒に載せて、その上花と共に縁取りするようなものである」。...

しかし今や私の背後で太陽が昇った。――この永遠の、オーケストラと画廊で一杯の自ら入り乱れる劇場の照明を前にして、序言や書評のザリガニ漁明かりや燐光を発する動物ども、つまり著者どもは、何と色褪せて、生気がなく、黄色みを帯びていることであろう。――私はしばしば、自然のこの長く見通し難い画像室の年ごとの絵画展示を前にして、本の章飾りや章末飾り、見返しや植字工の字間スペースを思い出すことにしている。

――しかし正午のときを除いては、上手く行かない。夕方とか朝方は駄目である。というのはまさに朝方や夕方には、それ以上に青春と晩年には人間はその夢の像や星の像で一杯の現世の頭を静かな天に向けて、天を長いこと見つめて、感動して懂れるからである。これに対して人生の日中の蒸し暑い最中には、人間は汗の滴で一杯の額を地球に、その松露と球根植物とに傾けるものである。かくてカルタの中間層は反古から成り立っていて、単に二つの裏側と表側とが上品な印刷紙から成り立っている。あるいはかくて虹は単に朝[東]と夕[西]にのみ生じ、南には決して生じないのである。

通りがますます高く谷を越えて上がって行ったとき、私は誰に忠誠を誓ったものか、分からなくなった。――私の左手の、崇高な並木道と山々の柱廊に対してであろうか、それとも真っ直ぐ前方に見える教養ある頭部の魅惑的対面馬車に対してであろうか。――左手のタボルの山の連なりは精霊が変容し、切り抜かれた足跡には飛び去った天使の跡[『巨人』第二十一周参照]がしっかりと残っていると見て取った。しかし対面馬車には飛

び去った天使自身が座っていたのである。

序文のことは考えておれなかった。幸いミュンヒベルクから遠からぬ所で、魂を葡萄の蔓のように支える自然の大なる足場の隣に、更に一つの足場があるのに気付いた。それは魂を矮小な小豆のように押し潰すもので、つまり絞首台であり、それにその上で植物採取をしている身なりのいい紳士がいた。 — ちなみに言おう。芝生のベンチの上とか要塞の中とかあるいはウォウウェルマンの画布の上でも、絞首台上の草にかなう素敵な芝生の緑はなく、これはさながら勝利する人類の一つの収穫祭、攻城祭の花輪である。いずれにせよ、多くの赤い雲が一杯の血の雨となって大地の上にあり、滴っている。 — 私は今や序文者と自覚して、こう思い描く。「汝が最初の宿駅、ミュンヒベルクの前に立ち、最初の射撃以上のものはまだほとんど序文として述べていないことは隠せないことだ。このようなやり方ではゲフレースや、ベルネック、ビンドロッホを通っても、序言が何ら増大することはない。殊に汝が先の将来の言葉に楔石の如く似合う言葉しか発しないとすれば。汝にとっては、フォン・モーザー殿[von Moser (1701-85)]のように仕事するのは自由なのではないか（汝のメモ箱の名親、先駆者殿だ）、この殿はその生涯で関連し合う全紙を書き上げたのではなく、単に警句や、格言、金言だけを書き、要するに編み細工は何も書かなかったのだ」。私は是認さざるを得なかった。それ故立派なピアノのように束縛[フレット]なく、官庁指令に従って続けて、絞首台上の植物の他には何の関連も雑种植物もなく、次の次第となった。

第二版のための序言

「人類が過ぎ去った諸世紀のすべての掻き傷や痘痕を、先の野蛮さのすべての後陣痛や母斑を、二回にしてしか撤去できないのは、人類の永遠の無作法である。 — 一回目は時間を通じてで、それから二回目は（すぐその後であるか、しばしば次の世紀となる）勅令や、ドイツ圏決議や、帝国議決、諸国会議決、国家安寧法、上級司教決定を通じてである。 — かくて我々の忌々しい壊血病的、錆びた、劣等な愚行や慣習はすべて侯爵達の体に似ることになる。この体は同様に二回埋葬される。最初は密葬で、臭いを発するときで、二回目は公然たるもので、空の二重のパレード用棺によるもので、この棺の後に哀悼の旗、哀悼の外套、哀悼の雌馬が沈痛な面持ちで続く」。 —

序言の続きが続く。

絞首台植物誌の植物学者は私が書いている間に私に追い付き、邪魔をした。私はハールハール^{*1} 出身のフライシュデルファー芸術顧問官を眼前にしていることに驚いた。彼はバンベルクへ行って、屋根か、山から、どこかの期待される主戦闘を見物するのであって、この戦闘を多くの戦争画の画廊監督として、いや自らホメロスの戦争の批評家として見逃すわけにいかないのである。 — これに対し私の顔は彼にとって一つの未知の内奥のアフリカであった。次のことをまず述べる必要のある男の方は、文学史に余り通じていない

*1 私が間もなく『巨人』という名前で出版する物語の舞台となる侯国はそうに呼ばれる。それ故私は芸術顧問官フライシュデルファーを十分に良く知っているのであるが、しかし彼は私を全く知らない。

のに違いない。つまりこの芸術顧問官は『新一般ドイツ文庫』の批評代理店でも、ハールハールやシェーラウ、フラクセンフィンゲンの批評代理店でも最良の書店員の一人として共同作業をしているのだ、と。鯉の池にカボチャを鯉の餌として投げ入れるように、彼はその滋養ある頭を多くの空腹のジャーナル界にブイヨンの固形球として投入している。私がそれでも決して何らかの悪さをしたことのないこの芸術顧問官は、すでに幾つかの箇所で明確なウィンクを寄越していた。つまり彼は私のことをちょっと批評してみたい、と。かくて私は致命的気分であった。というのは批評家と著者の間には同時に、かくも大きな類似性と反感とが見られないものであるからで、もっとも狼と犬の場合も同じである。それ故私は私の名前を自らの偽貨幣として改鑄し、自分を全く別の人間と称した。「ここにいますのは」と私は芸術顧問官に言った、「周知のエギディウス・ツェベデーウス・フィクスラインです。その生涯については私の名親殿のジャン・パウルが世間に第二版を贈ろうと考えています。―― もっとも私は日々更に生き続け、従っていつも、描写し得る新たな人生を追加しているわけですが」。―― 芸術顧問官の魂は、今や、『世界図絵』の模刻された魂のように点で合成されず、感嘆符で合成されることになった。他の人々の魂は括弧や引用符で成り立っているが、私の魂は思索線[ダッシュ]で成り立っている。彼は、さて、私を五級教師と考えて、私を調べ上げた。私の性格と私の家政が印刷されたそれと適しているか、どうかと。私は彼にフィクスラインの多くの新しい特徴を告げた。しかしそれは第二版に載っているものである。さもないと彼が私に公然と、私が私の原物を痩せ細った具合に描写してしまったと非難するからである。彼は私の路上での話しを早速羊皮紙に記した。何も記憶できないからであった。それ故彼は幾つかの頭脳強化の薬草を薬草帽子に絞首台で採取したのであった。フライシュデルファーは私に告白した。ある者が彼の抜粋や蔵書のある彼の書斎を燃やしてしまったら、一挙にすべての自分の知識と意見が奪われてしまう。知識と意見は書斎に保管しているのだから、と。それ故、自分は路上では無知で愚かなのである、さながら自分自身の単なる薄い影絵であり、模刻であり、その自我の科白のない端役、不在時管理人である、と。

そもそもドイツの名声の神殿はアテネのミネルヴァの神殿の美しい模刻であり、その神殿には忘却のために大きな祭壇があった¹⁾。いやフィレンツェ人達が自分達のユスティニアヌス法典に単に恭しく大礼服と松明を持って近付くように、我々も同じ畏敬の念から我々の詩人の作品に単に社交のフロックコートを着用して手に取り、この作品を自ら蠟燭に近付け、かくて―― 海の泡からなるすべての立派な頭の中で炎を煽る。―― 私はよく尋ねられたものである。古くなっていく世界において、その世界の記憶の中では最古の作品群、つまりプラトンとかキケロとか、それどころかサンキュニアトン[フェニキアの作家]の作品群が、千もの見本市を経て、残っているのに、それでも最新の作品群、例えば直近の見本市の騎士小説や、カントやヴォルフや神学者の論争誌、『バックルの生涯』、最良の就任式演説集や即興詩、司教牧書、学的新聞は、しばしばそれを耳にするその月のうちに消えていくのは、何故であろうか、と。私の返事は結構なもので、こういうものであった。世界ほどに立派な老いた神秘的人物はなく、これはデンナー[Balthasar Denner

*1 プルタルコス『饗宴』1の9あるいは6。

(1685-1749)、肖像画家]作の真の老いた皺を刻まれた頭部であり、今や（不思議なことではないが）老衰で衰弱し、ほとんど子供っぽくなり始めていて、かくて世界は当然なことに老いた人物の害毒を免れず、老人は青春時に聞いたり読んだりしたことすべてを的確に把握しているのであるが、これに対して晩年に見聞したことは一時間のうちに忘れるのである、と。それ故に我々の本は製紙工場の檻樓、素材は本である檻樓に似ることになって、製紙工場主は檻樓の中では最新の檻樓を、いつも古い檻樓よりも早く腐ったものにするのである。 —

実際私はこのことを第二版の序言の中で特別分として配置することができたであろう。

ミュンヒベルクについて芸術顧問官ははなはだ立腹した。山の上の家々か、あるいは下の家々はなくなっていい、と。彼は私に尋ねた。建物というのは建築学的芸術作品以外のものであろうか、これらは住むよりも眺めるにふさわしいもので、単に誤用として入っていることになろう、これらの作品はまさにフルートや大砲のように空ろにくりぬかれているからで、蜂のように空ろな木に巣くって、その木の花々の周りで戯れていないとしたら誤用になろう、と。彼は芸術作品の中に住まうことの滑稽さを示して、言った。それはあたかもヘーム^{*1}の陶器をチーズ瓶やインク壺に使うようなものであり、あるいはラオコン像をコントラバスケースに、メディチ家のヴィーナスを頭巾箱にくりぬくようなものである、と。彼はそもそも国王が村々に我慢ならずにいることができることを不思議がって、こう勝手に述べた。自分は芸術家として、一つの町全体が煙と消えても不愉快ではない、そうになったら新たなもっと美しい町を造る希望が生まれるのだから、と。

彼は私から離れなかった。今や彼は、ミュンヒベルクの外部にいて、ミュンヒベルク人の代わりに私自身を攻撃して、私の作品を笞刑に処した。いやはや第二版の序言も去って行く対面馬車も私と私の願いを絶えずはるか後に置き去りにして行く砂塵しか残していなかった。しかしこの砂塵は私には多くの三月の花粉やポンス用粉末、ダンヤモンド粉末とも引き換えにしたいと思わない大事なものであった。芸術顧問官、刑罰裁判官は今や私の名親、 — ジャン・パウルを船底くぐり刑、袋入り溺死刑にした。というのは私を、申したように、五級教師と考えていたからで、 — ジャン・パウルに対し、彼がその伝記上の粥を農民のようにまことに滑らかに描くことをしていない、そもそも彼は批判の鏡の前で仕上げることをしない、と難じた。私は侮辱された不在の男の振りをして、言った。私が彼の口から知っている限りでは、彼はまさに批評の跳躍板、跳躍棒、鏝の上に自分のプシュケ[魂]の羽根よりも頼りにして昇っており、いや彼は批判的手紙を書いていて、その中で批評家を犠牲にして批評を称えて、駆使しているのである、と。 — まさにこの批判的駆け引きが彼の作品をととても膨らませており、しばしば鼻をかむと、鼻がより大きく、長くなるようなものである、と。 — まことにそうなのである。私は一人の人間がほとんど半アルファベット[1 アルファベットは 23 全紙]もない小品をどうして書くことができるのか理解できない。遠くの一全紙は近くでは必然的に一冊の本に拡張するのであり、一冊の本はリース[480 全紙]に拡張する。私がまさに投げ飛ばすとき、新生児の熊のように鼠ほどの大きさもない作品を、私は時と共に舐め回して、大きな田舎熊に仕上げる。

*1 壺上の絵の最良の画家。

批評家は勿論単に作家がいくら保有したか見るだけで、いくら投げ棄てたかは見ない。それ故願わしいことは、著者達が自分達の作品の背後に書評家のために、自分達が先に容赦なく削り取った惨めで愚かな思考の完全な収集を付録させることであろう。実際著者達は、例えばヴォルテールのように、自分達の作品の最後の編集の際にそのことを行い、後により繊細な読者のために、初版のゴミの檻樓の土壌をくっつけ、貯えておくことをするだけに尚更のことである。これは例えば幾つかのプロイセンの連隊が、馬の毛を取っておき、自分達が馬櫛で洗ったことの証拠に準備しておかなければならないようなものである。

—

今や彼は次第に酸っぱくなって、ビールの酢からワインの酢になった。彼は私に面と向かって言った。「貴方は誰のために戦っておられるのか、御存じない。貴方の名親殿は貴方の七分像を自らの一つの『バンボチャーデ』[子供の遊び]となしており、貴方に知的な長所を認め、呈示することをなさっていない。これらの長所を貴方は、今私が耳にしているように、本当に有しておられるのに。私は印刷紙上では貴殿にほとんど関心を抱けなかった。ようやくこの国道では抱けますが」。私は彼がこの関心も撤回して欲しいところであった。そして故意に私のフィクスラインの性格から外れて、少し気分を害して言った。

「読者が、殊に女性の読者が、私の滑稽な性格を、あるいはそもそも不完全な性格を味わえないとき、私はこう上手く説明しています。彼らは執筆する諧謔家に趣味を有しない、ましてや行動する諧謔家には有しない、と。それに狭小な空想にとっては、完全な性格より、不完全な性格に身を置いて考えること、そして興味を抱くことは、より一層難しいことです。 — 最後に、読者は、自分に似ている主人公の方を、自分に似ていない主人公よりも好みます。似ている主人公というのは、いつでも、立派な人間のことを意味しているのです」。 — その通り。というのはプルタークがその伝記ですべての偉大な男を第二の偉大な男と比較考量しているように、読者は伝記のすべての偉大な性格をこっそりと第二の偉大な性格と（これは自分の性格である）まとめて、これからどういう次第になるのか注意しているのである。この理由で少女達は完全な女性らしい美と優しさとをはなはだ高く長編小説の描写では評価していて（かくも詩人はこの最も致命的なものを美化する）、現実の造型や彫刻の中ではほとんどそれに憧れない。 — 丁度醜いもの、蜥蜴や復讐の女神は、単に絵画では描かれるが、しかし彫像作品では気に入るようには描かれないようなものである。 — つまり少女にとっては長編小説は忠実な鏡であり、少女はそこにヒロインを見ることができるのである。

今や芸術顧問官は、「三本の焼きソーセージ」と呼ばれる村の前で、そこで山羊の乳を飲みたいという希望を述べた。私は彼に尋ねた。高貴な人々のようにしたいのか、彼らは

— ウアルテが一週間山羊の乳を飲むことを、天才を生殖する家庭薬と提案しているから、 — まさにそれ故山羊の魅力に身を任せ、それからどういう具合になるか見ている人々であるが、と。彼らが、少なくとも侯爵達は、その乳を肺結核故に飲んでいるのではないことは、彼らがその後を試みていることが証明しよう。しかし顧問官は、運命の女神が生命の糸を全く彼の脚の紡錘から巻き取っているが故に、ジュピターの乳兄弟となったのであった。彼はすでにさながら、博物標本のガラス棚の剥製の、立派に干涸らびた、エーテルで満たされた鳥として立っていた。彼は言った。自分は自らと本とを犠牲にするか、あるいは子供を犠牲にするかしなければならない、と。それは丁度と、私は付け加えた、

農夫が亜麻薺か亜麻の両方のうちどちらかにひどい扱いをしなければならないようなものだ、と。

乳療法の間に、我々兩人は、すでにそうであった以上に、互いにもっと憎み合うようになった。そして我々の反感の呑み込まれたヒキガエルの卵は、高貴な部分のわずかな温かさを通じて、正規のヒキガエルへと孵化されたのであった。私は彼に腹を立てた。ここ「三本の焼きソーセージ」村に立っていなければならず、多分成り行きとしては何ら素敵なものを見るか、書くことをせずに（対面馬車と序言のことを言っているのである）ゲフレースに着くことになったからで、そもそもフライシュデルファーが同時に燻し金であり、金雲母であり、雷金であったからである。これよりひどい混淆物はない。彼はそれどころか嘔みながら歯医者のように彼の門歯を引き出さなかつたらうか、単に犬歯のみが本物で真正なものであったのだから。彼が上着のボタンを外したとき、彼のチョッキの腹が絹で大理石模様で、チョッキの背中では逆に白く、リンネルであることを、私ははっきりと見る事ができたのではないか。あたかも穴熊のような具合で、これは、ビュフォンが述べているように、すべての動物どもの逆として、より薄い毛を背に有し、より濃い毛を腹に有しているのである。 — そして彼の弁髪に関しては、多分に確かなことは、彼のは単に先端にのみ自らの毛髪を示して、残りは長く偽物であって、しかし私のは小さく本物なのである。まさにあたかも自然とリンネが二つの周知の動物[馬と驢馬]のように我々を区別しようと欲したかのようである。^{*1}

彼本人としては同様に怒りのラヴェンデル酢を立派な酵母の上に置いて、それを私にペスト患者のように注ごうとした。つまり彼はこう想像していた。私は彼を騙して、あるいは彼をからかっている、全くそう自称している五級教師ではなく、多分に私の名親本人であろう、と。彼は私の明察から推定していた。私の正体を掴むために、彼はその工場の檻樓裁断機を発動して、それで一度に私の作品すべてにかかってくる。私は早速彼自身の言葉を述べることにしよう。私は確かにしばしば天に祈ったものである。私のために学術新聞に一羽の雄鶏を送って欲しい、私が文学上のペトロとして墮落したら、鳴いて、墮落のことで私が泣き出すようにして欲しい、と。あるいは単なる去勢食用雄鶏でもいい、それが他の雄鶏のように、私の雛を温め、連れ回すようにして欲しい、と。しかしこの雛に対する禿鷹のことを私は請願したことはなかった。私は自分がかつとなってきたのが分かる。彼はすでに「三本の焼きソーセージ」で話し始めて、ゲフレースまで続けたのである。 — その際彼は私をいつも貴殿と呼び、ジャン・パウルを私の名親殿と呼んだ。 — そして主張した。「ギリシアの形式よりも美しい形式は更にありません。ギリシアの形式は素材の断念を通じて最も容易に獲得できます。^{*2} — （それ故現今では、後の諸世紀の学術的荷を投げ棄てて、いわば身軽になって、ギリシアの舞踊手本に従って最も立派に動いている）。形式には体積は余り関係せず、形式は体積をほとんど必要としません。すでに純粋な意志が何の素材もない一つの形式であるようなものです。（そしていわ

*1 私は「全体毛深い尾を持つ馬」 — 彼は「先端に一杯毛のある馬」[驢馬]、リンネ『自然の体系』、綱1. 目4.

*2 すべての括弧の文は私の追加文、芸術顧問官のことを説明している。

ば意欲の意欲の中であって、丁度不純な意志が無意欲の意欲の中にあるようなもので、かくて美学的形式と倫理的形式とがその素材に関連する関係は、幾何学的平面がそれぞれの所与の現実の平面と関連する具合である)。 — それ故シュレーゲルの陳述[Die Griechen und die Römer,1797]が説明され得ますが、つまり何の素材もない純粋な思惟が存在しますように、(このようなことは全くのナンセンス)、また素材のない立派な詩的描写が有り得ます。(いわば単に自ら錯覚して描写しているもの)。 — そもそも形式からますます多くすべての内実をくり抜いて、皮を剥がなくてはなりません。仮に芸術作品がシラーの要求しているかの完全性を達成すべきときのことです[「美的教育について」の第二十二の書簡]、つまり芸術作品が人間を戯れと真面目さのために同様に自由にかつ有益にするという完全性のことです。(この高度な段階を詩文の崇高なジャンルは、例えば、叙事詩、頌歌は、人間的性質の仕組みのせいで、無意味で空虚な素材によるか、あるいは或る重要な素材の空虚で無意味な取り扱いによるかすることで窮める他ない。しかしまさにこの取り扱いは単に平板な芸術作品で見られることなので、それ故、劣等な芸術作品は全く完全極まる芸術作品と同じく凡庸な作品という区別の印を共有することになる)^{*1}。 — 諧謔ときたら、これは棄てるべきものであると同時に享受し難いものです。本来諧謔は古代人には見られませんので」。...

私が単に次のことを挿入したら、フライシュデルファーに続けて貰おう。私はいつか批判的小品の中で巧みにこう描写するつもりである。つまりすべてのドイツの芸術批評家は(最新の批評家[ジャン・パウル]を除いて)諧謔を単にひどい具合に解剖するばかりでなく、更にまた(これは予想していないことだった。美の享受はその解剖学の無知によって得るものが大なのであるから)、一層情けない具合に享受している。もっとも彼らは暗闇の裁判官としてアレオパゴス法院官に似ているのであるが、つまり彼らは冗談に対し笑うことが禁じられていたのであり(アイスキネス『ティマルコス弾劾』)、あるいは冗談を書くことが禁じられていたのである(プルターク、「アテネの人々の名声について」)。

— 更に、諧謔の曲がった線は確かに反省することがより難しいのであるが、しかし諧謔は何ら不規則なもの、恣意的なものを考えていない、さもないとそれを発する者しか楽しくないであろうからである。 — 諧謔は悲劇的なものと形式や技法を共有するが、しかし素材は共有しない。 — 諧謔は(つまり美学的諧謔で、これは実地の諧謔とはすべての描写がその描写された情感や描写しつつある情感とは異なるように区別されるものである)、単に長い理性的文化の果実であって、諧謔は世界の年齢と共に、個人の年齢との場合のように、成長して行かなければならないものである。

フライシュデルファーは続けた。「この試金石に対して私の名親殿の作品をかけてみると、これらの作品にはほとんど単に素材だけが目標とされているのですが、文芸新聞の書評家がその上例えば神性とか魂の不死、人生の軽視等々といった曖昧なこのような素材の

*1 効果の不足を最も劣等な芸術作品は最も完全な芸術作品と共有している。丁度無感動がモンテーニュによると、あるいは無知[docta ignorantia, Nikolaus von Kues による]がパスカルによると、まさに二種類の人間の許で、最も劣等な人間と最も高貴な人間の許で見られるようなもので、つまり劣等な者達の許では生まれついていて、最も高貴な者達の許では苦労して獲得されているのである。

選択故に称賛しているのは理解し難いことです」。

ー こう言いながら我々は丁度ゲフレースに歩み着いた。私は私に半ば馴染みのレディーがネットメロンのようにまだそのヴェールに包まれて出発するのを見た。それ故不吉鳥の芸術顧問官がその雌山羊のシャーベットを「三本の焼きソーセージ」村で摂取しなかったら、私は幸運な目に遭って、彼女がロッホミュラー氏の許で、御者と馬に何ほどかのものを与えているときに、丁度出会えていたかもしれないのであった。しかしそのような次第とはならなかった。私は心の中で激昂していた。そして内面で次のような攻撃を芸術顧問官に対して行った。「汝惨めな霜柱の<ロトの塩柱>よ。汝多くの心の空洞化された中空錐よ。吹き飛ばされた、雲雀の卵よ、この卵からは決して運命は歌声一杯の、空飛ぶ、歓喜に酔った心を孵化することはない。汝の欲することを言うがいい、私は私の欲することを書くことにする。ー 汝は私の製図用烏口も私の目も、永遠の氷壁から逸らすべきではない、その氷壁には隠された太陽の炎が戯れているのだ。それに第二世界の星雲からも、遠くに離れていて単に一秒の視差を有する星雲からも逸らすべきではない、それに須臾の人生の須臾の暑さを和らげるもの、蛹の中に折りたたまれた翼を広げ、我々を温め運んで行くすべてのものから逸らすべきではない」。ー

今や全くこのギリシア好みの造型家は、エーテルの半球の美しい一日と青いガラスの鐘を称えて言った。自分はここでは画家として語っていない、画家は晴天を描くのを好まないからで、美しい日々がその詩にとっても有益な詩人として話している、と。かくて私は熱心に絶えず彼に対してますます怒りを募らせていった。殊にプラトナー[Platner(1744-1818)]によれば立腹は明らかに腹に都合がいいというからで、ー それ故学者達は、いつも惨め極まる腹を有しているから、互いに交互に批判を応酬する学術新報紙上で更に強力に立腹すべきであろう。ー 私は意味もなく唇を動かして、彼に次のような小声の悪口をぶつけた。これは私が内面ではなかったが、陳述したものである。「私の前の形式のない形式屋は全宇宙で、全宇宙がモデルとして座ることにしか注意を払わない。ー 彼はパラシオス[パラージウス]のように[Seneca:Controversiae, II 17]、そしてかのイタリア人[ミケランジェロ]のように、拷問して、彼らの痛みをスケッチ、試作して、プロメテウスとか磔刑とかを描こうとする。ー 一人の息子の死は彼にとって願わしくないものではない、この息子の骨壺は、エレクトラの配役でポルスのような俳優にとって、三回の劇の稽古よりも更に加勢となるのであるから。ー 無数の農民は田舎風の詩のときとか、喜劇的オペラの際でさえも若干有益である。エウスタティウス・ネロ[Eustathius von Thessalonikeとの合成]ときたら、燃え上がるローマで美しいホメロスの描写の注解をし、オルロフ將軍ときたら戦争画家、海洋画家[Philipp Hackert]に、会戦場と爆破された船を準備して必要なモデルを提供するのだ」。

こんなのは悪魔にさらわれてしまえ。

しかし声高に言うことは、軽蔑の念からもはや私は芸術顧問官に対してほとんどしなかった。私はベルネックに急いだ。そこには対面馬車の中の飛んで行く蜂の女王が少なくともスूप皿の前で止まっているに違いなかった。私は衷心から願った、一つか二つの馬車の車輪が煙を出し始めて、黒い森の蝸牛を捕まえて、それでタール不足の代わりに[車輪

の]ボスに油を差すために止まらざるを得なくなって欲しい、と。私の将来の書評家はとても疲れ、腹ぺことなって、胃液よりも[関節の]滑液に欠けているので、逍遙学派の運動を蠕動運動と取り換えることを欲した。しかし私は立ち止まらずに、彼はその空腹と共に後を追って来た。「喜んでください」と私は言った、「貴方は今二つの状況、画家と詩人とがほとんど、あるいは全く、自分から知らせる術を知らない状況を生き生きと感じておられます。――つまり空腹と疲労です。――私はシャツをまとった百姓を見るたびに（向こうで一人の百姓が鋤き返しています）、一つ思います。私はシャツが襤褸屋の許に行き、草稿用紙となるまでに、それに一人の学者が自分の考えの卵を塗るまでにはいくらかかるものか計算します」。彼は私の諷刺を解したので、諷刺は全く彼には当たらなかった。諷刺と死の予兆は、その両者について何も自覚しない者にのみ当たるからである。

芸術顧問官に私は無関心に振る舞って、私は彼の前を行き、旅の他に第二版のための序言の続きを写字板で書き始めた。

第二版のための続きの序言^{*1}

「そして勿論カントは諸頭部の枠取りや壁に欠けているわけではない舞台で演ずるという珍しい幸運を得ている。これらの頭部からは彼の声がより澄んで共鳴しながら反響してくるもので、アテネ人がその劇場に空の壺を隠したようなものである^{*2}。これらの壺は俳優達の声に共鳴して加勢をしたのであった。考えを有する著者は、しばしばその考えで他人の考えを、広めるべき他人の考えを誤魔化す。そして仮に、ちょっと昔の時代、本を清書する者達が、純粹に、実直に書き写すと本当に誓わなければならなかったように、そう誓うとしても、それでも彼は空虚な頭脳とは、つまりその上部のトリチェリの空虚さ[真空]は物理学同様に火花の最良の導体であるものとは、常にはなはだ異なるものであろう。

――これに対して体系の中そのものでは、真理の見られない空隙は真理の衣裳^{かわ}で、長く新しい術語で躲さなければならない。賢い画家がその空虚な空間をドレープ^{かわ}で躲すようなものである。――

これは倫理上では若干違う。ここでは医学同様に理論家は全く経験主義者とは区別される。古代の劇場のように、一方の俳優は歌を歌って、他の俳優はそれに合わせて肉体的動作をして、芸術はまさにこの分離によってより高度に昇って行ったように、徳操の難しい芸術においても、（今日よく生ずるように）、理論と実践とが分離され、幾程かのものになるほどまでに進められていて、一方の者が徳操についての演説に限定するとき、他方の者はそれに然るべき行動を試している」。

序言の続きは続く。

というのは今や我々はベルネックの緑のテンペの谷の中へ入って、腰を落ち着け、私は写字板を閉じたからである。そうしなければ、粗野な振る舞いも見せずに、写字板で更に記していたことだろう。その中では彼のことを指していたのであるから、この芸術顧

*1 関連を見いだすためには、いつでも先の続きの部分に戻って開けなければならない。[関連はない]

*2 ヴィンケルマン『建築についての注』、第一章、10 頁。

問官自身と話しているのと同じ具合であったのであるから。

戴冠式馬車、エリアの馬車[列王記下, 2.11]、日輪の馬車は宿駅の前で止まった。そして私の道の女性支配人が降りてきた。私は飛び上がった。――誰が想像し得よう（私には多分最も想定外であったろう）、他ならぬ一人のプリマドンナで、すでに一度私の諸序言の一つ^{*1}に役者として登場していた女性で、つまり善良な、愛しい、周知のパウリーネ、故大尉で商店主エールマンの遺児の娘であった。

私はまさに、すべてのベルネック人達が知っているように歓喜の子と化した。「ジャン・パウルさん、どうして一緒なの」と令嬢は言った。その顔は今や婚約関係にあって店舗のものより気高い赤みを帯びていた。さながら間近な夫婦生活の赤い兵士の腕章であり、夫婦生活の絆のリボンの薔薇、前飾りの薔薇であった。

すぐにフライシュデルファーは赤く煮えて、温かい蟹となった。彼は今や、私が本当に、彼が車道で批判した作家本人であると耳にした。彼は言った。私が単に現実の中で嘘を言ったにすぎず、印刷の中ではない、印刷の中では真の男性的性格を遂行し、遵守することがもっと大事なことから、そのことはただただ芸術にとって幸いなことである、と。三テルツィエ[一テルツィエは六十分の一秒]で彼は五月の雪のように消え去った。しかし彼は私のことを忘れず、少なくとも『一般ドイツ文庫』の茂み、狙撃楯に身を置いて、そこから空気銃で旅の同行者を撃つことだろう。それ故前もってそのことを聴衆に知らせることは必要なことと思う。彼の石弩のすべての矢の上には（モンテスキュー[『法の精神』XII,24]によればタタール人がしなければならなかったように）名前が記されていて、狙撃手はフライシュデルファーというのである。彼は全体考察力のある男で、十分に善良である。彼はバンベルクの戦乱を視察して、彼の指を見て^{*2}分かるように、必要な明確な概念を得ていて、更にその際抜け目ない機知を有している。我々は互いに評価している。――私はその一端を披露したい。これは同時にいかに喜んで私が彼の月桂樹を播種しているか一つの証明となるのかもしれない。「鑢を」と無遠慮な芸術顧問官は言った、「つまり著者達が作品にかけるのを怠っている鑢を、出版者達は、出版者達が代価として支払う金貨に熱心にかけるものです」。立派に訓練されている。――

私は乙女の花嫁と喜んで正餐を摂った。彼女の将来の夫、夫たるパシャ、あるいは夫たらバイ[パシャの次の位]、[宮廷の]娯楽の親方は我々皆によく知られている領主裁判所長のヴァイヤーマン^{*3}に他ならない。私は認めるが、私は花嫁を避けるというよりは求めて、賢明なウリッセス[オデュセウス]に似ていた。彼は耳を開けたままマストに縛り付けられて、耳を悠然とサイレンの歌声に傾けたもので、他方彼の同伴者達は彼らの耳を空ろな臼歯のように蠟で封印していたのである。しかし彼女はまた輝く幼子イエスで、これは芸術顧問官が私の心に描き込んだ超絶的コレッジョの『聖夜』が最も美しい反映と共に銀鍍金をかけているものであった。彼女はそれでも無垢で、善良で、優しく、感受三昧の詩的胼

*1 『ジーベンケース』のための序言の中で。

*2 ビュフォンによれば分岐した足の指は我々に明確な概念を与えている。それ故分岐していない魚はとても愚かなのである。

*3 『ジーベンケース』第一部。[実は、『伝記の楽しみ』の「第一の付録」に登場]。

肌を帯びていず、そして彼女の父親の許での多くの鋭い両刃の受難は、彼女の心から奪うよりも多く彼女の心に与えたのであった。彼女は不幸の鋭い轆轤の上でローズウッドに似て、ローズ[薔薇]そのもののように甘美に匂った。彼女の吝嗇な父親は、勿論、単なる前景の文化を、外的文化、肉体的文化を、つまり高貴な衣装を許したが、しかし高貴な教養を許さなかった。(善良な領主裁判所長達が夕方この高貴な教養を無料で伝記的報告の中で提供していた)。そして彼女は私の周囲の大方の少女達に似ていて、この少女達の許ではウィーンのように郊外がモダンであって、都心そのものはどの区もすべて忌々しいほどに古風なのである。しかし私と彼女はすべての友人達のように ― ハラー[Haller (1708-77)]によると癒着人間達がそうであるように、 ― 単に一つの心であった、二つの頭ではあるが。これは大したことなのである。

我々は遅くに出発した。私は彼女に対面馬車の中で ― 対面して座っていた。我々の緑なす山々の背後にはイスラエルの民の砂漠が広がっていて、我々の前には穏やかなパイロイトの平野の約束の地があった。私と太陽とは絶えずパウリーネの顔を、同じ温かさで覗いていた。そしてとうとうこの小さな静かな形姿の女性に私は感動した。どこからこれは生じたのか。単に私が少女達の通常のヘルンフートの結婚生活の籤引きについて沈思したばかりではなかった。少女達はある年齢には知識よりも大きな感情を、その空虚な心に対象のない匿名の一つの犠牲の炎を有しているものである。 ― 丁度ヴェスタ神の乙女の神殿では神々の像はなく、単に炎があったようなものである。 ― 少女達はそれから機械仕掛けの神による誰彼構わぬ[夫の]出現に対し、その祭壇を押し進めるのである。 ― また私の感動は単に次のこと、つまり彼女達は、彼女達の大方の姉妹同様に、柔らかな漿果のように、硬い男性の手で同時に引き千切られ、押し潰されるということによるものでもなかったし、 ― あるいは、彼女達の女性的春は多くの雲を有し、日中や花々は少ないということ、そして私が彼女を何人かの花嫁のように眠っている子供と比べたことによるものでもなかった。つまりこの子供をガロファロ[Garofalo(1481-1559)]は、その上に茨の冠を支えている一人の天使と共に描いたのであるが、しかしこの子供には、結婚で目覚めさせられると、天使がその冠を押し被せるのである。 ― そうではなく、私の魂が優しくなったのは次のせいで、つまり私はこの好意的な、赤と白とに花咲く満ち足りた顔を見るたびに、この顔にさながら内面でこう語りかけざるを得なかったからである。「それほど喜び給うな、哀れな犠牲者よ。汝は、汝の美しい心は、血よりも何かより良きもの、より温かいものを、汝の頭は、枕が贈ってくれるものよりももっと高貴な夢を必要としていることを知らない。 ― 汝の青春の薫る花卉は今や匂いのない萼の弁^{*1}に縮んでしまうこと、夫にとっては蜜の器になってしまうことを知らない。夫は今ややがて汝から優しい心も、明晰な頭も要求せずに、単に荒れた仕事の指、飛脚の足、汗の滴、病んだ両腕、単に休んで麻痺した舌を要求することだろう。永遠の者のこうした広大な言語ドーム全体、宇宙の青い円形建物は縮んで汝の農舎、ベーコン貯蔵庫、木材貯蔵庫、紡績小屋となり、そしてより幸運な日々に客室となる。 ― 太陽は汝にとって世間の、吊り下がった気球のストーブであり、部屋暖房機となる。月は一つの雲の上の、燭台の靴屋の夜の球[水の

*1 様々な花々がそのような具合である。例えば[王]丁子。

入ったガラス球で明かりを反射する]となる。ー ライン川は干涸らびて汝の中では洗い場、白リンネルの洗濯釜となり、大洋は鯀の養殖池となる。ー 汝はすべての雑誌の大きな読書サークルの中で、年ごとのカレンダーを受け取り、汝の天文学的関連のためにほとんど好奇心のために政治的新聞が待ちきれない思いであり、その同封の知性新報上で「三本鬘亭」に泊まった未知の殿方の市門手形に読み耽るのだ。そして汝は世界の天才を大したものと思わず、自分の夫よりもちょっと賢いと思うだけである。ーーー 汝はもっとより良いものに生まれているのに、そうしたものになろうとしない（それに汝の哀れなヴァイヤーマンは何も責任はない、国家そのものが夫に対してもっとましなものにするというわけではないのだ）。かくて死が干涸らびた蕾で一杯の汝の経年落葉の魂に行き当たることになって、死がその魂をより好ましい天の一角によりやく移植することだろう」¹。

ー 何故このことが私に悲しみをもたらさないことがあろうか。毎週私は、魂が女性の肉体を纏いさえすれば、犠牲にされるのを見ていないだろうか。さてどんなに豊かで立派な魂であれ、人生の曙光の下、無視された心を抱きながら、果たされない願いと、満たされない辱められた状況と共に結婚生活という壁の巡らされた砦の土牢に沈められると、

ー 勿論その際、その魂は、その土牢が千もの刃を持つ地下牢とかではなく、それどころか夫が牢獄の女性によって手なずけられる穏やかな盲蜘蛛であれば、格別に幸運であるということになるが、ー かくてこの哀れな女性にはなはだ気分良く感ずることになって、

ー 若い頃の黄金の蜃気楼、魔法の城はやがて色褪せ、いつの間にか朽ちて、ー その太陽は見る間にその曇った冥界の人生の日々の上を一段ずつ忍び出て、苦痛と義務の間に暗鬱なこの女性はそのささやかな存在の黄昏に達してしまう。ー そして彼女は自分が誰にふさわしかったか知ることはなく、晩年には自分がかつて曙光の下で叶えようと欲したことのすべてを忘れてしまう。ただ時折かつて自分が崇拝した心の掘り出された古い神々の像とか憂愁な音楽とか一冊の本が心の冬の眠りの間に若干温かい陽光を降り注ぐ一時間の間に、彼女は目覚めて、重苦しく眠りに酔った目をして周りを見回し、こう言う。

「以前私の周りの事情は別であった。ー でもすでに長いこと経ってしまった。当時私は間違ってしまった、と私も思う」。そして彼女はまた静かに眠り込む。...

まことに、御身ら両親よ、夫達よ。私がこの悩ましい絵を掲げるのは、この絵が、この絵が似て写す傷付いた魂から涙をもっと絞り取るためではなく、御身らに描かれた傷を見せて、御身らが真の傷を癒やし、御身らの拷問具を投げ出すようにするためである。

今の私の気分のように、同じ理由で、対面馬車の中の私もー 沈んで行く太陽と、美しく辛抱強い眼前の姿と、特に私の以前の、芸術顧問官の前で聞かされた不協和音とで、

*1 「市民出身」の娘達に対して残酷に奪ってしまう教養として、それがあれば後に彼女達が我々男性のスパルタ人にとってヘロット[奴隷]として留まることはないであろう、とヘルメス[Hermes(1738-1821)]やカンペ[Campe(1746-1818)]が気付いていない教養として、私は惨めなフランス語や音楽的ガラクタを考えていない。そうではなく、博物史や物理学、哲学、歴史から、また文学や学問から、そして天文学からの、専門家にとってではなく、永遠の人間にとって必要なものすべてを考えている。この素材について一つの作品を私のペンで書き上げることを私は希望している。[『レヴァーナ』第四断編]

私とこれらはこの短調に溶けてしまった。要するにリュカントロピー^{*1}の後では、人は真の神の小羊となる。 — 罪の後で（とラーヴァーターは言っている）人は最も敬虔になる、と。それ故かの世の生での秀でた敬虔さが大事となるそのような聖人達は、この世の生ではまことの罪に陥るのである。私は花嫁の前ですっかり詩文のレモンの花々に咲きほころんだ。 — 私がその前は諷刺的なレモンの塩[酸]からの塩柱であったようなもので、このことはちなみに、書評家は決して名前を述べるべきではなく、ただ暗闇の中で狩りをするべきであることの新たな証明である。さもないと彼らに誰も敬意を払わないであろうからで、ミネルヴァの紋章動物のフクロウが夜には汚名なく殺害し、飛ぶが、しかし日中は自然の奇妙な戯けた流産児として巫山戯て飛ぶ阿呆に編入されているようなものである。閑話休題、人間はこの世ならぬ樂園へのその途次、そして私はパイロイトの樂園への途次、人類は最後の審判への長いその旅の途次、ブラウンシュヴァイクの黒ビールのように生成中一度ならず酸っぱくなる。しかし我々皆と黒ビールは素晴らしいもの、甘いものとなって仕上がる。つまり私はベルネックを過ぎてすでに半時間後、パウリーネに『五級教師フィクスライン』の「寡婦分」を話していたのである。

私にはあたかもこの世にはもはや「第二版のための序文」はないかのような気分であった。…汝、優しい花嫁よ。私は汝を物語でとても感動させようと思った。しかしそれ以上に汝は傾聴によって感動させてくれた。そもそもドイツには更に多くのパウリーネとジャン・パウルがいるのに違いない。さもないと現在の第二版は全く出来上がらなかったことであろう。これに対しこの機会を借りて私の衷心からの感謝を申し上げる。 — しかしパウリーネ的読者には申し上げない。彼女らは何も書かなくて結構である、私がそれで得るものは少ない。むしろ私は彼女らが私の前で私の品を膝に置いて読んでいるというのに、その膝に何も置いていない唯一の者なのである。丁度北アメリカではあるご馳走の客人達の中で、単にホストのみが一切れも食さないようなものである。 — 私が衷心からの感謝を申し上げますのは運命に対してで、それも運命が人間を互いに等しく作っていないことで（さもないと我々は皆退屈の余り死んでしまうことだろう）、更には似ていないようにも作っていないことで（さもないと誰一人他人を我慢し、把握できないだろう）、ただまことに似ている具合に作っていて、それで私はさながらスパルタの秘密伝令の丸い棒と、つまりその周りに記述された紙を偉大な精霊が巻き付ける丸い棒と見なされ得、読者は第二の丸い棒と見なされ得、そこに紙が、同じように削られているが故に、私自身宛の場合と同様に、巻き付けて読み取ることができるようになっていることに対してなのである。

——

私は今や、私と花嫁はまさにビンドロッホまで、私が降りようと思っていた所までそう遠くない所まで来たとき、[他人の]花嫁と一緒に硬直して垂直の姿勢でパイロイトの市門の下を通り、その上通過しながら知性新報紙に印刷される目に遭うのは不適切であると思ったからであるが、申し上げますと、今や私は、まさにそれ故に余りに憂鬱であって、殊にざわめく夕方の模造金箔や、私の上の自由な鳥籠の夕方の歌声の下、泣いている花嫁を失う間近に来ていて、繰り返すが、余りに憂鬱であって、ビンドロッホまで初版か第二版の

*1 リュカントロブとは魔術で狼に変ずる人間のことである。

後の五級教師フィクスラインなんかを報告することはできなかった。それは不可能であった。

しかし私は写字板を取りだして、何かを記した。例えば第二版への続きの序言を期待してはいけない。「今私はある墓碑銘と取り組んでいます。あなた」と私は彼女に言った。彼女は故父親と父親の男性客人達から退屈と蔑ろにされることに夙に慣れていた。そこで容易に彼女は私の記述を許した。しかしそれはまさに彼女のために感動を誘うものであった。私はビンドロッホでそれを彼女に朗読するつもりであった。読者にもこの話しの結末にこの墓碑銘を、引き抜かれて今や読めなくなった序言の代わりにお詫びとして、若干の適度の変更を加えて提供することにしよう。私は書きに書いた。私の目は薄暗くなった。沈んで行く陽を背にして、そもそも目には明かりよりも涙を多く有していたからである。汝、善良な魂よ、汝は何故私の目が滴っているのか知らなかった。それでも汝にも汝の目が滴って行った。――我々が広がったビンドロッホの山を下って行ったとき、谷が喜びで沸き立つ太陽を捉えた。しかしブレーメンやラウエンブルクでの競売の時のように、明かりの消滅を通じてさながら銀色の陽光で凝固する夜の空全体がさながら七時の競売の槌、鐘舌で閉じられたのである。

世界は休らい――山上には月が閉ざされた百合の花のように昇っていた。――私の草稿はできあがり、――我々は急な山を下っていて、――私は花嫁に言った。私は降りて、彼女も一緒に降りたら、外で少し朗読してやろう、馬車の中ではまず馬車の音よりも高く叫ぶ必要があるから、と。

私ども兩人はある古い柱[今はもうない]から程遠からぬ所で降りた。この柱の前を私は、運命の苛酷な巨大な手が我々軟弱な青虫、ガリヴァーを掴んで運ぶときの粗野な圧力に溜め息を付かずには通り過ぎたことがないのであった。この巨大な手は今日この柱を、人間の心の弱い記憶に対して、ヘルメスの柱の如く、また記念碑の如く置いているように見えた。しかし私は彼女をさえない柱形の下に案内して、――前もって彼女に示しながら、

――一台の馬車が上に被さっている風化した脆い女性の形姿が何をこの柱形の惨めな浮き彫り細工で意味しているのか説明した。即ち周囲の村の人々はこう報告しているのであった。かつて花嫁馬車で以前はもっと急峻なビンドロッホの山から花婿の両腕へと雷雨の中、怖じ気づいた馬と一緒に向かっていた一人の花嫁が、車輪の下に転がり落ちて、痛ましい花婿の目の前で、空しい希望の精神と共に身罷った、と。パウリーネは、殊に月が夕方の靄の背後で朧となっていたので、ほとんどこの古くなった嘆きの風化した彫像を読み取ることができないでいた。しかし彼女の打撃を受けた優しい心は、殊に同じような状況の間近にいて、喜んで流れ続ける涙の夕べの供物を未知の砕かれた姉妹に対して注いだ。この姉妹の折られた遺骨はすでに塵[花粉]として、――ひょっとしたら一本の花の葯から――散っていて、一方かつてその遺骨を動かしていた精神は、時を通ずる永遠の山道の上で、かつてその精神がなし、残した飛翔する塵に、その精神が見回すとき、もはやほとんど気付くことができないであろう。そしてこの拷問の勝利記念碑の隣で、夜の偉大な天の下、私はパウリーネにささやかな詩文を与えた。ここにすべての彼女の姉妹の心に対し、記すものである。

月食

月の百合の沃野に人類の母親が、静かな永遠の愛の中、すべての彼女の無数の娘達と一緒に住んでいた。ただ遠方の地球の上ではためく青空が、かなたで花粉からなる沃野の雪の上に被さって休んでいた。 — 冷たい霜の雲が明澄なエーテルの中、縮小された夕べを運ぶことはなかった。 — 穏やかな諸魂を憎しみが食い破ることもなかった。 — 一つの滝の上の虹が絡まるように、愛と慰いはすべての抱擁を一つの抱擁にまとめ上げていた。 — そしてその彼女達の静かな夜、地球が広がって輝かしく星々の下に懸かったとき、その地球上で苦しみ楽しんだ諸魂は、単に甘美な憧れと思い出とを抱いて後にしたその島を覗き見た。そこにはまだ愛しい者達が住んでいて、脱ぎ捨てられた諸肉体が休っていた。そして眠り込んで行く重苦しい地球がまぶしく一層間近に閉ざされる目の許に近寄ったとき、地球の先の春は輝かしい夢の中を通り過ぎて行った。そして目が目覚めると、目には歓喜の涙の露が一杯に懸かっていた。

しかし永遠の日時計の指針が新しい世紀を示すと、熱い苦痛の稲光が人類の母親の胸の中を走った。というのはまだ地球上に行ったことがない愛しい娘達が月から彼女達の肉体の中へ、地球が彼女達をその冷たい地球の影で触れ、麻痺させるや、移って行ったからである。そして人類の母親は彼女達が泣きながら行くのを見守った。必ずしもすべてではなく、単に無垢の娘達のみが、地球から純粋な月へまた戻って来るからである。かくて世紀から世紀にかけて哀れな母親から子供達が奪われた。そして母親は、日中我々の掠奪する球が、広大で堅固な雲として太陽の間近に来るのを見ると、震えた。

永遠の指針は十八世紀に近付いていた、 — そして夜で一杯の地球が太陽に向かって来た。 — 母親はすでに熱く、重苦しい気持ちですべての娘達を、まだ肉体という紗を纏っていない娘達を、胸元に抱き寄せて、泣きながら頼んだ。「大事な娘達、堕ちないで、天使のように純粋でいなさい、また戻って来るのよ」。 — 今や世紀の許の巨大な影が懸かり、暗い地球が太陽全体の上に懸かった。一つの雷が時を告げ、 — 暗い天に燃え上がる彗星の刀が落ちかかってきて、 — 銀河が震え、銀河から一つの声が叫んだ。「現れ出でよ、人類の誘惑者よ」。

世紀のたびに無限の者は一人の邪悪な精霊を、世紀を誘惑する精霊を送るのである。 — 小さな目から遠く離れて、無限の者の、星座から成る、永遠を取り囲む計画が、天の中に、解き放ちがたい星雲^{*1}として懸かっている。

誘惑者が叫ばれたとき、母親はすべての自分の子供達と共に震えた。そして優しい魂達は皆泣いた。現世にすでにいたこともある変容した魂達も泣いた。さて途方もなく地球の影と共に一つの巨大な蛇が身を持ち上げて、月に達して、言った。「私がおまえ達を誘惑しよう」。それは十八世紀の邪悪な精霊であった。月の百合の花は枯れて重なって身をかがめ、彗星の刀はあちこち揺れて、斬首刀のように、それが裁くことの印に、自ら動いた。

— 蛇は戯れるような、魂を殺害する目と、血のように赤い鶏冠と、舐められ、食いちぎられた唇とぴくつく舌をもって穏やかな樂園に忍び込んできて、尻尾は大地の墓の中で食欲に、意地悪げに痙攣していた。そして我々の地球上の地震が回る輪と、多彩な毒々し

*1 解き放ちがたい星雲とは、無限の彼方へ投げ飛ばされた一つの天体全体のことで、そこではどんな望遠鏡ももはや諸恒星を見分けられない。

い液体を様々に光る液状の雷雲のように旋回して出現させていた。それは夙に嘆いている母親を誘惑した黒い精霊であった。彼女はそれを見つめることができなかった。しかし蛇は言い始めた。「エヴァよ、この蛇をお忘れか。 ― おまえの娘達を誘惑しよう。おまえの白い蝶どもを沼地の上で集めよう。見るがいい。娘どもよ、これで私はおまえ達を皆おびき出すのだ」。(すると虻の目は男達の形姿を映し、多彩なリングは結婚指輪を、黄色の鱗は金貨を映しだした)。「その代わりおまえ達から月と徳操を取り上げる。絹のリボンの罫と布地の張り網とでおまえ達を捕らえる。私の赤い王冠でおまえ達を誘い、おまえ達はそれを被ろうとする。おまえ達の胸の中で私は話し始め、おまえ達を称え始める。それから私は男の喉の中に這って行き、進んで行き、その通りと言う。そしておまえ達の舌に私の舌を押しつけ、それを鋭く、毒々しいものにする。 ― おまえ達の気分が悪くなって初めて、あるいは死の直前に無益な良心の呵責をまことに鋭く温かく心に刻むのだ。

―― 永遠の別れをするがいい、エヴァよ。私がここで娘達に言うことは、幸い生まれる前に娘達は忘れてしまうのだ」。 ―

まだ生まれていない魂達は震えながら、その間近の冷たい蒸気をあげる毒の木を目にして姿を互いに隠した。純粹に地球から花の香りのようにまた地上から昇天していた魂達は、克服した過去に対して甘美に戦きながら、泣きつつ、臆して喜び、抱き合った。最愛の娘マリアとすべての人類の母親は互いに胸元で抱き合った。そして抱擁の中で跪いて、祈る両目を上げた。両目から流れ出る涙は、嘆願していた。「至仁の方、娘達を守り給え」。

― すると、この怪物が薄く、長い、ザリガニの鉋のように割れた舌を月の上に突き出して、百合を二つに割って、黒い月の食のようなものを作って、「娘らを誘惑しよう」と言ったとき、見よ、そのとき地球の背後で太陽の最初の条光がさっと閃き出て、黄金の明かりが高貴な美しい若者の額を照らし出した。人知れず震える諸魂の間にいた若者であった。一本の百合が彼の心臓を覆っていた。薔薇の蕾みで一杯の一つの月桂樹の冠が彼の額で緑に映えていて、彼の衣装は青いこと空のようであった。彼は穏やかに泣きながら、温かく愛で輝きながら、悲しみに沈んで諸魂を見下ろして、 ― 太陽が虹を見下ろす具合で、 ― そして言った。「私は御身らを守るつもりです」。それは宗教の精霊であった。沸き立つ巨大の蛇は彼の前から逃げて、石化して地球の上、月に接して立っていて、静かな黒い死で満たされた一つの火薬庫であった。

そして太陽が青年の顔により大きな朝を投げかけた。彼はその目を大きく星々に対して上げて、無限の者に言った。「父上、私は私の姉妹と一緒に人生の中へ進み、私を許すすべての者を守ります。エーテルの炎を美しい神殿でお守りください。炎は神殿を壊したり、荒らしたりしてはなりません。美しい魂を地上の魅力の葉で飾ってください。その葉は魂の果実を単に守るだけで、影とならないようにしてください。その魂に美しい目をお与えください。私はその目を動かし、その目に注ぎましょう。そして胸に優しい心を置いてください。その心は御身と徳操のために鼓動しないうちに散るべきではありません。汚れなく、台無しにせずに、私はその花を一つの果実に変えて、地球から再び連れて来ましょう。私は山の上、太陽の上、星々の下を飛んで、その魂に御身と、地球の上の世界を思い出させるつもりです。この月の白い明かりへと私は私の胸の百合を変えましょう。春の夜の夕焼けに私の冠の薔薇の蕾みを変えて、その魂に兄のことを思い出させましょう。 ― 音楽の音色に彼女を呼び、御身の天について一緒に語らい、調和した心の前でその天を開け

ましよう。彼女の両親の腕と共に私は彼女を私に抱き寄せて、詩文の声の中へ私の声を忍ばせましよう。彼女の恋人の姿で私の姿をより美しいものとしましよう。ー いや苦しみの雷雨と共に彼女の上を進み、照らし出す雨を彼女の目に注ぎ、彼女の目を高みへと、自らの出自の親戚の者達へと向けさせましよう。御身ら愛しい者達、御身らの兄を撥ね付けることのない者達よ、甘美な憧れが美しい行為へと、厳しい勝利へと御身らの心を拡張するとき、星々の夜、そして夕焼けの前で御身らの目が言いようもない歓喜に散って、御身らのすべての本性が高揚し、上方に迫り、愛しながら、静かに、落ち着きなく、泣きながら、憧れながら両腕を広げるとき、そのとき、私は御身らの心の中にあり、御身らに、御身らを抱擁し、御身らは私の姉妹であるという合図を送ることにしよう。ー そしてそれから短い夢と眠りの後、私はダイヤモンドの殻を破って、ダイヤモンドを明るく露として月の百合の中へ落とすことにしよう。ー いや、人類の優しい母親よ、御身の愛しい子供達をかくも痛々しく見つめ給うな。もっと楽しく別れましよう。失う者はほんのわずかなのです」。ー

太陽は覆われることなく、月の前で燃え上がった。そして生まれていない魂達は地球へ移った。徳操の精霊と一緒に付いて行った。ー そして彼女らが地球に向かって飛んで行くと、青空の中をフルートの音色が広がって、あたかも白鳥が冬の夜飛んで、大氣中に波の代わりに音色を残すようなものであった。

巨大な蛇は灼熱の飛んで行く爆弾の広大な弧を描いて、最後に縮んで点火用のピッチの輪となって地球に沈んで行った。そして曲げられた竜巻が一艘の船の上で砕けるように、蛇は大地に落ちて、千もの罨や結び目の皺を作りながら、殺害しつつ捕らえつつ、世のすべての民を通じて編み込まれて行った。裁きの刀がまたびくついた。しかし飛び過ぎてきたエーテルの余韻が更に長く続いた。ー

＊

私が終わると、パウリーネは穏やかな目の涙を拭った。その目は思わず知らず明るい月とその広い斑点に向けられていた。私は彼女から別れた。ー 私がここで善良な精霊のすべての愛しい姉妹達に対して述べる願いは、彼女宛の私の最後の言葉であった。「ただ幸せであって欲しい。人生のささやかな春の夜が静かに明るく汝に流れて行って欲しい。

ー この世ならぬ姿の見えぬ方が、汝にその夜、汝の上に若干の星の像を、ー 汝の下にハナダイコン[夜堇]を、ー 汝の中に若干の夜の想いを贈り給わんことを。ー そして美しい夕焼けに適した以上の雲や、月光の中の一つの虹に要するとか以上の雨を贈り給わぬことを」。ー

フォークトラントのホーフにて、一七九六年、八月二十二日。

ジャン・パウル・Fr. リヒター

少女達のための慰留分

- 1) ある天使の死
- 2) 月、一つの空想的な話し

1) ある天使の死^{*1}

我々が苛酷に死と名付けている最期の時の天使として我々の許に最も心優しい善意の天使が遣わされている。この天使が優しく穏やかに沈んで行く人間の心を人生からもぎ取って、その心を温かい手で、押し潰さずに冷たい胸から高く温かい楽園へ運ぶようにするためである。その兄は最初の時の天使で、人間を二回接吻する。最初は人間がこの人生を始めるときで、二回目は、人間があの世界で傷もなく目覚めて、現世の人生へ泣きながら来るように、別の人生へ微笑みながら来るようにするためである。

戦場は血と涙とで一杯にまみれていて、最期の時の天使は、震えている魂をその中から引き出すので、その穏やかな目は涙が溢れて、天使は言った。「いや、私もいつか人間のように死んでみたい。私が人間の人生を解き放つとき、人間の最期の痛みを調べて、人間を宥めるためにそうしてみたい」。あの世界で愛し合っている天使達の果てしない群れが、この同情深い天使に歩み寄って、この愛しい者に約束した。彼が死んだ瞬間の後、自分達の輝く天で彼を取り囲み、それが死であったことが分かるようにしてやろう、と。そして彼の兄は、彼の接吻は我々の硬直した唇を、曙光が冷たい花々に対してするように、開かせるものであるが、懇ろに彼の顔の許に身を寄せて、言った。「私がおまえにまた接吻したら、弟よ、地球上で死んだことになり、また再び我々の許にいるのだ」。

感動し、愛しながら、その天使はある戦場に沈んで行った。そこではただ一人の美しい熱血の若者がまだ痙攣していて、打ち砕かれた胸がまだ動いていた。この勇者の周りにはただその花嫁だけがいて、彼女の熱い涙を彼はもはや感じ取ることはできずに、彼女の嘆きは彼の周りに、遠くの戦場の雄叫びと分かちがたく漏れていた。そのとき天使は素早く若者を覆って、若者の許の愛しい女性の姿で休らい、熱い接吻で傷付いた魂を砕けた胸から吸い取った。―― 彼はその魂を自分の兄に与えた。兄はその魂をあの世界で二回目の接吻をした。するとその魂はすでに微笑んでいた。

最期の時の天使は稲妻のように痙攣して、荒涼たる覆いの体に入って行き、この肢体の内部を点して、強化された心臓で、温められた生命の奔流を再び巡らせた。しかし新たな肉体化は何と天使を捉えたことか。彼の明るい目は新しい神経精神の渦の中で沈んで行った。―― 彼の以前は飛ぶような思考は、今や緩慢に脳の靄の中を徒渉して行った。――

すべての対象の許で、これまで秋晴れのように対象の上に波打って懸かっていた湿って、柔らかな色彩の香りが干涸らびて、対象は熱い大気から燃えるような痛々しい色彩の斑点と共に彼をちくちく刺した。―― すべての情感が、より薄暗く、しかしより激しく、より間近に彼の自我に近寄って来て、我々にとって動物の情感がそうであるように、天使には本能であるかのように想われた。―― 空腹が天使を引き裂き、喉の渇きが燃え上がり、痛みが切り刻んだ。―― 彼の砕かれた胸は流血しながら高まり、彼の最初の呼吸は去った天への最初の溜め息であった。―― 「これが人間の死であろうか」と彼は考えた。しかし彼は死の約束の印を見なかったのも、つまり天使も、燃え上がる天をも見なかったのも、これは多分、人間の人生にすぎないと気付いた。

*1 この物語はすでに一七八八年の『ドイツの書斎』の十二月分冊に載っている。しかしこの時以来、私は自分同様にこの物語に変更を加えた。

夕方この天使から地上的諸力が尽きて行った。押し潰す地球が彼の頭部の上を回転するように見えた。眠りがその使者を送ったからである。内部の諸像がその陽光の中から蒸気を発する炎の中へ入って行き、脳の中へ投げ込まれた日中の影が混乱して巨大に混在していた。そして隆起する奔放な感覚世界が彼の上に流れ出た。 ― というのは夢がその使者を送ったからである。とうとう眠りという喪のヴェールが二重に彼の周りを包み、夜の墓所に沈み込んで、彼はあの世で孤独に凝固して、我々哀れな人間達のように横たわっていた。しかしそれから、天上的な夢よ、汝が汝の千もの鏡と共に彼の魂の前に跳んで来て、彼にすべての鏡の中、一つの天使の群れと一つの輝く天を示した。すると地上的肉体は天使からすべての棘を落とすかに見えた。「嗚呼」と彼は空しい歓喜の中で言った、「それでは私の眠りが私の死別だ」。 ― しかし彼はまた重たい人間の血で一杯の重苦しい心臓と共に目覚めて、大地と夜とを見たので、言った。「これは死ではなく、単に死の像にすぎなかった。星々の天と天使達とを見たけれども」。

天に運ばれたこの勇者の花嫁は、自分の恋人の胸には単に一人の天使が住んでいるにすぎないことに気付かなかった。彼女はこの傷付いた魂の真っ直ぐな柱像をまだ愛していて、自分から遠く去った若者の手をまだ喜ばしげに持っていた。しかし天使は彼女の錯覚した心を一人の人間の心と共にまた、自分自身の姿に嫉妬しながら、愛していた。 ― 彼は、彼女より先に死なないことを願った。彼女がいつか天国で、自分が一つの胸元で同時に一人の天使と一人の恋人とを抱擁したことを許してくれるまで、彼女を長く愛するためであった。しかし彼女はもっと早く亡くなった。先の苦悶がこの花の頭を余りに深く押し曲げてしまっていた。この頭は墓地に衰弱して横たわっていた。彼女は泣いている天使の前で没落した。見守る自然の前で華麗に海に身を投じて、海の赤い波を天に打ち上げさせる太陽の如くではなく、静かな月の如くで、これは真夜中頃、靄を銀鍍金して、青白い靄と共に人知れず沈んで行くのである。 ― 死はそのより穏やかな姉妹、つまり失神を先に送った。 ― 失神は花嫁の心臓に触れ、温かい顔は凍り付いた。 ― 頬の花は色褪せ、

― 冬の青白い雪が、その下で永遠の春が芽生えるのであるが、彼女の額と両手とを覆った。 ―― そのとき天使の腫れ上がる目は一つの燃えるような涙へ奔出した。そして自分の心は一つの涙の形で、一つの真珠のように脆い貝の中から放出すると彼が考えたとき、今一度花嫁が、最期の狂気へと目覚めて、目を動かして、彼を自分の胸元へ引き寄せて、彼を接吻し、こう言って亡くなった。「それでは一緒です、私のお兄さん[私の弟]」。

―― すると天使は、自分の天国の兄が接吻と死の合図を彼に寄越したのだと妄想した。しかし輝く天は回りに見られず、喪の暗闇であって、彼は嘆息した。これは自分の死ではなく、単に他人の死に対する人間の苦悩にすぎない、と。

「君達、抑圧された人間よ」と彼は叫んだ、「どうして君達疲れた者達は生き残れるのか、どうして老いて行くことができるのか。青春の形姿の群れが砕かれて、最後に全く散ってしまうとき、君達の友人達の墓が階段の如く、君達自身の墓へ下って行くとき、老齡が冷たい戦場の黙した空虚な夕べの時になるときに、君達哀れな人間よ、どうして君達の心はそれに耐えられるのか」。

昇天した勇者の魂の肉体は、穏やかな天使を厳しい人間達の下に、彼らの不正の下に、
― 悪徳と情熱の歪みの下に ― 置いていた。彼の形姿にも束の王笏の[苦行用]棘のベルトが巻かれていた。そのベルトは諸大陸を刺しながら圧迫し、偉いさん達がますます

きつく縛るものである。 — 彼は王冠の紋章動物どもの爪が筆り取られた獲物に立てられ、疲れた羽根をばたばたさせてその獲物が痙攣するのを耳にした。 — 彼は地球全体が悪徳の巨大な蛇によって、錯綜する黒々としてとぐろの中に巻き込まれるのを目にした。蛇はその有毒な頭を深く人間の胸に押し入れ隠していた。 — いや、そのとき永遠を通じて単に愛情深く温かい天使達の許にいた彼の柔らかな心の中を敵意の熱い一刺しが走らざるを得なかった。愛に満ちた聖なる魂は内的崩壊に驚かざるを得なかった。「嗚呼」と彼は言った、「人間の死は悲しい」。 — しかしそれは死ではなかった。一人の天使も現れなかったからである。

すると彼は一つの人生に、我々が半世紀を過ごす人生に、数日で飽きてきて、昔に憧れた。夕陽が彼の親しい魂を導いて来た。彼の傷付いた胸の傷が痛みで彼を疲れさせた。彼は夕焼けを青白い頬に受けて、墓地へ向かった。人生の緑色の背景で、そこでは彼が以前脱がせてやったすべての美しい魂の外皮が取り除かれる所であった。彼は憂愁の憧れを抱いて、言いようもなく愛しい、亡くなった花嫁のむき出しの墓に赴いて、薄れて行く夕陽を見やった。この愛しい塚で彼は自分の痛む肉体を見つめて、考えた。「おまえを真っ直ぐに起こしていなくても、おまえはすでにここ大地で崩壊することだろう、緩んだ胸よ、そしてもはや痛みを与えないことだろう」。 — そして穏やかに重苦しい人間の人生を熟考した。胸の傷の痙攣は人間がその徳操とその死とを購うときの痛み、自分が喜んでこの肉体の高貴な逝った魂のために省いてやった痛みを示していた。 — 彼は人間の徳操に深く感動した。そして人間達に対する無限の愛から彼は泣いた。人間達は自身の困窮に責め立てられながら、沈んだ雲の下、重大な人生の路上での長い霧の背後で、それでも義務の高尚な太陽星から目を逸らさずに、愛する両腕を暗闇の中、自分達の出会うすべての苦しめられた胸に対して広げるのである。彼らの周りでは、太陽に似て、旧世界で沈むが、新世界で昇って来るのだという希望しか微光を発しないのである。 — すると歓喜が彼の傷を広げて、血が、魂の涙が、心臓から愛しい塚に流れ出た。 — 散って行く肉体は甘美に流血しながら恋人を追って沈んだ。 — 歓喜の涙は沈む太陽を、一つの薔薇色に赤い、漂う海の中へ、屈折させた。 — 遠くの木霊が、あたかも地球が遠くから鳴り響くエーテルの中を通過するかのように、その濡れた光輝の中、戯れた。 — そのとき一つの暗い雲が、あるいは小さな夜が、天使の前を過って来て、眠りで満たされた。

— そして今や輝く天が開かれ、彼を覆った。そして千もの天使が燃え出していた。「戯れる夢よ、またおまえなのかい」と彼は言った。 — しかし最初の時の天使が光輝の中、彼の許に近寄って、彼に接吻の印を与えて、言った。「これは死だ、おまえ、永遠の弟、天国の友よ」。 — そして若者と彼の恋人がそれを小声で模した。

2) 月

空想的な話し

私の里親の娘フィリピーネへの献辞

私はまだどんな本でも、善良なフィリピーネ[『見えないロジ』登場]よ、おまえ達娘が月を大いに利用して、それで月はおまえ達の玩具、巣留め卵となっていて、その卵の周りに別の星々を置いて、そこから様々な空想を孵していることに関して難癖を付けたことはない。月は更に、そこではおまえ達の顔が月時計として示す（というのは我々男性の顔は日時計であるからで）諸理念の文字盤の歯車であってもよろしい、月は天の黒い繻子のベルトの中の輝く鋼の帯留めのようなものであり、―― 月は何も黒くしないし、―― 月にはむしろ明かりを投げかけて、それに対してはヴェールで覆う必要はない、月自身が顔のヴェールのように懸かっているのだから、―― 月はそもそも温和さと愛そのものであるからである。しかし少し別件について喧嘩することができよう。―― つまりおまえ達は善良な月とそこに住んでいる男と昵懇になりたいというよりはむしろ愛したり、見たりしたがって、おまえ達は月下の許の男達の許でもそのようにしている件のことだ。最良の妹よ、残念ながら秘密でも何でもないことだが、すでに千人もの娘達が結婚し、埋葬されて来たが、彼女達はかの向こうの銀色の世界を天上的錫のまことに可愛いスープ皿に実際他ならないと見なしてきていた、その錫には、イギリスの錫に天使が極印されているように、月の男が極印されているのである。妹よ、それどころか疑念があるが、おまえ自身まだ覚えているか。月はアジアと比べてわずかなマイルしか小さくないこと、を。何度おまえに窓枠の所で、おまえに覚えて貰うために歌って聞かせてやらなければならなかったことか。月の日中は半月続くばかりでなく、―― これはむしろ聞き入れて貰えようが、

―― その夜もそうであって、それで遊び好きの娘は、母親からすでに真夜中舞踏会から家へ引きずられて行くとき、それでも少なくとも優に百五十時間ワルツを踊り、輪になって踊っていたわけだ、と。―― フィリピーネよ、まだ頭の片隅にあるか、いつか言っておくれ。つまり月とかむしろその人々はかくも夜が長くては我々同様にしたり、散歩したりしたいと思っているということ、従って彼らは我々よりももっと大きな月を必要としている、少なくとも普通の馬車の車輪よりも小さくないものを必要としているということ、を。私は立派な筋から、おまえが、月が自分の上の月を一体何と思っているかもはや知らないと知らされている。―― 我らの地球が月の月なのだ。軽薄な妹よ。そして向こうの彼らには婚礼の菓子よりも大きくないのだ。私はここで私の次の物語のために付け加えておくが、我々がここ下界で自ら明かりを有しないとき、これは日食の場合であるが、彼らに明かりを（月光をあるいは地球光を）投げ与えることができないのだ。それ故月の息子達は我々の日食の際にはこう言うしかないのだ、「我々は今地球食だ」と。

とてもお願いだから、フィリピーネ、月のこの身上書、この空想的な物語全体の基となっているこの身上書を、二、三十回、おまえの聴講の娘達に朗読してやって欲しい。さもないとおまえ達にはすべてが、始めもしないうちに、何のことか分からなくなることだろう。

そもそも私はおまえ達の両親をはなはだ遺憾に思っている。両親はおまえ達にフランス語の代わりに、これは一束の名目侍従の鍵のように、単に魂を墮落させるおしゃべりの響

きに役立つだけで、おまえ達はむしろ騎士小説好みだから、一冊のフランス語の本の開封にも役立たないものであるが、両親ときたら、申し上げるように、むしろ天文学を習わせることをしていない。天文学、これは人間に崇高な心を与え、地球を越えて行く一つの目を与え、果てしない世界へ導く翼を与え、有限ではなく、無限である一つの神を与えるものだ。

人は空想を真理と見なさないならば、あるいは影絵芝居を絵画陳列室と、絵画陳列室を博物標本室と見なさないならば、月下で万般にわたって、月そのものについて空想を抱いてよろしい。天文学者は天の在庫品調査をし、査定し、数ポンドも間違わない。詩文は天に家具を備え付け、豊かにする。天文学者は沃野を土地台帳に記入し、詩人は沃野に何匹かの金魚と共に真珠の小川を導く。天文学者は月の周りに ―― それに地球の周りにも測索を置き、詩人は花綵を置く。従って、妹よ、おまえがおまえの裁縫の学友と一緒に菩提樹のバルコニーに赴いて、彼女達に私のものの如き空想を熱心に朗読してくれるならばまことに結構なことだ、ただ日中の明るいときに行いさえしなければ、また地上の本教会の礼拝が支部の月教会のことで等閑にされさえしなければ結構なことだ。

しかしおまえ、穏やかな、青白い形姿よ、その形姿を私はよく眺めて、私の心を宥めているが、 ―― かくも謙虚に微光を発し、かくも謙虚にさせる形姿よ、 ―― その価値を単に静かな天に示すだけで、声高な地球には示さない形姿よ、 ―― 歡喜の思い出で花咲く秋の沃野に数滴の滴が目の中に溢れるとき、その形姿に私は好んで目を上げて、その形姿の前で、私は最も好んで我らの移植された願望の、雲を越えて離れた母国のことを思い出すのであるが、おまえ、善良な形姿よ。...フィリピーネよ、ここで兄が語りかけたのは月なのか、おまえなのか、疑わしいのは、おまえの兄にとって快適なことだ。妹よ、このような疑念に値するのはとても素敵なことだが、私はただ更にもっと美しいことを知っている。つまりそれどころかこの疑念を奪うということで、月とは、その斑点と変わりやすさの点でしか異ならないということである。

いつに変わらぬ、もっとも単に今述べた点は異なるけれども、

おまえの兄より。

＊

物語

私が初めて、オイゲーニウスとロザムンデよ、その本当の名前を告げることは許されないが、汝らのささやかな話しを語ろうと思ったとき、私の友人達と私はある英国庭園の中に向かっていた。我々は新たに彩色された棺の前を通り過ぎた、その足許の板にはこう書かれていた。「私は逝く」。緑色の庭園の上には白いオベリスク[Morges から Lausanne の途上にあるらしい]が聳えていて、二人の仲のいい侯爵夫人がそのオベリスクで自分達の再会と抱擁の地の目印としていて、そこには次の銘があった。「ここで私どもは再会しました」。オベリスクの先端はすでに満月の中、輝いていた。ここで私は簡潔な話しを語った。しかし御身、親愛なる読者よ、 ―― 棺とかオベリスクといったものと同様なことであるが、 ―― 棺の銘を過去の灰に引き入れ給え。そしてオベリスクの文字を温かい高貴な心の血で御身の内面に描き給え。

幾多の魂が天から花々のように散っている。しかしそれらの魂は白い蕾のまま大地の汚れの中へ足を踏み入れ、しばしば汚され砕かれて一つの蹄の足跡に横たわっている。オ

イゲーニウスとロザリンデよ、汝らも砕かれてしまった。汝らのような優しい魂はその歓喜の三人の盗賊によって攻撃される。一つは民衆で、その粗野な扱いは彼らの優しい心に傷跡しか残さない。 — 次は運命で、これは光輝で一杯の美しい魂の許では涙を拭き取らない。さもないと光輝が消えてしまうであろうからで、色褪せないように湿ったダイヤモンドを拭かないようなものである。 — 最後は自らの心で、この心は余りに多くを必要とし、余りに少なく享受し、余りに多く希望し、余りに少なく忍耐する。 — ロザムンデは苦痛で穿たれた明るい真珠であった。 — 親戚から離れ、ただわずかに苦痛の許で痙攣し続けていて、夜が侵入してきたときのオジギソウの切り取られた小枝のようであった。 — 彼女の人生は静かな温かい雨で、彼女の夫の人生は明るい暑い陽光であった。

— 彼女の目からはまさに彼らの二歳の病身の子供に向けられていたが、彼の前で彼女は目を逸らした。この子供はこの人生での豪雨の下の一匹の薄い羽のよろめく蝶であった。 — オイゲーニウスの空想はその余りに大きな翼で余りに優しく薄い肉体の織物を壊していた。華奢な肉体の百合の花はその強力な魂を支えていなかった。溜め息の生ずる所、つまり彼の胸は、彼の幸福同様破壊されていた。彼はこの世で、彼の愛する心と、この心のためのわずか二人の人間しかもはや有していなかった。

この人達は春、苛酷に冷淡に彼らの心を襲ってくる人間達の騒動から逃れでようと欲した。彼らはシュタウプバッハの銀の連なり[滝]に向かい合う高貴なアルプスに静かな山小屋を求めた。最初の美しい春の朝、高いアルプスへの長い道を彼らは進んで行った。単に受難のみが与え、浄化する一つの神聖さというものがある。人生の奔流は、それを岩礁が寸断するとき、雪のように白くなる。崇高な考えの間にもはや卑小な考えすら入ってこないような高みがある。アルプスでは、谷による結び付きなしに、山頂が隣同士聳え立って見えるようなものである。ロザムンデよ、汝はかの神聖さを有していた、 — そしてオイゲーニウスよ、汝はこの高みを有していた。 — アルプスの麓では朝霧が移って行った。その霧の中には三人の形姿が舞って懸かっていた。この三人の旅人の蜃気楼であった。臆病なロザムンデは驚いて考えた。自分は自分の姿を見ている、と。オイゲーニウスは考えた。不滅の精神が纏っているのは、単により濃い霧にすぎない、と。子供は雲にテを伸ばして、霧からなるその小さな弟と戯れようとした。未来のただ一人の目に見えない天使が、彼らと一緒に人生を進み、山に登った。彼らはとても善良で、互いに似ていたので、彼らは単に一人の天使を必要としているだけであった。

登りながらこの天使は運命の書を開けた。その本の中では一枚の紙が三人の人生の概略であり、 — すべての行が一日のことであって、 — そして天使が今日の行を読み終えたとき、天使は泣いて、その書を永遠に閉じた。

か弱き者達は到着のためにほぼ一日を要した。大地は谷の中へ這うように戻って行った。天は山々に横たわっていた。疲れて、ただまぶしい太陽は、我らのオイゲーニウスにとって月の鏡となった。すでに氷の山々が大地に炎を投げかけたとき、彼は自分の恋人たる妻に言った。「私は疲れているが、元気だ。我々が二つの夢から、つまり人生の夢と死の夢から出て行くとき、我々がいつか雲のない月の中へ、人生のハリケーンの後での最初の岸边として入って行くとき[ヘルダーに見られる考え、ベーレント]、こんな具合なのだろうか」。 — ロザムンデは答えた。「もっとましだと思うわ。だって月には、あなたが教えてくださるように、この地上の小さな子供達が住んでいて、彼らの両親達は長く子

供達の許にいて、両親自身が子供達のように穏やかで安らかになるまでいるそうで、それから更に移って行くのだから」。 ― 「天から天へ、世界から世界へか」と崇高にオイゲーニウスは言った。

彼らは太陽が沈んで行くとき、登って行った。彼らがより緩慢に登って行くと、山の頂が解き放たれて動く小枝のように隠しつつ陽の光を浴びた。そこで彼らは上方へ移って行く夕方の微光の中、追って急いだ。しかし彼らがアルプスの山小屋に着いたとき、永遠の山々が太陽の前に現れた。 ― それから地球はその墓所と諸都市を祈りながら天の前で覆った、天が地球をすべての星々の目で見つめる直前であった。滝はその虹を消した。

― そしてより一層高く地球は、伸ばした雲の両腕と共に地球に垂れかかっている天に対して、黄金の靄の紗を下から広げていて、その紗を山脈から山脈へと掛けていた。

― 氷の山々が点火されて、山々は真夜中まで輝いた。そして山々に向かい合って、太陽の墓所には、夕方の灼熱と夕方の灰からなる雲の[火刑用]薪の山が積み重なっていた。

―― しかしこの微光の紗を通じて、善良な天はその夕方の涙を深く地球の中へ落下させて、最も低い墓にまで、最も小さい花にまで及んでいた。 ―

オイゲーニウスよ、今や汝の魂は何と大きくなったに違いなかったことか。地球の生活は汝の前、遠く離れた深みにあって、我々が余りに間近にいるが故に我々がその生活に見る何の歪みもなかった。丁度近景のより短い場面の飾りは、風景から不格好な線になってしまうようなものである。

二人の愛し合う者達は穏やかに長く、小屋の前で抱擁し合った。そしてオイゲーニウスは言った。「静かな、永遠の天よ、今や私どもから何ももはや奪い給うな」。 ― しかし彼の青白い子供は、折れた百合の頭と共に、彼の前に立っていた。彼は母親を見つめた。母親は大きな湿った目を天に向けていて、小声で言った。「あるいは私どもから皆を一度に奪い給え」。

私が憩いの天使と名付けようと思う未来の天使は微笑しながら泣いた。彼の翼は夕方の一陣の風と共に両親の溜め息を吹き払って、両親が互いに悲しむことのないようにした。

透明な夕方が赤いアルプスの周りに明るい湖のように流れ出て、涼しい夕方の波の輪で打ち寄せて来た。夕方と地球とが一層静まると、更に一層二人の魂は、自分達が正しい所にいると感じた。彼らは余りに多くの涙も、余りに少ない涙も有していなかった。彼らの幸福はその反復以外の増大を必要としていなかった。オイゲーニウスは純粋なアルプスの天の中で白鳥のように最初のハルモニカの音を流れ出させた。疲れた子供は、花の輪に囲まれて、日時計に寄りかかって、花と戯れていて、花を自分の周りに抜き取っては、自分の輪の中へ整えていた。とうとう母親は調和的な歓喜から目覚めた。 ― 彼女の目は、子供の、大きく彼女へと向けられた目に落ちて行った。 ― 歌いながら、微笑みながら、膨らむ母性愛を抱いて、彼女は小さな天使に歩み寄った。天使は冷たくなっていて、 ―

死んでいた。というのはその子の天から降ろされた生命は、地球の大気圏の中で、他の音色のように四散していたからである。 ― 死が蝶に息を吹きかけた。そしてこの蝶は拉致する人生の奔流から永遠の休らうエーテルの中へ昇って行った。地球の花々から楽園の花々の許へ行った。 ―

いつもそこから舞って行くがいい、浄福な子供達よ。汝らを憩いの天使が生命の朝の時刻に揺り籠の歌で揺すりかける。 ― 二本の腕が汝らと汝らの小さな棺を運ぶ。そし

て花の輪に添って、汝らの肉体は二つの薔薇の頬と共に、悲痛の刻み込みのない額と共に、白い両手と共に第二の揺り籠に滑り落ちて行く。汝らは単に樂園を替えたに過ぎない。

— しかし我々は、いや我々は、人生の嵐の風で崩れ落ちてしまう。そして我々の心は疲れて、我々の顔は地上の苦悶、地上の疲労で砕かれてしまう。それでも我々の魂はなお硬直して大地の塊にしがみつのである。

御身は、御身の目をロザムンデの刺し貫けられる叫び声、硬直して行く視線、石化して行く面影から目を離すといい、御身よ、御身が母親であって、この痛みをすでに有したことがあるのであれば、— この母親を覗く勿れ。母親は無感覚な愛を抱いて、もはや抱き締め返す力のない死骸を硬く自身に押し付けている。覗くのは父親の方だ。父親は胸を自分の戦っている心臓の上に黙って隠している。その心臓は黒い苦悶の虻のとぐろで取り巻かれ、虻の歯ですっかり噛まれていたけれども。いや彼がようやくその苦痛を取り除いたとき、その心は毒が回り、解体されていた。夫は傷をじっと忍び、その傷跡で屈してしまう。— 妻は苦悶に打ち勝つことは稀であるが、しかしそれでも苦悶を生き延びる。「ここにいるがいい」（と彼は圧倒された声で言った）— 「私は子供を、月が昇る前に、埋葬するつもりだ」。彼女は何も言わなかった。子供を黙って接吻し、その花の輪を千切って、時計の許に沈み込み、冷たい顔を腕の中に置いて、子供が運び去られるのを見ないようにした。

途中、月の朝焼けが揺れる乳呑み児を照らし出した。父親は言った。「月よ、現れ出でよ、この子の住む国を見てみたい。— エリュシオンよ、昇り出よ、そこでこの死体の魂を偲びたい。— 子供よ、子供よ、私が分かるなら、私の声が聞こえるなら、—

いやおまえは向こうでもこちら同様美しい顔をしていよう。美しい口をしていよう。何と天上的な口か、何と天上的な目か、もはやおまえの中では生気がない」。— 彼は子供に、人々が我々に最後に敷くすべてのものの代わりに、花を敷いた。しかし彼の心は、青白い唇、開けられた目を、花と土とで覆ったとき、折れてしまった。まず涙の奔流は墓に落ちた。彼が土塊の草の外皮で小さな隆起を築いたとき、彼は、旅と人生とで疲れてしまい、薄い山の空気の中、彼の病んだ胸が崩壊するのを感じた。そして死の氷が彼の心の中で沈殿した。彼は憧れながら零落した妻の方を見回した。— 母親はすでに長いこと彼の背後で震えていた。— 彼らは黙って互いに両腕で抱き合った。彼らの目はもはやほとんど泣けなかった。—

ようやく消光しつつある氷河の背後から神々しい月がひっそりと二人の黙した不幸な者達の上にこぼれ出て来て、彼らに人間を慰撫するその白い穏やかな沃野とその薄明かりを見せた。— 「お母さん、見上げて御覧」（とオイゲーニウスは言った）「向こうにあなたの息子がいる。— 御覧、月の向こうに、白い花々の杜が広がっている。そこで我らの子供が遊ぶのであろう」。— 今や燃えるような炎が食い尽くすように彼の内部を満たした。— 彼の目は月の許で、明かりではないすべてのものに対して盲いてしまい、その光の奔流の中、崇高な諸形姿が彼の前に打ち寄せて来た。そして人間の中では馴染みのない、思い出としては余りに大きすぎる新しい想念を、自分の魂の中で彼は聞いた。丁度夢の中でしばしばメロディーが、目覚めているときは何のメロディーも作れない人間の前に生じて来るようなものである。— 死と歓喜とが彼の重い舌を動かした。「ロザムンデよ、何故何も言わないのか。— 子供が見えないのかい。私は長い地球を越え

て向こうまで見える、月が動く所まで見える。そこで私の息子が天使達に混じって飛んでいる。高い花々が彼を揺すっている。　―　地球の春が彼の上に吹いている、　―　子供達が彼を導き、　―　天使達が彼を教え、　―　神が彼を愛している。　―　おまえ、良き息子よ、微笑しているな。楽園の銀色の明かりが天的におまえの小さな口の周りに流れている。おまえは誰も分からず、おまえの両親を呼んでいる。　―　ロザムンデよ、おまえの手を差し出しておくれ、一緒に行って、死ぬことにしよう」。　―

薄い肉体の鎖はより長くなった。彼の去って行く精神は人生の境界でより高く舞った。彼は麻痺した妻を痙攣する力で掴み、盲いながら、沈み込みながら、舌をもつれさせて発した。「ロザムンデ、どこにいるのかい。私は飛んで、　―　死んで行く、　―　一緒にいよう」。

彼の心は裂け、彼の精神は身罷った。しかしロザムンデは彼の許にはいず、運命は瀕死の手から彼女をもぎ取り、彼女を生きたまま地球に返した。彼女は彼の手を、その手は死んで冷たかったけれども、握って感じていた。そしてその手は死んでいたもので、彼女は手を穏やかに自分の心臓の上に置いて、ゆっくりと膝を屈して落ち、自分の顔を言いようもなく晴れやかに星々の夜に上げた。彼女の目は涙のない眼窩から天の中へ乾いたまま、大きく、浄福に迫って行き、天の中を静かにこの世ならぬ形姿を求めて、下界に飛んで来て、自分を持ち上げてくれるであろう形姿を求めて、見つめ回した。彼女は固く妄想していた、自分はすぐに死ぬ、と。そして祈った。「来給え、憩いの天使よ、来給え。そして私の心を奪い、心を上の私の愛しい者達の許に連れて行き給え。　―　憩いの天使よ、かくも長く私を一人っきりで亡骸達の許に置かないで。　―　神様、私の周りには何も目に見えぬものはいないのですか。　―　死の天使よ、御身がここにいないのはなりません。御身がまず私の側で二人の魂を拉致し、昇天させたのですから。　―　私も死にました。私の熱い魂をその跪いている冷たい亡骸から引き抜き給え」。　―

彼女は狂気のような不穏な心を抱いて空虚な天を見回した。突然天の静かな砂漠で、一つの星が燃え出で、地球の方へ向かってくねって来た。彼女は恍惚となった両腕を広げて、思った。憩いの天使が飛んでやって来る、と。しかし星は消えた、しかし彼女は消えなかった。「まだ違うのですか、私はまだ死んでいないのですか、至仁の方」、　―　と哀れな女性は溜め息を付いた。

東の方で一つの雲が湧き起こって、　―　月を越えて行き、　―　ひっそりと快活な天を近寄って来た、　―　そして地球の最も苦しめられた胸の上に懸かった。この女性は頭を反らして、雲を見上げて、稲妻を嘆願し、願った。「この胸の中に閃光を發し、私の心を救ってください」。　―　しかし雲は陰鬱に、後ろに反らされた頭の上を越えて行き、天の下に逃げ去り、山脈の背後に沈んだ。千もの涙と共に彼女は叫んだ。「私は死なないのですか、私は死なないのですか」。...

汝、哀れな女性よ。すると痛みが回転して襲って来て、怒った蛇の跳躍を汝の胸に行い、すべてのその有毒な歯を食い込ませた。しかし涕泣の精神が失神という麻薬を汝の心の上に注いだ。そして痛みの痙攣が穏やかな震えとなって溶けた。

いや、彼女は朝、目覚めた。しかし碎かれていた。彼女はまだ太陽と死んだ夫とを見た。しかし彼女の目はすべての涙を、彼女の引き裂かれた心は、爆発した鐘のように、すべての音色を失っていた。彼女はただ口ごもって言った。「何故私は死ぬことが許されな

いのか」。 — 彼女は冷たく小屋に戻って行って、この言葉しか更に言わなかった。毎夜彼女は半時間遅く亡骸の許に行き、そのたびに昇って行く細切れの月に出会って、涙もなく悲しみの目をその薄明かりの沃野に据えて、言った。「何故私は死ぬことが許されないのか」。

その通り。何故汝は許されないのか、善き魂よ、冷たい地球は、すべての汝の傷から熱い毒を吸い取ったはずなのに。丁度手が大地の中では蜂の一刺しから癒やされるように。しかし私は私の目をこの痛みから転じて、上の微光を発する月を見ることにする。月ではオイゲーニスが両目を微笑する子供達の許で開けていて、彼自身の子供が翼を有して、彼の心臓の上に降りて来るのである。...何故かくもすべてが第二世界の薄明かりの前庭では静かなのか。 — 一つの明かりの霧雨が第一の天の明るい野原を銀世界にしている、明かりの小球が輝く露の代わりに花々や梢に懸かっている。 — 天の青色^{*1}は、百合の平原ではより濃く膨らんでいて、すべてのメロディーがより薄い大気の中では単に溶け去った木霊である。 — ただ夜の花だけが静かな視線の周りを揺れて香りを発し、舞っている。たゆたう平原はここに踏み潰された諸魂を揺らしている。高い生命の波が滑るように四散して行く。 — すると心は落ち着き、目は乾き、願いは黙する。 — 子供達は蜂の絶え間ない羽音のように、まだ動悸している、花々の中に沈んだ胸の周りで舞っている。そして死後の夢が、地球の生活を映す、丁度こちらの夢がこちらの子供時代を、魔術的に、宥めながら、苦悶もなく、穏やかに映すようなものである。

オイゲーニウスは月から地球の方を見た。地球は、地球上の二週からなる長い月面の日、青い空に白く薄い雲のように漂っている。しかし彼は自分の古い母国が分からなかった。ようやく月面で太陽が沈んだ。そして我らの地球が不動に、大きく、微光を発して、エリュシオンの純な地平線に休らっていた。そして沃野の水車のように風の吹くエリュシオンの庭園を流れ出る微光で覆った。すると彼は自分がとても愛しい胸にかくも苦悶している心を残して来た地球を認めて、彼の歓喜の中で休らっている魂は、まだ下界で苦しんでいる昔の生活の妻への無限の憧れと憂愁とで一杯になった。「私のロザリンデ、何故何もはや自分を愛してくれない球から移って来ないのか」。そして彼は憩いの天使を頼むように見つめて言った。「愛しい天使。休息の国から私を連れ出して、下の忠実な魂の許に私を案内しておくれ。再び会って一人だけで苦しまないよう、再び痛みを有したいから」。

すると突然彼の心はさながら束縛もなく泳ぎ始めた。 — 風が彼の周りで舞った。あたかも彼が去るとき、彼を持ち上げて、膨らんで彼に吹き付け、流れとなって覆うかのようであった。 — 彼は夕焼けの中、花々の中を行くように、夜の中、木陰道の中を行くように、湿った大気圏の中を沈んで行った。彼の目はそこで滴で一杯になった。 — それから彼の周りでささやく声がした。あたかも子供時代からの昔の夢が再び来るかのようで、 — それからすべての彼の閉ざされた傷を開く一つの嘆きが遠方から一層間近に聞こえてきた。 — 嘆きはロザムンデの声となった。 — 最後に彼女自身が彼の前に立っていた、それと分らず、一人っきりで、慰めもなく、涙もなく、顔色もなく。...

*1 大気の青色は月ではより濃いに違いない。大気がより薄いからで、その双方が山では妥当するようなものである。

そしてロザムンデは地球上で夢見ていた。彼女にはあたかも太陽が翼を付けて、一人の天使となるかのように思われた。夢では、この天使が月をこちらに引き寄せて、この月が穏やかな顔となって、―― この近寄って来る顔が遂には一つの心となるのであった。

―― それはオイゲーニウスであった。そして彼の愛しい妻が向かって身を起こし、恍惚となってこう叫んだとき、「やっと私は死んだ」、二つの夢、彼女の夢と彼の夢とが消えた。そして二人の人間はまた離れ離れであった。

オイゲーニスは向こうの世界で目覚めた。微光を発する地球はまだ天に懸かっていた。彼の心は重苦しく、彼の目は、月面で落ちることのなかった一粒の涙で熱くなっていた。ロザムンデは下界の地上で目覚めた。大きな温かい露の滴が彼女の胸の一本の花に懸かっていた。―― すると彼女の魂の熱い霧は秘かな涙の雨となって落下した。彼女の内面は軽く、陽光のように明るくなった。彼女の目は穏やかに明るくなって行く天を見ていた。地球は彼女にとって余所余所しくなっていたが、しかし憎いものではなかった。そして彼女の両手は動いた、あたかも彼女の亡くなった者達が導いているかのようであった。...

憩いの天使は月を見、地球を見た。そして人間達の溜め息に心優しくなった。―― 天使は朝方の地球に一つの日食と一人の見棄てられた女性を見た。天使はロザムンデが、束の間の夜、日食の下、眠り込む花々の上において、朝方の露に落ちる冷たい夕べの露の中に沈み、両手を飛んで行く夜の鳥で一杯の影を帯びた天に向かって差しだし、震えながら太陽の中に漂っている月を、無限に憧れて見上げているのを見た。―― 天使は月の方を見た。そして彼の傍らに、地球が深く影の洪水の中漂い、一つの炎の輪へと溶接されているのを目にしている浄福な夫が泣いていた。まだ地球上に住んでいる微光の形姿によって、天上での浄福の全体をこの夫は奪われていた。―― すると平和の天使の天上的な心が折れた。―― 天使はオイゲーニウスの手と子供の手を握った。―― 二人を第二世界を通じて拉致し、下の暗い地球に連れて来た。―― ロザムンデは暗闇の中、三人の形姿が近付いて来るのを見た。三人の微光は星々の空に映えて、その形姿と共に上の方を歩んでいた。―― 彼女の夫と彼女の子供が春のように彼女の心の許に飛んで来て、すばやく言った。「大事な方、一緒に行こう」。―― 彼女の母親の心は母性愛で砕けた。―― 地上の血は止まった。―― 彼女の生命は尽きた。―― 浄福に、浄福になった彼女は二人の愛しい心の許でどもって言った。「私はまだ死ぬことが許されないの」。―― 「もう死んでいます」と三人の愛する者達の天使は歓喜で泣きながら言った。「今脱出したあの地球はまだ影の中にある」。...そして歓喜の波が高く浄福の世界に打ち寄せて来て、すべての幸福な者達、すべての子供達が影の中で震えている我らの地球を見つめた。

＊

勿論地球は影の中である。しかし人間はその地よりも気高い。人間は上を見上げ、自分の魂の翼を広げて、そして我々が六十年と名付けている六十分が打ち終わったら、人間は身を高くして、登りながら発火して、その羽毛の灰が落下する。そしてむき出しの魂は一人っきりでやって来る、地球[土]もなく、音色のように純粹に、高みにやって来る。―― しかしこちらで人間は薄暗い人生の最中、こちら下界では昇らない太陽の朝の黄金の中に、未来の世界の山脈を見るものである。丁度北極の住民が、太陽がもはや昇らない長い夜に、それでも十二時には最も高い山々に黄金色の朝焼けを見つめ、そして太陽が決して沈むことのない長い夏を考えるようなものである。

我らの時代に至るまでの
五級教師フィクスラインの生活
十五のメモ箱の形で

第一のメモ箱

シリウス日休暇[夏季休暇] ― 訪問 ― 貴族の家の貧窮女性

エギディウス・ツェベデーウス・フィクスラインは丁度一週間本当の五級教師となっていて、授業して温かい思いをしていたが、幸運にも食卓に四つの爽やかな、花と粉砂糖のまぶされた軽食、料理コースを得ることになった。つまり四週間のシリウス日[夏季]休暇となった。私はシリウス日休暇を発明した善良な男の髑髏を撫でてやりたい。私は休暇中こう考えずには散歩できない。今や休暇中千人もの背の曲がった学校教師が身を起こしている、そして硬いカバンは締め金を外されて足許にある。教師らは自分達が好きなことを求めることができるのだ、蝶々とか、 ― 数学の根とか、 ― 語根とか、 ― 葉草とか、 ― あるいは生誕の村を求められるのだ、と。

我らのフィクスラインも自分の村を求めた。彼はまず日曜日に ― というのは町では休暇はどんな味がするか、それを知りたいからで、プードルと、緑色のナイトガウンを運ぶ五級生と一緒に、市門から出て行くことにした。まだ露を帯びていた。彼はすでに諸庭園を後にしたとき、まず孤児院の子供達が朝の歌をトランペット構造の喉で発していた。町はフラクセンフィンゲンと言い、村はフーケルム、犬はシルと言って、年は一七九一年であった。[Huckelum という名が昔實在]

「僕ちゃん」（と彼は五級生に言った、というのは愛や、子供達やウィーン人同様に縮小詞[ちゃん]で語りかけることを彼は好んだからで）「僕ちゃん、村まで包みを私におくれ。 ― 駄けだして、自分のように小さな鳥を探しなさい。休暇中何か可愛がるものを見つけられるように」。 ― というのは僕ちゃんは同時に彼の小姓で、 ― 部屋掃除人 ― 同室者 ― 相棒 ― 小間使いであったからである。プードルが同時に彼の僕ちゃんなのであった。

彼はゆっくりと、色の付いた露の小球の一杯に付いた、襷のあるキャベツ畑を歩いて行って、そして藪を見つめた。そこからは朝風が四方から吹くと、宝石蜂鳥の飛行が見られるように思われた。それほどに藪が輝いていた。彼は時々 ― 呼び笛の紐を取って、小さな犬が跳ねて迷わないようにし、自分の一時間半の散歩を、道を時間によって測るのではなく、[過ぎた]村々に従って測るということで短縮した。歩行者にとっては、地理学者にとっては全くそうではないが、マイルに従ってではなく、[それより短い]ロシアマイルに従って測るのはより快適である。途中五級教師は、すでに刈り取られてある数少ない畑を暗記していた。 ―

しかし今や、フィクスラインよ、フーケルムの殿下の庭園をもっとゆっくりと進むがいい。君が君の上着からチューリップの花粉を搔き落としてしまうことのないようにするためとかではなくて、君のお母さんがせめて時間の余裕があつて、その滑らかな額に黒い琥珀織のアモールの帯を巻くようにするためだ。母親が帯にまずアイロンをかけようとするのを女性の読者達が遺憾に思うならば、それは私には腹立たしい。母親には女中がいなく、今彼女は教師殿食事全体を、 ― そのお金の準備は客人が三日前に送っていた、 ― 一人っきりで、世襲厨房女官の力も借りずに準備しなければならなかったということを知らないのに違いない。それにそもそも第三身分は（彼女は庭師の妻であった）いつも山鶉のように、自分が突いて出て来た平日の卵の殻を、午前中の教会の下、まだ尻に付

けているものである。

目に入れても痛くないほどに愛していた心の善良な母親が、どんなにその日の朝ずっと自分の学校の先生様を待ち受けていたか、想像できよう。彼女は全体地球上で、――自分の愛に溢れる魂にとって、――夫と長男はすでに亡くなっていて、――ツェベデーウスの他には誰も、誰も更に有していなかった。彼女はかつて何事か彼について語るとき、つまりは単に何か喜ばしいことにすぎないのだが、十回も目から涙を拭わずに語れただろうか。あるときは開基祭の自分の唯一のケーキを二人の乞食学生に分け与えなかっただろうか。自分の子供はライブツィヒで何も食するものがなく、ケーキ店のある庭園で、単に他の庭園同様、匂いを嗅ぐしかないというとき、自分が贅沢したら、神様の罰が当たると考えたからであった。

「おやまあ、あなたなの、ツェベデーウス」と母親は言って、当惑して微笑して、泣かないようにした。息子が窓の下で頭を下げて通って、二番刈り草でクッションを付けられたドアをノックしないで、突然入って来たからである。彼女は嬉しさの余りアイロンの石をアイロンに入れることができなかった。上品な学校教師が焼き肉が音高く焼けている間、優しくむき出しの額に接吻して、ママとまで言ったからで、この名前は彼女には優しく心への接吻のように響いた。すべての窓が開いていて、庭園はその花の香りと小鳥の鳴き声、蝶々の集まりで、ほとんど半ば室内のようなものであった。私はまだ報告していなかったが、一軒の家というよりは一つの室内と言っていいその小さな東屋は、宮殿の庭園の西側の岬にあったのである。その貴族が未亡人に好意でこの未亡人住居を確保させたのであった。いずれにせよ、庭師をもう雇わないので、その住居は空のままであったであろうからである。

しかしフィクスラインは喜びにもかかわらず長く留まっておれなかった。教会へ行かなければならなかった。教会は彼の精神的胃にとって、一つの宮廷料理、母親の料理であったからである。彼は説教が、単に説教であるということで、またすでに一回説教したことがあるということで、気に入っていた。母親にはそれは結構なことであった。善良な女達は、客人に単に気に入るものを与えさえすれば、すでに客人をもてなしたと思うものである。

彼は内陣で、外国人の教会参詣人のこの自由港、異教徒の前庭で、すべての教区民に微笑みかけて、子供時代同様に、大天使の木製の翼の下、頭巾を被った平土間を見下ろした。彼の子供時代が今や子供達のように微笑みのサークルで彼を閉じ込めた。長い花綵が輪になって子供時代を編み込み、時折花々を筆を取って、彼の顔に投げ寄越した。説教壇のパルナッソス山には長老のアストマンが立っていなかったか。彼はよく彼を鞭打ったものだ。彼の許ではギリシア語をラテン語で編集された文法から学ばなければならなかったが、彼は覚えることができて、説明することができなかったものである。説教壇の階段の背後には祭具室の客室があつて、そこには重要な教会の図書が、――学童ならその図書を本縛り革に収めることすらできないであろうものが、――パステルの埃を被ったシベリア栗鼠の毛皮の下に本当にあつたのではないか。そしてその図書は先にフォリオ判の多言語聖書から成り立っていなかったか。その多言語聖書を彼は、――プファイファー[August Pfeifer(1640-98)]の『神聖批判』によって活気付けた、――早期に一頁ずつめくって行き、そこから大変に苦心して、逆文字、大文字、小文字等々を抜粋したのであった。

しかし彼は今日はむしろ明日というよりもこの文字の粗性飼料を、オリエントの根食い動物の取りかかっているヘブライ語の文字箱に投げ入れるべきであつたろう。これらの動物はいずれにせよほとんど何の母音の穀粒飼料もないまま維持されるのであるから。――彼の横ではオルガンの椅子が王座として置かれていなかったか。いつも使徒日には彼をその椅子に学校教師が短い三つの合図で座らせて、司教区の者が跳ねるオルガンの音[ムルキー]で踊りながら階段を降りるよう仕向けたものだ。――

読者は今や、我らの五級教師が長老から、この聖職者の地方選帝侯から、鈴付き喜捨袋を広げながら、午後來るよう招待されるのを耳にすると、読者自身更に陽気になられることだろう。長老が読者自身を招待しているかのように、快いかもしれない。しかしまず読者は五級教師と一緒に母親と食卓の許、兩人はすでに白い、市松模様の晴着に着替えているのだが、家に帰って、大きなケーキを目にしたら、何と仰有ることだろう。このケーキはティエネッテ(シュテファニーのこと)嬢がパン焼き篋から滑らせて置いたものである。読者は勿論真っ先に、それは誰と知りたいことだろう。

彼女は、――というのは(レッシングによると[Hamburgische Dramaturgie.36St.])まさに『イリアス』の立派さに圧倒されてその著者の来歴は蔑ろにされてきたというとき、これは何人かの著者の運命に、例えば私自身の運命に合うのかかもしれないが、しかしケーキの製作者については、その焼き上げ作品に圧倒されて忘れられてはなるまいからで、――つまりティエネッテは他人の家に住む、赤貧の令嬢で、――多くを、年齢の他には有せず、その年齢は二十五歳で、――もはや近い親戚を有せず、――家政の他には何の知識もなく(彼女は本の『ヴェルター』さえも知らない)、――本を読まず、私の本は全く読まず、――宮殿の大尉令嬢として全く一人でフーケルムの宮殿の十三もの荒れて空いた部屋に住み、つまり監視していて、この宮殿は支部領シャーデックに居住する輕騎兵隊長のアウフハンマー所有のものであるが、――彼の夫役農民や女中の賄いをし、神の加護によって、――この加護は十三世紀には地方の貴族が侯爵同様に行っていたもので、――名前を書くことができる状態で、つまり人間の加護によって、即ち騎兵隊長夫人の貴族の加護によって生きており、夫人はいつも家臣に恵み深く、その夫は家臣を呪っているのである。しかし孤児のティエネッテの胸には砂糖入りのマルチパンの心が懸かっている、愛する余りかぶりつきたくなる心であつた。――彼女の運命は苛酷であつたが、彼女の魂は優しくあつた。――彼女は謙虚で、丁重で、臆病であつたが、しかし度が過ぎた。――彼女は身に応える蔑視を喜んで冷たくシャーデック[名は実在]では受け入れ、痛みを感じなかったが、しかしその後数日して、まずすべてのことを振り返った。そしてその切り込みからまず熱く血が流れ始めた。強硬症の傷が、その症状が過ぎた後痛むようなもので、それから彼女は全く一人っきりで自分の運命に泣いた。...

この深い音色の後、また明るい音を出して、こう言い添えることは難しいことである。つまりフィクスラインはほとんど彼女と一緒に育てられ、彼女は彼の同級生として、向こうの長老の許で、長老は彼を三級生として都市席に座る力があると見なしたので、彼と一緒に不規則動詞を学んだという次第である。

褐色の鱗の浮き彫り細工がギザギザ付いているケーキのこのアキレスの楯は、五級教師の中で腹ぺこの感謝の念の弾み車として回転した。彼は食事を輕蔑するかの哲学とか、食事を蕩尽するかの偉いさんの世界に関して、世の賢人や社交人の忘恩に等しいほどのもの

を左程有せず、屠殺の皿とか扁豆料理に対してはどんなに感謝してもしきれない思いであった。

無邪気に満足して、いまや四人席の会食者は、―― というのは犬は暖炉の下の一セットと共に除外されることはないからで、―― 甘い[無酵の]パンの祝宴、ティエネッテに対する感謝祭、庭園での幕屋祭を始めた。勿論フランスの国王のように四百四十八人のコックを（百六十一人の厨房の少年は数えることすらしない）、三十一人の果物屋を、あるいは二十三人のパン屋を有せず、それに毎日三十八ルーブルと二十スウ消費せずに、一人の人間が満足して食事できるものか、不思議な気にはなるであろう。しかし私は料理する母親も、私を養うというよりは食っている厨房宮廷国家全体も同じように好きである。伝記作者と世間がこのような食卓から取ることの許される得難い残り物は、あれこれの重要な卓話である。母親は多くのことを語った。ティエネッテは今晚―― と母はこっそり伝えている―― 初めて白いモスリン[『ジーベンケース』のレネッテの嫁入り姿]の朝の散歩用服を着て、同様に繻子の帯と鋼の帯留めを身に着けるけれども、しかし―― 彼女が言うには、―― 合わないことだろう。騎兵隊長夫人は（というのは夫人はティエネッテにその脱ぎ捨てた服をカトリック教徒が守護聖人に用済みの松葉杖や破損箇所を掛けるように譲るからで）もっと太っているから、と。善良な女達は互いにすべてを恵む、例外は衣服や夫や亜麻である。五級教師の空想の中で今や衣服を通じてティエネッテの肩甲骨から天使の翼が生えてきた。彼にとって衣服は半ば剥製の人間で、この人間には単に高貴な部分や第一原理が欠けているだけであった。彼は我らの核の周りのこの風袋、外皮を敬っていた。上品氏や美人検閲官としてではなく、他人が敬うものを軽蔑することができなかったからである。―― 更に母親はさながら彼の父の墓碑から読み上げた。父は齢三十二歳で、ある理由から死の両腕に沈んだのであったが、この理由については私はまず後のメモ箱で伝えることにする。読者に対する配慮からである。五級教師には彼の父についてどんなに話しても話し足りなかった。

最も素晴らしい知らせは、ティエネッテ嬢が今日彼女にこう伝えたことであった。「明日彼は奥方にお会いできます、恵み深い名親殿が町へ出掛けるから」。このことはまず私が勿論説明しなければならない。老アウフハンマーはエギディウスと言い、フィクスラインの名親であった。しかし彼は彼に、―― 騎兵隊長夫人は子供の揺り籠を夜のパンの贈り物や肉や穀類の十分の一税で満たしたけれども、―― つましくただ名前だけを名親の贈り物としたのであって、これはまさしく致命的なことであった。我らのエギディウス・フィクスラインはつまり彼のブードルと一緒に、この犬はフランスでの不穩故に他の亡命者と一緒にナントから逃れたのであったが、大学から戻ってほどなくして、彼と犬とは一緒に不運なことにフーケルムの小森を散歩することになった。というのは五級教師はいつも自分の同伴者に、「おとなしく、シル」(Couche, Gilles) と言うので、多分フォン・アウフハンマーという者を雑草の如く木々の間に撒いていた悪魔がいたものと見えて、彼の耳に容易に、彼の名前の―― Gilles はエギディウスなので、この茶番と偽造の全体が伝えられることになったからである。フィクスラインは早口で話すことも中傷することもできなかった。彼は Couche（おすわり、打倒）が何を意味するか、一言も知らなかった。今ではパリではその言葉を市民階級の犬自身が、彼らの犬見回りに対して言っているのである。しかしフォン・アウフハンマーは三つのことを決して撤回しなかった。彼の錯誤と

彼の怨恨と彼の言葉である。被挑戦者は今や、市民的挑戦者と不敬者に対しもはや面会せず、―― 贈り物をしないことに決めた。

閑話休題。正餐の後、彼は小窓から外の庭を見て、自分の人生の道が四つの坂道に分かれて、同様の数の昇天に通じているのを見た。牧師の館への昇天とティエネッテの宮殿への昇天と―― それは今日の分―― 明日はシャーデックへの第三の昇天、第四にすべてのフーケルムの家々があった。さて母親は十分に長く楽しげにつま先立って忍び歩いて、彼のラテン語聖書（ヴルガタ）での勉強を、つまり文芸新聞の読書を邪魔しないようにした。そしてようやく彼は自分自身の足で出掛けることになり、母親の謙虚な喜びは、活発な息子の背中を長く追うことになった。息子は一人の長老と全く上機嫌で話す度胸を有していたのである。それでも彼は畏敬の念を持って、禿頭というよりは白髪の老教師の家に入って行った。この教師は徳操そのものであるばかりでなく、空腹そのものでもあった。というのは彼は故国王陛下[フリードリヒ大王]よりも食したからである。教授を目指す教師は牧師をほとんど気につけない。しかし自ら牧師の家を自分の仕事場、出産の家に欲する者は、牧師館の住人を評価する術を心得ている。新しい牧師の住まいは、―― さながらフリーデリヒ通るかエアランゲンからか飛んで来て、フーケルムに落下した[聖母の]「聖なる家」のようであった。―― それは五級教師にとって太陽神の神殿で、長老は太陽神の司祭であった。そこで牧師になることは、菩提樹の蜜で塗り上げられた考えで、この考えは歴史上ただわずかに他一度生じている。つまりハンニバルの頭の中で、彼がアルプスを越えること、即ちローマの入口を越えることを考えたときのことであった。

主人と客人は立派な機知のサロン[bureau d'esprit]を形成した。官職にある人々、殊に同様な官職の人々は、互いに単に他人の話しを講義することが許される怠惰なコフキコガネや宮廷ののぼせ者よりももっと―― つまり自分達自身の話を―― 話すことになる。―― 長老はそれから（家畜小屋での）自らの堅い作品から、自分の大学生活での公文書に移った。大学時代はこのような人々が、詩人が少年時代を思い出すように、好んで思い出すものである。彼は立派であったが、しかし彼は自分がかつて余り大した者ではなかったことを半ば喜んで思い出した。しかし間違った行動の楽しい思い出は半ばその反復である。立派な行動の後悔する思い出が半ばその廃棄であるようなものである。

好意的に丁重にツェベデーウスは、彼は写字板で高貴な殿方の名前を書くときでさえ様子を忘れることはないので、この老人の大学時代の蜜カラに耳を傾けた。老人はヴィッテンベルク大学でペンに浸すと共に酒を注いだもので、ヒポクレネの泉に渴すると同様にグックグック^{*1}に渴したのであった。

イエルーザレムが素敵に述べているが、しばしば学問の多彩極まる花盛りの後生ずる蜜行は、一種の強壯化の泥土浴であって、かの花盛りの陥る危険性の高い過度の繊細化を阻むそうである。私が思うに、高校最上級生の場合いかに学問が上達するか、―― 例えば町が千フローリン学業の為に贈らなければならないニュルンベルクの名門の子弟ときたらどうなるか考える者は、―― つまりこのようなことを考える者は、ミューズの息子[大学生]にある種蜜行の中世を恵んだらよかろうと私は愚行する。この中世がまた大学生を

*1 大学のビール

鍛えて、その繊細化が過度のものにならないようにするだろう。この長老はヴィッテンベルクで百八十の大学の自由を、――それだけの数をペトルス・レブフスは数え上げているが^{*1}、――時効から守って、倫理的自由以外は何も無駄にできなかった。倫理的自由からは、人間は、修道院でさえ、大して得るものはない。このことは五級教師に度胸を与えて、自分の陽気な旅の脱線について言及した。これはライブツィヒで彼が悪夢の困窮の極みになったことである。聞き給え。彼の家主は、同時に教授で吝嗇家であったが、囲まれた中庭で家禽の飼育場を有していた。フィクスラインは、三人の同室の封建家臣団と一緒に容易に一部屋の賃貸料を支払っていた。彼らはそもそも重要な物は不死鳥のようにただ一品有していた。ベッドは一つで、そこにはいつも一組のペアが真夜中の前半に、後の一組が真夜中の後半に、夜警人の如く眠った。――上着は一枚で、それを次々に着用して、衛兵服のように中隊の国の制服であった。――そして更に幾つかの時と関心の一致が見られた。大学でほど貧窮の非常用貨幣、緊急時貨幣がより陽気に、より哲学的に集められる所はない。大学生の市民が、いかに多くの諧謔家、ディオゲネスをドイツは有するか証している。我らの唯一神教徒は、ただ一つの品だけ四倍持っていた。空腹である。五級教師がこう話したのはひょっとしたら思い出を余りに楽しく享受したからかもしれないが、一人がこのひもじい心から、正教授の家禽を課金、租税のように徴収しようと、一つの手段を考え出したのであった。この学生は言った（彼は法学生であった）、自分達はともかく法学的擬制を封建法から借用して、自分達は教授を、家禽の中庭と館の用益権とを有する世襲賃貸百姓と見なし、自分達を賃貸主人達と見なし、教授はその賃貸の家禽を主人達に正規に支払わなければならないということにしよう、と。さて擬制が自然に従って働くようにするためには、――とその学生は続けた、――擬制は自然に従うだから、――自分達はこのような謝肉祭の家禽を彼から本当に取り上げなければならないだろう、と。しかし中庭には入れなかった。封土権主義者はそれ故釣りを準備して、釣り針にパン切れを刺して、垂らしながらその釣り竿を中庭へ差し出した。数テルツィエで釣り針は家禽の喉に掛かって、取っ手を付けられた雌鶏は、今や賃貸主人の封土権主義者と会話することになり、静かに、アルキメデスが船を持ち上げたように高く、腹ぺこの気球船釣り結社の許に引き上げられることになった。そこではこの雌鶏には状況の都合に応じて正しい封土の名称、所有の肩書が待っていた。というのは吸収された家禽はあるときは竈税家禽、あるときは森林税家禽、村長税家禽、聖霊降臨祭家禽、夏季家禽と名付けられなければならないからである。「私はかくて」と釣り師の長子相続権者は言った、「ガロップ賃貸

*1 私はまだ若干のものをこのペーターに従って記述することにしよう。この若干のことはすべてかつて大学の生誕の際通用していたものである。例えば大学生は大学生に家と馬を供するように市民に強制できる。――彼の親戚に加えられた損害でさえも四倍にして補償される。――大学生は教皇の文書による命令を遂行する必要はない。――近隣の者は、盗まれた大学生のものに対して、責任を負わなければならない。――大学生と大学生でない者が下品に暮らしているとき、ただ大学生でない者のみが借家から出て行かされる。――一人のドクトルは一人の貧しい学生を養わなければならない。――

大学生を殺した者が発見されないとき、最も近くの十軒の家は秘蹟授与停止を受ける。大学生の遺産はファルキディア法によって制限を受けない等々。

料を徴収することになる。というのは当該の場合のように、賃貸百姓が長いこと賃貸料を納めることを怠っているとき、賃貸料の三倍、五倍はそう呼ばれているのだから」。教授は、侯爵のように、家禽の減少した民の数に悲しげに気付いた。これらはユダヤ人のように数えることで亡くなったものである[サムエル記下、24]。とうとう彼は、講義していたとき、――彼は丁度、森林の王権、塩の王権、貨幣の王権について話していた、――講義室の窓から祈るイグナツィウス・ロヨラのように、あるいは罰せられたユーノーのように[『イリアス』X V,18ff.]、空中に固定された賃貸料の雌鶏に気付くという僥倖を得た。――彼は飛行する動物の理解し難い垂直な昇天を追いかけ、とうとう上の方で釣り上げの[徴収の]従僕が動物磁気療法を施しているのを見た。この従僕が家禽の中庭から食事の分け前を引き抜いていたのだ。しかしすべての予想に反して、彼は王権の講義よりもまだ先に家禽狩りを終わらせた。――

フィクスラインは塔の響孔からの夕方のトランペット小品の下、家に歩いて帰った。そして途中丁重に宮殿の空の窓の前で帽子を取った。高貴な家々は彼にとっては高貴な人々と同様であった。インドではパゴダが同時に神殿と神を意味しているようなものである。母親には彼は挨拶を貰ったと嘘を言ったが、母親から本当の挨拶のお返しがあった。母親は午後、自分の史実の舌と自然科学者の目を持って、白いモスリン姿のティエネッテの許にいたのであった。母親は彼女に、息子が母親の大きな空の財布に入れてやった非常用貨幣をすべて彼女に示していて、彼が令嬢の許で好意を得るようにした。というのは女達は、自分の母親に優しく母親の慈愛の幾つかにお返しをする一人の息子の方に対して、例えば父親を世話している娘に対するよりも、より一層、より温かく自らの魂を傾けるからである。これはひょっとしたら百もの理由があるのかもしれないし、また女達は息子達や男達にもっと慣れていて、この男達は単に五フィートの長さの、――雷、ズボンを着た竜巻、あるいは収まっているハリケーンであるという理由かもしれない。

浄福な五級教師よ、君の生活には、君が君の母親に例えば長老宅での今日の午後について語ることができるという長所が鷲の勲章のように微光を発している。君の喜びは他人の心へ流れて行き、そこから二重になって君の心に戻って来る。心と心のより近い接近というものが、音響の接近のようにあって、木霊の接近よりも近い。至高の近さは音色と木霊とを反響の中に溶かす。

両人が夕方食事をし、正餐の残り物の代わりに、残りは明日自ずと正餐となろうからで、単に食卓の犠牲の炎の祭壇に犠牲[供物]のケーキあるいは無酵パンを置いたのは、史実的に確かなことである。自分の実子のためなら自らばかりでなく、残りの人々も喜んで犠牲にしていたであろう母親は、彼に対し、外で遊んでいて、自らの代わりに一羽の小鳥に餌を与えている五級生に得難い焼き菓子の残りではなく、単に皮のない自家製パンを与えるよう提案した。しかし学校教師はキリスト教徒的に考えて言った。日曜日だからこの若造は自分と同様美味しいものを食べたいだろう、と。フィクスラインは、――偉いさんや天才達の対蹠人として、――初めて市門と通って来て、次の駅では自分のホストと最後の宿駅長を忘れてしまうような人間よりも、むしろ奉公の家の仲間に好んで振る舞い、嫁入り支度をし、大事にした。そもそも五級教師は五体に名誉心を抱いていた。そして金を大事にし、尊重しているけれども、名誉心が問題となる場合には喜んで差し出した。同情心が強くなる場合は渋々で、同情は余りに痛々しく彼の心嚢を満たし、彼の財布を空にす

るのであった。 ― 五級生が無酵パンに放牧権を行使して、ティエネッテの無料賄い食卓に六本の腕が静かに置かれていたとき、フィクスラインは自分と一行に[母と犬]フラクセンフィンゲンの人名簿を読み上げた。モイゼルの『学的ドイツ[ドイツ学者人名録]』の他に、彼はこれよりももっと高貴なものを思い付かなかった。人名簿の侍従や枢密顧問官達は、ケーキの干しぶどうのように、彼の舌の上をくすぐって行った。そしてより豊かな牧師職から彼はさながら朗読を通じて穀物の十分の一税を徴収した。

彼はわざと日曜日の模造羊皮紙の自家版のままであった。つまり彼は祈りの鐘の下でさえ晴着のままであった。というのは彼はまだ多くのすることがあったからである。

食事の後、彼は令嬢の許へ行こうと欲した。彼女が庭園に百合のように赤い黄昏の中、浮かび上がって見えて来たときのこと、庭園の西の端に彼の家はあって、庭園の南の端には宮殿の中国式壁があった。...ちなみに、私がこうしたことすべてをどうして知ったか、メモ箱とは何か、私自身そこに行ったことがあるか等々、 ― これらについては、誓って、読者に直に忠実にお伝えすることにする、それもこの本の中で。 ―

フィクスラインは鬼火のように庭園の中を跳ねた、庭園の花の香りが彼のスープの香りにぶつかった。彼ほど貴人の前で深く屈むものはいなかった。平民的謙虚さからではなく、また保身的自己卑下からでもなく、こう考えていたからであった。「貴人というものはとにかくそうなのだから」。しかし彼の屈み込みは（前方ではなく）斜めの右の方へ、さながら帽子に引きずられて行った。というのは彼は杖を、敢えて持って来なかったからである。しかし帽子と杖は圧縮機であり、バランス棒であり、要するに屈み込み連動機であり、これがなければ彼は丁重な動きをなすことができなかった。たとえそれをなしたらハンブルクの首席牧師に任命すると言われてもできなかった。ティエネッテの陽気さで、彼の締められた魂はまた真っ直ぐになって、正しい調子となった。彼は彼女に対して長く丁重な謝辞と収穫祭説教とを鱗のケーキに対してなした。彼女にはそれは立派で同時に退屈なものと思われた。偉い世界[社交界]を知らない娘は、退屈な銜学を単に嗅ぎ煙草同様に男性の必需品と見なすものである。彼女達は我々を無限に尊敬する。ランベルト[Lambert (1728-77)]がプロイセン国王とはその太陽の目のせいで単に暗闇の中でしか話すことができなかったように、彼女達にとって、思うに、むしろ暗闇の中で聞き取るの方が、 ― まさに我々の崇高な風采のせいで、好ましい。 ― フォン・アウフマイヤー氏と彼のことを遺書に記入しようとしている恵み深い奥方についてのティエネッテの帝国史、皇帝史は彼を教化した。そして彼は彼女を、彼と副校長に関する学者史で、例えばいかに彼自身、二級教師として職を代理し、彼と同等の背丈の生徒達を教えているかと教化した。かくて兩人は満足して、赤い豆の花々、赤いコフキコガネの間を、ますます低く地平線上に落ちて燃え上がる黄昏の前で、庭園をあちこち歩き、いつも微笑しながら庭師の夫人[母]の頭の前で向きを変えた。その頭は窓の胸像のように小さな上げ下げ窓の中に嵌め込まれていたが、その窓はまたより大きな窓に収まっていたのである。

彼が惚れなかったことが、私には不可解である。確かにその理由を私は知っている。第一に彼女は無一文であった。第二に彼は無一文であり、その上負債の重荷があった。第三に彼女の系統樹は境界の樹で、保護棒であった。第四に更にもっと高尚な考えが結婚申し込みの彼の手を縛っていた。この考えはまだ訳があって、読者には隠されている。それでも、 ― フィクスラインよ、私が君の立場であることを許されなかったなんて面白くな

い。私だったら、彼女を見つめていて、彼女の徳操と我らの学校時代とを思い出して、それから私の柔らかに流れる心を取りだして、その心を彼女に手形のように差し出すか、顧問官勅令のように交付していたことだろう。だって私はこう考えたろうから、彼女は尼僧に二つの点で匹敵するであろう、――一つには立派な心の点で、一つには立派な焼きケーキを作る点で、――彼女は男性の夫役農夫達と付き合っているけれども、[両性具有の]カール・ゲノフェーファ・ルイーゼ・アウグステ・ティモテー・エオン・フォン・ボーモンなんかではなく、滑らかな、ブロンド髪の、頭巾を被った鳩なのだから、――彼女は我々男性よりも同性の女性にもっと気に入られるようにしているし、――彼女は、まず貸本屋から仕入れているのではない流れ出る心を涙の形で見せていて、その涙を無邪気に自慢しているというよりも恥じているのだから、と。――すでに三つ目の境栽花壇の前に私だったらこのような理由で、私の心の義捐金と共に出現していたことだろう。

――五の字よ、私が彼女を自分自身同様に知っていて、彼女と私とは（私が、つまり君であったならば）同じ長老からラテン語の書き方を習ったこと、――我々は無邪気な子供時分鏡の前で接吻をして、二人の鏡の中の紛いの子供達が真似をするか調べて見たこと、

――我々はしばしば男女の性の両手を一つのマフの中に押し込んで、その中で手の隠れん坊遊びをしたことを全くもって考えるならば、――最後にこう考えるならば、つまり我々はまさに夕方のエナメル画の中で微光を発するガラスの家の前に立っていて、その冷たいガラス窓の前で我々両人は（彼女は中に、私は外にいて）熱い頬を、単にガラス製の暖炉熱除け衝立によって隔てられて、互いに押し付け合っていたことがあると考えるならば、私はこの哀れな、運命によって押し潰された魂を、その雷雲に対しては墓より大きく高い塚を気象境界として有しない魂を、私の魂に引き寄せて、その魂を私の心の許で温めて、私の目で縛っていたことであろう。...

まことに五級教師もそうしたろう、私が隠している上述の高貴な考えが許していたならば。――その訳を知らずに柔和になって、――それ故彼は自分の母親に接吻したが、

――学的会話も交わさずに浄福になって、――そして卑下した推薦状の重荷と共に解放されて、この重荷は明日軽騎兵隊長夫人の前で降ろすことになっているのであるが、彼は小さな家屋に着いて、更に長いこと暗い窓から宮殿の明かりの窓の方を見ていた。――そして更にすでに上弦の月が沈んで行った十二時に、彼は穏やかな、薫る、湿った、心を名指しするようなささやかな夜風が吹き付ける前で、今一度すでに夢見ている視線の瞼を開けた。...

眠るがいい、君は今日はまだ何も悪いことをしなかったのだから。――私は、君の精神の垂れて、閉ざされた花の鐘が枕に沈んでいる間に、風の吹く夜、君の朝方歩む坂道を、つまり透明な小森を通じてシャーデックの君のパトロンの夫人の許に導く坂道を、覗くことにしよう。騎兵隊長はすでに一時に出発する。従って君と君の守護聖人の夫人は明日二人っきりで会うことになる。万事上手く行けばいいが、風変りな五級教師よ。

第二のメモ箱

フォン・アウフハンマー夫人 ― 子供時代の反響 ― 執筆家業

昨日五級生によって巣から養子にされたツグミがすでに二時に始めた餌を求めての早朝

のピョピョの鳴き声は、直に五級教師を服の着替えに追いやった。服の艶出し機と定規は世話を焼く母親の両手であって、母親は彼を騎兵隊長夫人の許に「だらしのない犬」のように向かわせたくなかった。プードルは監禁され、五級生は連れて行かれた、同様に彼がいかに騎兵隊長夫人に対して振る舞うべきかのフィクスラインの母の立派な訓示もあった。しかし息子は答えた。「ママ、私のように社交界とフォン・ティエネッテ嬢のような女性と交際のある者は、誰を前にしているか、上品な作法と社交術は何を要求しているか承知しているものです」。――彼は五級生と一緒に緑色の指をして（坂道で押し潰した葉の植物液の色によるもの）、そして歯につまみ食いの薔薇を有して到着し、シャーデックの太った従僕の前に立っていた。... 女達が花であれば、――もっともしばしば植物の花であると共に絹製の、イタリア製の造花、鉦物上の花模様であるが、――フォン・アウフハンマー夫人は豊満な花で、太った腹当て枕とベーコンの立方体を有していた。すでに卒中で体の半分が生命から切り取られていて、彼女はその脂身のクッションの上にただより柔らかな墓にいる具合であった。それでもまだ彼女に残っていた方は、同時に活発で、敬虔、自負心に満ちていた。彼女の心はすべての人間に対する注ぐ宝角であったが、しかし人間愛からではなく、厳しい敬虔心からであった。彼女は市民階級の者達を幸せにし、この者達に贈り物をし、すげなく断っていた。そしてこの者達の許ではせいぜい敬虔さしか評価していなかった。彼女は頷く五級教師を教会保護者夫人の逆方向に頷く風采で受け入れ、ティエネッテからの挨拶の陸揚げの際には好意的に快活になった。

彼女は会話を始めて、長いこと一人っきりで続けて言った。――それだからといって自負心の鼓腸が彼女から消えることはなかったが、――「自分は間もなく死にます、自分は自分の夫の代子達を（最後に署名した者を）きっと遺言で忘れることはありません」。

――更に彼女は彼に面と向かって言った。彼の顔には四番目の依頼がしっかり書かれて彼女の前にあった。「フーケルムでのお世話に関してはあてにではありません。でもフラクセンフィンゲンの教頭職は（これは市長と顧問官が決めるもので）自分としては協力できると思います。現市長の許でコーヒーを、市の法律顧問官の許で明かりを（彼はハンブルクの明かりの若干の卸しを商っていた）買っていますから」。――

さて彼は家臣としての言葉に移った。彼女が彼に長老アストマンの病状について報告を求めたからで、長老は病状の教理問答よりはむしろルターの教理問答を頼りにしていた。彼女はアストマンの教会保護者夫人というよりはパトロン[守護聖女]の方で、自分はこのような忠実な牧師の方には、ここ自分の荘園で彼の訃報の鐘を聞いたら、直ぐに後を追って行くことだろうとさえ告白した。かくも奇妙な乳糜の親戚は、我らの鉦滓と我らの銀鉦脈、例えばここの自負心と愛との間に見られるものである。そして私は願う、我々がこうした本質的同盟を美しい者達に許すのと同様、すべての人々に許して欲しい、と。この美しい者達は我々に、そのすべての欠点と一緒に、デュ・フェによると磁石に他の金属の混じった鉄が引き付けられるように、同様に引き寄せられるのである。

仮に悪魔が何らかの暇な折り、五級教師の魂に嫉妬の種子で一杯の片手か両手を振り蒔いたことがあったとしても、この種子は生長しなかったであろう。それに今日は全く育っていなかった。彼にとって師である人が、――それに虚栄心からではなく敬虔さから地球上の一つの称号と彼が思うもの、――つまり一人の聖職者である男性が称えられたのであるから。勿論史実的にこれも否定できないことであるが、彼はこの貴族の女性の許で

まさに請願に追い付いたのであった。「自分は確かに後数年喜んで学校生活に甘んずるつもりですが、しかしその後は落ち着いたささやかな牧師職に憧れています」と。しかし彼は正統派信仰かという彼女の問いに彼は答えた。「そう思いたい。自分はライブツィヒでブルシャー博士の公開講義をすべて聴いたばかりでなく、また何人かの信心深い学士達の講義も聴きました。宗教局は今では以前よりも純粋な教理について試験すると良く承知していますので」。

この病気の女性は、試射して欲しい、つまり彼女に病床での警告を述べて欲しいと頼んだ。―― 神かけて。彼は最良の警告の一つを行った。今や彼女の貴族の誇りは彼の職務の誇り、司祭の誇りの前で縮こまってしまった。というのはドミニコ会士のアラーヌス・デ・ルーペと共に、司祭は神よりも偉大である、神は単に一つの世界を創造できるにすぎないが、司祭は（ミサのとき）一人の神を創造できるのだからと彼は信ずることができたのではないが、それでも彼はホスティエンシスには喝采せざるを得なかったからである。この人は司祭の威厳は国王の威厳よりも七六四四倍大きい、太陽が月よりもそれ程の倍数大きいからと示したのであった。―― しかし貴族の女性ときたら、この女性は全く牧師の前では縮んでしまうのである。

奉公人の部屋で彼は従僕の許『ハンブルク政治ジャーナル』の前年の号を請い求めた。彼はこの時代の歴史的証拠書類を罰当たりなことに旅行服のボタンの包み紙に使用しているのを見たからである。うんざりする秋の夕べ、彼は腰を下ろして、政治的世界で何のニュースがあるか、―― 前年のことを参照することができた。

ひたすら希望が繋がれた、全く月桂樹の一杯に積まれた凱旋車で、彼は夕方家に向かった。そして途中五級生に、少しも得意げに昂揚することなく、自分がそうしているように静かに神に感謝するよう薦めた。

彼の四週間の夏季休暇の次々に花咲く行楽の杜とそこの中での花々も舞い飛ぶ群れは直に三頁で描かれることになる。私は彼の日々に行き当たりばったり出掛け、一日を取り出すことにしよう。日々は次々に微笑み、薫っている。

例えば彼の母クララの聖名祝日の日、八月十二日を取り出すことにしよう。朝彼は多年生の、耐火性の喜び、即ち仕事を有していた。というのは彼は私同様執筆したからである。まことに、クセルクセスが新しい楽しみ事を発明することに懸賞を出したとすれば、単にその懸賞問題に自分の考えを執筆する者は、新しい楽しみ事をすでに実際舌先に有していたのである。私は一冊の本を作ることよりも甘美なことをただ一件知っているにすぎないが、それはつまり一冊の本を計画することである。フィクスラインは十二分の一アルファベット[二全紙]の小品を書いて、それを原稿のまま、製本屋で黄金の翅鞘で綴じて貰い、背に印刷の活字でタイトルを付けて、自分の書架の文言の棚の全集に収めた。誰もがそれは新刊書で、筆記体で印刷されていると思った。彼は―― さえない作品は除外するつもりであるが、―― ドイツの文書の誤植の収集に取りかかった。彼は誤植を相互に比較して、どの誤植が最も多く生じているか示し、そこから重要な結論が引き出せようと述べて、読者にその結論を引き出すことを薦めた。

更に彼はドイツのマソラ学者の中に混じって行った。彼は序言で全く正しく述べた。「ユダヤ人達は『マソラ』を有していて、その『マソラ』を見て、こう指摘しているのである。彼らの聖書でそれぞれの字母が何回生じているか、例えばアレフ（A）は四三二七七回で、

— すべての子音が生じている節は幾つあって、(二六節である)、単に八〇の子音があるものは幾つか(三節である) — 四二の単語と一六〇の子音が出現する節は幾つあるか(単に一つの節で、エレミア書、XXI、7)、個々の聖書の書の最も中間の字母は何か(モーゼ五書のレビ記、XI、42では、それは貴族的V¹[フォン]である)、それどころか聖書全体では何か。 — しかし我々キリスト教徒はルターの聖書に対して示すことのできる同じようなマソラ学者をどこに有していよう。その聖書で最も中間の単語、あるいは中間の字母は何か、どの母音が最小に生じ、それぞれの母音の頻度はどうかと正確に調べられているか。 — 何千もの聖書の友が、ドイツ語のAは三二三〇一五回(従ってヘブライ語の七倍を越えている)その聖書に載っていることを知らずに亡くなっている」。 —

批評家の中で聖書研究者がいたら、この数字がより厳密な調査では正しくないと分かたら、公にして欲しいと私は願ってやまない^{*2}。

それに五級教師は多くの収集をした。彼は素敵な暦収集、教理問答収集、十六折り判収集を有していた。 — それに彼が始めた諸緒言の収集も、大抵見られるようにそれほど不完全なものではない。彼はドイツ語の本の予約者の自分のアルファベット順辞典を高く評価していた。その予約者の中にはJの項に私の名前もある。

最も好んで彼は本の案を生み出した。それ故彼は分厚い作品を綴じていて、そこで彼は学者達に、学者史の中では何を書くべきか単に助言をしたものである。彼は学者史を世界史、皇帝史よりも数インチ高く評価していた。彼は『学的共和国』の序言で手短に報じた。ホンメル[Hommel(1722-81)]は娼婦の子供であった法学者達の索引、聖人となった別の法学者達の索引を作った。 — ベレは何かを書こうと欲した学者達を数え上げたし、 —

アンツィロンは何も書かなかった学者を、 — リューベックの教区監督のゲッツェは靴屋であった学者、溺死した等の学者を数え上げた。この伝で行くと(と今や彼は続けることができた)、思うに、別の学者達について類似の名簿や検閲簿を作れるように思われる。その若干を提案すると、 — 例えば無学であった学者、 — 全く意地悪であった学者、 — 自らの毛髪を有していた学者、 — 弁髪の説教師達、弁髪の詩篇唱詠者達、弁髪の年代記作者達等々。 — 黒い革ズボンの学者達、諸刃剣帯刀の学者達、 — 十一歳で亡くなった、二十歳、二十一歳で亡くなった等の学者達、 — 百五十歳で亡くなった学者については自分は一例しか知らないが、乞食のトーマス・パレが該当しよう。

— 他の学者よりももっとひどい筆跡の学者達、(これについては単にロルフリンクとその文字が挙げられる。この文字は彼の両手同様[原典は親指大]長いものであった^{*3})。 —

*1 国家の場合と同様に。

*2 この依頼にエアランゲンでは答えている。当地の聖書研究所では五級教師がはなはだ確信を抱いて聖書で発見したと主張した(それ故この間違った数字もこの本の初版では81頁で本当に生じているが)一一六三〇一のAの代わりに、上述の三二三〇一五を発見した。これは(とても奇妙であるが)そもそもまさにコーランのすべての字母の数と同じである。リューデケの『トルコ帝国の記述』参照。新版、一七八〇年。

*3 パラヴィキヌス、『有名な男達の逸話』、第一の世紀、二。

あるいは喧嘩するとき顎髭しか引っ張らなかった学者達、(これについては単にフィレルフスとティモテウスしか知られていない^{*1})。

このような趣味の研究を彼は職務の仕事の傍ら行っていた。しかし思うに、一つの国家はこのようなことを馬鹿らしく思うものである。国家は、職務の慣行を犠牲にして、哲学と文学の面で偉大である者を、合奏時計と比べるものである。この時計はその時を、――フルートのメロディーを奏するのであるが、――愚かな遅鈍な塔の鐘よりも外れて打って鳴るものである。

聖名祝日に話を戻すと、フィクスラインはこのような緊張の後、小鳥の歌声の灌木やざわめく木々の下に入って行き、鉢や椅子がすでに食卓に用意された頃、温かい自然から戻ってきた。食事の時に、伝記作者には欠かせない何事かが生じた。つまり彼の母は彼の子供時代の世界地図を噛みながら開いて見せて、彼の現今の年の幾ばくかを推測せしめる当時の彼の特徴を語った。それから彼は、彼の子供時代の過去のこの遠近法の見取り図を小さな紙片に記した。それらはすべて我々の注目に値するものである。というのは、彼の子供時代の情景や一幕、芝居を含むただこれらの紙片を彼は年代別に一つの子供筆箱の特別な引き出しに平らに収めて、彼の伝記を、モザー[Moser:Lebensgeschichte 46 節]が彼の公法学的素材をそうしたように特別のメモ箱に分割したからである。彼は十二歳、十三歳、十四歳等の、二十一歳等々の思い出のメモのための箱を有していた。教育学的建築夫役の一日の後、休息の夕べを取ろうと思ったら、彼は単にメモを引き出し、彼の人生のオルガンの音栓ノブを引き出して、諸々のことを考えた。

私は私の首に絞殺の短い審判を掛けようと思っている沈黙の[啞の]批評家達に、格別のお願いをしなければならないが、私が章をメモ箱と名付けているが故に彼らがそうする前に、誰にその責任があるか見て欲しいし、私に他に仕様があるか考えて欲しいのである。五級教師本人が彼の伝記をそのような箱に分割しているのである。実際批評家は普通公正なものである。

ただ自分の兄については彼は母親を傷付ける質問をしなかった。というのは運命は兄はある独自のやり方で、その天才的なすべての才能と一緒に死の氷山で砕いたからである。つまり兄はある氷の塊に飛び乗った、それは他の塊の間で止まっていた。――しかし他の塊が退いて行き、兄の塊は兄と一緒に進み、漂いながら兄の下で溶けて、それで熱い心を氷と波の間に沈めてしまった。兄が見つからなかったこと、腫れ上がった死体を凝視して震撼させられることのなかったことが、母親には悲しかった。――良き母親よ、むしろそのことを神様に感謝し給え。――

食事の後、彼は書き物机での新たな諸力を蓄えるために、ただ暇そうに家の中を歩き回って、警察の火事見回りのように彼の小屋の隅々を調べて、そこから彼の子供時代の燃え尽きた喜びの炎の何らかの石炭を選び出そうとした。彼は屋根裏の、冬は捕鳥師であった彼の父親の空の鳥小屋に登った。そしてカナリア繁殖用の大きな巣小屋の中にある彼の昔の玩具の物置をざっと調べた。子供の魂の中では規則的に小さな形姿が、殊に球や賽子が

*1 同上、第二の世紀、十八。フィレルフスはこのギリシア人と一音節の韻律について喧嘩した。賞金あるいは賭け物は敗者の髭であった。――ティモテウスは自分の髭を失った。

最も深く刻印され印象に残る。そのことから読者は、赤いリスの牢獄や、馬鈴薯種子のカプセルと白い薄板から合成された骨組み、賽子状のランタンの快活なガラスの家に対するフィクスラインの快感を説明されると良からう。しかし私は次のことを全く別様に説明する。彼は建築助成もなしに、百姓のためではなく、蠅のために、粘土壁建物に挑戦した。それ故それはポケットに楽に収めることのできるものとなった。この蚊の救貧院はガラス窓と赤い塗料と、殊に多くの窪みの壁と三つの出窓を有していた。というのは彼は以前から出窓を家での一つの家と見なしてとても愛好していて、その点イェルサレムは気に入らなかったであろう、(ライトフットによれば) そこでは出窓は許されなかったからである。建築監督が窓際で這っている借家人を見たり、あるいは砂糖槽をつまみ食いするのを見る時の、―― というのはそれらはサン・ジェルマン伯爵のように砂糖しか食べなかったからで、―― 輝かしい目つきから、この喜びから、教育参事官ならば容易に家庭的狭小さへの彼の嗜好を予言し得たことであろう。彼の空想にとって当時まだ庭園の東屋でも余りに荒れた箱舟やホールであって、単にこのようなルーブル宮がまさに可愛い市民の家であった。―― 彼は彼の古く高い子供椅子を触った。それは教皇の聴聞席に似ていた。彼は子供馬車を揺り動かした。しかしそれが他の子供馬車と比べていかほどの香油と神聖さを有するのか分からなかった。彼にとって子供達の子供遊びは、それを遊んだ子供が大きくなって自分の前にいて、その遊びを描写するときほどには面白くないと不思議に感じた。

家の中の唯一の品に対し、彼は憧憬と憂愁の念を抱いていた。小さな衣装簞笥に対してで、それは私の机よりも高くなく、彼の哀れな溺死した兄のものであった。兄は簞笥の鍵と一緒に波に飲み込まれてしまったので、絶望した母はその玩具の棚を強引に開けないと誓いを立てた。多分哀れな兄の玩具のみがその中にあるのであろう。この出血する骨壺からは目を逸らすことにしよう。――

ベーコンは子供時代からの思い出を健全な薬用品に数えているので、当然思い出は全く五級教師にとって消化剤となった。さて彼はまた仕事机に向かって、何か全く格別のことをなした。―― 牧師職を求めての請願書である。彼は人名簿を取りだして、そこに見られる牧師の村のそれぞれに一つの請願書を準備した。その請願書は先任者が亡くなるまで、脇に置いておくのであった。ただフーケルムだけは求めなかった。空いているすべての官職に名乗り出なければならないというのが、フラクセンフィンゲンにおける素敵な慣習である。祈りのより高度の有益生が、その実現にではなく、祈りに慣れる点にあるように、請願書は、それで官職が得られるようにするためではなく、―― これは金で得なければならず、―― 一つの請願書の書き方を学ぶために、起草されるべきであろう。勿論、すでにカルムック人達の許では、カプセルを回すことが祈りの代わりとなるのであれば^{*1}、財布をわずかに動かすことは、文字通り請願しているのと同じようなものであろう。

夕方頃、―― それも日曜日となれば、―― 彼は村を逍遙して、彼の遊び場や、かつては蝸牛を放牧した共有の牧草地へ巡礼し、―― 学校時代から他の人々が驚いたことに

*1 彼らの祈りの小車、キュリュドゥーは、巻いた祈りの言葉で一杯の空ろなカプセルで、これが振られて、効果を発する。より哲学的に考えれば、祈りでは単に想いが狙い定められるので、その想いが口の動きによるか、カプセルの動きによるか、どちらでもいいことになる。

俺、おまえで呼び合う他の百姓を訪ね、 — 大学出の教師として学校教師の許へ、それから長老の許へ行った。 — それから主教の納屋あるいは教会へ行った。この最後のことは誰も分からないだろう。つまり四十三年前に教会が燃えて（塔は残った）、牧師館と — 再び作成することができない — 教会の記録簿が焼け落ちた。それ故フーケルムでは、自分は何歳であるか知っている人がごく少数であった、五級教師の記憶脳繊維は自身三十二歳と三十三歳の間で揺れていた。従って普段打穀されている所で説教されなければならない、神々しい言葉の種子は、物理的種子同様に一つの打穀場で吹き分けられた。楽長と学童が打穀場を占めて、中央教会区の女性達は一方の瘤胃に立ち、シャーデック支部の女性達は他方の瘤胃に立って、その夫達は三文棧敷、安棧敷のようにピラミッド状に、納屋の梯子の上にしゃがんでいて、そして上の麦藁納屋では様々な人々が下の方に耳を傾けていた。小さなフルートがパイプオルガンの代わりで、逆さにしたビール桶が祭壇で、その周りを人々は回らなければならなかった。白状すると、私自身気まぐれなことを挿まずには説教できなかったことであろう。長老は（当時はまだ若様で）牧師館建造中宮殿に住み、講じた。それ故フィクスラインはそこで令嬢と不規則動詞を習ったのであった。

これらの発見の旅が終わったとき、我らのフーケルムの巡回者は更に夕べの祈りの後、ティエネッテと一緒に薔薇から油虫を、苗床からミミズを取りだし、各分秒ごとに一つの喜びの天を得ることができた。 — すべての夕方の露の滴が喜びの油、丁子油で彩色され、 — すべての星が幸運の太陽の陽の眼差しとなり、 — この娘の[コルセットで]結ばれた心の中には、小さな隔壁な背後、彼の間近に、（薄い人生の背後、聖人の間近に見られるように）、広がった花々の楽園があった。...つまり彼女は彼を少しばかり愛していた。

彼はそれを知るべきであったろう。しかし彼はベッドに向かうとき、階段での子供っぽい思い出で、自分の重苦しい歓喜を薄めてしまった。つまり子供時分彼は夕べの祈りとして掛け布団の下、ロザリオの祈りのように十四の聖書の格言を祈った。最初の詩は、「さて皆、神に感謝し給え」、そして十戒、更に一つの長い祝福であった。さてもっと早く終えるために彼は祈りを階段で始めたばかりでなく、アレクサンダーが人間とは何か知り、ゼムラーが愚かな文士達を調べた所[トイレ]でもすでに始めていた。 — 綿毛の波の港[掛け布団]に滑り込むと、彼は夕べの祈祷を終えていた。そこで彼は更に努力することなく目を閉じて、真っ直ぐに羽根布団と微睡みの中へ狩り立てて行くことができた。 —

このように最小の人間[ホムンクルス]の中にさえすでに — カトリック教会の見取り図が隠されているのである。

以上が五級教師ツェベデーウス・エギディウス・フィクスラインの夏季休暇である。

— 私はこの人生の記述の章を、すでに二度目であるが、人生のように、一つの眠りで締めることにする。

第三のメモ箱

クリスマスの千年至福説 — 新しい偶然

我々皆を色褪せた平板な日々の連なりが、ガラスの真珠の紐のように墓場へ導いて行く、それは単に時折オリエントの真珠紐のように結び目で分割される。しかし人は五級教師の

ように自分の人生を一つの太鼓と見なさないとき、不平を言って死ぬことになる。この太鼓は単に唯一の音色を有するだけであるが、しかし時の間隔[リズム]の違いが、この音色に楽しさを十分に与えている。五級教師は四級生を教え、二級生の教えを代理し、写字台で人生の通常の単調さの中、書き続けた。―― 休暇から始まって、一七九一年のクリスマスまでであるが、さて私が描こうとしているこのクリスマスの他には特記するものがない。

しかし彼が渡り鳥に似て、陰気な霧のような秋をどのようにして飛び越えて行ったか、前もって若干のことを報告したら、このクリスマスのことはいつでも描けることになる。つまり彼は『ハンブルク政治ジャーナル』に取りかかったのである。これは従僕がボタンの包み紙にしようとしていたものである。彼は静かに、暖炉に背を向けて、前年の冬の戦役に従軍できた。―― そしてどの戦闘にも、禿鷹がファルサルスの戦いに向かうように、追って飛んで行けた。―― 彼は印刷紙上で楽しく、賛嘆しながら、ドイツの凱旋門や歓喜の花火の足場の周りを回ることができた。一方単に最新の新聞を取っていた町の人々は、フランス人によって意地悪く破壊されたこの戦勝記念品の瓦礫がほとんど見分けがつかないのであった。―― いや彼はすでに古い戦略で敵を追い返すことができたのであるが、当世の読者は新しい戦略もほとんど防衛できないのであった。[1794-96 年に合う]――

しかしフランス人をやっつける容易さのみが彼の心をジャーナルに対し籠絡したのではなかった。ジャーナルが―― 無料という事情もあった。彼は郵便前納の読書に顕著に夢中になっていた。彼が、モルホーフが助言しているように、雑貨商が出すような反古紙の個別の冊子を熱心に収集して、ヴェルギリウスがエンニウスに執心したように、このようなものを溜め込んだのはこの点から説明されるのではなかろうか。いや彼にとって小売商は（学者の）フォルティウスであり、（国王の）フリードリヒに当たった。兩人とも完全な本の中から、単に幾ばくかの価値のある頁のみを切り取ったからである。まさにすべての反古に対するこの敬意のために彼はフランス人のコックの前掛けに関心を示した。これらの前掛けは周知のように全部印刷された紙でできているのである。ドイツ人はこれらの前掛けを翻訳して欲しいとしばしば彼は願った。私はよく妄想するが、単なるこれらの紙の尾髄骨や前掛けよりももっと立派な訳本になれば、我らの文学は（この美しい尻のミューズ[プラクシテレスの Kallipygos]は）もっと繁栄し、涎掛け以上のものになり得よう。

―― 人間は、単に半ば盗んでこれたと思うが故に、多くのものに愛着価値を置くものである。この先述のことと関連のある理由から、五級教師は自分が公開講座から、あるいは客人として盗んでこれたものを信じ、受け入れた。ただ代価として教授に支払わなければならない見解のみは、厳しく吟味した。―― 私は先送りしたクリスマス・イブに話を戻す。

まさにエギディウスが喜んだことに、外では粉屋とパン屋が互いに喧嘩していた、―― という具合に人々は大きな雪片での吹雪を形容するが、―― そして窓辺では氷の花々が咲いていた。というのは彼は部屋の中が暑いとき、外気の凍霜を好んでいたからである。

―― 彼は今や暖炉にピッチの木材を入れ、胃には焙煎人参コーヒーを入れることができ、右足は（スリッパに入れる代わりに）プードルの温かい腰に押し込み、更に左足上で、老犬シルの鼻先を突いている椋鳥を揺さぶることができた。一方右手では―― 左手ではパイプを持っていて、―― 邪魔されずに、温かく包まれて、煙の中、冷たい隙間風も受け

ずに、五級教師のできる最重要なことを始めていた。―― フラクセンフィンゲンのギムナジウムの講義シラバス、つまりその八分の一を記していた。私は一人の学者の歴史における最初の印刷を製本屋の歴史における最初の印刷よりも重要と見なしている。フィクスラインは、有り難や、来年取り扱うことになるものを細記することに飽きることがなかった。それ故有益性よりも印刷のせいで、すべての教師団の演習計画の三、四回の教育学的指示を並べて行った。

彼は更に若干のダッシュ[思索線]を話しの糸として追記して、それからその作品をもはや見つめなかった。忘れようと思ったからで、印刷の後、自らの考えにびっくりするためであった。それから彼は見本市のカタログを、これは毎年そこに載っている本の代わりに買うのであるが、溜め息を付くことなく開けることができた。彼も私同様活字になっていた。

この陽気な道化師は、執筆中頭を揺すって、両手をもみ合わせ、尻で跳ねて、顔を磨き上げ、弁髪を端を吸っていた。―― 今や彼は夕方五時に跳ね起きて、休憩することにし、自分の鳥籠の中のパイプの魔術的煙の中、捕らえられたばかりの鳥のようにあちこち歩いた。温かい煙の中、通りのランタンの長い銀河が輝いていて、彼のベッドのカーテンでは上の方にかけて、赤く、近隣の燃える窓辺や照明を受けた木々の揺らめく反映が懸かっていた。そこで彼は思い出の一葉草から時間の雪を取り除いて、自分の子供時代の美しい年月が開けられて、新鮮に、緑色に、薫りながら眼前の下の方に立っているのを見た。いや、我らの空しく消えて行く人生の上を昇って行く煙が、消えて行くアンチモニーの場合のように、新たな、詩的なものとはいえ、歓喜の花々の中に収まっているのは素敵なことである。―― 彼は二十年という遠方から自分の両親の静かな部屋を眺めた。そこでは彼の父と彼の兄がまだ死の枯れた床、乾燥炉から消えていなかった。彼は言った。「今日のクリスマス・イブをすぐ早朝から味わうことにしよう」。すでに起床の際、彼はテーブルの上に幼子イエスが林檎や胡桃を夜、紋章風に象って打ち付けた金箔、銀箔の神聖なきらめきが見られた。―― 歓喜の貨幣検査秤では、この金属的泡は黄金の子牛、黄金のピタゴラスの辺、資本家のペリシテ人の黄金のはれ物[サムエル記上、6.4]よりも重いものである。―― それから彼の母が同時にキリスト教と衣服とを用意した。彼女は彼にズボン履かせながら、容易に戒律を約言し、靴下留めを結びながら使徒信経を称えた。獣脂蠟燭をもはや必要としないとき、彼は大型椅子のアームに乗って、クリスマスの白樺の黄色のねばねばの葉が夜間どれほど伸びたか測って、いつもより小さな白い冬の花には余り注目しなかった。これは上に吊された鳥籠からこぼれた麻の種子が、湿った窓の継ぎ目から芽を出したものである。―― 私は J.J.ルソーの聖ピエール島植物誌^{*1}の悪口は全く言わない。しかし彼も五級教師の窓辺の植物誌を悪く取らないで欲しい。―― 一日中学校はないので、肉屋[役]（彼の兄）を呼んで、家庭用屠殺を（これにもっとふさわしい凍える天候があらうか）行うのには十分な時間があつた。つまり兄は数日前に生命の危険、笞刑の危険を省みず、宮殿の窓の空気穴の肥育作品を捕らえたのであつた。窓下腰壁に立ちながら、手を伸ばして、そこに巣作りしている肥育雄牛の―― そう雀のことを言っている

*1 彼がビエンヌ湖の聖ピエール島について提供しようと思った記述。[『孤独な散歩者の夢想』]

たが、 ― 夜営場を襲ったのであった。この屠殺には木製の斧も、腸詰めも、塩漬け肉等々にも欠けるものはなかった。 ― 三時に老庭師[父]が、人々はこの人を造園師と呼ばなければならなかったが、ケルン製のパイプをくわえて、自分の大きな椅子に座った。すると誰もはや仕事を許されなくなった。彼は単に飛行して来る幼子イエスや鈴を持った騒がしいループレヒトの法螺話しをした。黄昏に幼い五級教師は林檎を一つ取って、それを立方幾何学のすべての諸像に切り分けて、それらをテーブルの二つの区分に置いた。その後明かりが入ってきた。すると彼は発見物に驚き始めて、兄に言った。「御覧、信心深い幼子イエスが僕と兄さんに贈ってくれたのだ。イエスの翼がちらちら光るのを見たんだ」。この微光を彼本人が一晩中待ち受けていたのであった。

すでに八時になると ― ここでは大抵彼のメモ筆筒の年代記に頼っているが、 ― 両人は首にかすり傷を付けるほど洗われて、新しい下着を着て、聖なるイエスが、まだベッドの外にいる彼らを目にするかもしれないと皆案じて、ベッドに追いやられた。何と長い魔法の夜か。 ― 何という夢想的希望のざわめきか。 ― 空想の形姿で一杯の、微光を発する[ハルツにある]バウマンの洞窟が長い夜と夢想的消化の疲労の中にますます小暗く、ますます充実して、ますますグロテスクに侵入して来た。 ― しかし目覚めると懂れている心にその希望が再びもたらされた。 ― 偶然や動物や夜警人のすべての音色は、臆病に敬虔な空想にとって、天国からの音響なのであり、大気中の天使の歌声なのであり、朝の礼拝の教会の音楽なのである。

いや、当時その遠近法と共に歓喜の奔流のように我々の心の部屋に襲来したもの、今になっても思い出の月光の中でその薄明かりの風景と共に我々の心を甘美に溶かすものは、単なる食べ物や玩具の怠け者の天国ではなかった。 ― いやそれは、当時我々の果てしない願望にとって、まだ果てしない希望が存在したということなのであった。しかし今では現実の我々には願望しか許さなくなっている。

ようやく近隣の素早い明かりが壁を越えて走り、塔のクリスマスのトランペットと鶏の鳴き声が両子供をベッドから起こした。 ― 暗闇に対して不安を抱かず、 ― 朝の冷たい霜の感覚はなく、 ― 騒がしく、 ― 酩酊して、 ― 叫びながら彼らは階段から暗い部屋の中へ突進して行った。 ― 空想が闇の中の宝物の焼き菓子の香り、果実の香りの中、掘り進み、木のヘスペリス達の果実の仄かな光の許、その蜃気楼を描いた。母が明かりを火打ち石で点す間に落ちてくる火花がテーブルの上の行楽地と壁の多彩な行楽の杜を戯れるように映し出したり、消したりした。そして一条の輝きの原子がエデンの吊り庭を運んでいた。 ―――

突然明るくなって、五級教師は ― 教頭職と置き時計を得た。

第四のメモ箱

官職の小売り ― 約束された秘密の露見 ― ハンス・フォン・フクスライン

つまりかつての五級教師がその子供時代の共鳴板たる煙の部屋であちこち歩いていたとき、市役所の従者が、ランタンと招聘状と共にやって来て、その従者の後にフォン・アウフマイヤー夫人の獵師が短い手紙と置き時計と共にやって来た。騎兵隊長夫人は病床での夏季休暇時警告に対する謝礼をクリスマスの贈り物に変えたのであった。その贈り物は1)

置き時計であり、これには木製の猿がいて、鐘を打つとき出て来て、何時になるか合わせて打つのである。ー 2) 教頭職、これは夫人が彼のために働きかけたものであった。

フラクセンフィンゲンの内部参事会のこの召命については外部では、然るべく判断されて来なかったので、全参事官のために『帝国新報』でよりもむしろここで一つの弁論を講ずることが私の義務であろう。私は、市の法律顧問官はハンブルクの明かりを、現市長はコーヒー豆を、粗挽きのものも碾いたものも取り扱っていたとすでに先の第二のメモ箱で言及している。しかし彼らが一緒に行っていた交易商会は、八つの学校官職を有している。他の参事官は単に荷造り人、売り子、帳場掛として参事官書記室を占めている。市役所[全参事官]全体はそもそも一種の東インド会社で、そこでは単に勅令や召命ばかりでなく、靴や布類も安売りされている。本来参事官はその官職販売の自由をローマ法の基本原理から有している。つまり「ある品を贈与する権利を有するものは、望むならその品を売買してよろしい」というものである。さて参事会[市役所]構成員は明らかに、官職を無料で付与する権利を有するので、官職を売買する権利は自ずと理解されなければならない。

召命の相場師達一般についての単なる号外

私は全体に、国家の大学産物小売り委員会^{*1}は官職販売が怠慢であると案じている。もし重要なポストのために収められる購入貨幣によらず、縁故や親戚関係、党派的推薦や平身低頭によって奪われてしまうならば、結局困るのは共同体の他にあるのか。本当の官職よりも肩書の官職がより高価にかかるのは矛盾ではなかろうか。本当の枢密顧問官は肩書枢密顧問官と比べて二倍に競り上げられることをむしろ期待すべきではなかろうか。ー

さて貨幣はヨーロッパの国家においては、万物の価値の等価物、代理物であるので、貨幣には頭部像があるだけに一層そうであるので、官職の購買額を数えて支払うことは、従って、立派な試験規定に従ってなされる厳格な試験に耐えることに他ならない。それを逆にして、自分の練達さを、その代用品、手形支払人、信用できる貨幣の代わりに呈示しようと欲することは、ガリヴァー旅行記の阿呆な哲学者達に似ることに他ならない。この哲学者達は事物の名前の代わりに、事物そのものを袋に入れて、社会的交易に持ち込んだのである。これは即ち明らかに物々交換の時代に逆行しようと欲することで、この時代ローマ人は、革の貨幣に描かれた雄牛の代わりに、牛そのものを引き連れて来たのである。

私は、すべてのかような不当な規則からはるかに距離を置いているので、フランス国王が新しい官職を思い付いて、その官職を天蓋の下、屋台で安売りしていると読むたびに、しばしば同じようなことを考えたものである。私は少なくとも冷静にこのことを提案し、これを諸国家が採用するか否か、そのことは気にかけないことにしよう。領主が、官職を販売のために多重化するのを許さないのは、単に、領主がむしろ日夜（遍歴の一座の座長のように）一人の国家の俳優に幾多の配役を割り振って、三つの芝居上の一致に加えて、俳優達の一致という四番目の一致をなすためであるので、従って上述のことは結構なことではないので、少なくとも諸官職と調和するような徳操を肩書として同時にこの官職と一

*1 ウィーンの帝国兼王国の鉱山産物小売り委員会から借用。名前ですらウィーン人は趣味を見せる。

緒に販売することはできないものだろうか。 — 例えばある試補の官職と同時に、肩書の「清廉」を売り出すことができないだろうか。かくてこの徳操は、官職には属さないものとして、特別に候補者によって支払われる具合にするとできないだろうか。 — このような購入肩書や位記貴族は試補の傷とはならないことだろう。同じような素敵な肩書がかつてはすべてのポストを飾っていたことを人々は考えていない。スコラ派の教授はかつて（自分の官職の称号の他に更に）熾天使的教授[Bonaventura]、 — 論駁し難い教授[Alexander von Hales]、 — 明察的教授[Duns Scotus]と称したし、 — 国王は自らを「偉大な王、 — 禿頭王 — 豪胆王 — 素朴王」と称したし、 — 同様にラビ達もした。より高位の司法職の男達にとって、非党派性、迅速性の肩書がそのポスト同様に売買で許されるのであれば、不快なことであろうか。かくて財政局参事官には家臣愛の徳操が素敵に肩書として結び付けられることになる。思うに、公正という肩書を、仮にそれが可能ならば、丁度政府弁護士の通常の肩書のように獲得することに対し躊躇する弁護士は少ないであろう。しかし候補者がそのポストを徳操[の肩書]なしに得ようと欲する場合、それは許されよう。国家はこの紛いの倫理性を強いてはなるまい。

トリストラム・シャンディー[IX,13、I,19]に従えば、衣服が、ヴォールター・シャンディーとラーヴァーターに従えば、固有名詞が人間に作用を及ぼすように、それ以上に称号が及ぼすことは考えられることである。いずれにせよ、我々の許では、甲殻類のように泡がしばしば甲羅へと石化するだけにそうである。しかしこの倫理性は、国家たるものが目指すようなものではない。美術でもそうではないように、描写が真の目標である。

上述の通り、様々な官職に関して様々な言葉の徳操を考案することは、私にはまことに難しいものであった。しかし察するに、更に多くのこのような徳操の区分が（今私自身更に自由精神、率直さ、竹を割った性格が思い浮かぶ）調べ上げられるべきであろう。せめて倫理的国家の大臣が正規の徳操区分官房とか倫理的人名録部局を何人かの官房書記と一緒に設置しようと欲するような場合で、これらの書記はわずかの給料と引き換えに様々な官職のための様々な徳操を考案することになる。私が書記の立場であれば、徳操の白い光線の前に立派なプリズムを置いて、光線を然るべく屈折させよう。望ましいことは、犯罪もそうして欲しく、 — つまり犯罪の下位区分をして欲しい。 — さすればそれに応じて裁判官を採用できよう。というのは単に低次の裁判権で、五フローリン・フランケン通貨を越えない罰の下される法廷で日々演習が行われて、裁判官達は各人に決して五フローリンを越えて罰しないよう、もっと多くの、もっと些細な裁判をすべての狼藉から引き出そうと欲するようになるであろうからである。これこそは立派な倫理的ロルフインケン[死体解剖]であり、これを法律家達は、幸い、罪の死体解剖助手たる聖アウグスティヌス、そのソルボンヌ大学の弟子達から学んだのであり、この両者はアダムの原罪の林檎の中に、かの者[ドレスデンの彫刻師]が桜桃の種に顔を色々刻んだよりももっと多くの罪を刻みつけたのであった。この裁判官は教皇庁の詭弁家とは何と異なっていることか。この詭弁家はどんなに非道な死罪をも横やりを入れて免すべき罪に薄める術を心得ているのである。

学校職は（これに言及すると）確かに些細な商品である。しかしこの職はいつでも王国である、 — つまり学校王国であって、 — ポーランドの王冠に似ており、ポープの詩によると一世紀に二回売りに出されるものである[venal twice an age]。これは算術的には間違っている。ニュートンが統治年月を平均二十二年間としているからである。ちなみ

に内部参事会が町の若者をハーメルンの鼠捕り男、子供誘拐者に導くか、ヴァイセ的『子供の友』に導くか、――これは参事会にとって違いはなかろう。学校教師というものは、その目に見えない欠点に対し馬喰が責任を負うべき駄馬といったものではないからである。市の法律顧問兼商会在自分達は一人の天才を探し出したと互いに非難し合わなければ十分であろう。というのは天才は、これは単に国家の飾りと楽しみに消費されるべきものである以上、勿論より劣等な、より冷静な頭脳を圧迫するであろうからである。こちらの頭脳が本来国家の真の有益、鉱山株なのである。丁度立派な半オンスの真珠、数え珠は単に飾りにしかならないが、劣等な種粒真珠は医用に役立つようなものである。そもそも学校教師はその学童を鞭打つ能力があれば、全体それで十分である。上級試験委員会が彼らの目の前で、学校教師に自分のクラスの何人か数人の学童を試しに鞭打たせてみて、どんな人物か知ろうとしないのは、私には遺憾に思える。

召命の相場師達一般についての号外の終わり。

さてまた話しに戻ろう。参事会の商会社長達が私の主人公に教頭職を認めたのは単に明かりとコーヒー豆のかなりの売り上げのせいばかりでなく、全く頓狂な推定のせいでもあった。つまり彼らは、五級教師がまもなく逝去すると信じていた。

――そしてここで私は、これまで誰にも明かしてこなかったこの話しの重要な地点に立つことになる。しかし今となってはこれまでのスペインの壁[屏風]を押しのけるか否かは私の意志とは関係なくなっていて、それどころか私はこれについて反射ランタンを掛けなければならない。つまり医学史では全く馴染みのことであるが、ある家系ではまさにある年齢で死ぬのである、丁度ある年齢で(つまり九ヵ月で)生まれて来るようなものである。

いや、私はヴォルテールから、親族がいつも同じ年で自殺したある家庭を思い出している[同じ年とは言えない]。フィクスラインの親族では男の先祖はいつも三十二歳のとき、カンターテの主日[復活祭後の第四日曜日]に倒れて、亡くなる習慣であった。誰もが三十年戦争についての自分の本の中で、シラーが全く省いてしまっているから、こう補記しなければならないであろう。この時一人のフィクスラインがペストで、別のフィクスラインが饑餓で、また別のフィクスラインが銃弾で、皆三十二歳で亡くなった、と。真の哲学はこの事実をこう説明している。「最初の数回は単に偶然生じたにすぎない。――残りの場合、人々は単なる不安で亡くなったものである。さもなくば、全事実をむしろ疑わしいものとしなければならないであろう」。

しかしフィクスラインはこのことから何をしたか。――ほとんどしなかったか、何もしなかった。彼がなした唯一のことは、ティエネッテに惚れ込むことをほとんどせず、あるいは全くせず、それで他人が自分のことで不安を抱かないようにしたということであった。しかし彼自身は、自分が長老のアストマンよりも年上になりそうだということに対し、五つの理由からほとんど気にかけなかった。第一は、三人のジプシーの女が、時も所も違う折に、そしてお互い何も知らないのに、その魔法の鏡の中に長い年月という同じ主要並木道を彼に映し出したという点で一致したからであり、――第二に、彼は全く健康であったからであり、――第三に、彼自身の兄が例外となっていて、三十代に入る前に溺死したからであり、――第四にこういう次第であったからである。つまり少年時彼はまさにカンターテの主日に、彼の父が棺台に結ばれたとき、苦悶の余り病気になったが、ただ

玩具で癒やされたのであった。しかしこのカンターテの主日の病気のせいで、彼は自分の家系の殺人的聖霊をまことに良く満足させたと思ったのであった。第五に、教会の台帳とそれ故自分の年齢の確証が共に燃え落ちたために、決して確実な致命的不安に陥ることができなかったのである。「私はいつのまにか」と彼は言った、「すでに、悪魔も気付かないうちに、厄年を越えているのかもしれない」。私は隠すことをしないが、すでに先年、自分は三十二歳であると考えていたのであった。「その年齢に」（と彼は言った）「来年（一七九二年）、有り難や、ようやくなるというのであれば、前年と同様に上手く経過し得よう。そして主は元気な私をいつでも見いだせよう。私の兄の人生から奪われた素敵な年月が、私に付加されるとしたら、不都合なことであろうか」。―― このように人間は現在の冷たい雪の下でも温まろうとしたり、その雪から立派な雪だるまを作ろうとしたりする。

これに対し、お歴々の寡頭支配者達は逆の立場に立っていて、まさに神のように五級教師を突然五級職から教頭職に抜擢した。彼は間もなくそれを空位にするであろうと固く信じたからである。本来学校の先任順で、この神聖な職は、副校長のハンス・フォン・フュクスラインに行くはずであった。しかし彼はその職を欲しなかった。彼はフーケルムの牧師になろうと欲していたからであり、殊にアストマンの死の天使が、確かな筋によると、この羊小屋[牧師職]へのドアをますます広く開けていたからである。「彼奴はせいぜい一年保ったら、上出来であろう」とハンスは言った。

このハンスは大変粗野で、彼がハノーヴァーの郵便局員でなかったのは残念である。その局員であれば、すべての郵便局員を立派な作法に指示しているハノーヴァー政府の訓令で一緒に自己改善できていたことであろう。彼は我らの五級教師に対し、この誰もが争わず、また誰をも憎むことのない教師に対し、一人敵意を抱いていた。単にフィクスラインがフクスラインと署名せず、自分と一緒に貴族になろうと欲しなかったからである。副校長は四頭の先駆けの先祖の先導の馬が引く彼の貴族の凱旋車の上で、自分と親戚の五級教師が背後の従僕用の馬車の革紐にすがっているのを見、世にも情けない身なりで、供の者にこう言うのを聞かなければならなかった。「先に行くのは私の従兄弟で、一人の人間にすぎません。いつも人間にすぎないことを忘れるなと彼に言っています」。穏やかで従順な五級教師は副校長の中の大きな雀蜂の毒胞に気付かず、それを蜜袋と見なしていた。いやこの貴族が見せかけと見なしていた彼の同胞的温かさを通じて、彼はこの男の有毒な果汁をただ更に濃く煮詰めてしまった。五級教師は単純さからその軽視を自分の教育学的才能に対する嫉妬と見なしていた。

エカテリーナ宮、―― アンナ宮、―― エリザベータ宮、―― 光輝宮やピョートル[ペーター]宮、こうしたすべてのロシアの離宮は、自分が聖なるクリスマス・イブに召命を得て、歩き回る一部屋を有する者ならば、（軽視することはなくても）なくて済まされよう。新たな教頭は―― 晴れた一日しか願わなかった。歓喜が（不安がそうすることは決してなく）雀のように彼の微睡みのけし粒を食い尽くしてしまい、今日はその上彼の喜びの勘定先導者が、つまり猿の時計が、彼が喜んで、いびきをかいて過ごす代わりに、夢を見て過ごすすべての時をバチで告げていた。

クリスマスの朝、彼は授業シラバスを覗いて、大して面白くなかった。彼は自分の昨日の、五級職への馬鹿げた自慢を今やどう考えていいかほとんど分からなかった。「五級教

師職は」と彼は自らに言った、「教頭職に比べたら何の問題にもならない。 ― 昨日の自分の変化の前に、それで得意に思えたことが不思議だ。 ― 今日がむしろその資格であろう」。今日彼は、すべての日曜日や祭日にそうするように、肉屋の親方のシュタインベルガー、彼の以前の後見人の許で食事をした。フィクスラインは親方に対しては、いつも卑俗な人々が抱くが、しかし高貴な人々や哲学的、情感豊かな人々はめったにしか戴かない ― 感謝の念を抱いていた。人間は自分自身が贈り物をする傾向があるほど、それだけ他人の贈り物に感謝しなくなる。気前のいい人はめったに感謝する人ではない。シュタインベルガー親方は、フィクスラインが学生としてライブツィヒで吊り下げられていた屋根裏部屋の金網鳥籠の許での糧食長として、燻製のものや自家製パン、酢漬けキャベツのカナリアの餌を一杯潰した食料小鉢を出してくれた。しかし彼に金を無心することはできなかった。知られているように、彼はしばしば長靴革に最良の子牛の皮を五級教師のために無料で鞣皮工へ送ったものである。しかし鞣料は被後見人が持たなければならなかった。フィクスラインが来たとき、いつものように粗野なテーブルクロスの上により小さな模様入りのテーブルクロスが敷かれた。 ― 大型椅子と銀製のナイフセット、それにワイン入りスープが用意された、全くもって、と後見人が言うには、単に一廉の学者にのみ似つかわしいもてなしで、肉屋には似つかわしくない、と。フィクスラインはまず食べてから、自分が教頭になったことを打ち明けた。「被後見人殿、そなたが」（とシュタインベルガーは言った）「そうだったのであれば、まことに結構。 ― おい、エーファ、おまえの雌牛のためには尾の一本も買わない。 ― うすうす感じておったのだ」。彼がその言葉で娘に伝えたのは、酪農所のために用意していた購入金を教頭職のために使わなければならないということであった。つまり彼はいつも被後見人に官職手付金を、四パーセント半の利子で先払いしていた。五十グルデンを彼は五級教師に五級教師就任のためにすでに貸していて、それは正當に利子が付かなければならなかった。しかし利子支払日にはフィクスラインはいつも払い戻しを受けていた。彼が後見人の娘にいつも日曜日の食事の後、算数、綴り方、地理を教えなければならなかったからである。シュタインベルガーは正當にも自分の実の十八歳になる娘に、彼が遍歴時代屠殺していた町をすべて知るよう要求していて、彼女が注意していなかったり、曲がった字や、間違っただ引き算をすると、彼は大学評議員兼秘密裁判参審員として彼女の椅子の背後に立っていて、いわば彼の拳の石工用ハンマーで、背骨につながっている脳を活性化のために少しばかり打撃するのであった。いずれにせよ穏やかな五級教師は決して鞭打つことはなかったろう。それ故、彼女はひょっとしたら数回の眼差しで彼女の心を濃縮して、遺贈したかもしれない。老肉屋は ― まさに自分の妻が亡くなっていたので、 ― いつも[坑内用]安全燈と攪拌棒とで、およそ娘の心にあるすべての片隅の内容物を調べていて、それ故夙に、 ― 五級教師が決して気付かなかったこと、 ― つまり彼女が彼に気があることに気付いていた。少女達は自分の喜びよりも悲しみを隠すのが上手である。今日エーファは教頭職についていつになく赤くなっていた。

彼女が今日コーヒーを取りに行くと、このコーヒーを被後見人は澀まで飲み干さなければならなかったが、 ― 「澀をほんの舐めることさえしても、エーファはぶたれて死ぬ思いをすることになる」と彼は言っていた、 ― それで彼はフィクスラインに言った。「いいかな、被後見人殿、私のエーファに一目、目をかけたことがおありかな。あいつは

そなたを好いておる。そなたがその気なら、貰っていい。しかし我々は身分が違う。学者殿は全く別の娘が必要だから」。――

「連隊給養係将校殿」とフィクスラインは言った（というのはシュタインベルガーはこのポストを地方民兵の許で得ていたからで）「このような縁組みはいずれにせよ、学校教師にとっては、余りに豊かすぎるものになりましょう」。給養係将校は頭で七十回頷いて、戻って来るエーファに向かって、子牛の手足を開いて吊すときの曲材を、蛇腹から取り出しながら、言った。「ちょっと待て、――いいか、おまえは現教頭殿をおまえの夫に迎えたいか」。「おや、神様」とエーファは言った。――「おまえが好もうと、好むまいと」と肉屋は続けた、「おまえが学者殿のことをちらりとでも考えたら、おまえの父がおまえの脳にこの曲材をお見舞いするぞ。――今はコーヒーを入れなさい」。かくて曲材の縫目解きナイフで容易に一つの愛が壊された。この愛はより高い身分ではこのような剣の介入があると、ただそれだけ一層泡立ち、発酵するものである。

さてフィクスラインはいつでも五十フロリン・フランケン通貨を徴収し[後の頁では九十必要]、教育学的帝国林檎[権威の球]に手を伸ばし、校長の補佐司祭、つまり教頭になることができた。借金は建築上の比例関係と関連すると仮定できよう。ヴォルフはこの比例関係について、最小の数字で表現されるものが最も美しいと述べている。しかし給養係将校は喜んで学者の両脇を支えた。というのは負債者が三十二歳で死に、一等級の債権者たる死に神に自然の負債が、他の債権者にその負債が支払われるよりも速やかになされるという見解を、この見解を彼は家畜の愚鈍さ、愚劣であると称したからである。彼は迷信深くなく、信心深くもなく、卑俗な男が、自慢たらしい文学者や、荒涼たる軟弱な偉いさんよりもはるかにしばしば有する確たる原理に従って行動していた。

私はただ個別の明るい聖母マリアの日や、温かいヴァルプルギスの夜とか、――せいぜい多彩な薔薇の週をフィクスラインの日常の鉱滓に固まった人生から銀の鉱脈のように取りだしてきて、それらを読者のために粉碎し、溶かし、滑らかにしているので、今や私は彼の人生の小川と共に一七九二年のカンターテの主日にまで歩まなければならない、そうしてから一握りの黄金の粒を洗鉱のためにこの伝記的金精錬所に運び入れることにしよう。これに対しこの日曜日はとても金を含んでいる。フィクスラインは（教会の台帳が灰になって読めないから）三十二歳になっているかどうか知らないということを読者は思っ

て見さえすればいい。

クリスマスからこの主日まで彼は教頭になるということしかなかった。新しい教壇は太陽神の祭壇で、そこでは五級教師の灰から若いフェニックス[不死鳥、一世紀ごとに灰になって生まれ変わる]が生まれ出た。大きな変化は若返らせる、――官職であれ、結婚生活であれ、旅行であれ、――人は人生をいつも、フランス人がフランス革命から暦を始めるように、最後の革命から日付を始めるからである。前任順の制度の梯子で、伍長として足を踏み入れた大佐は、生涯で――皇太子であった他にはない一人の国王よりも五度若返っている。

第五のメモ箱

カンターテの主日 ― 二つの遺言書 ― ポンタク ― 血 ― 愛

春の月[季節]は地球を新たに多彩に着せ付ける、しかし人間には黒く[喪に]着せ付ける。まさに我らの氷の地帯が豊饒になって、沃野の花の波が我らの大陸に打ち寄せるとき、いつでも人間は喪服に出くわす。人間の春の初めは涙で一杯である。しかし他面では若返った地球の花盛りは地球で倒れる者達に対する痛みへの最良の治療期間であり、花々は我々の墓を雪よりも上手に隠す。―― 教頭の恩師アストマンは四月に、これは変わりやすいというよりも致命的月であるが、死に遭遇して、死は彼の胃で病む脳を潰した。人々は彼の逝去を騎兵隊長夫人に隠そうとした。しかしいつにない弔鐘は彼女の心に彼の白鳥の歌を届けて、彼女の人生の晩鐘を次第に類似の震動にした。高齢と受難とは彼女に対し死の最初の刻み目を刻印して、彼女を全体倒すには、ほとんど労力を要さなかった。というのは人間は、挽き倒される前に長いこと生命の液が流れ出るようにと刻み目を付けられた木々に似ているからである。二回目の卒中に引き続いてすぐに最後の卒中に彼女は襲われた。死は、裁判と同様に、卒中を三回召喚するというのは、奇妙なことである。

人間は遺言を改善の意志同様に好んで引き延ばすものである。騎兵隊長夫人はひょっとしたらすべての自分の時間を空費して、言葉を失い、無感覚になる時まで、遺言に着手しなかったかもしれない。仮にティエネッテが臨終の夜、彼女が看護婦から湯灌の女となる前に、この病人に哀れな教頭のこと、彼の干涸らびた人生、か細い生活の養生、幸運に支払われた養育費、彼の空虚な未来、彼が黄色く萎びた植物として、学校の教室の、生徒と債権者の間の乾いた廊下の継ぎ目で、枯れて行くであろう未来を思い出させてやらなかったら、そうなるところであった。彼女の貧しさは彼女にとって彼の貧しさを描くときのモデルとなった。そして彼女の内部の涙は彼女の絵画の流れ出る筆遣いとなった。騎兵隊長夫人は単に召使いのためにのみ遺言して、男性達から始めていたので、フィクスラインは先になった。―― そしてこの教頭の特別な家庭の友に違いない死に神は、死に神の大事な息子たる彼がはっきりとした声で遺言の相続人と説明されるまでは、その大鎌を振り上げず、最後の切断をすることはなかった。それから死に神は一切を、人生、遺言、様々の希望を断ち切った。

教頭が母の洗濯伝票のメモによって、彼の二級生クラスで、これらの死の知らせ、ヨブの知らせを知ったとき、彼がした最初のことは、二級生達を放免して、教頭室に入る前に、涙を放出したことであった。母は彼が遺言で言及されていたことを、―― それが幾らであったか領主裁判官がずらずら述べていたことを願うが、―― 書き添えていたけれども、

―― ほとんど、彼がマソラ学者のようにドイツ語の聖書で分類し、記入したすべてのオーという母音のたびに、大きな滴が彼のペンに落ちて、インクは余りに薄くなってしまった。彼を苛んだのは、詩人の詩的悼みではなかった。詩人は大きく裂けた傷を喪のヴェールに包んで、叫び声を穏やかな葬儀の音色に屈折させるものである。また哲学者の悼みでもなかった。哲学者は一つの開けられた墓に過去のカタコンベの断崖絶壁全体を見てとって、哲学者の友の死の影は、地球全体の本影に映ずるものである。―― そうではなく彼を絞ったのは、一人の子供の悲しみ、一人の母親の悲しみで、すでにこう考えると、――

副次的考察も生ぜずに、―― ひどく碎かれるのである。つまり「それでは汝をもはや見ることはなく、汝は消えて行く。愛しい魂よ、汝をもはや見ることはない、もはや決してない」と。―― まさに彼は詩的な苦悶も、哲学的苦悶も有しなかったので、すべての些細なことが、彼の苦悶の一つの休止、一つの隙間となった。そして彼は女性のように同

じ晩のうちに、自分の告げられた遺産の額の将来の若干の使用計画を立案することができた。

それから四週間して、つまり五月五日に、遺言の封が開かれた。しかし彼は六日によく（カンターテの主日）フーケルムに出発した。彼の母は彼の挨拶に涙で答えた。涙は彼女が死者に対し、―― 悲しみの余り、―― 流したものであり、―― 遺言に対し、―― 嬉しさの余り流したものであった。―― 現教頭のエギディウス・ツェベデーウスに贈呈されたものは、第一に、鏡台の天蓋付きの貴族的大きなベッドで、そのベッドの中では巨人ゴリアトでも寝返りを打てそうなもので、このベッドへは後ほど私と女性読者は、検分のためにもっと近寄ってみることにしよう。―― 第二に、彼には彼が歩んで来た各一年に対し、未払いの復活祭代父金が、―― つまり各一弁髪ドゥカーテンが遺贈された。

―― 第三に彼に対し、五級教師職や教頭職へのクロイツァー貨幣徴収に要したすべての納付金、逗留金が、ヘラー貨幣、ペニヒ貨幣に至るまで用意されることになった。―― 「それでおまえ」と母親は続けた、「哀れな令嬢は何を得たと思う。―― 何てことだろう、何もないのだよ。びた一文ない」。―― というのは死に神は、丁度夫人が手を伸ばして、哀れなティエネッテのために彼女の人生での俄雨や血の雨のささやかな雨傘を渡そうとしたとき、その手を硬直させたからである。母親はこの幸運の足蹴を真の同情をこめて報告した。この同情は女達にあっては嫉妬を溶かすもので、共に喜ぶこと、これはむしろ男性的なものであるが、この共歓よりも女性にとっては容易なのである。幾多の女性の心室では同情と嫉妬は間近な隣人で、彼女達は地獄でほど徳操的に振る舞うことはないであろう。地獄では人間は驚くほど多くのことに耐えるのである。そして天国でほど欠陥的に振る舞うことはないであろう、天国では人々は善いことを余りに多く有するのである。

さて教頭は地上で天国を、彼の恩恵の女性が昇天して行った天国を得ていた。真っ先に彼は、―― 自分の感動が収まったハンカチをポケットに入れずに、―― 階段を登って行って、大きな遺贈されたベッドが広げられているのを見た。彼は家具に対して女性的偏愛を抱いていたのである。読者がすでに騎士のベッドを覗いたことがあるか、あるいは登ったことがあるか、私は知らない。このベッドへはベッドに付属している手すりのない小さな階段を通じて容易に上がれるもので、そこでは根本的にいつでも階段より上で眠るのである。ナジアンゾスの聖グレゴリウスはこう報告している（『演説集』XVI）、すでにユダヤ人がこのような鶏用梯子付きの高いベッドを有していたが、しかし単に害獣のせいであった、と。遺贈されたベッドの方舟は、まさに大きなもので、―― 一匹の蚤ならばベッドを地球の直径ではなく、シリウスまでの距離で測るようなものであったろう。フィクスラインはこの巨大な寄宿舍のカーテンを開けて、大きな鏡のあるベッドの天蓋を直接見たとき、彼はその中に入って見たかったであろう。そしてアメリカの上の夜の円錐から円錐曲線を取りだしてこれるものなら、それに包まって、せめて半時間自分の細い胴回りを綿毛の池で泳がせたかったことであろう。母親はベッドよりも長い推論や計算をして見せても、彼に上の大きな鏡を取り除かせることはできなかったことであろう、彼の大きな鏡台は髭剃り鏡として覗く他には用はなかったけれども。―― 彼は鏡を上につけたままにしておいた。「いつか、有り難や、結婚したら」と彼は言った、「朝方私は眠っている妻を、自分がベッドで起きなくても、見つめることができる」。

第二の条項に関しては、つまり遺贈された代父のペニヒに関しては、昨日母親がまこと

に上手く処理していた。領主裁判官は相続人の年齢について聞き取った。彼女は相続人にまさに齒の数、三十二を添えた。彼女は嘘を付いてでも、息子を銘文のようにもっと古く売りつけたかったのであろう。しかしこの年齢免除[尚早の成年宣言]に対しては正義は正義によって抗弁するであろうと彼女は見ていた。「それは真っ赤な嘘だ。息子が三十二歳[以上]ならば、息子は夙に死んでいたことであろう、多分そうとしか推定されない」。

そして、まさにこう話しているときに、アウフハンマーの従僕が口を挿んで、母親によって提出された出生証明の債務証書、追認に対して、年齢の三十二の計算貨幣の黄金の棒が教頭に対し、人生の水棹の如く差し出された。フォン・アウフハンマー氏は市民の出生証明について吝嗇家風に争うには余りに気位が高かった。

かくてこのような気位の高い気前の良さで最良の裁判の一つが水泡と化した。人々は黄金の棒を裁判官席の引抜台で引き抜いて、極上の黄金の線にすることができたかもしれないのであるが。整理し得ない綿くずから、―― というのは第一にフィクスラインの年齢は何の記録もなかったのであるから、第二に、彼が生きている限り、彼はまだ三十二歳ではないと仮定しなければならなかったのであるから¹⁾、―― これらの綿くずからは単に絹や絞殺腹帯ばかりでなく、張り網全体を紡ぎ、撚り合わせることもできたことであろう。そもそも訴訟依頼人は、訴訟がより長く続けば、訴訟について嘆くことは余りない。哲学者達は何千年も哲学的問題について論争している。それ故弁護士達が法律的問題をもう六十年、八十年の審理で片付けるつもりであるのは、珍しいことである。しかしこれは法律家の責任ではない。むしろレッシングが[Eine Duplik, 1778, 1St.]真理についてこう主張しているように、つまり真理の発見ではなく、探査が人間を幸せにする、そしてレッシング自身探求の甘美な苦労のためにはすべての真理の贈り物は諦めていいと述べているように、法律家は発見や決定によって幸せになるのではなく、法的真理を探ることによって幸せになるのであり、―― この探することはまさに裁判とか弁護士業と呼ばれているものであって、―― 法律家は好んで永遠の真理に、漸近線の誇張法に見られるように、真理に達せずに、近付きたいと思っていることであろう。法律家は妻子と共に、正直な男として、この永遠の近似に対処できるであろうから。――

派遣された従僕は黄金の遺産の他に、領主裁判官の勅令も有していて、それには遺産相続人は、五級教師、教頭として自分の上司達の貨幣縁取機の下に立ったとき支払わなければならない刻印費用について、証拠、証明を添えるように、と、また、それに対して自分の金が支払われることになる、と記されてあった。

現在百万長者の列に並ぶことになった教頭は、短い黄金の包みを手に王笏のように、未来の海の突き出た池の栓のように持っていた。その栓は今や外されて、すべての所有の魚が大きく育って、乾いて、しっかりと差し出されるに違いないのである。

私はすべてを一度に話すことはできない。さもなければ、すでに長いこと注目しているであろう読者に、むしろ先にこうお話ししたろう。つまり裕福になった教頭にとって三十

*1 今や現文書によれば、彼は三十二歳で死ぬという仮定の他に立脚すべきものはないので、遺言人の夫人の死後、三十二年して彼が死んだら、彼には一文も渡されないことになる。我々の擬制によれば、彼は遺言の作成時に一歳ですらなかったことになるであろうから。

二枚の代父貨幣は過大に三十二年を描き出して、その上今日はカンターテの主日、彼の家庭のバルトロメウス虐殺の夜[1572年8月24日]、九月二日[1792年フランスでの殺害]が加わったのであった。子供の年齢を知っていた筈の母親は言った。自分は忘れていたが、しかし賭けてもいいが、すでに彼は一年前に三十二歳になっていた、ただ領主裁判官が聞く耳を持たなかつただけだ、と。「私自身誓いたいと思いますが」とこの資産家は言った、「私が前年のカンターテの主日、どんなにうかつだったか、覚えています」。そもそも彼は死に神を、詩人のようには、空想のそそり立ち拡大させる凹面鏡では眺めず、子供や未開人や農夫や女性のように死に神を賛美歌集の前面の表紙の平板な八つ折り判鏡の中で見ていて、死に神は彼にとって身を沈めた、教会の格子窓の椅子で眠っている老人の頭に思われた。

それでも彼は今日前年よりもしばしば死に神のことを考えた。というのは喜びは好んで憂愁へと溶けるからで、ラックを塗られた幸運の車輪は、涙を目に注ぐ汲み上げ水車であるからである。...しかしこの地球の、あるいはむしろ水球の好意的精霊は、―― というのは物理界でも倫理界でも陸の大陸より涙の海が多いからで、―― その上を動き回る水中昆虫にとって、つまり我々にとって、魂の鉛疝痛に対する全く格別なシュヴェールのエキスを用意してくれていた。思うに、精霊は人間の全病理学を熱心に研究したに違いない。というのは、自分の頭蓋と自分の胸の骨亀裂に対し高価な処方薬と薬草を合成してくれたストア主義者、牧師に支払うことのできない哀れな悪魔に、立派な傷薬水をすべての地下貯蔵庫に樽で準備してくれたからである。患者はただそれを服用し、骨の破片や切り傷に注ぎさえすればいいのである。―― つまり安ブランデー、あるいはビール、あるいはワインとか。...誓って、人間が人生の神経衰弱のとき、哲学、キリスト教、ユダヤ教、異教世界、それに時間の速やかな代替となるもの、―― 申したように飲み物を有することを、人間が神に感謝しないならば、それは一面では医学上の精霊に対する忘恩であり、他面では禁じられた泥酔と許された酩酊との神学的混同である。

教頭は日没のはるか前に村の小使いに見事な三グロッシェンの駄賃を払って、実際ポケットにドウカーテン貨幣の陳列室全体を有していて、一日中暗闇の中、手で数え続けたわけで、―― 三ターラー分ポンタクを町から取り寄せることにしていた。「私は今日」と彼は言った、「カンターテの楽しみをしなければならない。私の最期の日なら、結構。それは私の最も楽しい一日となろう」。私は彼がもっと大きな注文をしたら良かったのにと願う。しかし彼はいつでも歯と歯の間に節度の勒を有していて、脅威の紛らわしい死の夜を前にしているときや、歓喜の最中でさえ、そうであった。彼が他の二本を母親と令嬢に振る舞おうと思っているのでなかったならば、彼は一本の瓶に限定しなかったであろうかという疑問が残る。彼が最後の審判を予期している十世紀に生きていたら、あるいはノアの洪水を予期していて、それ故難破したときの水夫のようにすべて飲み干す他の世紀に生きていたら、彼はそれが故に一文ももはや消費しなかったであろう。彼は遺贈で主要な債権者のシュタインベルガーに弁済することができ、正直な男としてこの世から去ることができることを喜んでいた。まさにお金を大事にする人々は、自分達の借金を最も正直に返す。

緋色のポンタクは、フィクスラインがポンタクのお蔭で飲み手の男性と女性達の頬に差されるであろう歓喜の赤鉛筆のスケッチと赤い表題文字が太陽の周りの最後の雲々の夕べ

の肉色調を調和するであろう時に届いた。...

まことにこの話しのすべての観客の中で、私ほど哀れなティエネッテのことを思っている人はいるまい。しかしまこと時期尚早に彼女を彼女の衣装室から私の史実の舞台に追い立てることはできない。哀れな女性よ。教頭はその伝記作者よりも熱く願うことはできない、つまりイェルサレムの神殿のように自然の神殿にも、――死の門の他に、――一人の司祭に起こされるよう、そこを通過して単に困窮者のみが行くことになる特別な門が開いていること、を。しかしすでに自分の沈んでしまった展望についての、納棺された恵み深い夫人についての、喪のヴェールで紡がれた人生全体についてのティエネッテの胸の痛みは、石だらけの騎兵隊長が穏やかなものにするというよりもむしろ出血させる悲しみの中で、彼女にこれまですべてを、仕事を除いて、拒むことになり、仕事へとは向かないすべての歩みを萎えさせ、そして彼女の目には、その涙を拭き喜ばせることのできるものを何一つ与えなかった。夢想と眠りで一杯の垂れて来る臉の他には何も与えなかった。

すべて苦悶は市民的儀礼の作法を越えさせ、散文家を詩篇作者にするものである。単に苦悶の中でのみ女達は大胆になる。ティエネッテは単に夕方、単に庭園の中を外出した。

教頭は、自分の家庭の女友達の前に出現し、彼女に自分の感謝を、――今日はポンタクを、――持参することが待ちきれない思いであった。三本のポンタクの聖杯と三個の聖杯のグラスが彼の小屋の外の窓辺にあって、彼は花の森の間の薄暗い窪みの道から戻って来るたびに、自分のグラスからちびちび飲み、――そして母親は上げ下げ窓を通じて部屋の中で飲んだ。

私はすでに述べて、彼の人生の実験室は庭園の南西部の隅にあって、村の中に達しているエスコリアル宮たる宮殿に向かい合っていた。北西の隅ではアカシアの木陰道が花咲いていて、さながら庭園の花の王冠であった。フィクスラインも自分の散歩を始めて、何か広く格子状になった木陰道から広い野原の中のティエネッテの方へ幸せな視線を投げようとした。彼は少しばかり石造りの梯子の二段の前で後ずさった。その段は彼の木陰道への途中にある池の中へ滴った新鮮な血と共に下っていた。近くの葦にも血が見られた。人間はこれが流血しているのを見いだすと、我々の生命の芯のこの香油に対し戦慄するものである。人間にとってそれは死の天使の赤い死の署名である。フィクスラインは心配して木陰道の中へ急いだ、――そして彼はここで一層青ざめた恩人の女性が花の茂みに寄りかかっているのを見いだした。彼女の両手は編物と共に膝の中にあった。彼女の目は臉の中でさながら微睡みの包帯の中であって、同時に彼女の左の腕は瀉血の本当の包帯で縛られていた。そして両頬は、それには夕焼けが懸かっていたが、その分の色合いがこれまでの傷で、――今日の傷も加わって、――奪われていた。フィクスラインは最初の驚きの後、――それはこの花の眠りに対する驚きではなく、自分の騒がしい接近に対する驚きであったが、――自分の目の蝶の螺旋状視線[口吻]を展開させ始め、その視線をこの花の静止している花卉に据えた。根本的に、と私は申してよろしいであろう、彼が彼女を見つめたのは今日が初めてであった。彼は三十歳に達していた。それでもまだ、令嬢に対しては単に衣服に注目して良く、肉体に注目しては良くない、単に耳で待機すべきで、目で待機してはならないと信じ続けていた。

私は次のことをポンタクの電氣的ライデン瓶の持ち上げ滑車装置のお蔭と見なすが、つまり教頭は勇気を持って、――向きを変え[改宗し]、再びやって来て、咳とかくしゃみ、

速歩、プードルへの呼びかけという目覚ましの手段[薬]を一層服用量を増やしてこの眠れる女性に投与した。 — 彼は例えば手を取って、医学上の弁解の許、眠りから起こすことは、これは大胆すぎることで、これは教頭がまだポンタクの前で立っていることができて、分別を有する限りは決してできないことであつたろう。

要するに彼はとにもかくにも目覚めさせた。

疲れた困窮した女性よ。何とゆっくりと汝の目は開いたことか。地上の最も温かい効能膏藥たる眠りは延期された。そして思い出の夜風が再び汝のむき出しの傷に吹き付けてきた。 — しかし汝の微笑する青春の友が、汝の目が夢の吊り庭から汝の周りの低俗な庭に沈むとき、その目が向けられる最も美しいものであつた。

彼女自身ほとんど気付かなかつたが、 — 教頭は全く気付かなかつた、 — 彼女はその花の花卉をいつのまにかこの天体の位置の方に、つまりフィクスラインの方へかがめた。彼女はイタリア製の[人造の]花に似ていた。これは立派な新年の賀詞を隠し持っているのであるが、すぐには取りだし方が分からないものである。今や彼女の善行の黄金の水車列が彼女を彼につなぎ、彼を彼女につないだ。 — 彼女は早速自分の目と声調に喜びの仮面を着けた。というのは彼女は自分の涙を、キリストが涙をカトリックの信者に対してするように、祭壇で崇拝されるようにと、遺物のフラスコの中に満たすことをしなかつたからである。彼は自分のポンタクの病人用聖餐式への招待をまことに巧みに、その財源を開くことになった仲介に対する長い謝辞と共に始めることができた。彼女はゆっくりと立ち上がって、一緒にワインの貯蔵庫へ進んだ。しかし彼は最初、彼女を案内したと言えるほどには気が利いていなくて、あるいはもっと快活にはできなかった。彼は腕を差し出すよりは自分の手を（つまり結婚指輪を）差し出す方がより容易であつたろう。彼は人生でたった一度ミラノの伯爵令嬢を芝居劇場からその帰路、案内したことがあつた。 — これはつまりそうせざるを得ない事情があつたということがなければ勿論信じられないことであつたろう。つまり彼女は異郷人として、すべての身内の人々の混乱のせいで、ひどい夜、彼の腕を黒服の若司祭として掴んで、自分を旅館まで導くよう命じたのであつた。しかし彼は作法を心得ていて、ただ自分の五級教師邸の門の所まで一緒に行って、それから彼女に指で旅館を示した。旅館は別な露地から三十もの明るい窓と共に見えていた。

そんなことは彼にはできない。しかし今日彼がその疲れた女性と池の岸边まで来ると、その池の中へ彼女は魔女的悪用への迷信的恐れから自分の左の腕の純な血を流したのであつたが、その残りの血と共に岸边から落ちかねない案じた彼は、傷付いた腕をすっかり大胆に押さえることができた。かくて多くのポンタクとわずかばかりの勇気で、教頭でも一人の令嬢をつかむことがいつでもできるようになる。誓つて言うが、まだワインの貯蔵の木の前でも、つまり窓の前でも、彼は案内の姿勢のままであつた。何という穏やかなグループが、地球の半陰影の中に、夜の暗い水がますます深く落ちて来て、月の銀の明かりがすでに銅製の塔の擬宝珠に反映しているとき、見られたことか。私はこのグループを穏やかと呼ぶ。このグループは、二重に出血している一人の娘と、この娘に自分の子供の幸せに対する謝辞を今一度涙と共に伝えている一人の母親と、敬虔で謙虚な一人の人間、両者に対して注いで、乾杯している人間から成り立っているからである。そしてこの人間はその血管に熱い溶岩の流れを感じている。溶岩は彼の心の中を煮立てて通って行き、その心を最後には一つ一つ砕いて、押し流そうとしているのである。 — 一本の獣脂蠟燭が外

の三本の瓶と三個のグラスの間に、諸情熱の間の理性の如く立っていた。― それ故教頭は窓ガラスを見続けていた。というのは窓ガラスに（部屋の闇が鏡の裏箔となっていて）フィクスラインが好きな他の顔に混じって、最愛の顔も映していたからで、その顔は彼がただ反映の中でのみ見つめる勇気があったもの、ティエネッテの顔であった。

各一分が同盟祭となり、各一秒がそれに対する安息日前夜祭となった。月はすでに夕方の露から、ポンタクは目から、微光を発した。豆の棒が格子状のより短くなった影を投げかけた。― 星々の水銀の小球はますます合流して行きながら、夜の紗の中に懸かった。

― ワインの熱い靄が兩人を再び蒸気機関のように活動させた。

夜の中あちこち歩くことほど心をより一杯にし、より大胆にするものはない。フィクスラインは今や令嬢をためらわず案内した。引っ掻き傷の腕のせいでティエネッテは単に手だけを彼の腕に絡ませて置けるだけであった。そして彼は、自分の腕での支えを半ば軽減するために、彼女の指をできるだけ上手に自分の腕で自分の胸に押し付けた。作法をマスターするために、作法を知る必要はないかもしれない。しかし些細なことが愛の糧食を焼き上げてくれる。― 指はすべての繊維で輝いている熱の電氣的放電である。― 溜め息は収斂する心の導音である。そしてその際一つの不幸は、最も劣等なもの、強壮なものである。というのは愛の炎は、ナフタの炎のように、好んで涙の水の上に漂うからである。― 一つは他人の目の中の、一つは自分の目の中の、二つの涙の滴が二つの凸面鏡のレンズから一つの顕微鏡を合成し、これがすべてを拡大し、すべての受難を魅力へと変えた。善良な[女]性よ。いや私はすべての不幸な女性を美しいと見なす。ひょっとしたら汝は、受難する性であるが故に、すでにそれ故美しい性という名前に値するのかもしれない。

ウィーンのフンチョブスキー教授[Hunczovsky (1752-98)]がすべての肢体の傷を蠟で象って、自分の弟子達に治療を教えているとすれば、汝、善き[女]性よ、汝の魂の傷口や傷跡を私は小さな絵に描写することにする。もっとも単に、荒い手が新たな傷を付けないよう、荒い手を防ぐためにすぎないが。――

ティエネッテは遺言の喪失ではなく、遺産贈与人の夫人の喪失をととても深く感じていた。

― それは一つの活動のせいで、これはすでに母親に語っていたものであったが、今彼に語った。つまり騎兵隊長夫人の臨終の二晩の病気の折、彼女は熱に浮かされた看病で、ベッドの足許に座って、恵み深い夫人の夜の死体と葬儀の馬車しか思い浮かばずに、強張った夫人の目に向かいあっていたとき、しばしば自分の目から、それと気付かずに、両頬から素早く涙が落ちるのであった。彼女は思いの中で、恵み深い夫人の棺のための難しい寄る辺ない着せ替えを想像するからであった。あるとき真夜中過ぎにこの病気の夫人は人差し指で自分の唇を示した。― ティエネッテは夫人の言うことが分からず、― 立ち上がって、彼女の顔を覗き込んだ。― 弱った夫人は顔を持ち上げようとして、できなかった。― そしてただ唇を丸めた。― とうとうティエネッテは推測がひらめいて、この萎えた夫人を、その瀕死の両腕は愛しい心をもはや抱き締められないので、自ら抱擁することにした。― いや突然彼女は熱く、涙を流しながら、自分の熱い口をより冷たい口押し当てた。― そして彼女も、声の出ない夫人同様に黙っていて、抱擁を返されることなく、― 一人っきりで抱擁した。四時頃指が再び痙攣した。― 彼女は再び強張った口に沈んだ。― しかしもはや反応はなかった。というのは彼女の友の

夫人の口は長い接吻の間に強張って冷たくなっていたからである。...

今や何と深く夜の無限の永遠の顔の前でその思いの刃がフィクスラインの温かい魂の中に侵入して来たことか。「私の傍らの、哀れなあなた。何の幸運な偶然も、夕焼けも、今天に微光が見えるような夕焼けも、一つの日曜日への展望といったものもあなたは有さない。 — あなたには両親がなく、兄弟もなく、友もなく、枯れて行く空虚な地球の場にただ一人つきりだ。残された秋の花のあなたは、孤独に、凍えて、過去の二番刈りの残り株の上で揺れている」。 — これが彼の思いの意味であり、その内側の言葉は次のようなものであった。「哀れな令嬢、一人の封土所有の従兄弟すら有しない、一人の貴族も彼女を引き受けない。彼女はかくも忘れられて年を取って行く、それでいて気立てが良い。

— 彼女は私を幸せにしてくれた。 — いや私がフーケルムの牧師職への召命をポケットに有するならば、申し込みをするのだが」。...彼ら二人の人生は、運命の密接な鋭い接合具がかくも間近に絡ませているものであったが、今や紗を懸けられて彼の前に歩み寄って来た。そして彼はまさに — というのは内気な男は一時間半すると最も大胆な男に変わっていて、その後も変わらないので、 — 彼の女友達を最後の瓶の許へ連れ戻して、かくてすべての悲しみの芽吹く薊と時計草[受難の花]を溺死させようとした。私は通りすがりに、これは愚かなことと注解を付ける。砕かれた葡萄の蔓は水脈も房も一杯で、かくも穏やかな重苦しい心を、喜びの飲み物は、単に柔らかくして、涙に変えるものである。

私に同意しない人には、私は今や単に教頭に注目するようお願いしたい。教頭は私の経験知を三段論法のように証明している。 — 何故まさに飲み物は、 — 即ち、結局神経精神のより豊かな分泌は、 — 人間を同時に敬虔に、優しく、詩人的にするのかという理由を追及して行くと、哲学的見解に達することであろう。詩人は、そのミューズの父[アポロン]のように、永遠の青年であり、他の人間達が単に一度きりでしかないもの、 — つまり恋するものであり、 — あるいは単にポンタクの後でしかないもの、 — つまり酩酊しているものであり、 — 一日中、全生涯を通じてそうなのである。朝方には詩人でなかったフィクスラインは、今や夜に詩人となった。ワインは彼を敬虔にし、優しくした。 — より高次の世界を模して響く人間の中のハルモニカの鐘は、ガラスのその鐘のように、現世で使用されるには、濡れた状態に保たなければならない。

今や彼は彼女と一緒に再び波打つ池の前に立っていた。池では天の第二の青い半球が揺らめく星々や揺れる木々と共に震えていた。 — 緑色の丘の上に白い曲がった通りが小暗く上に通じていた。 — 一方の山では夕焼けが一緒に沈み、他方の山では夜の霧が起き上がって来た。 — そしてすべてのこうした人生の闘う靄の上では不動のきらきらする星空の千もの支柱を持ったシャンデリアが懸かっている、それぞれの支柱は一つの燃える銀河を保っていた。...

今や十一時となった。... このような情景のとき、人間の中では一本の見知らぬ手が突き出され、見慣れぬ言葉で、その心にかの恐ろしいメネ[数えたり]、テケル[量れり、いづれもダニエル書、5.25]等を書くものである。 — 「ひょっとしたら私は丁度十二時に死ぬのかもしれない」と我らの友は考えた。その魂の中では今やカンターテの主日がそのすべての黒塗りの断頭台と共に生じて来た。

彼の女友達のすべての将来の人生の十字架の道が彼の前に棘だらけの茨の道となって横たわっていた。そして彼は、彼女が、 — 彼自身の道を花々や花卉で柔らかなものにし

てくれた彼女が、その脚を引き抜くときの血痕の一つ一つを見た。そこで彼は体と声とを震わせて、彼女に向かって厳かにこう言わざるを得なかった。「主が更に今日私に命じられるのであれば、貴女には私の全財産の半分を遺贈することにします。私が学校教師には珍しく借財がなくなっているのは、貴女の言いようもない善意のお蔭ですから」。

ティエネッテは、我々男性のことを良く知らず、この言葉を間違って結婚の申し込みと受け取らざるを得ず、この唯一の生きている人間、その人間の腕を通じてまだ喜びと愛と地球とが自分の胸と結ばれているのであるが、この人間の腕を、つまり自分の指が置かれている腕を、今日初めて傷んだ腕の指で震えながら押した。教頭は、女性の手最初の圧力に喜んで驚きながら、肩越しに回した自分の右手で彼女の左手を握ろうとした。ティエネッテは、彼が曲げようとしてできないでいるのに気付いて、指を腕から上げて、傷んだ腕を彼の腕の中へ、彼女の左手全体を彼の右手に置いた。二人の愛する者達は「囁き画廊¹⁾」に、どんなに薄い息も一つの物音に生命化される画廊に住むことになる。善良な教頭は愛の至福の圧迫を感受して倍加した。このようにして哀れな無力な魂はどもりながら、閉じ込められて、喘ぎながら、狂ったように、存在しない熱い言葉を求める。――彼は圧倒された。――彼は彼女を見つめる勇気がなかった。そうはせず、真っ直ぐに夕焼けを見て、言った（このとき言い知れぬ愛の余り熱く彼の頬に涙がこぼれた）、「いや、私は貴女にすべてを与えます。財産と血、私の有するすべて、私の心と私の手とを」。

彼女は答えようと思った。しかし側面を見た後、驚愕の声を上げた。「いや、神様」。

――彼は彼女に向かって、白いモスリンの袖が彼女の血で一杯に染み溢れ出ているのを見た。彼女が腕を預けたので、瀉血の包帯がずれてしまっていた。早業で彼は彼女をアカシアの木陰道へ拉致して行き、彼女はそこで腰を下ろした。湧き出て来る血はすでに衣服から滴っていた。彼は彼女より青ざめた。血の滴の一つ一つが彼の心の血を汲みだしたからである。青白い便箋の色の腕がむき出しになり、――包帯が解かれ、――彼はポケットから一枚の金貨を取り出して、――動脈が切れたときするように、こぼれ出る源泉を金貨で防ぎ、この黄金の封鎖とその上の包帯とで、彼女の苦悩の人生が迸り出るその門を閉ざした。

それが終わると、彼女は彼を見上げた。青ざめていた。しかし彼女の目は苦痛と感謝に満ちた言い知れぬ愛の二つの微光の源泉であった。――疲れる出血のでいで彼女の魂は溜め息に散った。ティエネッテは言いようもなく優しかった。多くの年月と多くの矢とで傷付けられた心はすべてのその傷と共に温かい涙の奔流に沈んで行き、閉じて癒やそうとした。丁度壊れたフルートが水中に置かれることで合わさり、その中で音色を取り戻すようなものである。――このような魅惑的な形姿を前にして、このような神々しい愛を前にして、彼女の同情心の強い友は、喜びと痛みの炎の間で溶け、声を詰まらせて、愛と歓喜とに引き倒され、善良な青白い天上的の顔の上に崩れて、その唇に、接吻することなく、内気に押し当て、遂に全能の愛がすべての帯を彼らの周りに巻き付けて、両者をより一層窮屈に締め付けた。そしてとうとう二人の魂は、四本の腕に抱かれて、涙のように溶けて

*1 ロンドンのパウロ教会の中にある。そこではどんな小さな物音も百四十三フィートの空間を越えて響く。

流れ出た。―― その時今や十二時が弔鐘のように鳴った。そこで突然この幸福な男は、彼女の唇が自分の魂を吸い出すだろうと考えざるを得ず、彼の人生のすべての繊維、すべての神経が、痙攣しながら、固く地上の最後の心を求めて、彼の最後の歓喜を求めて、絡み合った。―― いや幸福な男よ、君は君の愛を表現したのだ。というのは君は、君の愛が基で死ぬと考えたのだから。...

しかし彼は逝かなかった。十二時を過ぎると生き生きとした東の[朝の]風が揺り動かされた花々を通じて漂って来て、春全体が一杯に呼吸した。喜びの海にすら堰を置くこの幸福な男は、今や彼の花嫁となった出血している女性に、夜風の危険を思い出させ、自らは今や長年克服されることになった死のより長い夜風の危険を思い出していた。―― 無邪気にそして幸福に二人は白いアカシアの花々と煌めく月光とで透かし彫りになった婚約の薄明かりの中から出て行った。―― そして外部では、あたかも広大な過去全体が地表陥没によるかのように眼前で沈んだかのように思われた。すべてが新しく、明るく、若かった。―― 天は永遠の朝の煌めく露の滴が見られて、星々は喜ばしげに、震えて散り、沈み、光線に溶けて、人間達の心の中に落ちて来た。―― 月はその光の源泉と共に庭全体を覆って、点火し、星座のない上の青空に懸かっていた。あたかも間近の星々を消化しているかのようで、去ったより小さな一つの春、隣人愛から微笑しているキリストの一つの頭部であるかのように見えた。――

この明かりの下、彼らは初めて、愛の最初の言葉の後、見つめ合った。天は魅惑的に、愛の最初の歓喜がまだ彼らの顔に残っている穏やかに溶けたその面影の中へ微光を発した。...

君達、愛している者達よ、目覚めているように夢見給え。楽園にいるかのように幸せに、楽園にいるかのように罪もなく。

第六のメモ箱

官職の商品税 ― 最も重要な請願書の一つ

最も素晴らしかったのは、騎士のベッドの中での彼のヨーロッパ植民地での目覚めであった。―― 胸の中の愛の燃焼し、くすぐるように囁って行く、熱の中、今や愛の宣言の就任プログラムを幸いこなしたという雀躍感と共に、生き生きとした予言の埋葬からの甘美な復活感を抱いて、今や三十代にして初めてより長い人生の希望を、―― これは少なくとも七十年の人生ではなからうか、―― 十年前よりも抱くことになった喜びと共に、今やこうした発酵する人生の香油と共に、その香油の中では彼の心の生氣ある炎の車輪が火花を発して回転していたが、彼は横たわっていて、反映する鏡の天蓋の中の自分の煌めく肖像画に向かって笑いかけた。しかし彼は長いことそうしていることはできなかった。彼は動かなければならなかった。もっと幸せが少ない者には、ベッドの面積を、―― 幾多の巡礼者が巡礼の長さを測るときそうするように―― 歩数ではなく、地球の直径の如く身体[投地]で測れば、十分なことであつたろう。しかしフィクスラインは無造作に、さながら温かい洪水の人生の最中に入るかのように、ベッドから起きた。―― 彼は今や彼の愛しく善良な地球をまた翼の所で[裾で]捉えて、その上に教頭職を得、おまけに一人の花嫁を得ていた。かつまた下で母親が彼に告白した、彼は昨夜本当に友ハイン[死に神]の

利鎌からしなやかな草のように逃れ出たのであり、昨日はただ彼が恐れることを恐れてそのことを言い出せなかった、と。今や四時間前になってしまった高いタルペイアの岩[ローマの処刑地、罪人を投げ下ろした]を見上げると、今でもそのことは彼の心に冷たく過った、――殊に今日彼は冷静であったので、――その岩の頂銃眼で彼は昨日死に神と一緒に立っていたのであった。

彼を不快にさせた唯一のことは、月曜日であったことで、彼はギムナジウムに戻らなければならなかった。このような過重な喜びを、町への通りへの途上で抱いたことはなかった。今四時過ぎに彼はコーヒーを沢山一杯飲んで家から出て（フーケルムで彼はコーヒーを母親のために飲んだ。母親はこの女性用ワインをその後更に二日その沈殿物の酵母から引き出すのであった）、涼しい薄明かりの五月の朝の中へ入って行った（というのは歓喜は冷氣を要し、苦悶は太陽を要するからである）。――彼の許嫁は（見送りはしなかったが、それでも）遠くからの朝の歌を届けた。――彼はただちょっと花々で酩酊しているアカシアの木陰道の幸せの港の中へ寄り道をした。木陰道はその中で結ばれた同盟のように棘はなかった。――彼は自分の熱い手を、露の木陰道の冷氣浴に浸した。――彼は気持ちよく露の散布された化粧水の平野の上を徒渉して行った。その水は長靴から、顔には分け与えてくれる色合いを奪った。（「だって三十ドゥカーテン有する教頭はきっと二足の長靴を靴置きに置いてもいいのだから」）。――今や月が（さながら昨日の歓喜の懸かる鏡さながら）西の方に明かりの汲み尽くされた手桶として沈んでいて、東には第二の溢れ出る一杯の手桶として太陽が昇り、その明かりの流出はますます広く煌めいていた。[1792年5月7日、満月は4時36分沈み、日の出は4時31分、ベールント]――

町は天上的な朝の炎の中にあった。ここでは彼の鉉脈占い棒は（金貨の棒で、これを彼は十六分の一インチ欠けた分を除いて身に有していた）、快樂の略奪品や銀鉉脈が隠されているすべての箇所では反応し始めて、我らの棒占い師は、町と未来は真の歓喜のポトシ銀山[南米]であると容易に告白した。

彼は自分の教頭職の小室で跪いて、神に感謝した。――遺産と花嫁のことよりも、――自分の命が無事であったことを感謝した。というのは日曜日朝早く、自分は戻って来られるか疑念を抱いて出発していたからで、私は読者に対する愛情から、読者が不安を抱くと考えたが故に、フィクスラインの旅の理由を先には策謀的に、自らの遺言をただ母親の許で書くという願望よりも、遺言の内容を知りたいという欲望のせいにしたにすぎなかったのである。すべての治癒は我らの青春の再来、再生である。人々は地球と、その地球上にいる者達を、新たな心で愛する。――教頭は二級生全員の頭を掴んで、抱き締めたかったことであろう。しかし彼はそれを単に自分の副官、四級生に対してのみした。これは第一のメモ箱ではまだ五級生であったものである。

午後の授業の後、彼はまずシュタインベルガー親方の家へ出掛けた。そこで彼は、一言も言わずに、五十フローリン分をドゥカーテンの現金で卓上で数えて、「ようやく」とフィクスラインは言った、「私は私の借金の半分を多くの感謝の念と共に返済できます」。

――「おや、教頭殿」（と連隊給養係将校は言って、絶えず腸詰めを作り続けていた）「わしの方針は『三ヵ月ごとの双方の解約予告に従って返済する』だ。――それ以外我らの者に仕様があるかい。――しかしそなたに金貨を両替することにしよう」。――そして彼に助言した、そこから数グルデン取って、より上等の帽子と靴一式を注文したら、

もっと賢明であろう、と。「そなたが」と彼は付け加えた、「子牛の皮と六枚の兎の皮を鞣したいなら、むこうにちゃんとある」。――私は愚考するが、私の読者にとっても、親方にとっても、このような話しの主人公が擦り切れた帽子の鍋蓋と長靴のポンプ胴やすね当てとで出迎えてくれるか否かはどうでも良いことではなかろう。――要するにこの男はヨハネの日[夏至]の前には、趣味の良い立派なものを身に着けていた。

しかし今や二つの極めて重要な書類を、――根本的には単に一つの書類、フーケルムの牧師職への請願書であるが、――これを仕上げなければならない。私自身手伝わなければいけない気分である。...今まさに全読者が注目していなければ、簡単なことであろうが。

まず最初に教頭は、自分に五級教師職、教頭職の国境棒が引き上げられる以前に支出しなければならなかったすべての宗教局や参事会の領収書、あるいはむしろ通行の際の関税証明を探し、整理した。というのは騎兵隊長夫人の遺言執行人は、領収書通りにヘラー貨幣、ペニヒ貨幣に至るまですべてを返済しなければならなかったからである。他の者ならば、この官職の消費税全体を合算するには、単に彼の――借金を眺めて見れば、合計が出し得たことであろう。この借金と、かの関税証明は[聖書の]類似箇所のように互いに説明し、認証し合っているからである。しかしフィクスラインの場合は、副次的事情があって、むしろ次のようにしか言及し得ない。

彼は自分の二つの官職のために、単に百三十五フローリン、四十一クロイツァー、半ペニヒしか支払い、借用しなければならなかったことに、少しばかり落胆した。遺産は確かに早速遺言執行人の手から連隊給養係将校の手に渡された。しかし彼は、自分が、――というのは人間は阿呆に出来上がっているからで、――もっと支払いができ、従ってもっと相続できていたらと願う始末だったのである。全教頭職を彼はわずか九十フローリンの投入でさながら幸運の車輪[抽選器]から引き当てたのであった。このようなわずかな負債金を読者はいぶかしく思うであろう。しかし読者は、教室への入室金がかもって安い国々があると私が語ったら、まず何と思われることであろう。シェーラウ侯国では教頭職はわずか八十八フローリンである。そしてひょっとしたらこの職はこの三倍の実入りがあるかもしれないのである。ザクセンのことは考えるまでもなく、――これは勿論宗教と文学の改革揺籃期以来他に考えようのないことであって、――そこではつまり教師や牧師は何も支払う必要がないのであるが、すでにバイロイト侯国においても、例えばホーフでは啓蒙期以来進歩していて、四級教師たる者、――四級教師は物の数ではない、――三級教師たる者、――三級教師は物の数ではない、――教頭たる者は、自分の職に就任する前に、次の数だけ納めればいいのである。つまり

フローリン・ラインラント貨幣		クロイツァー・ラインラント貨幣	
30		49	宗教局での義務の件で
4			召命の件での市の法律顧問官に対して
2			現市長に対して
45		7.5	政府の辞令の件で
合計	81 フローリン	56.5	クロイツァー

校長の印刷費用も若干の条項でより高額になるとしても、逆に三級教師、五級教師等は教頭そのものより安く印刷に付される。告白すると、そうやって学校教師はやって行けるのである。すでに一年目で自分の官職の手数料よりも余剰金を得るからである。学校教師は実際生徒同様一学年ごとに進級して行って、最上級のとき受け取るとき、国家からの謝金が遅滞税も含めて、丁度に収まる具合にしなければならない。その上我々の制度が反対していないのは、――これはアテネでは反対であったのであるが、――官職に借金をして就任することで、それどころか各人が自分の背囊と共に競争もなく階段を登って行くのである。教皇は大きな聖職禄の際、一年目の収入を年納の名目で徴収していて、それ故教皇はいつでも大きな聖職禄をより小さな聖職禄の所有者に贈与して、他人と自らの歳入を同時に増やしている。思うに教皇教会とルター教会の素敵な相違というものは、ルター教会の宗教局はひょっとしたら教師や牧師達から最初の官職の年収のほとんど三分の二も徴収しないということかもしれない、もっともその他は教皇と同じく職が空くことを当てにしているけれども。

私がここで、自分はシュマウス[Schmauß(1690-1737)]の『ドイツ民法大全』の一六五九年一月六日マインツ選帝侯帝国官房徴税令を調べて、そこから宗教局と比較していかほど帝国官房は徴収するつもりか調べたと告白したら、マインツ選帝侯と相容れないかもしれない。例えば、戴冠詩人(月桂冠詩人)として煮詰められたい、あるいは焼き上げられたいと思う者は、五十フローリンの国税と二十フローリンの官房手数料を納めなければならない、もっとも更に二十フローリン出せば教頭になれたかもしれない、ついでにそのような詩人、職務上の詩人となれたかもしれないのである。――一つのギムナジウムを設立するには千フローリンで認可される。途方もない額で、これだけあれば設立されたギムナジウムの全教師の教師任用の許可料が賄えるものである。――一人の男爵は、いずれにせよどうして年を取るのかしばしば分からずに年を重ねるが、年齢免除[尚早の成年認知]を現金の二百グルデンで買い取らなければならない。その半額あれば、学校教師になれて、その上年齢は自ずと加算されるであろうはずであるが。千ものこのような事例がある。しかしこれらが証明しているのは、身分上昇には勤勉さよりも愚行の方が値が高くつくことになっても、学校を建てるのが学校で働くことよりも高くなっても、諸国家と帝国圏にとっては都合が悪いことではなかろうということである。

私がこの点に関し、侯爵に対して述べたことは、この点に関し一人の市の法律顧問官が私に語ったこと同様に余りに珍しいことであり、単に脱線を恐れてここで見過ごすわけに行かないことである。

この市の法律顧問官は、――洞察の男、愛国心の男であり、その愛国心の光線を一つの焦点に、自らと自らの家族に向けているが故に、それだけ一層善行心の温かい者であって、――私に多くのことへの最良の答えを与えてくれた(当時私はひょっとしたらすべての学校のベンチ、学校の階段を、人々が拷問のために用いるベンチ、梯子と見なしたかったのかもしれない)、「一人の学校教師が三十帝国ターラーしか消費しなくても^{*1}、政治家が各自用に見積もった商品しか毎年購入しなくても、つまり五帝国ターラーしか購入し

*1 政治家によれば毎年ドイツではそれほど必要とする。

なくても、そして政治家が見積もっているツェントナー分の養分しか、つまり十ツェントナーの養分しか摂取しなくても、要するに裕福な樵のように暮らしても、つまり仕舞には自分の官職の借金の利子の額と同等の額を、毎年純益として残せそうにないのであれば、悪魔がその芝居をしているに相違ないであろう」。

この法律顧問官は当時私を納得させなかったのに違いない。私はその後フラクセンフィングンの侯爵にこう言ったからである*1。「閣下、御存じないかもしれませんが、私は知っています。――すべての本当の学校教師が年間毎日通い続けて求めなければならないその俸給を貰うとしても、貴方の一座の俳優の誰一人として三晩のエンゲル[Engel (1741-1802)]の『放蕩息子』で教師役をやらないことでしょう。ブランデンブルク侯国では傷病兵が学校教師となります。私どもの許では学校教師が傷病兵となります」。

閑話休題。フィクスラインは就任借金の一覧をまとめた。しかしいつも遺言が頭の中にある読者の考えとは違って、全く別の意図からであった。要するに彼はフーケルムの牧師になりたいのであった。自分の揺り籠と、自分の子供時代のすべての庭があり、――更に自分の母親がいて、――婚約の木陰道のあるその土地で牧師になること、これは新しいイェルサレムの門が開かれることであった。たとえその職がつましい懺悔[降格処分]の牧師であっても。肝腎なことは召命されたら結婚できることであった。というのは自分のチョッキの[空腹用]腹帯の中での、――財布を購入することすらまなぬ収入の乏しい教頭職では、婚礼の松明よりは葬儀の獣脂蠟燭や芯を集めることになるであろうからであった。

つまりそもそも教職では立派な国家でも兵士同様ほとんど結婚を許されない。コンリング[Hermann Conring(1606-81)]の『昔の大学』では、全頁で、修道院が元来学校であったと証明されているが、その本で私は原因が分かった。今や学校が修道院なのであり、従って、人々は教師に少なくとも三つの修道院の誓いの若干の模倣を守るように求めているのである。従順の誓いはひょっとしたら最初に校長達によって強制されるかもしれない。しかし独身という第二の誓いは、最良の国家の仕組みの一つによって、第三の誓いのために、つまり貧乏という立派な平等の誓いのために配慮がなされていなければ、難しいことであろう。即ち貧窮証明を作成する本人以上に幾多の貧窮証明を必要とする者はいないのである。――それでこの本人が結婚相手に申し込んでも、二人のそれぞれが一人前の胃を有していて、その上貨幣とビールを二人で分け合うことになったら、結果は分かる。...

私の読者の数百万人が教頭自身のために請願書を起草して、それを持ってシャーデックの殿方の許に騎行して、せめてこの哀れな奴さんに羊小屋を、その増築された婚礼の家と共に恵んでやろうとするであろう、その後かつて活字箱から生じたもののの中で最良のメモ箱が書かれるであろうと思われるが故にそうするであろう。

フィクスラインの請願書ははなはだ立派で人目を引くものであった。それは騎兵隊長に

*1 私が一人の侯爵と話すというこの奇妙な調子は、現伝記作者がフラクセンフィングンの侯爵との間で有する同様に奇妙な縁でのみ弁解されよう。私が一七九五年の復活祭に『犬の郵便日』というタイトルで世間に贈ろうと思う私の本の中で、すべてをすでに十分明確にばらしていると期待できなければ、ここで喜んで打ち明けようと思う縁である。

四つの理由を挙げている。1)「自分は村の子であって、自分の両親と先祖はすでにフーケルムで貢献してきており、従って請願するものである云々」。

2) 自分は容易にここに記録されている百三十五フローリン・フランケン貨幣、四十一クロイツァー、半ペニヒの負債を、この返済金を忘れ難い遺言は指定しているが、仮に牧師になるのであれば、自ら支払い、かくて遺贈を辞退するものである云々」。

筆者による自由な注記。お分かりのように、彼は夫人の遺言で怒ってしまった代父殿を買収しようとしているのである。しかし親愛なる読者よ、哀れな、困窮した、重荷を背負うた学校教師、学校労働馬に無神経の言い回しを大目に見て頂きたい。勿論我々はこんな言い回しはしないであろう。考えて見て欲しい。フィクスラインは騎兵隊長が市民階級の者に対しては吝嗇で、貴族に対しては差し出す筆られ兎であると知っていたのである。それに教頭は騎士席でのパトロンの殿方達から、一度か数回、耳にしたことがあって、彼らは実際教会や墓地を――イギリスではこれらを販売するそうであるが、販売するというよりは、これらの忠実な委託職を販売するというか、あるいはむしろ下請け候補者に下請けに出したというのである。私はランゲから、教会はパロンがその生活の資を失っても養わなければならないと承知している^{*1}。そこで貴族ならば、乞食になる前に内金払いで、自分の養育費の前払いを若干説教壇の下請けから受け取っていいのではなかろうか。――

3)「自分は最近恵深いフォン・ティエネッテ令嬢と婚約し、彼女に結婚を期し金貨を一枚与えたものである。従って生活が安定すれば、結婚できよう云々」。

筆者による自由な注記。私は請願書全体の中でこの理由を最も強固な理由と見なしている。フォン・アウフハンマー氏の目にティエネッテの系統樹はすでに切り詰められて、葉が落ち、虫に食われ、チャタテ虫で一杯に映じていた。彼女は確かに彼の家計世話係、宮殿の管理人であり、宮殿の召使い達の教皇大使で、彼の喜捨金への彼女の権利のために彼にとって次第に重荷になっていた。フィクスラインの遺産があれば彼女との手切れ金となっていたであろうにという彼の怒りの願望は今やフィクスラインで満たされた。要するに、フィクスラインが牧師となったら、この第三の理由のお蔭であろう。次のとんでもない四番目のお蔭とはとても言えない。...

4)「自分は、プードルの名前が、この犬はライブツィヒで一人の亡命者から買い上げたものであるが、ドイツ語ではエギディウスを意味し、この犬のせいで恵深い殿方の不興を買ってしまったと悲しい思いで耳にした。従ってこの犬を将来そう呼ぶことは自分にはできない。しかし自分の恵深い代父殿が、今名前のないこの犬に、自ら名前を決定してくだされば、大いなる恩恵と見なすものである」。

筆者の自由な注記。これまで貴族が代父であったこの犬は、従って、その名前を彼から二回受け取ることになる。...しかしひもじい庭師の息子が、その履歴では学校のベンチから学校の教壇にまでしか高く登ったことがないのに、そして女性達とは歌うときにしか、つまり教会でしか話したことがないのに、どうしてかような者がこのような一組の弦で、街学的調子よりも他の上品な音色を出せよう。――しかしその理由はもっと根深い。狭小な状況というよりは狭小な視野が、素人学問というよりは狭小な市民階級の魂が街学的

*1 『聖職者の権利』 551 頁。

にしているものであり、この魂は人間の知識と行為の集中する円を測定し、分離することができず、人間生活全体の焦点を、その焦点距離のせいで、すべての収斂する光線のペアと混同し、一切を見通し、一切を耐えることができない。...要するに真の哲学者は偏狭である。

教頭は請願書を幸せな五晩かかって綺麗に清書し、 — そのために特別なインクを使い、 — 確かに愚かなマヌティウス[Manutius(1512-73)]がラテン語の手紙に要したほど、つまり数ヵ月、 — スキオピウス[Scioppio(1547-1600)]の言を信ずれば、 — かなりつきりになったのではなく、 — 更に別な学者がラテン語の書簡をそうしたように、 — この者は、 — 単にモルホーフを信ずるしかないわけであるが、 — 丸四ヵ月それに手を入れて、異同や形容詞や詩脚に自分の語句の権威者達すべてと共に正確に行間注を記したそうであるが、それほど長期のものではない。彼はもっと敏捷な才を有していた。そして十六日で請願書を綺麗に仕上げた。彼が封印を押したとき、我々皆と同じように思った。この封筒は一つの偉大な未来全体の果皮であり、多くの甘い、あるいは渋い果実の外皮であり、自分の残りの人生の襦袢である、と。

天は彼の封筒を嘉し給え。しかし彼が牧師職を手に入れたら、私は自分をバビロンの塔から投下させよう。アウフハンマーはそうはできないと誰も分らないのであろうか。 — 彼は他の欠点にもかかわらず、いやまさにそれ故に、自分が副校長に与えていた約束を固く守るのである。彼が宮廷におれば、話しは別であらう。というのはそこではまだ古いドイツの風習があつて、約束は守られないからである。というのはメーザーによると、古代ドイツ人は午前中になされた約束だけを守ったそうであるからである。 — 午後にはすでに彼らは酔っぱらっていた。 — それで宮廷のドイツ人も午後の約束は守らないのである。 — 彼らは午前中の約束ならば、それは守るであらう、しかしこの場合は生じない。 — 彼らはまだ — 眠っているからである。

第七のメモ箱

説教 — 学校行事 — 見事な錯誤

教頭はその百三十五フローリン、四十一クロイツァー、半ペニヒをフランケン貨幣で得た。しかし返事はなかった。犬は名無しのままで、その主人には牧師職はなかった。その間夏は過ぎて、軽騎兵隊長は相変わらず拷問具の骨で一杯の頭の聖職者のかわかます[頭が拷問具に類似]を候補者達のすし詰め孵化池から取りだして、フーケルムの牧師職ののびのび養魚池に投げ込まなかった。スペインの守護聖人のように請願書で取り囲まれるのは、彼にとって快適なことであつた。そして彼は(副校長を召命するつもりであつたが)一通の請願書の聴許を、三十七名の染物屋やボタン職人、錫器製造人の息子達の請願書を一度に拒絶することができるまで躊躇っていた。というのはキリスト教界の現今の教師達は最初の教師達やこの教界そのものに似て選ばれたからであり、キリスト教界は最初ヴェネツィアやペテルスブルクがそうであつたように漁師小屋で立ち上がったのである。フォン・アウフハンマー師に聖職者の議会決定の選挙権の延期を恵み給え。彼は貴族というものは、自分の誕生日に最大の勝利を得たティモレオン[コリントの将軍、紀元前337年没]に似ていると承知していて、つまり彼のなすべき最大のことは、男爵夫人や最

高位夫人等々を母親として認定することであった。すでに胎児のとき貴族に昇格される者はシラミバエと比べることができよう。これはすべての昆虫の生態に反して、すでに母胎内で羽化して変身するのである。

しかし先に進もう。フィクスラインは今や金に欠けるわけではなかった。私が読者に、彼は破産者を片付けてくれた遺産の中から、更に三十五フローリンを自分が自由に買い物できる完全私有地、お手元金として有していたと語れば、あたかもその金を読者にプレゼントしたも同然であろう。それではいかにしてかくも立派な額に、このような資産に達したのか。 ― これは単に、彼が大きな額の貨幣を小貨幣に崩すたびに、そもそも収入のたびに、二、三枚、四枚の白ペニヒをこっそりと盲目に自分のトランクの書類の下に投ずるということをしてきたのであった。彼の意図は、いつかまとめて資本を引き上げるとき、びっくりすることであった。いや、誓って。この意図は、自分が五級教師職の王座に登るとき、書類から引き出して、戴冠費用として加えたときにも達成していた。 ― 今やまたそれを証書の下に蒔いていたのである。戯けた話である。つまり彼は自分の遺産をパトロンの殿方への積極的報酬、幹旋料として差し出したとき、幸いその遺産を危ない目に遭わせていなかったら、フーケルムの教会のドアをノックした後の失敗で彼は意気消沈していたことであろう。しかしノックが失敗しても、その金はまた得ることができて、彼は喜ぶことができた。

今私は彼の話しを先に進めて、彼の人生の岩石の中でとても美しい銀鉱脈に突き当たっている。つまりとても素敵な一日で、(思うに) 彼が自分の生まれた村の人々に代理説教を行った聖三位一体日の後の第二十三日曜日[1792年は11月11日、つまり聖マルティヌスの日]でさえも、ここでは単に軽く触れて済まされることになる。

それ自体説教は立派で素晴らしいものであった。その日はまことに歓喜の一日であった。しかしそもそも私は今現に私が生活し書いている五月から盗み取るよりももっと多くの時間と、素敵な日々の行楽がその風景画を私に恵んでくれるよりもっと多くの力を残存させておかなければならぬまい、全体としてかの聖三位一体日の後の日曜日に彼の心耳に一つの天球の音楽を形成した弦の長さや厚さについて、その振動について、その交互の協和音の関係について、私や他人にとっても気に入るような数学的報告を行うことに若干の希望を見いだしたいのであれば、残存させておかなければならないであろう。...しかし勘弁して欲しい。思うに一人の男がある日曜日、すべての夫役農民の前で、つまりかつて造園師の息子として自分を腕に抱いてくれた人々の前で、更には自分の浄福の涙をビロートのマフの排水溝に流している母親の前で、更には自らがまさに浄福になり給えと命ずることができる恵深い殿方の前で、最後には自分のモスリンの花嫁の前で、すでに同じ唇が接吻もでき説教もできることにほとんど石と化すほどに浄福になっているこの花嫁の前で、思うにと私は申し上げたが、一人の男がこのことをなすのであれば、この男は多分、自分の状態を描こうとしている伝記作者に、 ― 黙らっしゃいと言う権利があらうし、そのような状態を迫感しようと思う読者には、読者自身口を開けて、自ら説教してみてもはと言う権利があらう。

しかし私が職務上描かなければならないのは、これに比すればこの日曜日は単に安息日前夜祭、大祝日前日、前菜にすぎない日であって、つまり聖マルティヌスの祝日行事の前の安息日前夜祭、大祝日前日、前菜に当たる日のことである。日曜日彼は説教を行った。

水曜日はその祝日行事で、火曜日[前夜祭]は稽古であった。 一

今や火曜日が世間に対し描写されなければならない。

私は単に、勿論学校行事は司教の叙任式やフランクフルトの戴冠式オペラセリア[正歌劇]と左程異ならず、格別上等ではないと思うような世慣れた人々ばかりに読まれるのではなく、学校に行ったことがあって、行事の際の学校ドラマ、その道具方、劇案内(プログラム)の何たるかを知っている人々、それ故その劇の長所を誇張することもない人々にも読まれると覚悟している。

聖マルティヌス祭の行事の下稽古を述べる前に、私自身芝居の演出家として、教頭の招待状を抜粋するというわけではなくても、記録するというにしよう。彼はその中で幾多のことを述べ、(著者にとっては快いことであろうが)非難の代わりに、提案をして、ペスト[ブダペスト]やポーランドにおける大貴族の周知の文法違反[ドナートゥス違反]の際、伝染した野蛮さに対する隔離棟として校舎が最良に守ってくれるのではないかと思いつかせていた。更に学校で、守るべきものを守っていて(世で防御ほど甘美で容易なものはない)、こう言っていた。不当にもある種宮廷に似て、ただラテン語でのみ語らせ、自ら語る学校教師はローマ人を擁護できよう、ローマ人の家臣や王達は手紙やその交渉においてラテン語に励まなければならなかったのである、と。何故単にギリシア語の文法ばかりがラテン語でまとめられていて、ラテン語の文法もそうではないのか、彼は不審に思っていて次のような珍しい問いかけを行っていた。ローマ人は彼らの子供達にラテン語を教えるときに、まさにただラテン語で教えていたのではないか、と。 一 その後彼は行事に移って、次のようなことを自らの言葉で語っていた。[以下 Rennebaum 教師のパロディ]

「別な招待状の中で証明する用意がありますが、我らの宗教改革の偉大な創始者について、我らの今日の聖マルティヌス祭の演説練習のこの対象について知るべきこと、語るべきことのすべては、すでにゼッケンドルフ[Seckendorff(1626-92)]や他の者達を通じて、とうの昔に汲み尽くされています。実際ルターの行状や、彼の卓話、収入、旅行、衣装等については、殊に同時に真なるものでなければならぬとなると、もはや目新しいことは何も述べられません。しかしながら宗教改革史の分野は、比喩的に言って、まだまだすべて開拓されたとは言えません。学者は今日に至っても、この偉大な改革者の子供達や孫達、曾孫達等々についての、真実の、我らの時代にまで達する報告を探しているが空しく終わっていると私には思えます。これらの人物は改革者が一層身近に宗教改革史に関与しているのに対し、一層縁遠く関与しているわけではありますが。汝が汝の微力をこの等閑にされた歴史的小枝に傾注し、尽くすならば、ひょっとしたら全くの骨折り損とはならないであろうと私は自分に言い聞かせてきました。かくて私はルターの最後の父方の子孫、つまり弁護士マルティン・ゴットロープ・ルターに関して、彼はドレスデンで開業し、一七五九年当地で亡くなっていますが、特別な宗教改革史の研究開始に挑戦することにしました。この宗教改革に関連する弁護士に関する私の非力な研究は、これに関するより良い作品への刺激となれば、十分に報われたものになりましょう。私が彼に関してまとめ、収集した些少なことを、恐縮しつつ低頭して謹んで、フラクセンフィンゲンのギムナジウムのすべての講演者、友人の方々に、十一月十四日、六人の個性溢れる弁士達の口から御聴講して下さるよう御願い奉ります。先頭弁士は、

ゴットリーブ・シュピースグラスで、フラクセンフィンゲン人、ラテン語にてマルティン・ゴットロープ・ルターはそもそもルター博士の父方の子孫であったことを明らかにしようとしています。次に続く者は、

フリードリヒ・クリスティアン・クラブラーで、フーケルム出身、ドイツ語の散文にてマルティン・ゴットロープ・ルターが、すでに現存している宗教改革に、まだ及ぼすことのあった影響について明確に述べます。それに引き続き、

ダニエル・ローレンツ・シュテンツィンガーがラテン語の韻文にて、マルティン・ゴットロープ・ルターの訴訟の報告と教会改革に関する弁護士達の蓋然性の高い報告を総じてまとめようとしています。 — これに続いて、

ニコル・トビアス・プフィッツマンの出番となって、フランス語にてマルティン・ゴットロープ・ルターの学校時代、大学時代、盛年時からの特記すべきことを顕彰しようとしています。更には、

アンドレアス・アインタルムがドイツ語の韻文にて偉大なルターのこの子孫の若干の過失を弁護しようとしています。そして、

ユストゥス・シュトローベルがラテン語の韻文にて、弁護士身分での彼の公正さと名誉心とを力の及ぶ限り歌い上げます。 — その後私自身が教壇に登って、フラクセンフィンゲンの学校のすべての後援者に恐惶して謝辞を述べ、この珍しいドレスデン人の生涯から若干の部分引用させて頂きます。その内容についてはまだ何も申せません、これは事情が許せば次の聖マルティヌス祭の行事の弁士達のために取っておかれるからです」。

＊

行事前日の日はさながら水曜日の試射、見本刷りのようなものであった。衣服のせいで偉大な学校祭から遠ざかっていなければならない人々、殊に女性達が、火曜日六人の弁士の稽古に現れた。確かに私ほど稽古を水曜日の本番行事の下位に置く用意のある者はいなくて、学校のトランペットを吹く祭を然るべく評価するよう私に諄々と説いて聞かせる必要はない。しかし他面では私は同様にこう確信しているのである。つまり水曜日本当の行事に出掛けなかった者は、この稽古の日よりも何かもっと素晴らしいものを前もって想像できなかったであろう、と。というのはこの華麗さと、つまりこの祭の主人公が女性達や市参事会員達の前で、六人の弁士の同志達を馬と呼ぶならば、その六頭が先導する凱旋車に乗って、 — 明日に備えて向かって行った華麗な様と比較するものを有しないであろうからである。フィクスラインよ、明日の凱旋に対し向かって行く君の今日の小凱旋式に対する人々の驚きに関し絶えず微笑み給え。君のくしゃくしゃの顔には、幸せな、自らと香煙とをかみしめている自我が痙攣している。 — しかし君の虚栄心のような虚栄心、比較することなく、あるいは誹謗することなく享受している虚栄心、これは我慢できるし、育ててもいいだろう。しかし彼の蠟の心全体の上に溶かす陽光のように落ちかかっていたのは、彼の母親で、彼女は大いに説得されて、ようやく懺悔日の服を着て、主たる両開き戸の全く下の方に謙虚に佇んでいたものであった。どちらがより幸せであるか言うのは、難しいことであろう、自分の腹の中で育てた息子が半ば絹のチョッキの上品極まる若い殿方達に指示を出し、指揮を取っている様を見守り、息子が彼ら皆と一緒により声高に高尚なことを言い、かつ理解している様を聞いている母親の方か、 — それとも息子の方か、

と。息子は古代の何人かの英雄達のように、まだ母親の存命中に凱旋する幸せを有しているのである。私は私の文書や行為の中で故ブルヒャルト・グロースマンに石を投げたことはない。彼は歌「愛しい曙光よ、燃え出でよ」のスタンザの冒頭文字の中に自分の名前の文字を分配したものであるが、更に哀れな薬草採りの女達、すでに生前に葬儀のキャラコにアイロンを当てて、十二分の一ダースの葬儀用シャツを自らのために縫う女達を咎めることをしない。私は更に次のような男も賢明であるとは見なさない、―― もっともまことに抜け目がなく術学的であると見なすが、―― つまり我々ハモグリバエの誰もが、自分が囓りつつ上に屈み込む双葉を、近さと牧草のせいで、[ウィーンの]アウガルテン公園、第五の大陸と見なしていること、葉の孔をテンペの谷と、葉脈を一つの自由の木、パンの木、生命の木と見なしていること、そして露の滴を大波と見なしていること、こうしたことに青筋を立てて怒る男のことである。―― 我々日中の青虫[蝶]、夕方の青虫、夜の青虫[蛾]は、皆同様の錯誤に陥っているのであるが、しかし単に別な葉[紙]の上であって、そして（私がしていることであるが）重要な表情について、校長が国の方針を、演出家が劇案内を、ケニコット聖書の異同本喜捨収集人が文字を買い集めるときの表情を笑う者は、その者が賢明であれば、―― ここではその場合であるが、―― 自分も同様な愚行をしているという意識を持ってしているのであり、隣人に対して人間性と自らとを笑い飛ばしているのである。

母親は抑えきれなかった。彼女は今晚のうちにもフーケルムとティエネッテの許へ行って、少なくともこの素晴らしさについて若干を報じなければならなかった。――

今や世間是一对百で賭けることだろう、今や私が伝記上の蠟を取って、その様式が唯一独自である行事そのものを象るであろう、と。――

しかし水曜日の朝、希望に酔った教頭がまさに着替えようと思っていたとき、何かノックする音がした。――

それは馴染みの騎兵隊長の従者で、副校長フュクスライン宛の召命を有していた。このフュクスラインにこの善良な男は牧師職へのこの呼笛を運ぶことになっていた。しかし彼は副校長と教頭の区別が付かず、そもそも何故教頭の許に来たのか十分な理由を有していた。彼は考えたのであった。「誰が他にいようか。先の日曜日に説教して、この村出身の男の他に、彼は実際我らのティエネッテ嬢と噂があって、すでにわしが一個の時計と弁髪ドゥカーテンを運ばなければならなかった男ではないか」。―― 彼は自分の恵深い殿方が代子を見捨てるとは思いもしなかった。

フィクスラインは辞令の宛先を読んだ。「フーケルムの牧師フィクスライン宛に」。彼は必然的に従僕の錯誤を犯さざるを得ず、他人の辞令を自らの辞令として開封せざるを得なかった。かつまた召命には単に学校の次席官（副校長の代わりに）に関するもしか見いだせなかったので、自分の錯誤に留まらざるを得なかった。何故領主裁判官、この召命の作成者は、この召命をかくも愚かに起草したのか、私が十分に説明する前に、我々二人、私と読者は、即ちかつて教区に編入された人々よりも多くの人々は、フィクスラインの歓喜の跳躍の許に留まってみることにしよう、―― つまり彼の感謝で濡れた目の許に、―― 彼の動悸する胸の許に―― 彼の持参する両手、贈られた慰留分のこの取っ手の許に、司教冠保持者として喜んで手放し、同時に説教壇で垂らすことになり、教育者弁髪としては手放す二個の弁髪ドゥカーテンの心付けの許に留まってみることにしよう。―― 自

分がどう考えたらいいか（騎兵隊長について）、あるいはどう書いたらいいか（まさにこの隊長宛に）、あるいは何を食卓に出したらいいか（従僕のために）彼は知っていたであろうか。 — 彼は恵深い善行者の健勝について繰り返し尋ねたのではないか。従者はまことに良くすでに最初の質問のとき答えていたのであるけれども。 — そしてこの人間は、嘲笑好きの、肩をすくめる、二股かける人間の質であったけれども、自分の持参した歓喜に最後にはとても感動して、自ら即刻新しい牧師の学校行事に、そこには一人の貴族もいなかったけれども、立ち会って見るという決意を行ったのではないか。 — フィックスラインはまず感謝の辞に封をして、丁重に爵位記の持参者の許で、しばしば牧師館を訪問してくれるよう、そして今日は母親の許に立ち寄って、何故昨日はここに残らなかったのか、今日恵深いパトロンの殿方による召命の際、一緒に立ち会えたであろうのに、とこの説教を伝えるよう頼んだ。

従者が去ると、彼は喜びの余りまことに懐疑的になり始めた。 — そして不安になって、それ故召命の文書を、こそ泥を恐れて、十分にトランクに二個の南京錠で封鎖した。

（ — それに敬虔に、優しくなった。彼は神に臆せず万事のことで感謝したからで、神の永遠の名前すらも彼は官庁体書式と色付きインクでしか書かなかった、ユダヤ人の筆記者がこの名前のない名前を単に祭服を着て、身を清めてからしか書かなかったようなものである。 — そして牧師は聾になっていた）。それで彼は行事の逢瀬の時が鳴ったことにほとんど気付かず、 — ぼんやりしていた。ティエネッテの許でのもっと素晴らしい逢瀬の時がその薔薇の灌木や薔薇の蜜と共に彼の魂から去ろうとしなかったからである。彼はふくれっ面にするような運の時でさえ、長く子供達が互いにするように笑い顔にするのであったが、とうとう本当に微笑をし始めざるを得なくなっていた。 — 彼は今やさながらますます高く、はじかれて、一つの跳板に飛び乗った。...

しかし行事の前に我々は領主裁判官を聴取することにしよう。彼は、フックスラインの代わりにフィックスラインと名前の正書法の無知のせいで書いた。この正書法は夫人の遺言の正書法のせいで更に大きく、自然なものとなっていた。「フォン」という凱旋門を彼がフックスラインの新しい名前の前に置くことは許されなかった。アウフハンマーが禁じていたからで、彼はフックスラインの先祖の純粋な出自を攻撃していて、そもそも一人の貴族が誇りとするものを考えていなかった。すでにキリストがそのマタイによってまとめられた系統樹で四人の周知の — 娼婦を有しているからである、タマルにラハブ、バトシェバ、ルツである。最後にこの辞令の作成者は、カンペの無作法を自ら有していて、すべてをドイツ語化しようと思っていて、それは一つの言葉に、もっと良い国籍を与えようと思ってドイツ語化を試みたとき、それが本来その言葉で理解されているよりも、その後ではもはや意味が分からなくなるのであった。それはそれ自体どうでも良いことである。

— すべての言葉はすべての人間のように互いに同胞であり縁者であるだけに、一層そうである。 — 未開人が一つの言葉を発明したか、外国人か、あるいは苔のようにドイツの森の下に生えているか、あるいはローマの広場の舗石の中に要塞の草のように生えているか同じことである。これに対し領主裁判官は反撃して、それは同じことではないとし、日中旅行は召喚日の謂いであり、呼びかけは控訴の謂いであることを当事者達に隠さなかった。それ故彼は副校長の言葉に異国風のお仕着せ[次席官]を着せたのであった。この書き方も学校教師を牧師に変換したのであった。かくて我らの市民的安泰は、これは我らの

人間的な、内的土台、土壌の上に育つ安泰の方ではないが、単に偶然性や縁故、馴染み、悪魔とかその他とんでもない飛び土の上に生長するのである。

ちなみに、一人の領主裁判長には私はもっと分別を期待することだろう。私は（間違いかもしれないが）こう前提することだろう。裁判長は、かつて（ホーフマンの『ドイツ語のあるいは非ドイツ語の帝国演習』第七六六節参照）ラテン語で起草されていた文書、ヨーゼフ[一世、二世]前にハンガリーの文書はそうであったが、これは今日では、侮辱することなく言ってよければ、ことによるとラテン語というよりはむしろドイツ語で書かれていると承知していることだろう、と。この点では帝国大審院での判決に書かれている全てのドイツ語の行を典拠にできよう。しかし私は法律家が、インヒホーファーがローマの言葉を第二[彼岸]人生での母語であると説明しているが故に、方言から脱却しようと努めているとは思わない。この方言を通じて法律家はローマ[帝国]の鷲のように、あるいは後にローマの灰色青鷲のように（ローマの教皇席）その鷲の鉤爪で多くを掠奪したものである。

――

人々はいずれにせよ学校行事の鐘を鳴らし、入場し続けるがいい。誰がそれを気にかけよう。私も、先の教頭も気にかけない。六人のピグミーのキケロ達は我らの前で自分達の考えと体の華麗な着想[服]を披露しようとして空しい。偶然の隙間風は行事から光輝の後光、髪粉の後光を吹き飛ばしてしまった。先の教頭は察知した。何と教壇では誇るものが少ないことか（これは船首が一杯というのではなく黄色の嘴[青二才]が一杯で）、逆に説教壇ではいかに誇るものが多いことか、と。「思いもしなかった」（と彼は今考えた）「教頭になったとき、もっと偉いものがあるとは、つまり牧師というものがあるとは」。人間は自分がただ別な色に染めるだけで、もっと薄くすることはない永遠の眼帯の背後にいて、自分の誇りを一段一段と運んで行き、より高い段に立つたびに、より低い段での誇りをけなすものである。

行事で最良のことは、連隊給養係将校にして肉屋の親方のシュタインベルガーが参加していたことで、長い羊の革をまとっていた。祭の間、副校長のハンス・フォン・フクスラインは何度か満足げな問いかけの視線をシャーデックの従者に投げかけていたが、従者は彼に全く注目していなかった。ハンスはその従者の視線で打ち殺されていたろう、行事の後従者が彼を召命することになっているのだ、と。ようやく六つの首の小さな鶏小屋がその糞土の上で鳴き終わると、つまり弁じ終わると、現職の教師が、彼には今より高い公職旗が翻っているのであるが、自ら舞台に登って、校長や副校長、後見者や従僕にご臨席に対する丁重な謝辞を述べ、しかしついでに些細なことを告げた。「この度、神の思し召しで、今の自分の職から別な職への召命があり、フーケルムの教区並びにシャーデックに広がる教区支部の牧師職に身に余る任命を受けました」。

一 このささやかな弁は見たところ現副校長のハンス・フォン・フクスラインをほとんど椅子から撃ち落として、彼の顔は赤い膠塊粘土と緑色のチョーク、石黄、王妃の反吐[焦げ茶色]から混合されているように見えた。

背の高い給養係将校はその毛皮のまま中腰に起き上がって、幸せに自分を忘れて、十分声高に唸った。「彼奴が 一 牧師か」。

副校長は彗星のように従者の前を通りかかって、自分の許で主人宛の短い手紙を預かって行くように命じ、家に飛んで帰り、自宅で長い感謝の賛美歌を予期していたパトロンの

殿方宛に、至急、短い諷刺書簡をまとめて、それに口頭での中傷を添えた。

国家の下僕はその主人に交互にフィクスラインの感謝の歌と、フュクスラインの人身攻撃とを渡した。軽騎兵隊長は野蛮な男に激昂して、教頭が公然と行事で述べた自分の約束を守って、新しい牧師に同時に、混同と混同の追認の返事を書いた。ーそして今やフィクスラインは、我々皆が嘉するであろうように、フーケルムの正規公認の牧師となり、変わりがないことになった。

退けられた彼の好敵手のフュクスラインは、『新一般ドイツ文庫』の雀蜂の巣の中に居座るという慰めをまだ有していた。ーいつか牧師が作家に変身することになったら、この姫蜂が飛び出して来て、その針を蛹に刺して、その幼虫を刺された蝶の代わりに置くであろう。副校長は至る所忍び回って、自分の同僚を書評すると勝手に脅しているので、フィクスラインの誤植表や彼のマソラ学者的演習が今のこの時に至るまで手に入らないことに読者は驚かなくていい。

春に未亡人の一年恩給の年は、その安息日年月に席を譲ることになる。ー彼が花々の木の一つの王座の天蓋の下、キリストの花嫁（つまりキリスト教会）を片手に有し、別の手に自らの花嫁を有するとき、いかなる具合になるか、これは八番目のメモ箱、このメモ箱はの場合、真の宝石箱、虹の鉢^{*1}となり得るものであるが、この箱なしにはただ新郎だけが思い描けるものであろう。

第八のメモ箱

牧師職への就任

一七九三年四月十五日、読者は深く窪んだ道の中を三台の手荷物馬車が徒渉して行くのを目にすることになる。ー貨物馬車は新しい牧師の家財をフーケルムに運ぶのである。その所有者は自ら告解者と一緒に行進して行く。自分の上等の食器セットや家具が少しも十八世紀に毀損することのないようにするため、全ては十七世紀製のものであったからである。フィクスラインは背後で学校の鐘が鳴るのを聞いた。しかしこの鐘楽はタベの鐘のように未来の安息の歌をオルガン演奏してくれた。彼は今やギムナジウムの嘆きの谷から救済されて、浄福者達の居場所に受け入れられた。ーここには嫉妬も、同僚も、副校長もいない。ーこの天国では誰も『新一般ドイツ文庫』の共同執筆をしていない。ーこの天上的フーケルムのイェルサレムでは教会で神を称えることしかない。そしてここでは完成者はもはや知識の増大を必要としない。...いやここでは、しばしば日曜日と使徒日とが同じ一日となることにもはや嘆かなくていい。

真実を言うと、牧師は誇張している。しかし自分がすでに新しい状況の中において、従ってこの状況を古い状況とのコントラストで明らかにできるようになったときに、ある状況の全体の影や半陰影をまず描くというのが、以前からの彼の流儀であった。というのは一人の学校教師の地獄の苦しみは格別なものではなく、むしろギムナジウムではある段階から別の段階へ登って行くので、真の地獄の処罰に似ていて、これはその永遠性にもかかわ

*1 迷信は、虹が生じる箇所には黄金の鉢があると仮定している。

らず、世紀から世紀へと次第に弱くなって行くものであるということを見抜くには左程熟考しなくても分かることであろうからである。その上あるフランス人の格言に従って、「二つの苦悶は一緒に合わさると一つの慰めとなり得る」というのであれば、学校では慰めとなるに十分な悩みがある。つまり八つの合流した苦悶からは ― 私は単に各教師に一つの苦悶を数えているが、 ― きっと二つの苦悶よりも多くの慰めを汲み出せるであろうからである。ただ、学校教師は宮廷人のように決して仲良くしようとしなくてよい。ただ磨かれた人間と磨かれたガラスのみが容易に密着する。その上学校では、 ― それにそもそも官職では、 ― いつも報酬がある。というのは第二[彼岸]人生ではより大きな徳操は現世での徳操の報酬であるように、学校教師の功績は新しい功績への更に多くなる機会を通じて支払われるからで、しばしば学校教師は全く自分の職から釈放されない。 ―

八人のギムナジウムの生徒達が牧師館で駆け回り、組み立てたり、釘付けにしたり、引いて来たりした。思うに、私はプルタークの弟子として、このような些細なことを挿入しても許されるであろう。大人に愛される者は、子供達には更に強く愛される。学校全体が微笑むフィクスラインに微笑みを返して、彼を好いていた。彼が雷を落とさずに、彼らと遊ぶからであり、 ― 彼が二級生に貴方らと言うのに、副校長はおまえ達は言うからであり、 ― 彼の自ら立てる人差し指が彼の唯一の王笏であり教師用鞭であったからであり、 ― 二級生のクラスでは生徒達とラテン語で手紙のやり取りをし、五級生のクラスでは計算棒[Napier の棒]や（もっと長い棒）の代わりに棒砂糖で四則[加減乗除]を教えたからである。 ― 彼の教会の村は今日彼にはとても厳かで祝祭的に見えたので、 ― 月曜日[暦通り]であったけれども、 ― 教区の子供達や人々が晴着ではなく普段着を着ているのが不思議に思えるのであった。牧師館の玄関には泣いている女性が立っていた。とても幸せ過ぎたからであり、彼が、彼女の ― 息子だったからである。滂沱の涙を流しながらも、彼女はいとも容易に、運搬人に降ろすとき古いフランケン様式の箆の四つの球をもぎ取ることのないよう注意した。彼女の息子は今やとても敬うべきものに見え、あたかも聖書の絵の中の銅版画で描かれた端役の一人に思われた。 ― それは大きくなった蛙が尾を棄てるように、教師の弁髪を棄てて、正式な鬘を着用して立っていたからであった。彼は今や、世俗的地球から遠ざかって行く彗星で、これは天の彗星がそうであるように、尾の星[彗星]から毛髪の星[彗星]となるのである。

彼の花嫁はその前日大いに彼の家の改訂豪華版のために尽力していた。家の他の書き割り画家や靴磨人に混じって働いていた。しかし彼女は今日離れていた。彼女は余りに善良で、花嫁にかまけて娘の本分を忘れることはなかったからである。愛は人間同様空腹よりも過食が基で死ぬことが多い。彼女は愛によって生きているが、しかし彼女はアルプスの植物に似ていて、濡れた雲を吸い込んで育つが、しかし雨水を浴びると絶えてしまうのである。

今や牧師が引っ越して来た。そして彼は即刻、 ― というのは私は女性読者を知っているからで、彼女達は自分達が花嫁付添人であるかのようにそれを熱望しているものである、 ― 結婚することになる。しかし彼はそれを好んでいない。昇天祭[1973年5月9日]以前にはない。それまで優に三週間半ある。その理由はこうである。彼はまずとにかく松明日曜日、つまりカンターテの主日[同年4月28日]を乗り越えようと思っていた。

自分が地上での存命に疑念を抱いていたからではなく、ほんの些細な死の不安ですら（実際花嫁のために）蜜月の中に持ち込みたくなかったからである。

肝腎なことは、彼は婚約前に結婚したくなかったのであり、婚約は就任説教と共に次の日曜日に設定されていた。それはカンターテの主日である。読者は少しも不安を抱くことのないように願いたい。私はそもそも、かくも厳密に忠実に描写するの でなければ、最も啓蒙された世紀の一つにおいて、このような空想的日曜日の怪談を明るみに出したくない。フィクスラインは ― 殊に給養係将校が、彼は子供ではないかと尋ねて以来、 ― ようやく賢明になって、自らの阿呆らしさを察知した。いやその察知は立派で、より大きな阿呆らしさに至った。つまり自分は死ぬという夢想は、釈義的誤謬法によれば長寿と安寧しか意味しないので、自分の死の妄想はこのような良き夢想であるという結論を容易に引き出した。まさにカンターテの主日は幸運の女神がその宝角を彼の上で持ち上げ、注いでくれて、彼に一人の花嫁と召命とそれに弁髪ドゥカーテンとを恵んでくれていただけに、それは容易なことであった。かくて偶然が彼の役に立とうと害しようと、迷信に羽毛が生ずることになる。

書記官や和平条約作成者、公証人、このような写字台での徒刑囚は、自分がいかに就任説教を仕上げる或る牧師の下位にいるか、まことに実感することであろう。この牧師は（単に私のフィクスラインに注目すればいい）そこに屈み込んで、 ― 自分の説教のプレパラートの脈管に色付きインクを注入して、 ― 右側に格言の索引を置き、左側に賛美歌の索引を置き、あちらで箴言を切り抜き、こちらで歌の詞華を切り取り、その両方で説教師の焼き菓子の飾り付けをし、 ― 極上の作戦を練って、一人の世の紳士とか一人の女性の心といったものではなく、すべての聴講している女性達の心とそれに男性達の心を得るようにし、 ― すべての窓辺を馬車で通り過ぎて行く農夫をも草稿に取り入れ、最後に優しく滑らかな主要詩歌、説教歌を賛美歌から彫り上げ、それで心づくしの五千人が食する説教の黒スープの脂とするのである。 ―

ようやく彼は夕方、肩の荷が下りる思いで、起き上がり、中断することにした。赤い太陽が写字台で眩しいからである。そしてさえずる雀とアトリの間、ずっと長く、牧師館の周りに差し込んだ桜の木々を越えて、西の方を見つめ、天に雲のおぼろな余光しか見られなくなるまで見つめていた。 ― そしてフィクスラインが祈りの鐘の間ゆっくりと階段を降りて、料理する母親の許へ行ったとき、階下でなされ、焼かれ、運ばれて来るものすべてが結構だと思われなかったら、当然なことと言えなかったことであろう。

夕食の後、宮殿への一つ飛び、 ― 善良な懇ろな目への一瞥、 ― 酔ってない花嫁への酔ってない一言、掛け布団の下で楽園しかない穏やかに呼吸する一つの胸、一つの説教と一つの夕べの祈り。... いやはや、かくて私は、自分の天を去って、ここ我々の下で一つの新しい天を見いだしている一人の神話的神を満足させようと思う。

一人の死すべき者は、死がやがて塵へと乾かすことになる湿った土塊の中の一つの自我が、フィクスラインがその心の中で汲み入れたよりもっと多くを一週間のうちに要求できるものだろうか。このような偶然の籤での四度当りの後、このような塵の人間が更に何かを要求できるとしたら、せいぜい五度当りであろう。つまり着任説教、就任説教そのものである。 ―

そしてこの当りを我らのツェベデーウスは本当に日曜日引き当てた。彼は説教した、

ー 着任の説教をした。ー 彼はそれを押し寄せ、ぎしぎし言う高廊を前にして、後見人やフォン・アウフハンマー氏を、この牧師と犬の代父を前にして行った。ー 彼はかつて子供時分宮殿の家畜を牧草地で一緒に鞭打った告解者達を、今や自ら魂のへぼ羊飼いとして導いた。ー 彼は自分の両足で、踝丈の草のような聖職候補生や学校教師の中で立っていた。彼は今日（彼ら皆が許されないことであつたが）、祭壇で指の食刻針を持って空中に大きな十字架を描くことが許されたからである、洗礼や結婚は言うまでもなく。...思うに私は実際そうしているよりも躊躇わずに、この陽光のように明るい前面広場に牧師が投げかける細い墓の影を引き入れさせるべきであろう。彼は重たく湿った視線を利用して、黙って聞き入っている教会を見回して、あたかもさながらどこかの教会席、告解席に自分の青春時とこの教区の塵と化した師を探し出したいかのようであつた。師は外の白い墓石の下、人生のこの裏面の下、敬虔な心の外皮を外したのであつた。ー そして彼が、自らの内的奔流に押し流されて、まさにこの日の自分の死の恐れを、自分の花々や恩寵によって透かし彫りにされた人生を、自分の説教壇の下に休らっている棺の中の恩人の夫人を、四重[師を含め]にも思い出して言いようもなく軟化して、そして彼が自分の恋人、ティエネッテの泣き崩れた顔を前にして、夢中になって強張って、そして涙しながら、説教壇から騎兵隊長家の納骨堂の扉を見下ろして、こう言ったとき、「感謝を受け給え、御身敬虔な魂よ、御身がこの教区とその教区の新しい師に対してなしたすべての善行に対する感謝を。そして御身の神を畏れる胸、隣人愛の胸の塵がいつか神々しく黄金の塵のように、御身の目覚めた天上的な心の周りに積もらんことを」、そのとき教区民の誰の目も濡れたのではないか。彼女の夫は甲高く嗚咽した。彼女の愛しい者、ティエネッテは切ない思い出で崩れた頭を教会席の台に葬儀に列席している親族のように伏せた。ー

これより美しい午前が、一緒に婚約をし、交換した指輪を永遠の輪と結び合わせる午後を用意したことはなかった。新郎新婦の他には昔からの二人、母親と背の高い後見人しかいなかった。新郎は自ら筆を執って結婚契約書、あるいは結婚確約書を起草して、そこで彼女に自分の全動産が、ー 彼の筆記体文庫ではなく、全文庫が、中世では高貴な娘達には単に数冊の本が結婚持参金として贈られたというのがその代わりとして、ー 今日から彼女に約束された。ー これに対し勿論彼女は十分に持参した。つまり花嫁馬車、嫁入り馬車丸ごと一台、あるいはむしろ婚礼手押し車一台である。娘がベッドの天蓋へ上昇するこのエリアの馬車に重ねられていたのは、九ポンドの羽毛と、これは学者の歴史的詩的羽根[ペン]ではなく、身に着ける羽根[飾り]でもなく、我々自身を包むもっと小さな羽毛[布団]で、ー 立派なダーズの代父からの皿と代父からのスプーンと、これには一本の魚用スプーンが付いており、ー 絹製の靴下ばかりでなく（フランスのアンリ二世ですら絹は脚しか纏うことはできなかったけれども）、すべての絹製のスカートと、ー

それに少し価値の劣る宝石や家具であつた。善良なティエネッテよ。汝のプシュケの馬車[プラトン『パイドロス』]には真の花嫁の贈り物が、つまり汝の高貴な、穏やかな、謙虚な心が、自然の婚礼の朝の贈り物があつた。

不信からではなく、「生と死の現実のせいで」すべての事物に公証人の印を押したがっていた牧師は、抵当担保より確実な保証はないように思えて、どんな塵芥にも証書や領収書、契約書を要求して、今や結婚確約書が出来上がって、心がより軽やかになっていた。そして嫁入りの品のことでこの善良な男は一晩中花嫁に感謝した。しかし私にとっては結

婚契約書は何か痛々しいもの、不快なものに思える、――私の偉大な青春を人は非難するとしても、私は率直に白状するが、あたかも私の恋文をまず皇帝の公証人から閲覧済みの印を押して貰い、連署して貰わなければならないかのように思える。いやはや。その香りは秤の竿を動かすことのない愛の軽やかな花を、チューリップの球根のように、法の干し草秤に乗せて、二つの心を両親と弁護士の冷たい当局の秤、肉屋の秤に乗せて、彼らはその皿に単に家々や田畑や錫を積み上げて行く。これは関係者にとって、哲学やミューズの酔った乳呑み児や教え子が自分の女神に対する夕べや朝の祈りを書店に運び、そこで敬虔な思いを金に替えて、その敬虔な思いに契約書とエレ尺とを適用するとき感ずる思いに似ていよう。――

カンターテの主日から昇天祭まで、つまり帰旅、あるいは結婚までは一週間半で、――あるいは一週間半の浄福な永遠であった。夜や冬が日中の時や歓喜の季節をかなり遠くに離れさせることが素敵なのであれば、例えば誕生日、命名日、婚約日、結婚日、洗礼日を同じ一日に体験することのないのが素敵なのであれば、――というのは結婚日と洗礼日とが祭日と使徒日のように一致するのはとても少数であろうから、――婚約と結婚の間の期間、つまり花縁を異常に広げることとはもっと素敵なことである。結婚日の前は真の蜜の週であり、――それから蠟の週となり、――それから酢蜜の週となる。

第九のメモ箱でこの牧師はきっと花嫁のベッドを開けることだろう、――そこで私はここ第八のメモ箱では単に短くそれまでどのような具合に進行したかに触れる。勿論十分に天上的に進行した。すでに結婚式前にかくも大きな羽根とかくも大きな花とを（自分が向かって飛んで行ける花を）有する幸せに彼のように恵まれる者は少ない。思うに、フィックスラインのように、上述のために自ら小麦と家禽とを購入する幸せに恵まれる者は少ない、つまり結婚式の七面鳥に仰山の食事[処刑食]を詰め込んで与え、――毎晩馬小屋に行って、後見人が結婚式の贈り物として贈った婚礼時の豚がまだ生きて食っているか調べ、――将来の妻のために家の中で亜麻の部屋や衣装簞笥を置く壁龕を探し、――新しい貯蔵樽を（貯蔵ビールではなく）冬に備えて牧師館の地下室に運び入れ、――宗教局から早速わずかな贖罪金と引き換えに免除証書を、つまり三回の結婚通告の交付免除を得てポケットに収め、――町に住むのではなく、町ではどんな阿呆に対しても（自らが一人の阿呆なので）結婚することにしたということを打ち明けるために通知しなければならないが、小さな村に住むのであり、そこでは若干のことを学校教師に知らせさえすればよく、それで教師は後に鐘を打って、祭壇の手すりに祈祷時膝布団を広げてくれるのである。

騎士ミヒャエーリス[Michaelis(1717-91)]が天国は、人々が四散して行かないように小さなものであったと主張しているとすれば、実際村とその喜びは小さく狭い。これは楽園の若干の模写がまだ我々の地球にも残るようにするためであろう。――

一度も引用しなかったが、結婚式の前日連隊給養係将校が頼みもしないのにやって来て、豚を処理し、無料でソーセージを作ってくれた、宮廷でも食べたことがないようなものであった。

しかし愛しいフィックスラインよ、この穏やかで脂身の多い歓喜の油の表面にはまだ無料で一つの春の太陽が、――夕焼けが、――花の鎖が、――はじける蕾の世界の半分が浮かんでいた。...

君はこの歓喜の熱い渦の中どのように振る舞ったのか。 ― 君は君の魚の尾鰭(理性)を動かして、それで波の中に正しく進む行路を準備した。というのは他の牧師だったらその半分の渦で書斎から追い立てられたも同然であつたであらうからである。しかしまさに我らの牧師を幸せにしたものは、節度という境界の丘で、この丘に彼は根が生えたの如く留まっていて、そこから他の何千もの者ならば取り逃がしてしまうものを見下ろしていたのであつた。彼は宮殿の窓に向かい合っていながら、「アーメン」は聖書に百三十回生じていることを数え上げることができた。いや彼は自分の学的実験室に新たな化学的暖炉を隣接させた。彼はニュルンベルクやパイロイトのゼンフト兄弟出版社に寄稿して、それぞれの月の銅版画の下、裏面にはカレンダーの预言用に、表面には論考用に役立つペンとした。彼は普通の男性の思考方法に改革的に介入しようという意欲があつたからである。...そして彼は今牧師としてなすべきことが少なくなっていて、教区民の神聖な休養日に六日の文学的創造の日々を閉じることができたので、彼は(すでにこの謝肉祭の週に)まだ全く耕されないでいるフーケルムの地方史に自分の鋤を入れて、後から播種機を持って行った。...

かくて彼の分秒は全くの幸運の車輪に乗って、十二日間転がって行く。これらの輝かしい、小さな幸運の星々で(幸運の太陽の代わりに)モザイク的に嵌め込まれた天国への道で、十三番目の日の第三の天へ通じており、即ち

第九のメモ箱

あるいは結婚式[に至る]

起きよ、美しい昇天祭の一日、結婚式の一日よ、そして読者を喜ばせておくれ。最も純粋な宝石で、つまり花嫁で飾っておくれ。その魂はその覆い同様純粋で輝かしい。同時に真珠と真珠を包む貝殻が微光を発し光沢を出すようなものだ。 ― かくてどの読者も花と咲く格子垣を越えて、彼の後を付いて行く。その果実の実る垣根がこれまで我らの寵児を彼の樂園から隔てていたものだ。 ―

一七九三年五月九日の朝三時、一つの光線のように澄んだ郵便ホルンの鋭い音が灰色で暗赤色の五月の夜を通じて響いた。二つの螺旋状のホルンが一つの強張ったトランペットの音を挿んで、感嘆符を包む疑問符のように一軒の家から出て来て、固まった。その家ではただ一人の告解者が(告解聴聞師ではなく)住んでいて、吹いたのであつた。つまりこの告解者は魂の羊飼ひ[司牧]が今日予定している結婚式を昨日行つたのであつた。喜びの呼笛は牧師を広いベッドから、 ― プードルを下から起き出させた。プードルはすでに数週間前から滑らかに洗われた掛け布団から追い出されていた。 ― それも早い時刻で、牧師はこれまで毎朝自分の小さな赤ら顔とベッドの白い布団を観察していたベッドの天蓋の反映の中に、単にすべてが薄暗く、墨絵となっているのを見ることができただけであつた。

白状すると、新たに上塗りされた部屋と壁の曙光の赤色の色合いとが十分に明るくして、彼は自分のズボンの留め金が灰かに光るのを目にすることができた。彼はその後そっと母親を起こした。 ― 客人達はまだずっと羽根布団の中に留まっていて欲しかった。

― 母親は町の料理女を目覚めさせることになった。この料理女は、幾つかの結婚式の

家具同様町から数日間借り出されていた。彼は二つのドアをノックして空しく、返事がなかった。というのは皆がすでに下の竈に立っていて、料理し、かき起こし、整えていたからである。

何とさわやかに次第に春の一日は尼僧のヴェールを払いのけて行くことか。地球はあたかも復活の朝であるかのように、明るくなって行く。―― 晴雨計の水銀柱は、天気予報のこの導きの炎の柱[出エジプト記,13.20ff.]は、しっかりとフィクスラインの約櫃の上に休らっている。―― 太陽は朝焼けの代わりに、朝の青色の中に、純に涼しく昇って行く。燕は交差しながら雲の代わりに響く大気の中を射るように飛んで行く。...幾つかの神殿と祭日に値する素晴らしい天気の善意の精霊が（これなしには祭日は得られないので）、エーテルのように純な青空の一日をさながら月の澄んだ泉の大気から取り出して、その一日を青い蝶の羽根で、―― あたかも青い月曜日のように、―― 太陽の下、心地良くジグザクに震えながら煌めきながら地球の狭い空間に落下させて来た。その空間を今や我らの炎の空想が見守っている。...そして春の明るい空間の中、草の花々の間に、そこに木々は葉の代わりに花々を落としているが、一人の花嫁と一人の新郎が立っていた。...幸せな新郎よ、どのようにしたら私は、憧れの溜め息を最も美しい人々の魂の中に増やすことなく、君のことを描けよう。――

しかし落ち着こう。我々は空想の魔法の杯をすでに六時に飲み尽くそうとはせず、冷静に夕方頃まで待つことにしよう。

祈りの鐘の早朝、新郎は、準備の喧騒のために静かな祈りができなくて、墓地に出掛けた。墓地は（幾つかの地で見られるように）教会と共にさながら教会の中庭として牧師館の周りにあった。ここの濡れた緑の草の上で、その閉じられた花々には墓地の壁がまだ広い影を投げかけていたが、彼の魂は大地の熱い夢想から冷却した。ここ、彼の師の白い墓碑が人生のヤヌスの神殿の閉まった門のように、あるいは最後の住まいの嵐の大地の方を向いた風雨側のように、思われる所で、ここ、彼の父の格子の十字架の許の、開かれた金属製の小さな扉に、死と彼の父の享年に関する銘が書かれていて、真面目な想いへのその下のブリキ板に刻み込まれたすべての警告が読まれる所で、―― そこで、申し上げるように、彼はこの日他の誰にもまして優しく真面目になって、以前読み上げていた朝の祈禱を暗記して述べ、神に祈った。職務のときの自分を祝福し、自分の母の命を長らえさせて、自分の今日の挙式に弥栄を与え給え、と。それから墓を越えて垣根のない隅の花壇へ行って、落ち着いて、神の加護を信頼しながら、チューリップの支柱をより深く脆い土の中へ押し込んだ。

しかし彼が家の中へ入ると、結婚式の喜びの鈴の音の中の、イエニチェリの音楽の中的一切に出会った。―― すべての結婚式の客人がナイトキャップを外していて、大いに飲んでいた。―― お喋りとなり、煮立てられ、理容がなされた。―― 紅茶の食器、コーヒーの食器、温かいビールの食器が交互に運ばれ、結婚式のケーキで一杯のスープ皿が陶工の轆轤の如く、汲み上げ水車の如く回った。―― 学校教師は自分の家から三人の少年と共にアリオーツ[詠唱風に]を試みて聞かせ、歌のレッスンが終わった後、自分の上司にそれを聞かせて驚かせようとしていた。―― しかしその後泡立つ歓喜の奔流のすべての支流が入り乱れて、心臓や模造の花々を掛けられた天の女王たる花嫁が、臆した歓喜を一杯にして、震える謙虚な愛を一杯にして、降りて来て、―― 鐘が鳴り始め、―― 行列

の柱が動き、 — まだ早いのに村の人々が集まり、 — オルガンや教区民や同僚や教会窓辺の木々の雀が歓喜の軍太鼓で渦をますます長く打った。...歌っている新郎の心臓は、「彼の婚礼の日、かくも整然と華麗に行われる」と喜びの余りチョッキから跳ね出ようとしていた。 — 単に結婚の祝福のときに彼は少しばかり祈ることができた。

万事は食事の際更にひどく、甲高くなって行き、パイやマルチパンの銘句がもたらされ、 — グラスやくたばった魚が（ナプキンの下で、客人達をびっくりさせるため）回って行った。 — そして客人達は起き上がり、自ら歩き回り、最後にはダンスして回った。町から楽器を持った一団が来たからである。

一分から一分へと次々に歓喜の砂糖入れと瓶詰酒が振りまかれ、 — 客人達は聞いたり見たりすることはますます少なくなって、告解の人々はますます耳を傾け、目を向けるようになって、夕方頃には開けられた牧師館の玄関に楔が打たれたようになった。 — いやそれどころか二人の少年が牧師館の中庭で、梁材に架かっている一枚の板の上で、上下にシーソーをしでかしていた。散って行く太陽のほのかな光の霧が外の大地を包み、宵の明星が牧師館の中庭、墓地にかかっていたが、誰もそれに気付かなかった。

そうこうしているうちに九時頃になって、 —すでに結婚式の人々は新郎新婦を忘れて、ただ飲み続け、踊り続けていたが、哀れな人間は運命のこの陽光の中、別の陽光の中の魚のように、その濡れて冷たい自然力から跳ね上がって、新郎は幸運と愛の星の下、彗星のように長い尾を天に投げかけるこの星の下、こっそりと、飲み干された歓喜の杯で満たされた自分の胸で、自分の花嫁と母親とを抱き寄せた。 —— そこで彼は結婚式のパンの一切れを秘かに壁戸棚に閉じ込めた。この残り物が結婚生活の間ずっとパンを保証してくれるという古くからの迷信に期待を寄せていた。彼が人生の永遠の同伴者により大きな愛を抱いて戻って来ると、この同伴者は彼の母親と一緒に迎えて、一人で昔の慣習に従って、新郎のナイトガウンと新郎のシャツを贈った。激しい感動のときに、喜びの感動のときでさえ、青ざめる顔が中にはある。ティエネッテの蠟の顔は幸運の太陽の下この青ざめた蠟の中にあつた。汝、天の百合よ、決して萎むことのなかれ。四季の代わりの四つの春が太陽の汝の花の萼を開閉して欲しい。 — 彼の魂のすべてのポリープの腕は漂いながら歓喜の海で痙攣して、愛する者の華奢な温かい心臓を取り巻いて、その心臓をひしと抱き締めて、自分の心臓へ導こうと欲していた。...

彼は彼女を蒸し暑いダンス場から涼しい夕べへ連れ出した。何故夕方は、何故夜は、より熱い愛を我々の心の中へ入れてくれるのか。それは寄る辺ない夜の圧力なのか、あるいは人生の喧騒からの崇高な分離なのか、魂にはもはや魂しか残されない世の覆いなのか。恋しい人の名前が我々の内部で書かれるときの文字は、さながら燐光の文字のように、夜には燃えて映ずるが故であろうか。その文字は日中には単に臃な輪郭の煙となるのに対して。 —

彼は自分の花嫁と一緒に宮殿の庭園へ行った。そこで青春の時の美しい花々は長い圧力機の下、広く乾いて圧迫されていたのであった。そして彼女の魂は戸外の自由な庭園の中で大きく呼吸して開かれた。運命は庭園の花壇の中に彼女の今日の人生の最初の種を蒔いていたのであった。静かな楽園よ、緑色の、花々で震える薄明かりよ。 — 月は地球の下、死者のように休らっている。しかし庭園の向こう側では太陽から明るい赤色の夕方の雲が薔薇の花弁のように落ちて、宵の明星、この太陽の花嫁付添人が輝く蝶のように薔薇

の赤みの上に漂っていて、花嫁のように謙虚に、一つの小さな星からもその光を奪わない。

二人の人間はかつての庭師の小屋にやって来た。小屋は閉ざされて、黙したまま、暗い部屋と共に明るい庭の中にあった。現在の中の一つの過去のようであった。木々の剥き出しの小枝が太ったなりかけの葉と共に絡み合って、密な鬱蒼とした灌木の葉叢の上にあった。―― 春が勝者として、足許にある冬の隣にあった。―― 血痕のない青い池では暗い夕方の天が掘られていて、その排水溝では音を立てて苗床に水が流れていた。―― 星座の銀色の火花が東の祭壇の上ではじけていて、西の紅海へ消えながら落ちていた。――

風が夜の鳥のように一層音高く木々の間をざわめいて過ぎて、アカシアの木陰道に音色を与え、その音色はその木陰道でかつて幸せであった人間達に呼びかけていた。「入り給え、新しい人間のカップルよ。そして過ぎたこと、私の消滅と汝の消滅とを思い出し給え。永遠のように神聖になることだ。そして単に喜びの余り泣くのではなく、また感謝の余り泣き給え」と。―― そして泣いている新郎は、泣いている花嫁を花の下に導き、その魂を花のように彼女の心に置き、言った。「最良のティエネッテ、私は言いようもなく幸せだ。そして沢山話そうと思うけれども、言えない。―― いや、忠実なあなた、私どもは天使のように、子供のように一緒に暮らそう。―― まことに私はあなたが喜ぶことすべてをするつもりだ。二年前には私は何も有しなかった。無一物だった。いやあなたのお蔭で、愛しい人よ、とても幸せだ、私はただあなた[おまえ]と言う、愛しいあなたよ」。―― 彼女は彼を更に自らに近寄せて、接吻はしなかったけれども、言った。「愛しい方、ただあなた[おまえ]と呼びかけてください」。

そして彼らが再び神聖な木陰道から魔術的に薄暗い庭園に入ってきたとき、彼は帽子を取った。まずは心の中で神に感謝するためで、次に言いようもなく美しい天を眺めたいと思ったからである。

彼らはざわめく照らし出された結婚式の家に着いた。しかし彼らのほろりとなった心は静寂を求めた。他人の干渉は、花咲く葡萄の木のように、魂の花々の結婚[受粉]を妨げた。彼らはむしろまた向きを変えて、墓地に向かって、自分達の感動を保持した。偉大に墓地や山々の上に夜が、心の前にあって、心を偉大にした。白い塔のオベリスクの上には天がより青く、より濃く安らっていて、その背後ではより低い五月柱の干涸らびた先端が色褪せた旗と共に翻っていた。そこで息子は父親の墓塚を眺めた。墓塚では風が金属製の十字架の小さな扉をぎしぎしと開閉させていて、真鍮の上に刻まれた父の没年が読めるようになっていた。―― 熱い憂愁の念が激しい涙の奔流と共に彼の解き離れた心を襲って、彼は朽ちた塚へ向かって、自分の花嫁を墓塚へ導き、言った。「ここに眠っている、私の善良な父が。―― すでに三十二歳の時に父はここで永遠の休みに入ったのだ。善良な、大事な父上、今日あなたの息子の喜びを母上同様御覧になられたら良かったのに。最良の父上、あなたの眼窩は空ろで、あなたの胸は灰に満ちていて、私どもを御覧にならない」。

―― 彼は黙した。―― 切迫した花嫁は声を上げて泣いた。彼女は自分の両親の朽ちた棺が開けられ、二人の死者が起き上がって、自分の娘の方を見回すのを見た。娘は長いこと両親から棄てられた大地に残っていたのであった。―― 彼女は彼の胸元に崩れて、どもって言った。「大事な方、私には父も母もいません。私から決して去らないでください」。

汝、まだ父親とか母親を有する者よ、汝の魂が歓喜の涙で一杯で、その涙を受けとめてくれる胸を必要とする日には、そのことを神に感謝し給え。...

父親の墓塚のこの高貴な抱擁と共に、神聖に、この歓喜の一日が終わらんことを。 ―

第十のメモ箱

聖トーマスの日[冬至]と誕生日

著者というものは読者の群れに対する一種の養蜂家で、この群れの気に入るよう、この群れのために保っている植物区系を様々の時期に分割し、幾つかの花々をこちらでは早め、あちらでは遅くし、かくてどの章でも花盛りとなるようにする。 ―

愛の女神と平和の天使は夫婦を、豊かな沃野を越えて行く坂道に導き、春を通して、高い穀物畑の中に隠されている小道に導き、夏を通して行き、 ― そして秋は、冬に向かおうとしているとき、その大理石模様の葉を彼らに撒き散らした。かくて二人は冬の低く暗い門の前にたどり着いた、生活と愛とに満ちて、確固と、満足して、健康にそして赤く[血色良く]。

聖トーマスの日、ティエネッテは冬と同様誕生日を迎えた。我々は丁度、近くの教会で歌声が止んだとき、九時十五分に牧師館の中を窓から覗くことにしよう。 ―― そこには老母親の他には誰もいない。母親は一日中、息子が仕事を外して、休むようにさせているので、忍び歩き、床を蠟で磨き、アイロンかけをし、掃除をし、拭き取っている。どんな曲線の椅子の脚も、蠟引き布で覆われたテーブルのどの真鍮の釘も輝いている。 ― すべてが、ブラシ、蠅叩き、カレンダーが、子供のいないすべての夫婦の許で見られるように、正しい位置に掛かっている。 ― 安楽椅子は部屋の警察官によって古びた隅に置かれている。 ― 空色の綬のディアデム[髪飾り]あるいは肩帯で巻かれた亜麻の糸巻棒が騎士のベッドの所にある。今日半端な祭日に紡いで糸にされるからである。 ― 帯幅の紙の切り屑が、それに説教の構想が記されるのであるが、白く、切り取られた説教そのものの横にある、つまりそのための八つ折り判のノート横にある。というのは牧師とその書き物机は寒さのせいで書斎から居間へ降りて来たからである。彼の大きなマフの垂れ肉は綺麗な新郎のナイトガウンの横にかかっている。 ― この部屋で見当たらないのは、ただ彼と彼女である。というのは彼は今日単なる使徒日の教会へ招いて彼女に説教を聞かせていたからである、彼らの母親が、証人なしに、 ― 私と一緒に窓から覗いている数千の読者を除くが、 ― 糧食のパンと誕生日祝いの料理馬車を丸ごと発送し、最良の食器と瓶詰めをいつの間にか準備できるようにするためである。

司牧は、自分がスープは皿の上で湯気を立てていると思うまで、教会の人々に長く、警告し、元気付け、脅すことを何の罪とも思わなかった。それから彼は誕生日の女性を家に案内して、彼女を突然、料理の供物のある祭壇の前に、パンのトルテでできた甘い飾り模様カットの前に立たせた。そこには彼女の名前がアーモンドの口蓋音字母からなる真のゴシック体で焼き上げられていた。時と部屋の背景に、私はそれでも更に二本の ― ポンタク・ワインを隠している。 ― 何と速やかに喜びの光線の許、汝の頬は、ティエネッテよ、赤く熟したことか、汝の夫は厳かにこう言ったのだ。「今日はあなたの誕生日だ。主があなたを祝福し、守り給わんことを。そしてあなたに、あなたの義母とあなたの夫の喜びのために、特に幸せな楽しい分娩を贈り給わんことを、アーメン」。そしてティエネッテは、老婦人がこのすべてを自ら料理し、運んで来たことを悟って、あたかも自分の母

親であるかのように、夫人の首にすがった。

感動が食欲に勝った。しかしフィクスラインの胃は彼の心臓同様に強靱で、どんな種類の感動も、彼の蠕動を妨げることはなかった。飲み物は舌の滑液であるが、食事はその歯止めである。しかし彼は幾多のものを食べ、述べてから注ぐことにした。その後、瓶から池のコルク栓を引き上げ、酒精分のある池が抜かれた。まだ自分の生命の中へ隠された人間[胎児]のいる衰弱した母親は当惑した感動の最中、感謝の視線をただ老婦人に向けて、彼が自分のことで町のワイン店に使いを出していたことにほとんど叱ることができないでいた。彼は自分の愛する各人のために、左右の手にグラスを取って、そのグラスを母親と妻とに渡して、言った。「あなたの長い、長い命を願って、ティエネッテ、 — そして御身の御健勝のために、母上[ママ]、 — そして神が授け給うとき、我らの子供の本当に無事な誕生を祈って」。 — 「息子よ」と造園師の妻は言った、「でもおまえの長寿を主に願って私どもは飲まなければなりません、おまえに私どもは養われているのだから。

— 神がおまえに長寿を恵み給わんことを」、 — と重苦しい気持ちで彼女は付け加えた、そして彼女の目が彼女の心を明らかにしていた。

私は女性の途方もない移り気について次の時ほどより生気あるイメージを抱くことはない、つまりある女性が死の天使を自分の心の下に抱きながら、しかし死の兆候に満ちた九ヵ月の間、代父への思いと洗礼の際の予定の料理への思いより大きな思いを抱かない時のことである。 — しかし汝は、ティエネッテよ、より高貴な思いを抱いていた、もっとも先の思いも抱いていたけれども。 — 汝の心のまだ覆われた寵児[胎児]は汝の眼前に、小さな、墓碑に描かれた天使のように、その小さな手でいつも汝の没年を示して、安らっていた。そして毎朝、毎晩、汝は死の確信を抱いて、その確信の理由は定かでないのであるが、地球は薄暗いバウマンの洞窟で、そこでは人間の血は、滴りながら鍾乳石のように形成物を仕上げて行き、これらが須臾に煌めき、早くに溶け去って行くということを考えていた。 — これがまさに、何故に汝の涙が絶えず汝の穏やかな目から湧き上がり、汝の子供に対するすべての汝の不安げな思いを明らかにしているかの理由であった。しかし汝は汝の心の悲しい流涕を抱擁して償った。汝は新たな燃え上がった愛と共に汝の夫にすがって言ったのだ。「なるようになりましょう。あなたと私の子供が無事でありさえすれば、神の思し召しのままになりましょう。 — でも私は知っています、最良の方、あなたが私をとっても愛していること、私があなたを愛するが如くだということを」。... 母よ、汝の手を祝福を一杯にして二人の上に置き給え、そして良き運命よ、汝の手を決して二人から引き抜き給わぬことを。 —

私は確かに感動と賀詞とを一杯に抱いて、二人の親しい女性の抱擁の隣に、二人の有徳な恋人達の抱擁の隣に立っていて、彼らの祭壇の炎から火花が私の中へ飛んで来る。しかし二人の人間が、同じ重荷の下、背を曲げて、同じ義務へと結ばれて、同じ小さな寵児への同一の配慮に熱くなって、互いに美しい時、沸き立つ思いの心の許にくずおれるのを目にするとき、この共感の昂揚に比べれば、こうした心の軟化はいかほどのものであろう。これを二人の人間が、つまりすでに人生の喪の引き裾を、即ち高齢を引きずり、その髪と頬はすでに色が落ち、その目は炎がなく、その顔は千もの棘が受難の像へと彫り上げている二人の人間が疲れて老いた両腕で抱き合って、自らの墓場の山腹の間近でこう言い、考えるとき、「我々の許ではすべてが死滅した、しかし我らの愛はそうではない、 — 我

々は長いこと一緒に生活し、受難してきた、そして今や我々も一緒に死に神に両手を差し出して、一緒に連れ去られてしまおう」と、――すると一切が我らの中でこう叫ぶ。愛よ、汝の火花は時を越える、その火花は歓喜の許、薔薇の頬の許、微光を発することはない。その火花は千もの涙の下でも、高齢の雪の下でも、汝の恋人の灰の下でも消えることはない。その火花は決して消えない。至仁の方よ、永遠の愛がないのであれば、そもそも愛はないであろう、と。...

牧師にとっては私にとってよりも心から胃へ移行して行くことは容易であった。彼は今や、その声が早速快活になったティエネッテに、――一方彼女の目は次々に輝き始めたが、――凍れる天候を利用して、有する限りのものを自家用に屠殺する自分の計画を持ち出した。「豚はもうよろよろしている」と彼は言って、女達の決心と、更には肉屋と屠殺の日取りと鉢の数とを定めた。彼はすべてを、戦争組合[国王達]（これは過剰の人類に套管針を、つまり軍神の剣を据えるものである）がある地方を追獵の家、屠殺の家に追ひ込む一日前に作業に取りかかるときの厳密さで話した。

その後彼は、全く陽気に冬の始まりについて、これは今日朝の八時二十二分に始まったのであるが、語り始めた。「冬はまた」と彼は言った、「強力に春を目指して行くので、明日は今日ほど多く明かりを点す必要はない」。母親は自分の五感の武器で攻撃してきた。しかし彼は彼女に天文学的表で対抗して、日中の増大は気付き難いと同時に否定し難いことであると証明した。最後に大抵の法官、夫達がそうであるように、女達が理解していようといまいと何も気にかけず、法学的神学的言い回しで彼女達に告げた。「今日の午後、もう先送りにすることなく、教会司法権を有する立派な宗教局に教会の塔のための新たな擬宝珠を請願する、春までには教区の豊かな優しい寄付金を当てにできているだけにそうする」と。――「神の御加護で春を体験できれば」（と彼は極度に陽気に言い添えた）「そしてあなたが無事にお産できれば、そうしたら丁度擬宝珠が乗っかるように万事手配できよう、あなたが教会に参詣するときにね」。

その後彼は椅子を容易に酌用台、デザート台から仕事机に動かして、午後の半ばを塔の擬宝珠の請願書に取りかかって過ごした。しかし黄昏までまだ少しばかり時間があつたので、仕事道具を新たな学術作品に振り向けた。つまりフーケルム近郊では外の雪の中に古い盗賊の館の十分の一が残っていて、彼は秋毎日幽霊のように訪ねて、それを測量し、切り抜き細工で輪郭を描き、すべての窓の棧やすべての館に残っている上塗りを正確に紙に写すようにしてきた。彼は自分がそのことで、――つまり垂直というよりは水平な壁の幾つかのスケッチを通じて、自分の『フーケルムの盗賊の館に関する二人の友の建築学的書簡』に、書評家達を満足させるかの最後の手と成熟を加えたとしたら、余りに徒な期待を抱いているわけではないと思っていた。というのは書評家達の批判的大審院判決に対して、若干の作家達が本当に抱いているような、あるいは例えば私がそうであるように単に装っているようなかの軽蔑を彼は抱いていなかったからである。倒壊した盗賊のルーブル宮から彼にとって、かつてひょっとしたら垂直に立っている宮からその所有者にとって生じたかもしれぬものよりも多くの喜びの花が生じていた。

このすべてに責任があるのは他ならぬビュッシング[Büschung(1724-93)]であるというのは、私の知る限りまだ未知の逸話である。フィクスラインはちょっと前に教会の書簡保管室で一通の手紙を探し出して、その中でこの地理学者が村について特別報告を求めて

いた。ビュシングは勿論何も得なかった。 — それ故実際フーケルム全体がまだ彼の地図には欠けている。 — しかしこのペスト伝染の手紙はフィクスラインの心に名声欲の持続性の春熱を移してしまい、それで彼の動悸する心は単に書評というルカの守り札[火事避け]で静められ、落ち着くのであった。執筆業は愛と同じようなものである。両者とも十年にわたって同時に求めながら、無くて済ますこともできる。しかし一度その両者の最初の火花が汝の火薬庫に落ちたら、最後まで燃え続けるのである。

単に冬の始まりのせいで今日特別に温かい部屋が用意されなければならなかった。これは人々が思うよりも彼が大きなマフや熊皮の帽子のように、もっと好むものであった。黄昏[薄明かり]、この一日の明暗版画、夜のこの多彩な前景を、彼はできるだけ引き延ばして、その中でクリスマスに向けて、 — 研究を行った。それでも彼の妻は敢えて躊躇いもなく、彼が神々しい言葉の種で一杯の腰にぶら下げた種袋と共に部屋の中をあちこち歩き回っているとき、まさにビール酔で一杯のスプーンを彼の前に突き出して、それを酵母から注いでいいか口蓋で味見するよう促した。それどころか彼は、鰯の樽から、産卵前の雌魚が好みであったけれども、単に愛する妻のせいで、雄魚をいつも取り出すようにさせたのではなかったか。 —

今や明かりがもたらされた。まさに冬はガラス窓のガラス絵を、つまり氷の花の絵と雪の葉飾りを始めたので、牧師は、彼が冷たい料理と呼んでいる何か冷たいものを読む時期と悟った。つまり恐ろしく凍った国の記述である。そのときはノヴァヤ・ゼムリャ島での四人のロシア人の冬の物語であった[Histoire des Naufrages.1790]。当方の私は、勢いのいい西風が花の萼を咲かせる夏にはイタリアや東洋の地図や見取り図を更に私が座っている風景の中に新しい風景として貼り付ける。それでも彼は今日更にフラクセンフィンゲンの町の年代記を手に入れて、射撃やペストや飢饉や、長い飾り帯の付いた彗星や、三十年戦争のあらゆる地獄の川のざわめきの最中、彼の鴨の焼き肉用のためにキャベツサラダを切っている奉公人部屋の方に一方の耳を傾けて聞き入っていた。

お休み、牧師さん。私は疲れた。良き天が汝に一七九四年の春、地球が人間達を夜の青虫[蛾]のように葉や花々の上に運ぶとき、新しい塔の擬宝珠と丸々と太った — 赤ん坊とを送り給わんことを。

第十一のメモ箱

春 — 叙任式 — お産

私は奇妙な夢から目覚めた。しかし先のメモ箱がその事を自然なものとしている。私は夢見た、すべてが緑に萌え、 — すべてが香っている。 — 私は太陽の下、輝いている塔の擬宝珠を覗き見ている。白い園亭の窓辺に休んでいて、臉は花粉で一杯で、両肩には薄い桜の花びらで一杯で、耳は近くの蜂の巣からのぶんぶんの音で一杯である。 — その後ゆっくりと花縁の間をフーケルムの牧師がやって来て、園亭の中に上がって来て、厳かに私に言うのである。「殿下、まさに私の妻が男の子を分娩致しました。貴殿にお願い申し上げます。この子が教会の膝に抱き上げられるとき、この子のために神聖な仕事を引き受け頂きとう存じます」。 —

私は全く自然に目覚めた、すると — 牧師フィクスラインがなお実物のまま私のベッ

ドの横に立っていて、私に名親を頼んだ。というのはティエネッテが今日の未明一時にお産をしたからであった。出産は産院で行われたも同様に無事に済んでいたが、それは父親が数ヵ月前から注意を怠らずに、鷲の巣の中にある所謂鳴子石を手に入れて、お産のお守りとしていたからである。というのはこの石は、ナポリの老フランシスコ会士の帽子がそれを被る陣痛の女性達にあらたかなことすべてを、これはゴラーニ[Gorani(1744-1819)]が語っていることであるが、その石の流儀でやってくれるからである。

— 私はもっと長く読者を悩ますことができよう。しかし私は喜んで放免し、読者に事情を打ち明けることにする。

一七九四年のこの五月のような、このような五月を自然は人間の思考の中で、— 始めたことはなかった。というのは今ようやく十五日となるからである。洞察力ある人々は数世紀前から、毎年ドイツの歌い手が五月の歌を作ることに一度怒らなければならなかったことだろう。他の月の方がはるかに詩的な夜の音楽にふさわしいからである。私はしばしば極端なことをして、市場の女達の言葉遣いを攻撃して、五月のバターの代わりに六月のバターと言ったことがあるが、同様に六月の歌、三月の歌、四月の歌と言えよう。—

しかし汝、今年の五月よ、汝は同名の粗放な従兄弟達に対しすべての歌に同等に値する。

— 誓って。私が今この章を書いている宮殿の庭園の手品のような明暗のアカシアの木陰道から広大な生氣ある日中に出て来て、温かい天を見上げ、その下で湧き出る地上を眺めると、私の眼前に春が一杯の力強い雷雨のように青く緑の輝きを帯びて広がっている。

— 私は太陽が夕方の天に薔薇に射して光っているのを見る。今日地球を描いたときの光線の絵筆をその薔薇に投じているのだ。— そして私が少しばかり太陽の絵画展示を見回すと、そのエナメル画は山々ではまだ熱く、— 濡れた大地の濡れた石灰では、液汁で一杯の花々が乾いており、小川の畔では勿忘草が細密画の色彩と共に乾いており、— 奔流の光沢剤の下に画家の太陽は自らの目を留めて、雲は装飾画家のように単に荒々しい輪郭と単純な色彩とで描いていた。かくて太陽は地球の縁にあって、その大いなる、自分の眼前にある春を眺めており、春の襞取りが谷となり、春の胸の花束が庭園となり、春の赤面が春の夕べとなり、そして春は起き上がると— 夏となる。

しかし話しを進めよう。春のたびに、— それもこのような春のときには、— 私は徒歩で渡り鳥を出迎えて、冬の憂鬱な沈殿物から旅立って行く。しかし私は自分がフラクセンフィンゲンの教区監督兼宗教局参事官の許に来たことがなかったならば、単に数日後上げられるフーケルムの塔の擬宝珠を見るためにだけ出掛けようとは思わないし、いわんや牧師館の人々を見たかったらとは思わないであろう。この参事官の許で私はフィクスラインの経歴を調べた、— どの聖職候補生も自分の経歴を宗教局に提出しなければならない、— そしてそれ以上に面白い塔の切妻についての請願書を調べた。私は満足して、この変わり者がいかに陽気に人生のその鴨の池、牛乳浴の中で舌鼓を打って、ぴしゃぴしゃ音を立てているか見て取って、— そして彼の岸边への旅の計画を立てたのであった。我々が風変わりな人間と風変わりな本を一年中願って、称えるのは、奇妙なことであり、つまり人間的なことである。しかしそれを得、それを目にすると、我々はそれに立腹する。— あたかも我々自身の独創性とは別な独創性ならなし得るかのよう、全く我々の気に入る、我々が味わえるものであって欲しいのである。

五月三日の土曜日、夕方、私と教区監督と教会参事会長老と何人かの世俗的参事会員が

出発、乗車して、二台の馬車で牧師の玄関先まで案内して貰った。その件は、彼がまだ
― 叙任されておらず、明日がその予定であった。私は、我々が宮殿の庭園の白い格子垣
の側を通り過ぎたとき、その中で新しい小品に取りかかるとは思っていなかった。

私は牧師がまだ灰色の鬘の頭飾りを着けたまま馬車の扉まで飛んで来て、我々を引き出
すのを見ていた。 ― とても微笑んで、 ― とても懇懇で ― とても見栄っ張りで
かつ取り出された荷物に注意を払っていた。 ― あたかも人生の旅での痛みの旅のヴェ
ールをまだ全くまとったことがないかのように見えた。 ― そしてティエネッテは決し
て自分のそのヴェールをはね除けたことがないかのように見えた。万事が何と家では優し
く、飾られて、磨かれていたことか。それでいて静寂で、従者を呼ぶ鐘の忌々しく激しい
物音も階段を踏む退屈なトロンメルバスの音もなかった。 ― 紳士方が上の階で上品に
座っているとき、私は私の流儀で家中の臭いを嗅いで回った。私は居間を通り、台所を通
り、最後には家の墓地の所に来た。良き土曜日よ、私は汝の時を、できる限り黒い瀝青の
インクを用いて、他人の魂の時計文字盤に描いてみたい。居間で私は書き物机から背文字
に『フィクスラインの聖なる講話 第一巻』とある背と隅に金箔のある巻を取り上げた。

― 私が印刷所を見ようと思ったとき、 ― この聖なる本は手書きのものであった。
私はペンの羽幹を触って、インクの黒染めの中に浸して、そしてすべてが結構なものであ
ると知った。飛び回る学者達は、単に外務部門にのみかかわり、内務部門にかかわらない
もので、若干の別のインクの類の他には、インクとペンは劣等な代物である。一つの銅板
も見つけたが、これについてはまた触れることにしよう。

台所では、これはイギリス小説を書くためにはドイツ小説の遊び場となるほどにも必要
ない所であるが、私はティエネッテの横に立つことができ、一緒に火をかき起こす手伝い
をし、彼女の顔と彼女の料理の火とを同時に見ることもできた。彼女は、白い薔薇が頬で
は赤くなる結婚生活にあったけれども、その結婚生活では注にある比喻^{*1} に似てくるので
あるが、 ― そして竈木材[焚き火]は偽りの[紅]化粧を彼女に投げかけていたけれども、
私は彼女がかつてはいかに青ざめていたかおおよそ察知して、彼女の色合いについての私
の感動は運命が今日の未明取り上げるといよりはむしろ単に彼女の両腕の中と心臓の間
近に置いた彼女の重荷[赤ん坊]を考えると一層高く募った。まことに次のような男性は或
る永遠で覆われた世界の創造の分秒について思いを巡らしたことがなかったに違いない、
つまり或る覆われた無限の手がその生命の糸を次の生命のために紡ぎ出す女性というもの
を、即ち無限から実在への移行を、永遠から時への移行を覆い隠す女性というものを、哲
学的に尊重して眺めることのない男性のことである。 ― しかしその魂が、女性が未知
の見たことのない者に対して、我々が既知の者達に対して犠牲にするよりも、もっと多く
を、つまり様々な夜や喜びや、しばしば命をも犠牲にする状況にある女性に対して、サハ
ラ砂漠上での歌う尼僧のオーケストラ一同に対する以上に深い、大きな感動をもっとお辞
儀することのない男性は更に感じ入ることが少なかったのに違いない。この両者よりも
っと劣等な男性は、その母親を見て、すべての他の母親を尊重に値すると思わない男性で
ある。 ―

*1 つまり白い雪の花で始まり、薔薇や撫子で終わる春に似ている。

「哀れなティエネッテよ、更に汝にとって、無益なのは」（と私は考えた）「今や汝の辛い病気の杯を一杯に注いでいるときに、騒々しい祭典が重なることだ」と。叙任式と擬宝珠の取り付けのことを私は意味していた。私の位階は、その爵位記は読者が『犬の郵便日』に綴じ付けられているのを御存じだが、そしてそれはかつて彼女の位階と同じなのだが、彼女についての控え目な、当惑した、とりとめのない意見の一軍を差し向けることになって、私はそれを苦勞して分散させた。いつも人々が以前それに所属していた高い身分や低い身分の人を前にしたとき述べる意見である。私は彼女とも彼とも、他の紳士方が立ち去ってしまうまでは、土曜日、日曜日上手く軌道に乗れなかった。老母親は、薄暗い観念のように、強く持続的に作用していたが、しかし姿を見せなかった。これは我々に対する彼女の極度の畏怖の念から説明されようが、部分的には静かな苦悶のせいであって、これは雲のように彼女の中で（多分嫁のお産に関して）湧き上がっていたものであった。

私は、三日月[暦通り]がまだ微光を発している間に、墓地をあちこち歩き回って、余りに容易に褐色の脆いミイラとなって描かれる私の空想を夕焼けによって和らげるばかりでなく、また何と容易に我々の目と心は死の瓦礫とさえも和解するものかと考えることによって和らげた。これは明日のために納骨堂を整えている口笛吹く学校教師と、歌いながら墓地の草取りをしている牧師館の女中によって補強された考えである。何故我々は運命のすべての形姿に対するこの慣習を、我らの性質と我らの扶養者の別世界にも応用しようとしないのであろうか。―― 私は墓石を次々に読んで行った。そして墓石を読むと記憶が失われるという迷信^{*1}は正しいと今でも思っている。―― もとより人間はこの世の千もの事柄を忘れるものである。...

日曜日[一七九四年五月四日]の叙任式、立派な羊飼いについての日曜日の福音書はこの儀式に合っているが[ヨハネの書、10,12-16]、これについては手短に済ませなければならない。すべて崇高なものはおしゃべりを嫌うからである。しかしこう報告すれば、肝要なことは報告したことになろう。つまりその際、酒が飲まれ、―― 牧師館で、―― ティンパニーが打たれ、―― 合唱となり、―― 長老によって、召命が、世俗的参事官によって、批准の布告が、―― 朗読され、―― 司牧を受け入れ、司牧を教区民に、教区民を司牧に紹介し、与え、保証する宗教局参事官によって、―― 説教がなされた、と。フィクスラインは自分が田舎牧師としてやって来た教会から高位の聖職者として出て行く気分がして、一日中、一度たりとも悪態をつく勇気がなかった。人間は莊重に取り扱われると、自分をより高級な人間と見なして、自分の聖名祝日を敬虔に行う。

この入会式、この修道院誓願式を聖職者の上級ラビ達やフリーメーソンの親方達が、―― 教区監督達が―― 普通よく挙行するのは、牧師がすでに数年、紹介されるべき教区民の前に立って、馴染みができてからのことである。丁度初期のキリスト教徒達がキリスト教への清祓、叙任式を、つまり洗礼を、好んで彼らの臨終の日に延ばしていたようなものである。―― いや私は、叙任式は、これと職務の記念祭とを同じ一日に節約するとしても、幾ばくかの有益性を失うとは思ひもしない。この有益性というのは教区監督や参事

*1 このキリスト教的迷信はラビ達の迷信であるばかりでなく、ローマ人の迷信でもある。キケロ、『老年について』。

官達が何かを味わったり、得たりすることにあるだけに尚更のことである。

夕方頃になって我々兩人は知り合いになった。つまり叙任式の司祭達や徴税官達は夕方ずっと大いに ― 呼吸した。即ち殿方達は、最古の見解と最近の実験から、大気は薄まって四散した水分に他ならないということを知っていなければならなかったので、容易にこう察知できたのであった。逆に水分はより濃い大気に他ならない、と。そしてワインを飲むことは絞られて、若干の芳香を撒かれた大気の呼吸に他ならないのである。さて今日では、聖職者の口を通じて、流動の呼吸はどんなになされても十分とは言えないので、つまり彼らの状況は彼らにより小さな孔を通じての呼吸が難しいので、アーバネシー[Abernethy(1764-1831)]はこの呼吸を大気浴という名で推奨しているのであるが、聖職者にあっては食道なるものが、気管の壁の隣人、ドアの隣人、気管の吸根や子音に他ならないのではなかろうか。 ― 私は脱線している。私は言いたいののであった、自分は夕方上述の見解に賛同していたが、しかしこの空気を、あるいはこのエーテルを彼らのように甲高い哄笑のために使うのではなく、人生のより静かな観照のために使った、と。私はそれどころか私の代子に神への畏怖を洩らすような若干の意見を述べたのであるが、これを彼は最初冗談と取ろうとした。私が宮廷の出で、私の身分のことを知っていたからである。しかしワインの霧の凹面鏡は最後に私の魂の像を、拡大させ、霊の形成物として具体化させて、大気中に描き上げた。 ― 人生は私にとって短い夏至の夜へと、我々発光する蛍が切り抜いて行く影絵となって行った。 ― 私は彼に言った、人間は、大きなゼニアオイの葉のように、人生の様々な時刻の中、あるときは東の方、あるときは西の方を向き、あるときは夜地球の方、その墓の方を向かなければならないのであろう、と。 ― 私は言った、善なるものの全能は我々と諸世紀とを神の町の市門へと仕向けている、丁度エーテルの抵抗がオイラーによると回転している地球を太陽に導いているように云々、と。

彼は私をこの挿話[アントレ]のせいで、この時代の第一級の神学者と受け取って、戦争を開始しなければならない目に遭ったとき、私からまず判断を取り寄せかねなかった、かつて戦争の指導者達が宗教改革の神学者達からそうしたような按配であった。しかし私は隠すことをしないが、牧師が現世の空しさと呼んでいるものは、哲学者が呼んでいる空しさ[虚栄心]とは全く異なるものである。私が彼にすっかり打ち明けて、一応著者と名乗って恥ずかしくない者であり、あれこれの伝記を書いており、自分は彼自身の伝記を教区監督殿の許で目にしており、それを印刷物に仕上げることができるであろう、彼が私に一、二の具体的色彩の手伝いをしてくれるならばと述べたとき、単に私の絹の服が、これは残念ながら電氣的炎の絶縁となるばかりでなく、より上等の炎との絶縁ともなるのであるが、私と彼の両腕の間に残る格子となっていたにすぎなかった。というのは彼は大抵の貧しい田舎牧師のように、何らかの位階を忘れるとか、自分の位階とより高い位階とを混和することはできなかったからである。彼は言った、「私が彼のことを印刷しようと思うなら、それは名誉なことと思うことだろう。しかし恐縮に耐えないことであるが、自分の生涯は記述するには余りに卑俗で、劣等なものである」と。それでも彼は私に彼のメモ箱の引き出しを開けて、言った。自分はこれで貴方の下準備になっていると思う、と。

肝要なことは、彼が、自分の誤植表、演習、盗賊の館についての書簡は、私が前もってこれらに執筆者の伝記を先述すれば、より良く受容されるであろう、それはあたかも私が序言を付しているかのようなものであろうと期待していたということである。

要するに月曜日、他の紳士達がその後光と共に輝きを消して去ったとき、一人彼の許に私は沈殿物として居座り続け、―― 今も居座っていて、つまり五月五日から（読者は一七九四年のカレンダーを側に打ち付けて置いて欲しいが）十五日まで、―― 今日は木曜日で、明日は十六日金曜日であり、所謂ほうれん草開基市で、塔の擬宝珠の上棟があり、私は立ち去る前に、ただそれを待つ計画であった。しかし今私は出て行かない。日曜日に洗礼契約を洗礼代表者として私の代子のために結ばなければならないからである。私の言うことを聞いて、カレンダーを開けた方は、何故日曜日まで延ばされているのか、容易に理解されよう。その日はあの記念のカンターテの主日に当たっていて、かつて我らの話しの中ではその戯けた嗜眠的な毒人参の力のせいで、―― しかし今は美しい婚約のせいで重要な日となっており、この婚約が二年後、洗礼と共に祝われるのである。

私は確かに、色彩とプレス機の乏しさのせいで、―― 二週間の優しく香る花の鎖を、つまりここで私の病んだ生命の周りに巻き付いている花の鎖を紙に彩色して写すとかプレスすることができない。しかし一日あればそれを試してみることができよう。人間というものは、自分の喜びも苦しみも察知できない、それらを反復することは更に、人生の中であれ、記述の中であれ、難しいということを私は良く承知している。

コーヒーの黒い時は、我々の口の中で黄金と蜜とを有する。ここ朝の涼しさの中、我々は皆一緒になって、一般的な会話をしており、牧師夫人も造園師夫人もその会話に加われる。教会の早朝礼拝のせいで、この教会にしばしば全民衆^{*1} が座り、歌うのであるが、我々は分散することになった。私は鐘の音の中、私の棘の執筆道具を持って歌声の宮殿の庭園の中へ行進して行き、新鮮なアカシアの木陰道の下、露を帯びた二脚のテーブルに着席した。フィクスラインのメモ箱はすでに私のバッグの中にあり、覗いて見て、私のに役立つものを彼のから取り出しさえすればいい。奇妙なことである。容易に、記述にかまけて、ある件を人間は忘れてしまう。私はまさに今、二脚の木陰道のテーブルの許で、私が話題にしているそのテーブルの許で、こうしたことすべてを書いていることをわずかばかりも思い出していなかった。

私の名親依頼人は、その間、世間のためにも働いていた。彼の書斎は祭具室で、製本機の締め木は説教壇で、それを彼は全世界に説教するために使用している。というのは著者たる者は宇宙の町の牧師であるからである。一冊の本を作る人間は縊死することが少ない。それ故、すべての豊かな卿の息子達は、印刷機のために働くべきであろう。というのは余りに早く目覚めても、何故そこから起き上がることになるか、一つの計画、一つの目標、それ故一つの理由を眼前に有するからである。その際最良なのは発案する作家よりも、むしろ収集する作家である。―― 発案する作家は不安げな炎のせいで心が石灰化するからで、―― 私は骨董研究者、紋章学者、注作成者、収集家を称える。私は肩書すずきを称賛する（これは魚で、*perca diagramma* [コシヨウダイ]の名前で、鱗に活字があるせいでそう呼ばれる）、それに植字工虫を称賛する（これはベーコン甲虫 [カツオブシムシ] で、*scarabaeus typographus* の名前で、松の樹皮に活字を彫って行くものである）―― 両者ともぼろ紙の上の展示場よりも世界でもっと大きな美しい展示場を必要とせず、二十四の文

*1 というのは法学者によれば、十五人おれば一民衆と言えるからである。

字の卵を産み付ける為には尖った羽茎より他の抱卵器を必要としない。 ― 名親依頼人がドイツの誤植について作成しようとしている小理屈のカタログに関しては、彼に数回言ったことがある。「立派なもので、数え上げる基となった規則に則っています、例えば一ツェントナーの十二ポイント活字の亀甲文字のためには四百五十のピリオドと三百の改行用スペース等が必要である、と。しかし政治的文書や献呈における一ツェントナーの十二ポイント活字の亀甲文字用として五十の感嘆符は余りに少なくないか、同様に哲学的文書や長編小説における六千の字間スペースも少なくないか検討してみる必要があります」と。

幾日か彼は何も書かなかった。自分の牧師服の革袋、煙道の中に収まっていて、祭服のまま向こうの学校教師の許で数人の ABC 初級者に、他の新入生のように春だからと言って休暇を取れない者達に初歩の練習をさせていた。彼は義務以上のことはしなかった、しかし義務以下のこともしなかった。自分が以前校長の下でへいこらしていたのに、今や自ら校長のようなものであるということで、彼の心には穏やかな温かさが過った。

十時に我々は我々の様々な博物館から出て来て出会い、村を視察した。殊に私が丁度今朝私のペンというか私のパントグラフの下で描いてきた伝記上の家具や神聖な地を視察した。私は私の記述の後では、記述以前よりもそれらにもっと関心を抱いて、観察したからである。

それから食事となった。

食卓の祈りの後、祈りは余りに長いものであったが、我々兩人は隣人愛支援金、あるいは大審院税、それに施しの寄付金を、つまり教区民が新しい塔の球を購入するための喜捨箱の宗教基金、返済基金としたものを二重の帳簿に記入した。その一方の帳簿は、施与者の氏名と共に、 ― 子供のためにも寄付をした場合には、 ― その子供の氏名と共に鉛のカプセルに入れられ、塔の擬宝珠で保存されるものであり、他方の帳簿は、下の方でファイルに残るのである。擬宝珠の中に上げられたいという名誉心で幾ら集まったか記すことはできない。 ― しかし誓って言うが、すでに十分に施していた百姓達も、洗礼を受けさせるとき、更にもう一度払うことになるのであったし、子供も擬宝珠に上がって欲しかったのである。

この記帳の後、名親依頼人は銅板に記入した。彼は幸い才能を発揮して、逆のラテン文字の S に似ている一つの流儀で官庁式書体のすべての頭文字をととても美しく、とてもくねらせて、あたかも修業証書や爵位記にあるかのように紡ぎ出すことができた。「貴方が六十を数えるまでに」と彼は私に言った、「私は私の馴染みの流儀から一つの文字を仕上げました」。私は単にそれを逆にしていて、彼が仕上げるまでただ六十を数えるようにしていたのであった。この美曲線をすべての文字に応用して曲げて、彼は自らが彫る銅板を通じて、官庁式書体のためにより一般的なものにしようと欲していた。私はロシアやプロイセンの宮廷に対して、また若干のより小さな宮廷に対しても、彼の名において最初の複製品への期待を抱いてもいいであろう。これらは執筆する書記達にとって不可欠のものである。

さて夕方となった。我々兩人が果実採取器で命がけで活動している認識の学術の木から再び野原の花畑へ降りて来て、田舎風の喜びの芝地で遊ぶ時である。 ― しかし我々は今や神の聖母として我らの仲間である働き者のティエネッテが、我々の間に行くより他の

歩行は必要なくなるまで待っていた。 ― それから我々はゆっくりと歩んだ、 ― 病の[お産の]女性は疲れていた、 ― 農舎を通り、つまり馬小屋やその財産目録名義の酪農場を通り、家鴨で一杯の汚い水溜まりの側、鯉で一杯の牛乳室の側を通り過ぎて行った。我々は、つまり私と他の者達は、この家鴨と鯉に、侯爵達のようにパンを与えた。日曜日に洗礼の後、 ― パンに添えて自ら食しようと思ったからである。

それから天はますます晴れて、赤みを帯びてきた。燕や花咲く木々がますます声高になり、家々の影がますます長くなった。 ― 人々はより満ち足りて来た。アカシアの木陰道の総状花序は冷たい台所に懸かっている、ハムは、 ― これには私はいつも立腹するが、 ― 花を挿されていて、遠くの花々の影が写っていた。...

それからより深く夕方となって、小夜啼鳥で私の心は一層和らいだ。私はまた私の周りの穏やかな人々をほろりとさせ、殊に青白いティエネツテをほろりとさせた。彼女にとってというか彼女の心にとって、激しい喜びの動悸は、抑圧された青春の卒中性の麻痺の後、憂愁の念の動揺よりも難しいものになっていた。かくて我々の透明な純粋な人生は美しく、五月の花々の覆いの下で散って行くものであり、我々は謙虚に享受しながら前方も後方も見ない。宝物を持ち上げる人々は、来し方、行く末を見回さないようなものである。

このように我々の日々は過ぎて行く。 ― ただ今日は別様であった。普通我々はこの時刻すでに夕食は済んでおり、プードルはすでに我々の夕飯の骨の標本を顎の間に有している。しかし今や私はまだ一人っきりでこの庭園に座っていて、第十一の箱を書いており、私の名親依頼人がやって来ないか、野原の方を今か今かと覗いている。

彼はつまり、薬味の仕入れ商品を求めて町へ出掛けたのである。彼は大きな上着のポケットを有する。いや、彼は自分の下宿屋がある後見人の所からただ上着のポケットに幾つかの肉屋の十分の一税を入れて持ち帰るということを秘密にしていなかった。勿論より上品な世界や町との交際とそこから生ずる礼儀作法が、 ― というのは彼は本屋にも学校教師達の所にもより卑俗な町の人々の所にも行くからで、 ― これが肉の取得よりも大きな彼の町旅行の意図なのである。彼は今朝私を家の現当主にして私に[権威標章の]束桿と王座の天蓋とを与えた。私は一日中産褥の女性の許に座っていて、全くのところ、単に夫が私を彼の結婚生活の端役として残したという理由で、この美しい魂の女性がもっと好きになっていた。彼女は黒っぽい服を選ばざるをえず、そして私に彼女の惨めな青春の冬景色、氷の地帯を描かざるを得なかった。しかし私はしばしば軽い悲歌的言葉で、私の推測に反して、彼女の静かな目を濡らしてしまった。まだ多感な圧力[印刷機]によって搾られたことのない溢れる心はほんの少し押されるだけで流れ出たからである。彼女の話の間、数百回私はこう言おうと思った。貴女の人生は冬と多くの類似点を有する定めであるが故に、まさにそれは冬と共に始まったのです、と。汝、風の、雲のない一日よ。汝について更に三言話すのを世間は悪く受け取らないのではないか。

私はますます間近に女達の心の中心の炎に立つようにした。結局女達は穏やかに牧師のことを咎めだした。しばしば最良の女達でも他人に対して自分達の夫のことを嘆くのであるが、しかしだからといって少しも愛情が減って行くわけではない。母親と妻は食事しながら、彼が本のオークションの度に、作品を求めることに堪えていた。実際彼は立派な本や劣等の本とか、 ― 古い本とか、 ― 新しい本とか、 ― あるいは自分の読む本とか、 ― 好みの本とかを競って求めていると言うよりは、ただ本を競って求めている。

母親は主に彼は沢山銅板に散財していることを非難した。その後数時間彼女は塔の擬宝珠用の金の呈示を申し出ている村長に、彼は立派な筆跡で書いていたが、自分の息子がどんなに上手に彫り込むか注意を向けさせて、このような頭文字に対しては一文も惜しまぬ甲斐があるものと述べていた。

彼女達はその後、――というのは女達は一度率直に話し出すと、すべてを吐き出すからで（ただ質問の栓をひねることのないようにしなければならない）、――指輪入れを持って来た。そこに彼は見つけた侍従の鍵を収めていたが、これを誰がなくしたか知らないかと私に尋ねた。合鍵の数よりもほとんど多くの侍従がいるのに誰がそんなことを知ろう。――

最後に私は勇気を抱いて、これまで家中探して見つけれなかった溺死者の小簞笥のことを尋ねた。フィクスライン本人がそれを尋ねて無駄に終わっていたのであった。ティエネッテは老母に愛に満ちた促すような合図をした。そして私は老母によって、広げられた籐骨張りの婦人スカートに案内された。それは小簞笥の上に張られていたのであった。途中母親は語った、息子には隠していた、兄の思い出で辛い思いをするであろうから、と。錠が外れている時間のこの貯金箱が開けられたとき、そして私が子供の遊戯の先の世の瓦礫で一杯のこの納骨堂を覗いたとき、私は、一言も言わずに、フィクスライン兄弟のこの玩具をまだ旅立たないうちに、存命のフィクスラインに広げて見せる計画を立てた。子供時代の散らばって沈んだヘルクラネウム風の廃墟が掘り出されて、外の大気中にあるのを見ることほどに素敵なのがあるだろうか。

産褥の女性はすでに二回私に、彼が帰って来たかどうか、使いの者に尋ねさせた。彼と彼女は互いに、まさに彼らは自分達の愛に、言葉による抑制の表現ではなく、行為により強調の表現を与えていたので、言いようもない愛を抱いていた。他の新婚の者達は互いに接吻によって唇や心や愛を囁き取って行く。ローマの（ミケランジェロ作の）キリストの像の足が接吻によって減って行ったようなもので、この足にはそれ故ブリキの覆いがある。他の新婚の者達では、彼らの情熱や爆発の数を、ヴェスヴィオ火山の場合その数は今まで四十三回であるが、その火山のように前もって予言できるものである。――しかしこの二人の中では節度ある永遠の愛のギリシア的炎が湧き上がって来て、火花を撒き散らすことなく暖め、ぱちぱち言うことなく垂直に燃え上がる。――今や魔術的に夕方の炎が庭師の小屋の窓から私の木陰道へ跳ね返っていて、私は運命に向かってこう言わなければならないかのように思える。「汝が鋭い痛みを有するならば、むしろ私の胸に投げ入れて、三人の善良な者達を大目に見て欲しい。彼らは余りに幸せで、それで血を流さないわけに行かない。そしてその小さな暗い村に余りに限定されていて、震撼された自我を地球から雲の彼方へ拉致する雷光を前に、怖じ気づかないわけに行かない」。――

汝、善良な夫よ。今や彼が急いで牧師の野原を渡って来る。何と愛に満ちた憧れの眼差しが君のティエネッテの目の中に安らっていることか。――君は今日町から何という新しいものをもたらすのだろう。――明日何と君を、上昇する塔の擬宝珠は喜ばせることだろう。

第十二のメモ箱
塔の擬宝珠の昇天 ― 小簞笥

いかに今日、五月十六日、フーケルムの古い塔の擬宝珠がねじ取られ、新しい擬宝珠が乗せられたか、それを私は今日最善を尽くして描写したい。しかし古代人のかの単純な史実的文体で行おうと思うので、これはひょっとしたら大きな出来事の場合最も良く似合う文体かもしれない。

とても早朝、一台の馬車で宮中金箔師のツェッデルと錠前師のヴェクサーと塔の新しい聖ピエトロ大寺院のドームが到着した。八時頃に擬宝珠の保育士達からなる教区民が目に見えて増えて来た。少し遅れて軽騎兵隊長のフォン・アウフハンマー氏が教会と塔のパトロンとして、そして教会堂管理人のシュトライヘルトが着いた。この後私と私の名親依頼人殿のフィクスラインが、すでに名付けられた人々と共に教会の中に入って、そこで無数の聴衆を前に平日の祈祷を行った。その後私の名親依頼人殿は上の説教壇に現れて、厳かな儀式にふさわしい演説をしようと試みた。―― 彼はその後で早速、その喜捨で擬宝珠をもたらした良き魂の寄付者の名前を読み上げて、全教区民に、彼らの名前が保管されている鉛の小箱を見せ、彼が読み上げた台帳は単に牧師館のファイルに残るだけであると述べた。その後、自分がその功績に値しないのに、このような仕事の起業家として選ばれたことについて、教区民と神とに感謝する必要がある旨述べた。その全体を彼はスレート屋根葺職人のシュテヒマンに対する短い祈りで締め括った、この職人はすでに外の塔の所にすがって、古い軸を外していた。―― そして彼は、シュテヒマンが首とか他の体の部分を折ることのないよう願った。そこで短い賛美歌が歌われ、外の教会の前にいた大方によって和された。すでに彼らは塔を見上げていたからである。

さて我々も皆外に出て来て、外された擬宝珠は、さながら塔の切り取られた鶏冠のように降ろされ、綱が解かれた。教会堂管理人のシュトライヘルトはこの脆い擬宝珠から鉛の小箱を引き出して、それを私の名親依頼人殿は自分の物とし、折りを見てそれに目を通すことにした。しかし私は何人かの百姓に向かって言った。「御覧、諸君の名前も新しい擬宝珠に保存されて、後の時代引き下ろされたとき、小箱の中にあって、そのときの牧師が諸君皆のことを知るようになる」。―― そこで新しい塔の球が鉛の鉢と共に、そこには周りの者達の名前が入っていたが、いわば一杯に充填されて満腹となって、引き上げ綱に結ばれた。―― そして今やこれまで教区民に被されていた放血器が高く昇って行った。...

誓って。今や飾り気のない文体は私の手に負えない代物になって行く。―― というのは擬宝珠が、動き、揺れ、昇って行くと、塔の中で太鼓のようなものが打たれて、前もって教区民の方に向けられていた響孔から下を覗き見していた学校教師が、今や昇って行く擬宝珠が通り過ぎることのない方の人気のない側の響孔からトランペットの音を響かせたからである。―― しかし教区民の全員が落ち着かず、柱頭が高く首の所まで上がるにつれ、歓呼の声を上げて行ったとき、―― そしてそれをスレート屋根葺職人が受け取って回し、その先端に上手く合わせたとき、―― そして彼が、擬宝珠に寄り添って、天と地の間で、地に対し、我々すべてに対し、下に向かって竣工式の演説をしたとき、そして今現牧師であることの幸せの余り、私の名親依頼人から涙が祭服に落ちたとき、そのときその魂が出血するほどまでに搾られる共通の苦悶に襲われた男性は、私がただ一人であり、女性は彼の母がただ一人であった。というのは私と母親は、後ほどもっと詳細に語ること

にするが、昨日溺死者の小簞笥の中に、彼は明後日カンターテの主日、洗礼の日に、――
――三十二歳になるという彼の父親の筆跡を見つけていたからである。――何ということか（と私は考えた、青い空と緑色の墓塚、微光を発する擬宝珠、涙している牧師を見ながら）、かくも哀れな人間はいつも、不可解な運命よ、汝の鋭い刀の前で、覆われた目をして立っている。汝が刀を上げて振っているとき、打撃の直前、人間はピューという風音に喜んでいる。――

すでに昨日私はそのことを知っていた。しかし私は、遠回しに仄めかしてきた読者に、その悲しい知らせについて何も知らせたくなかった。つまり私は他界した兄の小簞笥の中に、少年達が綴り字を習った古い家庭用聖書と共に白い製本用紙[遊紙]を見つけたのであるが、その用紙に父親が子供達の誕生年を記していたのである。まさにこのせいで、汝哀れな母親よ、それ以来些細な理由のせいに我々がしてきた苦悶が生じたのであり、汝の心はこれまで雨の中ずぶ濡れとなっていたのである。この雨はすでに去って、一つの虹に変わったかに見えたのであるが。――ただ彼への愛故に彼女は毎年一度嘘を付いて、彼の年齢を隠して来た。我々が彼の不在の時に簞笥を開けたのはまことに幸いであつた。私は相変わらず、彼にその致命的の日曜日の後、彼の子供時代の多彩な名残と古いクリスマスの贈り物とを新たな贈り物とする考えでいる。しかし我々が、私と母親とが、明日と明後日、絶えず彼の後を、釣りの浮きか足枷のように付いて行き、殺害的偶然によって彼の誕生日のカーテンが開けられないようにすれば、きっと大丈夫であろう。というのは今であれば、勿論誕生日は彼の迷信的な空想への変身的鏡の中で、そして彼の今の拡大される魔法の靄の背後で、赤い死の宣告文のように彼の目に燃えて写るであろうからである。...しかしその上更にこの聖書からの用紙はすでに我々皆よりも高い所にある。つまり新しい擬宝珠の中で、私は今それを用心深くそれに差し込んだのである。本来それは何の心配もない。

第十三のメモ箱

洗礼日

今や単純なカンターテの主日である。しかしこの主日はただ一時間しか残っていない。

――誓って。我々は今日大いに満足していた。思うに、私は誰に劣らず十分に飲んだ。

――しかし人は勿論すべての点で、執筆、飲酒、歓喜で節度を守るべきであろう。蜂の蜜に麦藁を幾つか置いて、その糖で蜂が溺れることのないようにするように、そのように人はいつでも人生のシロップの中にかの麦藁の代わりに若干の堅固な原則と認識の木からの小枝を投げ込んで、その中で自らを保ち、鼠のように溺れることのないようにするべきであろう。しかし私は今真面目にきちんと書こうと思うし（生きようとも思うし）、それ故より冷静に洗礼の行事を報告するために、私の炎を夜の露に晒し、更に一時間花々と波とで刺繍された夜の中を散策することにする。この夜生温かい朝[東]の風が香りを含んで梢の花々から揺れる草の花々の下へ吹き降りて来て、草原を撫でながら、最後に波の上に飛んで、それと共に微光を放つ小川を下って行く。いや、外の星々の下、小夜啼鳥の音色の下、これは木霊とならず、遠くの微光を注ぐ諸世界[惑星]の許で反響するように見えるもので、そして月の傍ら、この月を湧き出る小川は刺繍された波形模様の帯で運んで行く

が、そしてこの月は岸辺の小さな影の下に、雲の下に行くように隠れるのであるが、いやこのような形姿や音色の下にいと、人間は真面目な思いにかられる。そして夕べの鐘は以前、旅人を大きな森を通じて古里の夜へ導くために鳴り響いたように、夜そのような声が我々の中、我々の周りで生じて、この声が我々を迷路から呼び出し、我々をより落ち着くようにさせる。我々が我々の喜びを節度のあるものとし、他人の喜びを描くことができるようにと配慮して。...

＊

私は物語るために十分落ち着いて冷静になって戻って来た。昨日私は私の名親依頼人を、老いたニュルンベルクの女性がユダヤ人を相手にそうするように片時も目から離さず、彼が自分の生命の毒の井戸水を汲み上げないように守ってきた。彼は父親の喜びを一杯にして、今日のために暗記している説教の骨子を手にしていながら、万事を、魚の築のこと、錫の食器鉢のことを話した。そしてカンターテの主日がいつも彼のためにもぎ取って来て、満たしてくれた歓喜で一杯の果物籠に私の注意を向けさせた。彼は私が去ろうとしないので、彼の洗礼日の食事や、職務上の出来事、親戚のことを語り、

彼の牧師館での公の収入についての私の無知を直し、告解の人々や教理問答の子供の数について教えてくれた。しかしここで何人かの読者が途方に暮れて、何故私がフィクスラインにこう言ったのか分からないのではないかと不安になる。「名親依頼人殿、それ以上のできは望めませんよ」。私は嘘を言ったのではない、というのはこういう次第で、...しかし注を読みたい^{*1}。

ようやく日曜日になって、つまり今日の日で、この神聖な日に、単に私の代子がキリスト教に入ろうとしているので、洗礼の祭式令としてより大規模なニュルンベルク改宗者文庫は手許にないが、大きな喧騒となった。誰かが、殊に民衆が、改宗するとなると大騒ぎとなり、射撃がなされる。私は二つの三十年戦争を、より新しい戦争と、カール[大帝]が同様に長く異教徒のザクセン相手に行った戦争を引き合いに出す。かくて太陽はパレ・ロワイヤルでは子午線を通過するとき大砲が放たれる。しかしまさに小さな非キリスト教徒のこと、私の代子のことは朝方少しも問題にされなかった。洗礼のせいで、洗礼児のことを考える時間がなかったからである。それ故私が一人っきりで彼を相手に午前の半ばを過ぎて、彼に素早く非常時洗礼を授け、洗礼者より早くジャン・パウルと名付けた。正午に牛肉が届くと、それを片付けさせた。幸運の太陽はすべての胃液を干涸らびさせていた。さて我々は煌びやかなものを求めた。私は私の髪建築物に人工的な持送を求め、代子は洗礼用シャツを、産婦は訪問用頭巾を求めた。まだ洗礼の小鐘の音が鳴らされる前に、私と産婆は母親のベッドの側でこの小さな非キリスト教徒の顔への観相学的旅行を行って、若干の面影は母親から、多くの確固たる部分が私から象られているという発見を持ち帰ることになった。この二重の類似性は読者の関心を引くものではなかろう。ジャン・パウルは彼の年齢の割にはすでにあるいはむしろ数分の割には、はなはだ利発に見える。私は幼いジャン・パウルのことを言っているからである。 ー

*1 ここでは長い哲学的説明が不可欠である。この説明は『想像力の自然的魔術』というタイトルでこの本の中で見いだされる。

しかし今や私は尋ねたい。いかなるドイツの作家が、我々皆が載っている大きな歴史的頁を広げて、我々が教会の中へ入って行く次第を描き上げる自信のある者があるだろうか、と。その作家は、ブラシをかけられた祭服を着た子供の父親が、ゆっくりと、敬虔に、感動して歩く様を描かなければならないのではなかろうか。 — その作家は、今日自分の名前を与えようと思っている名親をスケッチしなければならないのではなかろうか、その名前を彼は二人の使徒から（ヨハネとパウロから）得ていて、ユリウス・カエサルがその二つの名前を今日までなお続いている事物（暦の月と王座）とに与えたような具合なのである。

— そしてその作家はその[可愛い]代子を頁に記さなければならないのではなかろうか、その代子とは皇帝ヨーゼフ[二世は一七九〇年逝去]さえも、まだ存命であれば、晩年に乳兄弟[退行]として飲むことになるであろうのである。

私はその部屋で数百度祝い事として微笑む計画を立てていた。後に私は、それに出席していて、思わず知らず上品さと真面目さで一杯の石化した顔をしてしまった。というのは行事の前に学校教師がオルガンを弾き始めたとき、 — これはまだフーケルムのどの子供も経験しなかったろうが、 — そして木製の洗礼盤の天使が精霊のように降りて来て、その描かれた木製の腕を洗礼盤の上に広げて、私が最も間近にその金箔の翼の側に立っていたとき、私の血はゆっくりと厳かに、温かく、密に私の動悸する頭を通して、溜め息で一杯の私の肺を通して行き、そして私は、自分に対するときよりも、もっと悲しげに、静かな、私の両腕に抱かれた寵児に対し、もっとも自然は地上の豊かな眺望に対するこの寵児の未熟な目を閉ざしていたが、未来に対する今日のような穏やかな眠りを、今日のような善良な天使を、しかしただもっと生き生きした天使を願った。天使がこの寵児をより生き生きとした宗教へと導き、その目に見えない手で、人生の森の中を通して、その森の倒れる木々や荒々しい獵師や嵐の中を通して、無事に案内してくれるように、と。...私は世間に次の点でお許しを願うことができるのではないだろうか。つまり私は、私が側の父親の顔に息子に対する祈りと、祈りの中へ滴り落ちる喜びの涙を見たとき、そして私が祖母の顔に、抑えることのできない、より濃い、素早く拭き取られた滴を眺めたとき、それは古来の質問に従って、子供に対し両親が身罷ったとき、私が面倒を見るという約束をしたが故であるが、お許しを願えるのではなかろうか、私はその後、目を低く代子の上に下げて行き、涙が溢れていることをただ隠そうとしたことを。 — というのは私は、彼の父親がひょっとしたら今日、死に神の飛び出てくる仮面の前で硬直するかもしれないと考えたからである。いや、この哀れな赤ん坊は母胎内での折り曲げた姿勢をより自由な姿勢と取り換えたのは、単にやがてもっと激しく人生の窮屈な余地の中で屈み込むためにすぎないとまで考えたのである。私は彼のやむを得ない愚行や錯誤、罪惡を考え、我々の完成というギリシア的神殿に至るためのこの汚れた段階を考えた。私はいつか天分という自身の炎が彼を灰にするかもしれない、丁度電気を帯びさせられる者が、自身の稲光によってやられてしまうように、と考えた。...私とその幼い胸に印刷させて差し込んだ代父の賀詞のすべての神学的願望が私の胸の中で今一度記されて燃え上がった。...しかし私の喜びの白い竜田撫子[赤い斑点がある]は、それからまたいつものように血の点を有していた。 —

私は啄木鳥に似てまたいつものように巣の髑髏の中へ運んだ。...私はそのことを残念ながら今もまた行っているので、洗礼の一日の描写は、今日終わりとし、明日続きを書くことにしよう。...

第十四のメモ箱

いつもそんな具合だ。このように運命は我々の小さな喜劇の劇場に火を着け、未来の美しく描かれたカーテンに火を着ける。かくて永遠の蛇が我々と我々の喜びの周りに絡みつき、王蛇のように巻き付いて、毒されていないものを潰してしまう。汝、善良なフィクスラインよ。―― いや私は昨夜、哀れな君が、私が君の側で書いているとき、すでに死に神の有毒な大地の影の中に進んでいたことを想像できなかった。

彼は昨日なお遅く、古い塔の擬宝珠の中で見つかった鉛の小箱を開けた。―― 先の塔の建築のために施しをした人々の名簿がその中にあって、彼は今ようやく読むことになった。それまでは私が居たためと彼の仕事のせいでそれができなかったのであった。私が新しい擬宝珠の中に隠した彼の出生年をまさに古い擬宝珠の中で見いださなければならなかったこと、建築を支援した人々の目録の中にまさに彼の父親の名前が、「自分はこれを新生児のエギディウスのために贈る云々」との添え書きと共に記入されていたことを私はどう呼んだらいいのだろう。

この打撃は彼の胸に深く響いて引き裂いた。―― 父親の喜びで一杯のこの温かい時に、かくも美しい日々の上に、かくも美しい準備の上に、何度も克服された死の不安の上に、彼を揺すりながら導いてきた明るく滑らかな海の中へ、喘ぎながら、死に神の海の怪獣が朽ちた深淵からせり上がって来た。―― そして怪獣が口を開いて、静かな海は渦を巻いてその口の中へ入り、彼を連れて行く。

しかし辛抱強いこの男は静かに、ゆっくりと、致命的に冷たくなっていたが、しかし黙した心と共に、その紙片を畳んで、―― 穏やかに確固と墓地の方に目を向けた。墓地では月光の中に彼の父の塚を見分けることができた。―― そして臆して、星々で一杯の天を見上げた。天には白い[嵐を告げる]条雲が延びていた。―― 巣籠もりしてすべてを眠って過ごすために、ベッドに入ることを願ったけれども、その前に彼は窓辺に立って、この夜が最後の夜の場合に備えて、妻と子供のために祈った。

このとき塔では十二時が打たれた。しかし一つの鉄の歯車の歯が壊れて、分銅を次々と回転させて、鐘舌を打ち続けさせた。彼は戦慄して針金や歯車のがさがさという音を聞いていた、あたかも死に神が彼のまだ存命すべきすべての残り時間を次々と打ち尽くしていくかのように思われた。―― そして墓地が動き、震えるように思われ、月光が教会の窓辺で煌めき、教会では明かりが周りに点されて、納骨堂では動き始めた。

彼は慄然として、ベッドに入って、目を閉じ、何も見ないようにした。―― しかし空想は今暗がりの中で死者達の塵を吹き飛ばし、それを集めて起き上がった巨人として、空ろな引き裂かれた仮面を交互に明かりと影の中へ追いやった。―― それからようやく透明な想念からなる多彩な夢となって、彼には次のような夢に思われた。自分が窓から墓地を見ている。すると死に神が小さくその上をサソリのように這い回り、自らの肢体を探し始める。すると死に神は塚で上腕骨と脛骨とを見つけて、言った。「わしの骨だ」。そして背骨と骨とを取って、それで立ち上がって、二本の上腕骨を取って、それで掴みかかり、フィクスラインの父の墓で髑髏を見つけて、それを被った。―― それから死に神は花壇の横で草刈り鎌を振り上げて、叫んだ。「フィクスラインよ、おまえはどこだ。わしの指

は氷柱であって、指ではない。氷柱でおまえの心臓を叩こう」。――今や寄せ集めて作られた骸骨は、窓辺に立ったまま去ることができないでいた者を探して、砂時計の代わりに永遠に打ち続ける時計を別の手に運んでいて、氷でできた指を遠く空中に短剣のように差し出した。...

すると彼は息子を上の窓辺に見つけて、高く条雲の所まで起き上がって、指をまさに彼の胸に突き込もうとして、――彼に向かって歩んで来た。しかし彼が更に歩み寄ると、その色褪せた骨はより赤みを帯びて、靄が羊毛のように彼の突き刺す姿勢の周りに漂った。

――花々が素早く開き、彼は、神々しく、骨の土塊[燐酸カルシウム]はなく、花々の上に浮かんでいて、花々の萼からの芳香の息吹が彼を揺すりながら吹き寄せていた。――そして彼が近寄って来ると、時計と鎌とは流れ去って、彼はその骸骨の胸の中に一つの心を、頭蓋骨の上に赤い口を有していて、そして更に間近で、一つの柔らかな透明な、薔薇の香りに浸された肉がさながら星々の青空の背後で飛んでいる天使の反映を捉えていて、――最も間近ではそれは閉ざされた雪のように白い臉の一人の天使となった。

私の友のグラスハルモニカの鐘のように震える心は浄福に広大な胸の中へ溶けて行った。――そして天使がその天上的な目を開けると、彼の目は重々しい天国の歓喜で閉ざされ、彼の夢は消え去った。――

しかし彼の生命が消え去ったのではなかった。彼は熱い目を開けて、――彼の良き妻が彼の熱病の手を握って、天使のいた場に立っていた。

熱は朝方に去った。しかし死ぬという思いは、この哀れな男の全ての血管の中で脈打っていた。彼は可愛い子供を病気のベッドの中へ入れて貰い、その子は泣き始めたけれども、黙って強く父親らしく自分の重苦しい胸に抱き締めた。それから正午頃に彼の魂はすっかり冷静になり、鬱陶しい雲は遠ざかって行った。――ここで彼はまさにこれまでの、普通は冷静な頭の（さながら砒素中毒的な）空想について語った。しかしまさに緊張した神経、つまり詩人の神経のように、詩的な、痛みと戯れる手の運用、設計図の下で延ばされたことのない神経は、不協和音を激しく引き締まった弦に鳴らせる運命の強引な拳の下で、より軽快に跳ね、引っ張るものである。

しかし夕方頃になって彼の観念は再び彼の魂の周りで炎の柱のように松明舞踏[ポロネーズの一種]を始めた。すべての血管が点火棒となり、心臓は脳に燃えるナフタの源泉を送り込んだ。今やすべてが彼の魂の中で出血した。彼の溺死した兄の血が、ティエネッテの瀉血の傷から夙に流れ出ている血と共に一つの血の雨となった。――相変わらず彼は思っていた、自分は婚約の夜の庭園にいて、絶えず止血のために締める必要を感じていて、自分の頭を塔の擬宝珠の中へ突っ込もうと欲している、と。情熱の時でさえ節度があって理性的な人間が、高熱の詩的な不合理の中で荒れ狂うのを見ることほど切ないものはない。しかしながら涼しく管理されて熱い脳が宥められさえすれば、そして興奮した神経の煙りや蒸気が、血管のざわめく竜巻が窒息した魂に襲いかかり、暗黒にしているとき、より高貴な指がこの霧の中に侵入して来て、この哀れな麻痺した精神を突然靄の中から一つの太陽へと持ち上げさえすれば、我々は嘆くよりも、むしろこう考えたがるのではなからうか。運命は目の外科医と似ている、この外科医はまさに片方の盲目の目に明かりを取り戻させるその前の数分間、別の見える方の目を閉じさせ暗くさせるのである、と。

しかし私がティエネッテの青ざめた唇から、聞いたわけではないけれども、読み取った

その痛みは、私にとっては余りに悲しいものであった。私が彼女に見たのは、拷問の痙攣による歪みとか、干上がった目の真っ赤な燃えとか、声高な嘆きとき、不安に陥った肉体の激しい動揺といったものではなかった。私が彼女に見ざるを得ず、同情する心を余りに激しく引き裂いたものは、青白く、静かな、動かない、歪みのない顔で、青ざめた血の気のない頭部であり、これは痛みが、打撃の後、さながら首を刎ねられた者の頭部のように死者のように白く空中に支えているものである。というのは、何と、この形姿には、三方断裁の刃の短剣に切られたすべての傷がしっかりとまた閉ざされていたのであり、その血は隠されたまま、傷の下、窒息する心臓に流れていたからである。ティエネッテよ、この病人から去って、我々にこう告げている顔を隠すがいい。「私は自分がこの世では幸せになれない定めであることを承知しています。―― 今や希望はありません。―― この生命がもう終わりになって欲しいところです」。

数時間前に余りに声高に嘆く母親がこう告白していたことを知る人がいなかったら、誰も私の悲しみは理解できないことだろう。ティエネッテはとうの前から絶えず彼の三十二歳の時に恐れを抱いていて、この迷信に対して、ある別なもっと高貴な迷信で対処していたのであった。つまり彼女はわざと結婚式の祭壇では、はるか後方に控えて立っていたのであり、婚礼の夜は彼よりも早く就寝して、そのことによって、―― 民衆の妄想の通りに、―― 自分がやはりもっと早く死ぬように計ったというのである。いや彼女は彼が死んだら、彼の死体に自分の服を一つ添えて、彼の冷たい洞穴の隣により早く降りて行く決心をしていたのである。汝善良な、忠実な妻よ、しかし汝、不幸な妻よ。――

最終章

私はフーケルムを去り、私の名親依頼人はベッドから出て、どちらも同様に元気である。その治療は病気同様馬鹿げたものであった。

私はまず、ブールハーヴェ[Boerhaave(1668-1738)]が全身痙攣を全身痙攣で治したように、彼の場合妄想を妄想によって治せないものか、つまり自分は三十二歳ではなく、六歳とか九歳という妄想によって治せないか思い付いた。空想は眠りによらない夢であり、すべて夢は我々を青春時に引き戻す。空想もそうしない筈であろうか。―― 私は、従って、皆に患者から遠ざかるよう命じた。ただ母親だけは、ごく熱い隕石が彼の熱に浮かされた魂の前をシュッと音立てて飛び過ぎるときに、彼の側に二人っきりで座って、あたかも彼が八歳の子供であるかのように語りかけることになった。更に彼女にはベッドの鏡も覆って貰った。彼女はそうして、―― 彼は痘瘡の発疹熱に罹っていると知らせて、そして彼が、「死に神が三十二本の鋭い歯で自分の前に立っていて、自分の心臓を噛み砕こうとしている」と言ったとき、彼女は言った。「坊や、おまえに転倒用帽子と、練習帳と、食器セットと、軽騎兵毛皮をまたあげるよ、いい子にしていたらもっとあげるよ」と。この痴れ言よりも何か分別のあることを彼が把握し、理解することはもっと難しかったろう。

最後に彼女は言った、―― というのはこの上ない痛みするとき、女性にとっては偽装は容易なので、―― 「もう一度だけ試すことにして、おまえに玩具を与えよう。妙な坊や、またこちらに来て、ベッドの中で痘瘡のまま転がってごらん」。―― そして彼女は一杯のエプロンからすべての玩具や衣類をベッドの中へ注いだ。それらは私が溺死した兄の小

筆筒の中で見つけたものであった。真っ先に注いだのは練習帳で、それには彼自身当時八歳の名前を記していたもので、それを彼は自分の筆跡と再確認しなければならなかった。

ー それから黒いビロードの転倒用帽子、ー それから紅白の歩行用紐ー 錫箔の柄の付いた子供用ナイフの食器セット、緑色の軽騎兵用毛皮で、その袖口は禿げていた、

ー そしてニュルンベルクの人形劇世界の絵の描かれた一冊の『世界図絵』あるいは『虚構図絵』であった。...

病人は瞬時に時間の奔流の中で沈んで行った春の世界のこの突出した先端、ー 埋もれた日々のこの半陰影、この薄明かり、天上的時間のこの火事場、髑髏の地[ゴルゴタ]を認識した。これは我々が決して忘れることがない、我々が永遠に愛し、我々がまだ墓場にあっても振り返って見る天上的時間である。... そして彼はそれを見ると、ゆっくりと頭を、あたかも長く悲しい夢が終わったかのようにあちこち回して、そして彼の心全体が温かい涙の雨となって流れだし、涙で一杯の目を母親の目にぴったりと向けて言った。「お父さんとお兄さんはまだ生きているの」。ー 「ちょっと前に亡くなったよ」と傷付いた母親は言った。しかし彼女の心は圧倒されていた。そして彼女は目を逸らした。苦い涙が垂れた頭から人知れず落ちた。そしてここで突然、彼が父の死のことでベッドに臥せって、玩具のお蔭で治癒したかの晩のことが、彼の魂を輝きと明かりと過去とで襲って来た。

そこで狂気は我々の人生のアウローラの中で薔薇色の翼を染め上げて、鬱陶しい魂を扇いで、ー 蝶の黄金の鱗粉をその羽根から小道へと、悩んでいる者の造花へと振りまいた。ー 遠くで素敵な音色が生じて、遠くで素敵な雲が飛んで行った。ー いや心は砕けようと欲した、しかし単に舞い飛ぶ花糸の中に、優しく捉える神経の中に砕けようと欲した。目は溶け去ろうと欲した、しかし露の滴となって、歓喜の花々の萼のために、血の滴となって他人の心のために、溶け去ろうと欲した。魂は最も素敵な妄想の熱く、溶かすような薔薇の香りの中を、沸き立ち、ぴくつき、呻き声を上げ、吸い込み、漂った。...

歓喜は彼の熱に浮かされた心を制御して、彼の荒れ狂う動悸は静まった。その次の朝方母親は、万事上手く行っているのを知ると、教会で鐘の音を鳴らすようにさせて、すでに次の日曜日になっていることが彼に分かるようにさせようとまでした。しかし夫人は（ひょっとしたら私に対する羞恥心のせいで）嘘を咎めて、言った。同じ事だから、置き時計の日付の指針を（しかしヒゼキヤの日時計の場合とは違って[列王記下 20 参照]）一週間早めても良からう、これまで手を伸ばしてカレンダーで見るよりも、むしろ起き上がって、「何日だろう」と時計の方を見ていたから、それだけになおその方がよからう、と。私としては単に彼の所へ赴き、彼に尋ねた。「君は長く横になって、カンターテの主日はとうに過ぎているのが分かっているのに、何という馬鹿げた死の不安を抱こうとしているのかね。馬鹿ではないか、単なる不安のせいで、干涸らびて柿板になってしまうのか」。

素晴らしい協力者が私に加わった。肉屋あるいは給養係将校である。彼が、女性達に挨拶せずに、不安げに入ってくると、私は早速甲高く発した。「私の名親依頼人は心配なことです、連隊給養係将校殿。昨日は自分は実の息子とほとんど変わらない年だと思い込んでいたのです。ここに自分で被ろうとした転倒用帽子があります」。後見人は罵声を発して、言った。「被後見人殿、そなたは牧師さんですか、それとも阿呆ですか。この点進歩がないとしょっちゅう言い聞かせてきたのだが」。ー

ようやく彼自身、正気ではないと悟って、健康になった。後見人の皮肉の他に、私の誓

いも大いに役立った。「すぐに起き上がって、治らないことには、まともな名親依頼人とは見なさないぞ。彼の伝記の一言も出版しないぞ」と。

ー 要するに私に対して、大いに礼儀作法を見せて、彼は起き上がって、元気になった。

ー 彼は多分まだ土曜日までは病気を引きずっていて、日曜日まだ説教はできなかった（説教に類したものは学校教師が読み上げた）、しかし土曜日にはある告解を聞いて、祭壇でこの回復期の患者はミサを行った。礼拝が終わった後、彼の快気祝いが行われ、更に私の送別会が重なった。私は午後出発しようと思っていたからである。

私はこの最後の午後をできるだけ冗長に立案し、後にその見取り図を更に快適にホンメル[Hommel(1722-81)]風駄弁のパントグラフで大きく描こうと思う。

この記念祭のとき人頭税の教理問答の教え子達と見本市のプレゼントが彼の快癒の歓喜の炎としてもたらされた。これは教区民がいかに彼を愛していて、いかに彼がそれに値しているか示すものであった。というのは人々からは理由なく愛されるよりも理由なく憎まれることが多いからである。彼は実際どの子供に対しても優しくかった。それで自分の敵を

ー 神の代わりにしか許すことのない聖職者達の一人ではなかった。そして同時に全世界を、自分自身の妻と自分とを称えていた。

私はそれから彼の午後の子供への教理問答に参列して、ー 第一のメモ箱の彼のよう
に、ー 内陣で木製の知天使の翼の背後から下を見ていた。この天使の背後で私は私の
写字板を取りだして、白い賛美歌の番号が一杯に書かれている黒板の後に自分をもっと隠
して、私が今ー 考えていることを書き留めた。私は今日、五月二十五日、このサレル
ノの紡績学校から、ここで生命の糸を水剤で湿り気を与えずにより長くもっと素敵な方法
で引き出す術を学ぶのであるが、（申し上げるように）私が去ったら、侍従の一団が頭
の中に有するよりももっと多くの幸福教義の基礎知識を持ち帰ることになるであろうと知
っていた。私は最初の印象を自分と印刷のために次のような处世訓として書き留めた。

小さな喜びは自家製のパンのようにいつも、反吐を感じることなく、元気にさせる、大
きな喜びは時に反吐を伴う。ー 我々は些細なことを嘆くだけでなく、喜びを感じるよ
うにもすべきであろう、その毒胞ばかりでなく、蜜胞をも捉えるべきであろう。しばしば
壁の蚊が煩わしい時には、蚊をドミティアヌス帝[51-96]のように楽しむばかりでなく、
なお存命の選帝侯のように生計の資とするべきであろう。ー 市民階級の生活とその微
物研究から、これにはこの牧師が生来の趣味を有するが、人為的趣味を得なければならな
い、これは、その生活を尊敬せずに愛することによって可能となり、その生活を、いかに
人間的の下にあると、長編小説の中でのその描写に窺えるように、人間的の
別の分枝として詩的に享受することによって可能となる。最も崇高な人間も最低の人間同
様に同じ一つの事を愛し、求める、ただより高い理由からであり、ただより高い手段によ
ってである。ー どの分秒も、いいかい、汝にとって一杯に満ちた人生であり給え。

ー 秒針が君の魂のある樂園への道案内とならないときには、月針が道案内となることは
更に少ない、君は月から月へと生きているのではなく、秒から秒へと生きているのだから。
君の実存を、君の実存様式よりも享受し給え、そして君の意識の最愛の対象は、この意識
そのものであるようにし給え。ー 君の現在を未来の手段としないこと、というのはこ
の未来は、次の現在でしかないのだから、そしてすべての軽蔑された現在が望まれた未来
だったわけだ。ー 宝籤に賭けないことー 家に留まり給えー 大きな饗宴を催し

たり、訪ねてはいけない — 半年も旅行しないこと — 長い計画を立てて、君の家政や、君の部屋、君の知人をおろそかにしないこと — 人生を享受するために、人生を軽蔑し給え — 君の人生の隣人、すべての部屋の棚、すべての隅を視察し、そして這いながら、君の蝸牛の家の最後の、最も家庭的な渦巻きの中に巣ごもりし給え。首都を単に村々の集合と見なし、村を一つの町からできた袋小路と見なし、名声を玄関の下での近所の会話と見なし、図書館を学のお喋りと見なし、歓喜を一秒と、苦痛を一分と、人生を一日と見なすこと、そして三つの事を一切と、つまり神と創造物と徳操とを一切と見なすこと。
——

そして私が自分自身とこの原則とに従う気があるならば、この伝記も大層なものとする必要はなく、この伝記を一度節度ある人間のように終わらせなければならない。

子供相手の教理問答の後、私は広く黒い上着の名親依頼人の許へ降りて行った。教区民が引き上げた後、我々はすべての二階席に足を運んで、 — 教会席のブリキ板を読み、

— 私は祭壇で、時の堆積物で化粧張りされた信者用便覧をめくって（比喩的に言っているのではなく）、私はオルガンを弾き、名親依頼人は送風器を踏んで、 — 私は説教壇に登り、幸いそこで薔薇の木を見つけ、これを送別会のとときわたしのフィクスラインの薔薇園に植えることができた。つまり説教壇で、ある木製の使徒の許、ラーヴァーター [Lavater (1741-1801)] の名前に気付いたのであった。これはこのチューリヒ人が聖なるトルソに旅の途中、奉納額として手書きで納めさせようと欲したものであった。フィクスラインはその筆跡を知らなかった。しかし私は分かった。 — というのはその筆跡をよくフラクセンフィンゲンのある女官の壁紙の所で見ていたばかりでなく、彼の筆記体文庫^{*1}の中でも、多くの地方教会でも見ていたからである。これらの教会はさながらこの遍歴の名前の人名簿、単語集であった。ラーヴァーターは説教壇に、女の羊飼 [逢瀬の女] が木々にそうするように、好んで好きな相手の名前を書き付けるからである。それ故私は私の名親依頼人に、使徒からその名前が記載されている鮑屑共々、丁寧に切り取って、筆跡を立派に保管するよう助言した。

牧師館に入ると、私は帽子と杖とを取って別れようとした。しかし計画がすでに、さながらアカシアの木陰道での夕食の投影図や筋書きのように、ティエネッテによって練られていた。産褥の女性も一緒に布告された夕食のために外に出るのでありさえすれば、私は夕方まで残ろうと申し出た。...実際ようやくこの伝記作者は産褥の女性の行軍規定に優位に口を挿むことができた。

私はその後牧師に、自分の記憶を強化するために裏地を張って貰った薬効ある帽子を被るように強いた。「侯爵冠の代わりに侯爵達が、ドクトル帽や枢機卿帽の代わりにドクトル達や枢機卿達が、殉教の冠の代わりに聖人達がこのような記憶用帽子を頭に被ったらいいのに」。それから我々は二人っきりで、焼き肉や料理の間に、牧師の田畑に外出して、学的会話をを行った。我々は廃墟の盗賊の館に入って行った。これについては私の名親依頼

*1 ささやかな、印刷活字で植字された原稿。彼はこれは他ならぬ侯爵達に贈っている。この印刷文書を彼は用心深く手書きとして偉いさん達に言いくるめている。偉いさん達は手書きのものを好んで多く読むからである。

人が周知の作品を描いているものである。私は、殊にその拿捕の館がかつてフォン・アウフハンマー一族の者に所有権があったが故に、彼がその記述を軽騎兵隊長に献呈しようと思っていることを大いに首肯した。思うに、この隊長はプードルよりは文書にその名をむしろ優先して与えることだろう。私はこの私の同業職人にそもそも文学的慰めを与えて、言った。「名親依頼人殿、大胆に書くことです。副校長のハンス・フォン・フクスラインが黙示録の竜[黙示録 12,4]であって、胎児を飲み込もうと、逃げる女の分娩を待っているとしても構やしない。私がいますよ。私には友人の文芸新聞の編集者が側にいて、この編集者が喜んで広告料と引き換えに反論を送ることを許してくれます」。特に私は彼のメモ箱の新しい広告と返送とを勧めた。私はこの伝記上の筆筒に更に数年後新しいメモ箱を挿入することを否認しなかった。「名親依頼人殿、私の代子が読者界に、まだ、ホラティウス[de arte poetica(v.388-89)]が新しい作品に必要と認めている九年の代わりに、九ヵ月であるときに、すでに紹介されるとしても、この子にとっては何も問題ありません」。

家へ帰る途次、私は彼の妻を褒めた。「結婚生活が」と私は彼に言った、「茜草の染料であって、少女でもキャラコでもその色を明らかにするのであれば、私は主張したい、ティエネッテは少女としては、今の妻としてほどにはほとんど明らかとは言えなかったと。誓って、このような結婚生活では本を書きたい、 — つまり全く別の、本だ。 — つまり書き物機の隣に（レーゲンスブルクの帝国議会の大きな投票機の隣に菓子机があるようなもので）、 — 同様に、申し上げるように、私の隣に生姜ジャムもあるのであれば、要するにです、とても可愛い、立派な、メモ箱文士に惚れ込んだ顔があるような結婚生活ときたらですね、名親依頼人殿。彼女の結婚生活はまさに我々の向かっているアカシアの木陰道に似ています。そこでは葉叢がまさに暑さと夏とで密になるものです、他の植物ときたら単に干涸らびた孔の多い影をなしていますが」。

我々が上手の庭園の木戸を通してこの木陰道に入ってきたとき、まことにすでに食事は出来上がっていて、立派な夫人がそこにいた。立派な主婦がその夫の恩人、あるいは仲間に対して心得ている敬意ほどに倫理的で優しい気遣いはない。 — 幸いなことにまさにこの伝記作者はこの仲間であり、この敬意の対象であった。我々の会話は楽しいものであったが、私の心は重苦しかった。私の主人公達に対して単なる読者を結び付けている枷は、私の場合三重になっており、私は主人公達の客人であり、彼らの肖像画家である。私は牧師に向かって言った。彼は私より長生きするであろう、彼の調整された気質はさながら医師によって等しく、文化の神経衰弱と農夫の炎の濃い血の間で釣り合わせられているから、と。フィクスラインは言った、これまでと同様の長さを今一度生きさえすれば、つまり三十二年間生きさえすれば、それは閏日を入れずに二八〇三二〇時間となる、これはかなりのものだ。自分はよく、自分と一緒に生きるに違いない何千人もの三十二歳の者の数を満足して概算している、と。

ようやく出発しなければならない時となった。沈む太陽の赤い明かりが木陰道で昇って、我々をますます深く夜の影の中へ浸らせて行ったからである。夜の露は産褥の女性に風邪をもたらすであろう。私は混乱して、直に町に来よう牧師に頼んだ、彼に宮殿のすべての部屋を案内するだけでなく、侯爵にも合わせるつもりだ、と。この世では、私がそのことを告げている顔と、その顔の穏やかな反映であったもう一つの顔よりももっと楽しげなものはなかった。伝記作者にとっては、今この瞬間[分]に、自分の空想が望遠鏡のように

すべての対象を単に震えて写している瞬間に立ち去らなければならなかったのであれば、つまりこう上手く思い付いて発しなかったのであれば、大いに痛手となっていたことだろう。即ち、産褥の女性が少しばかり体を動かして、庭を出て、現メモ箱の著者にして建築主の同伴の加勢をなさっても、余り害とはならないでしょうし（大いに益があるかもしれない）、と。

要するに二本の腕の代わりに、二本の手のそれぞれに、夫婦の手を私は取って、夫婦と一緒に庭園を出て、フラクセンフィンゲンへの小道に出た。私はしばしば強引に夫婦の間にいながら頭を振り向いて見た、あたかも誰か後を付けて来る者の物音を聞いたかのように。しかし実際は単に今一度重苦しい気持ちではあったが、幸福な小村を振り向いて見たかっただけである。この小村はただ或る静かな落ち着いた安息日の喜びの住まいから成り立っていて、十分に幸せなのである。もっともその広くまばらに置かれた舗石の上には、単に週に一度髭剃人が、祭日に一度理容師が、年に一度日傘売りが通り過ぎるだけであつたけれども。それから勿論私はまた頭を回して、二人の幸せな者を、今にも溢れそうな目で見つめた。私のいつもは善良な名親依頼人はこの悲しい合図に上手く対処できなかった。しかし汝の心には、汝、善良な、しばしば苦しめられてきた女性よ、すべての弔鐘は容易にその和音を響かせ始める。そして余韻を響かせる胸のその薄い震える共鳴板で崇高になったティエネッテは、私に美しい木霊のすべての音色をまた聞かせてくれた。 — ようやく我々は境界の丘に立つことになった、そこを越えてティエネッテを行かせるわけに行かなかった。私は今や毎朝とても陽気に — 各々がベッドから出て — 一緒に話しをした名親依頼人から、謙虚な希望の静かな圏から出て来て、沸き立つ吠えるような宮廷のサークルに戻らなければならない。宮廷では人は運命から人生の甘草を奪い取り、勝ち取って行く、それはヴォルガ河畔の植物の甘草がそうであるように、太い腕[支流]のもので、その甘い材を囓るためというよりは、それで他人を叩き殺すためである。

私が彼らに「御機嫌よう」と言おうと思ったとき、この愛しい連れの二人の将来のすべての痛み、すべての喪、すべての願いが私の心の中に生じて来た。そして私は、ただ微睡む歓喜の花だけが、彼らの（同様に私と各人の）生涯の日々を印付けるのだと考えた。 — それでもやはり、彼らが彼らの年月を落ちる涙の水時計によってではなく、眠り込む花々の花時計^{*1}によって計るのであれば、それがもっと素敵である。その時計では花々の萼が、何と、哀れな我々の前で、時間ごとに閉じるのである。

私は丁度この時、 — 私は溢れる目をして、死者達のように、この二人の愛しい者達を見つめていることをまだ思い出したので、 — 自分に語りかけ、こう言おうと思った。「余りに軟弱なジャン・パウルよ、その白墨はいつもメランコリーの紗の上に自然のモデルを模写している。汝の心を汝の肉体同様に鍛えて、汝と他の人々を消耗させないことだ」。しかしどうしてか、どうして最も軟弱に感動したときに、二人の人間に述べたことを正直に告白してはいけないのだろう。「御機嫌よう、君達、穏やかな人々よ」と — 私は言った、というのは私はもはや体裁を構っていなかったからである。 — 「摂理が揺すつ

*1 リンネはウプサラ[スウェーデンの町]で花時計を設置した。その時計の花々は、眠り込む様々な時間によって、時を告げるのである。

て君達の傷付いた心を運んでくださいますように、 — 我々を今見下ろしているすべての諸恒星の上の善良な神様が、君達をいつも一緒に結び合わせて、連れ添ったまま神様の心とその口許へと運び上げてくださいますように」。 — 「貴方もお幸せに、お達者で」とティエネッテは言った。「貴女も、ティエネッテ」（と私は続けた）「いや貴女の青白い頬、貴女の辛い目に遭った心、貴女の長いこと虐げられた冷たい青春に対しては、どんなに、どんなに願っても十分ではありません。決して、でも傷付いた魂を癒やしてくれる一切を、美しい魂に気に入る一切を、隠された溜め息を静めてくれる一切を、いやはや、貴女に値する一切を、貴女に対して願ってやみません。そしてまた再会したときには、今でははるかにもっと幸せですと言ってくださいますように」。

我々は皆余りに感動していた。我々はようやく繰り返された抱擁から離れて、私の友は、自分の愛する愛しい人と共に去った。 — 私は夜一人っきりになった。

そして私はあてもなく、森を通り、谷を通り、小川を越え、眠る村を通って、大いなる夜を日中のように楽しんだ。私は磁石のように、絶えず北の方を見上げて、進んで行き、微光の残る夕焼けの許で、我々の足の下の方の忍び出て来るアウローラの許で、心を鍛えようとした。白い蛾が通り、白い花々が舞って、白い星々が落ち、明るい吹雪が銀色に地球の高い影の中に、この月の上に昇り、我々の夜を形成する影の中に飛散した。すると創造物の風奏琴が、上から下に吹かれて、震えて響き始めた。私の不滅の魂はこのリュートの弦の一つであった。 — 近しい永遠の人間の心が永遠の天の下で溢れて来た。丁度海が太陽と月の下で膨張するようなものである。 — 遠くの村の鐘が真夜中を告げて打った、さながら古い永遠の響き続ける音色であった。 — 私の死者達の肢体が冷たく私の魂に触れて、その魂の汚れを追ひ払った。死者の手が皮膚の発疹を治すようなものである。 — 私は静かに小さな村を通り抜け、その外れの墓地に通るかかると、墓地の朽ちて飛び出た棺の板が微光を発し、その中に納められていた鋭い目は灰色の灰となって散っていた。 — 寒気のする考えである。 — 冷たい幽霊のように私の心に襲いかかってくるな。私は星空を見上げる、すると永遠の列が上下、左右に移って行く。すべてが生命であり、輝きであり、光である。すべてが神々しく、あるいは神である。...

朝方、私は、小さな馴染みの町よ、汝の遅くの明かりを目にした。私は棺のこちら側のこの町の者だ。私は地球に戻って来た。汝の塔で、過ぎ去った大いなる真夜中の後、二時半の時が告げられた。一七九四年のこの時丁度に、火星は西に沈み、月は東に昇った。そして私の魂は、まだ春の花々の上に流れ寄る高貴な戦闘的血潮を遺憾に思っ重苦しく、願った。「いや、血なまぐさい戦争よ、赤い火星のように去って行け、そして静かな平和よ、穏やかな新月のようにやって来い」と。

男性のための若干の
固形ブイヨン

1. 想像力の自然的魔術について
2. 地方長官フロイデルの自らの呪わしい悪霊に対する告訴状
3. 利己的な愛もなく、自己愛もなく、ただ利己的な行動が存在するのみである
4. フェルベル校長とその一級生達のフィヒテルベルク [山地] への旅
5. 覚え書きの追伸

1. 想像力の自然的魔術について

記憶は単により限定された空想にすぎない。思い出は二つの像の同一性の単なる知覚ではなくて、同じような像の空間的時間的關係の差異の知覚である。従って思い出は時間と所の關係を越えて来て、従って序列、繼續を越えて来る。しかし単なる妄想や想像はある対象を単に脈絡もなく描き出す。

五つの感覚は私の頭の外部に、空想は私の頭の内部に一つの花園を浮き彫りにする。五感形成し、描写する、空想も同じことをする。五感自然を五つの異なるプレート[銅板]で象る、空想は脳内感覚中枢として自然を皆一つのプレート[銅板]で象る。空想は確かに、エルヴェシウス[Helvetius(1715-71)]が言うように、諸感覚の気の抜けた余韻ではない、しかし諸感覚のユニゾン[同音]である。感覚神経の触糸が感受に対する關係同様に、脳の小球は（あるいは何と肉体的補助剤を仮定しようと）内的諸像に關係している。我々は単に諸像を殖[う]み出し、感受を孕み受けると思うけれども、しかしそれは感受の際の間違いであって、感受を我々は、カントが十分に証明したように（我々の中のある測りがたい造型的な形式に従って、その形式と共に）内的諸像同様に殖[う]み出しているのである。感覚の余地は空想よりも狭いので、我々は感覚を単に肉体の鎖の中で考え、空想を単に意志の手綱の中で考えるという錯覚が生じている。我々は同様に絶えず感受し、かつ空想しなければならないのである。感受はエナメル画あるいはモザイク画の彩色で、例えば一人の人間を私の前に立たせ、空想は魔法の淡い色で、あるいは（詩人の中では）アクアチント版画で行う。両者は単に彩色の点で異なるということは、空想の活発さでこの彩色の違いが無効にされるとき、最も良く分かる。 — つまり高熱の時で、そのときには青白い死体が（つまりある人間についての表象が）頭の中で大いに生氣と血とでもって噴出されて、熱病患者は本当に生きた者の如くその死者を自分の頭の外に見ていると思ってしまう。そうなる表象[想像]は感受同様に全く生き生きとしており、そっくりである。

勿論また或る違いはあつて、もっと大きな違いがある。 — というのは私は先の類似では空想を具体化しようとしたのではなく、単に感覚を靈化しようとしたからで、つまり次の違いである、即ち、我らの周知の[あるいは未知の]自我は、空想における繼起を（感受における同時性同様に）秩序付けて、規則付けていて、夢の中での混沌の中でさえもそうしていることである。觀念連想の三つの法則は単なる肉体によっては少しも觀察され得ないからである。

かの類似性に従えば、従って、（五感の）感受の強度は常に空想の強度の（この超越論的、移植された感受の）周り、隣にあることになる。それ故この両者は、未開人、農民、女達の中で一層力強く、一層繊細である。というのは芝居や、物語、音色、夢は彼らの魂の中でより強い畝を作って行くからである。酩酊もまた空想と感覚とを同時により一層鋭くする。勿論しばしば詩人的天才にあつては、すべての外的感覚神経が干涸らびていて、枯れている。しかし一方の枝の生長が単に他の枝を吸い尽くしてしまっており、感覚もそうで、 — 例えば目と耳とが — 互いに奪い合い、弁済し合っている。未開人の下では単に天才のみが最も鋭い感覚を有するであろう。

私は今や二つのことをなさなければならない。こうしたことすべてにもかかわらず、空想は何故我々をかくも甘美にその魔法の鏡と魔法の笛を有する領地で魅了し、魔術的に眩

惑させることができるか、私は証明しなければならない。第二にまずこうした魔術的芸術作品の大方を数え上げなければならない。

単に空想の魔法の床に立っているすべての人々は、言いようもなく我々の前で、神々しくなる、例えば死者や、―― 不在の者達や、―― 未知の者達である。―― ある伝記の主人公が我々にとって忠実に描写されているとする。それでも我々の変身的想像は、我々の平板な網膜が描くであろうよりも大きくその主人公を捉える。絵画では忠実に模写された人間の頭部は同じような平面積の原像よりも大きく見えるようなものである。それ故牧歌詩人の電氣的絶縁体の上にいる農夫は輝きを帯びており、微光を纏っている。同様にルソーの頭の中の未開人も、すべての詩的な頭の中の子供達もそうである。

かくて空想の望遠鏡は過去の幸福な島の周りに、未来の約束の地の周りに、多彩な拡散空間を引き寄せる。

すべてのドラマ的作品の人物は、悪人でさえも、その大気圏、魔法圏の中で、禿げて、まばらな卑俗な人生の中に出現していたら、すべて散ってしまっているであろう魅惑を受け取る。

夢は空想のテンペの谷、母国である。この薄明かりのアルカディアの中で鳴り響くコンサートは、あるいはその谷を覆う楽園の平野、その谷に住む天上的形姿は、地球が与える何らかのものとの比較を好まない。私はしばしば考えたものである。人間は色々な美しい夢想から目覚めるので、つまり青春や希望や幸福や愛の夢想から目覚めるので、―― 目覚めたらそれらは皆人間に再び与えられたであろうから、―― 微睡みの美しい夢想の中にもっと長く留まることができさえすればいいのに、と。

空想力が外部に作用し、現在そのものがその形成物の大理石の塊、あるいは練り粉となると、その空想力は更に大きなものとなる。私は一つの例以上を呈示しよう。最初の例は、極めて明瞭とは言えないものである。陶酔的歓喜の祭典で、舞踏会で、夜の歓喜の会場で、すべての各瞬間が次の将来の繁栄で飾り合うとする。これが続く間、我々は心甘美な渴きを飲み物と混同する。―― というのは人間は有するものがわずかで、自分が強く欲することができさえすれば、喜ぶのである。人間は自分の願望の強さをその満足に数えるのである。―― しかし酩酊の時がやって来て、長い歓喜の会場では我々の空想は我々の感覚を凌駕して響き、現在はむしろ夢へと、音楽はむしろ木霊へと疲労してしまい、我々は我々の周りの渦巻く多彩な煙の中で目眩を起こし、それから目眩の中で我々の回転を他人の回転と見なししてしまう。そうなる和我々は満ち足りて、何と、ほとんど疲れた余り、一杯の気持ちになる。

酩酊の中では内部で燃える香煙の雲が外に押し出てきて、外部の諸対象に付着し、それらに拡大され、完成され、震える形姿を与える。

愛の中では現在と空想の混淆はもっと密接になる。君がかつて愛したことがあり、今やどんな魅力を合わせても、彫像の理想的魅惑すら君にとって有していない形姿を見つめて御覧。何故その形姿が、今や君にとってラックを塗られた花卉を支える棒になっているかと言えば、この棒の許で君の空想が育って行ったすべての薔薇が今や切り取られているからに過ぎないという他にあるのか。―― 私は読者が、自分が好きになれない兄との格別な家庭的類似性を有する或る妹を愛していると仮定してみる。その人は容易に愛するその顔を、その空想が裏箔としてその顔に金箔をかけ、紋章法で描いてくれる花嫁の装いから

分離できることだろう。要するに愛する人は不在の人物 — 亡くなった人物 — ドラマ的人物の後光を有するのである。

更に言おう。その頭が詩的被造物で一杯の人々は、この被造物の外部でも少なからぬ被造物を見いだす。真正な詩人にとっては、全人生がドラマ的であり、すべての隣人が彼にとって登場人物となり、すべての他人の痛みは彼にとって幻想の甘美な痛みとなり、一切が動揺して、崇高に、アルカディア的に、飛ぶように楽しげに映ずる。その詩人は決して、いかに六人の子供を有する哀れな文書館書記にとって、市民階級的に狭小な心持ちがするか、 — 仮に彼がこの書記本人であろうとも、理解しない。というのは彼自身市民的に不幸であり、例えば乞食ラザロ勲章[ラザロ教団]の佩用者であっても、あたかもゲイ[John Gay(1685-1732)]の乞食オペラの客演をしているかのような気分がしているからである。運命は劇作家であり、妻と子供は常備の一座である。

— 実際、哲学者と人間もここではこの詩人よりも他の具合に考えることが許されない。そして自分にとって外的（市民的、物的）生活が一つの配役以上のものである人は、その人は自分の配役を自分の人生と取り違えて、舞台上で人生を泣き始める喜劇役者の子供[子役]のようなものである。この観点は、実際よりも一層比喩的に見えるが、ストア派の無感動よりももっと崇高な、もっと稀な、もっと甘美な堅牢さへと高める。我々に喜びのときすべてを感受させる堅牢さ、喜びの喪失を除いて感受させる堅牢さである。

夏、田舎へ行く多読家の少女達は、農夫達から逍遙するゲスナー[Geßner(1730-88)]的な牧歌の理想を作り出す。農夫達はまた農夫達として、その少女達を人形劇や物語本の中の王女達に理想化して引き上げる。同様に私も先の伝記の第十三章では、牧師と私には普通厭わしい市民生活の牢獄[ツヴィンガー]と債務拘留とを褒めあげた。彼と彼の非常用家畜小屋にすでに、私が後に彼に投げかける伝記上の理想的月光が微光を発しているのを見たからである。喜劇においても、地の振る舞いが見える本当の阿呆をこっそりと喜劇的な俳優へと、立派に遂行された喜劇的な性格へと理想化できよう[『ヘスペルス』でも主人公が行う、第一の犬の郵便日]。 —

空想は単に感覚の黄金色の夕方の反映にすぎないのに、夢や、不在の者達や、恋人や、去った時代や土地や、子供時代や、 — ほとんど名付ける必要もないような、 — 詩人達によって世に送り込まれた花の女神達や花の平土間席に付着する、独自のこの魅力はどこから生じているのか。 — 何故詩人達が我らの気に入るのか、それが分かれば、残りも分かるであろう。

これについては幾つかの正しいけれども、十分とは言えない理由を挙げることができよう。例えば我々は一年全体を、像よりも記号で考えていて、つまり像ではあるが、単により薄暗い、より小さな像であって、響きや活字で考えている。しかし詩人は我々の頭の中にすべての像や色彩をただ一つの祭壇画にまとめ上げるばかりでなく、すべての個々の像や色彩粒を次のような技法で鮮やかなものとする。詩人は隠喩を通じて一つの物体を何か精神的なものの覆いとする（例えば或る学問の花）ことによって、この肉体的なものを、従ってここでは「花」を、植物的な花の場合よりも一層明瞭に見るように我々に強いる。[ジャン・パウルの個人的主張]。詩人はこのように隠喩を通じて、精神的なものにより肉体的なものに対し、より高い色彩を与えるように、これをまた逆にして、同様に擬人化を通じて、肉体的なものにより精神的なものに対して、より高い色彩を与える。

更に言えよう、 — 実際に言えることである、 — つまりドラマ作家は週の出来事を分秒に転換することで我々を圧倒し、悲劇的な、ひょっとしたら年間を越えて紡がれる話しを数時間に圧縮することによって、我々の情熱を目覚めさせるが、それはまさに情熱も、手品師や将軍のように我々を迅速に動かすのであって、この詩人がこの情熱に似ているが故にすぎない、と。

しかし私は自分を満足させてくれるものに急ぐことにする。人間の両腕は無限のものへ広げられる。我々のすべての欲望はある大きな無限の願望の分割に過ぎない。人は、空想から、つまり空想はすべての有限なものを越えようとするが故に、その翼は無限の空間と無限の時間とを覆おうと欲するが、更にまた有限な因果列を考えられない理性から、更に続けて意志というものを続けて推論して来なかったのは奇妙なことである。すべての我々の情熱はその永遠性と大袈裟の消し難い感情を手許に有する。 — すべての愛、すべての憎しみ、すべての痛み、すべての喜びは永遠であり、無限であると感じている。かくてまた何か無限のものに対する恐れがあつて、このうち幽霊への恐れは、私が別の箇所^{*}で証明したように、一つの現れである。我々は我々を満たし、永遠に満足させることができるような至福を思い描くことさえできない。 — 君の精霊が君を拉致して、君をこの大地の最も美しいポブラ島[ルソー埋葬のエルクノンヴィル公園にある]に君を据えろとしよう、 — その精霊が島を通じて行楽の杜を、杜の周りに庭園を、庭園の周りに花々を引き出すとしよう、 — 精霊が君の目を開け、君の有するものすべてを見せろとしよう、君の愛する静かな天と二人の人間だ、 — その精霊が君の心の中に飛び込んで来て、その中に徳操と英知の名の下、住むことになるとしよう。 — 幸せな者よ、君は決して溜め息を付くことはなくなるだろうか。願望や空想が集まらない飽食として君の最初の溜め息が生ずることがあろうか。喜びを求めての我々の戦いはすべて、単に我々の憧れを聞こえなくさせているにすぎない。我々は孵化しながら冷たい大地の上に白墨の上の鳥のように座っていて、何かを孵すためではなく、我々の切ない胸の孵化の熱を和らげるためである。

さて我々の際限のないものへの我々の感覚に、 — こう私は簡略さのためにいつも言うつもりであるが、 — 自然の鋭く分割された分野が拒むもの、これをこの感覚に恵んでいるのは、空想という漂う、霧状のエリュシオンの分野である。カント[『判断力批判』26節]はすでに詩文と自然の崇高なものをある観照された無限なものの中へ措定している。確かに自然そのものは感覚の対象として崇高では、つまり無限ではない。自然はすべてその塊を少なくとも光学的境界と共に鋭く切り取っており、果てしない海は霧や曙光と共に、無窮の天は青色で、深淵は黒色で切り取っている。それでも海や天や深淵は崇高である。しかし感覚の贈り物によるのではなく、空想の贈り物によるのであって、空想は光学的境界、かの一見したところの果てしのなさ^{*}を詐称して、真の果てしのなさへ移行して見えるようにしている。何故空想はそれぞれの青色、それぞれの黒色の場合そうしないのか疑問視できよう。 — それにはこう答えられよう。必ずしもそれぞれの青色が大きな対象を取り囲んでいるわけではないからである、と。再度疑問視できよう。何故大きさが海ほど

*1 『ミイラ』、第一巻 278,279 頁。[『見えないロジック』第二十の扇形]

の花の平原が霧で終わっているとしても、海ほど崇高に見えないのか、と。しかし最後の答えはこうである。すべての偉大なものは単色でなければならないからで、新しい色ごとに新たな対象が始まるからである、と。天の単純な青色の中で魂はその翼を上下に揺する、

— そして最後の星から魂は翼を広げたまま果てしのなさへ墜落して行く。

あるアルカディアを想像してみるといい。君が歩いて行くアルカディアではいつでもヘルクレスの柱[ジブラルタル海峡の両端]が君の享受を妨げており、単に君の願望だけを、柱を越えて、飛ばすのである。しかし詩的なアルカディアでは君の願望は、君の領域よりも広くなり得ない。そして君の望むものは、まさに君が以前に創造したものである。

現実の坂道は、その坂道の上を彷徨い歩く空想の坂道よりも石ころが多いだけでなく、もっと長い。しかし君がある詩人を読むと、君はその上更に、他人の空想の花の道路を自分の空想と交錯させるという喜びを得ることになる。すでに現実をも飾る空想は、夢となるとまずどんなに飾ってくれることだろう。 —

私がしばしば私の空想に、美しい風景の中で、観客のためではなく私のために風景画を描いてくれるよう仕向けるとき、私が気付くのは、 — そうでなくても気付くのであるが、 — 私の中から生じて来る野原は、とうに沈んだ幼年時代からの島々や地帯に過ぎなかったということである。夢もまた（すでにヘルダー[in den Gesprächen über die Seelenwanderung]が述べているように）夙に押しやられていた多彩な幼年時代のガラス絵を再び眠りの暗箱の中に取り戻してくれる。しかし幼年時代の思い出は、我々にとってどの年代になっても残っている思い出として爽やかなものとなるのではなく、その魔術的な暗がりと、ある無限な享受という我々の当時の幼年らしい期待の追憶とが、こう期待して全き若々しい諸力と人生への恐いもの知らずとで我々は騙されてきたわけであるが、果てしのなさへの我々の感覚にとって心地が良いから爽やかなものとなるに違いないのである。

詩の中の理想的なものは、この映し出された無限性に他ならない。この無限性がなければ、詩は単に平板な色褪せた石盤の模写にすぎず、高貴な自然の花の絵とは言えない。従ってすべて詩は理想化しなければならない。ある一帯の最も正しい記述というものは、それ故、詩集の年鑑では必要なく、むしろ土地台帳で必要であろう。 — それ故議事録は喜劇の場面では必要なく、 — 自然の模倣はまだ詩文とは言えない、コピーでは原像以上のものを含めないからである。

詩は本来ドラマ的で、感受を、他人の感受や自らの感受を描く。 — 諸像や飛行、諧音、自然の模倣、 — こうしたものは単にかの絵画のための木炭筆、画家の筆入れ、足場にすぎない。これらの道具と詩との関係は、通奏低音やハーモニーがメロディーに関係するようなもの、あるいは彩色がスケッチに関係するようなものである。更に私はこう仮定する。すべて量的なものは我々にとって有限であり、すべて質的なものは無限である、と。量については我々は外部感覚を通じて知覚できるが、質については単に内的感覚を通じてのみ知覚できる。従ってすべての質は我々にとって精神的特性である。霊とその出現は我々の内部にとっては果てしがなく、かつ暗く表現される。従って、我々が詩人によって抱く、我々の中に投じられた太陽の[水鏡の]像は、詩人自身が我々の中に一緒に作った波の中で、拡大されたり、多重化されたり、微光を発したりして震えざるを得ないのであ

る。^{*1}

しかしこれは私が問題にしようと思ったことではない。美術はどのようにして、何を手段にして我々に作用しているか問題にしたかったのである。全く単に空想によって、空想を手段としてである。絵画や立像の形成物を他の物体と区別するものは、我々の空想に対しある特別な関係を有するに違いない。この関係は、我々が原像と模写の間に置き、我々が克服された厄介事というつまらぬ満足を汲み出せるような単なる空虚な比較に至るものではない。ズルツァー[Sulzer:Theorie der schönen Künste. Ähnlichkeitの項]は言っている。絵画は我々の氣に在るが、鏡の中の忠実な像は氣に入らない。立像には惚れ惚れするが、より忠実な蠟人形には惚れ惚れしない。というのは類似性にはある境界がなければならないからである、と。私はしかし何故と尋ねる。何故完全な類似性（同等性）は未完成の類似性よりも及ぶことが少なければならないのか、と。この意味でこれは真実ではない。鏡像からは動きがないだけの肖像画は、それだけに我々をもっと魅了するであろう。

しかし勿論別な意味で非類似性が必要である。この非類似性は絵画で或る精神のパントマイムを印象付けているもので、要するに理想的なものである。我々はキリストの頭部を見て、描かれた頭部ではなく、この上述の頭部、芸術家の魂の前に安らっている頭部を思い描く、要するに芸術家の魂であり、一つの質であり、一つの力、何か無限なものである。[カント『判断力批判』51 節参照]。俳優は、単に劇作家が舞台でその理想を描くときの手段にしている文字に過ぎず、単に乾いた水彩絵具に過ぎない。――それ故どの悲劇も、舞台よりも頭の中で理想的なものがより有利な風に上演されることになる。――かくて色彩とか線は画家の文字に過ぎないわけである。この文字の活字印刷術的華麗さと、この文字の無意識的記号である崇高な意味とを混同してはならない。

私は無意識的な記号と書いた。我々の魂は記号の二十四の記号で（つまり諸単語の二十四の文字で）魂に書き付ける。自然は数百万の記号で書き付ける。自然は我々の自我の隣の他人の諸自我を信ずるように強いる、我々は永遠に単に肉体を見ているにすぎないのに、

――つまり我々の魂を他人の目や鼻や唇の中に移植するように強いている。要するに観相学と読心術とによって我々はまずすべての肉体を生命化し、――後にすべての非有機的物体を生命化する。木や教会の塔、牛乳鍋に我々は懸け離れた人間的造型を付与し、この造型と共に精神を付与する。顔の美しさは線の美しさで装われるのではなく、逆にすべての線の美しさ、色彩の美しさが、単に人間的美しさの移植された反映に過ぎない。我々は何か生命のないものが実在している、つまり生きていると考えることができないので、全創造物の永遠の擬人化に我々が慣れていることと結び付いて、美しい一帯は我々にとって絵画的想い、あるいは詩人的想いとなってしまう、――大きな塊が、あたかもその中に大きな精神かあるいは無限な精神が住んでいるかのように、我々に語りかけることになり、――そして造型された[ベルヴェデーレの]アポロの像とか描かれた[ルーブルのダヴィンチ作]ヨハネの頭部は、偉大な魂の美しい真性の観相に他ならないということになる。

*1 創造する精神について言及しなければ、次のことは説明され得ないであろう。つまりシェークスピアがある場面を一語一語、ある現実の出来事、議事録、対話から書き写したのだと知っているとしたら、彼のある場面は何故半分も興味を引かなくなるかという理由の説明のことである。

この両者の像の魂も、自らの肉体よりももっと同質の肉体に住んでいると思われるのである。

ティトノスが自らに、ユピテルに対して、不滅性を懇願したとき、彼はその依頼に青春を含めていず、結局不滅の――声となって消えた[『ホメロス風讃歌』]。このように生命は我々の後では消滅し、青ざめて行く。そして我々の消滅し、干涸らびて行く無常に対してはただ何か不滅なもの、――或る声が残る、即ち音楽である。さて音色は、これは薄暗い月光の中で肉体のない諸力と共に我々の心の周りに漂うもので、これが我々の魂を二重化して、それで魂は自らに聞き入るのであるが、この音色と共に我々の深く攪拌されて、無限な、極度に興奮した希望と思い出とがさながら眠りの中で語ることになり、かくて音色はその全権を果てしないものの感覚から受け継ぐことになるという次第は更に語るまでもないであろう。ハーモニーは我々を部分的にはその算術的關係で満たすものである。しかしメロディー、この音楽の生命の霊は、我々の喜びと我々の痛みとが自ずと与える一層粗野な音色の詩的な純然たる模倣といったものでしか説明され得ない。外的音楽は、従って、本来の意味で、内的音楽を生み出すものである。それ故またすべての音色は我々に歌への刺激を与える。――

しかし十分であろう。私は、お芝居のように、愛する音楽で終えることにする。私は更に多く限定し、答弁し、追加すべきであろう。例えば享受する空想と、創造する空想とがあって、享受する方が詩的魂であり、無限なものへの感覚をより繊細に有する、そして創造する方は、創作的魂で、しばしば無限のものへの感覚を有しないまま、この感覚を養い育てるものであると述べるべきであろう。[『美学入門』第十節参照]。私は更に月光や、夜や、露の滴の多彩な色の波の諸力で私の命題を補強できよう。しかし日中でも盲目である者は、雲のない陽光の許でも何も見えはしないであろう。私には、――いかに人間は自身の部分さえも擬人化しようとも、――私が余りに長く書いてきていて、その熱い線の下では他の線の下と同様に青春の永遠の朝風が吹き寄せる空想に対して、単調な人生の周りに花綵のように巻き付けているその時刻、その庭園、その花々、その願望そのものに対する感謝の感受を述べなければならないかのように思われる。しかしここでもまた人間は、しばしばそうであるように、贈り主よりも、むしろ贈り物に感謝しようと思う。――

そして我々の感謝とは何であろうか。――満足である。現実の得難い代替物と、現実とを同時に欲する無作法は御免である。つまり空想の枯れることのない花の絵の他に、更に現世の喜びの薄い花々を要求すること、そもそも詩的な虹は（光学的虹同様に）まさに太陽が最も低い位置にあるときに（夕方と冬に）最も高く懸かるということを忘れてしまう無作法は御免である。――多分我々はこの点我々の渇する胸と共に眠っている者達に似ていよう。彼らは口を開けている限り、渇しているのである。口が閉じられると、渇は収まっている。我々も我々の口を最後の手が閉じてくれると、収まるのである。しかし我々は我々に授乳する天上的夢で一杯である。――そして夢の爽やかさの歓喜や期待が余りに大きなものとなると、そのとき我々は満たされるよりももっとまじなものになり、――目覚めるのである。

2.

ヨズアー・フロイデル地方長官の自らの忌まわしい悪霊に対する告訴状

この可愛い告訴状は、この中で或るぼんやりした学者が自覚することなく自らのぼんやりを描いているが、牧師フィクスライン殿の好意によって私が入手したもので、牧師はこれをその祭具室の教会信者用便覧の中で見いだしたのであった。思うに私はこの告訴状を盗用ということではなく、私の論考や所有物に加えて良からう。フロイデルは後で私の論文を彼の論文に加えているからである。混入、融合は獲得の一方法であるので、正当な根拠の下、その全体に対して権利を行使することにする。少なくとも、彼はその為の用紙を祭具室から徴収したものであるから、管理人として私の名親依頼人に、長官の紙上に記された考えは従物として属するものであろう。この文書起草者は贖罪日に過失でフーケルムの教会に閉じ込められてしまった。 — そこで祈りの鐘が鳴って解放されるまで、長く、退屈を紛らわそうとして、彼はずっとその間この告訴を書いていたのであった。

*

人生が最も上手く経過していて、まさにそのように終わろうとしているとき、悪意ある悪霊が何人かの者を追跡していて、その人生の営みの中へ長い留め鉤を投げかけるというのは、多分に確実なことである。誰もが、賭や — 戦争や — 結婚や — すべての面でただただ不幸な目にだけ遭う人々を、そしてまたただただ幸福な目にだけ遭う他の人々を、知っているに違いない。私の場合は、何と、幸福と不幸は交互に詰められて、隣り合い、重なり合って、一つの樽の中に収まっている。ユピテルが二つの樽に収めている具合ではない[Ilias, X X IV, 527f.]。満足や、礼遇や、私の感ずる感動的感受が全く大きく、はなはだ大きいとき、確実に言えることは、それに今や悪霊が気付いて、そのあとすべてに祝福をくれるであろうことである。かくて悪霊は好んで私の楽しい行楽を家庭的争いで台無しにしてくれる。凱旋門は私にとって、三日間の惨めな日を予告する虹となってしまう。かくて今日悪霊は私の後を付けてこの教会へやって来た。花と咲く説教が私に若干の満足を与えるであろうと予見していたからである。それで晩拝式の説教以来私はこの教会に拘禁されている。いつになったら解放されるか、運命に尋ねる他ない。ドアも窓も破って出られないからで、最大の不幸はまさに贖罪日であって、女中は誰一人墓地に出ない日[贖罪日の墓地訪問は不幸を招くという迷信]であるからである。私の愚かな書記官達の誰一人として、いずれにせよ、分別があつて、祭具室にいる私を探しに訪ねて来るということをしてしない。この教会はそもそも私に反抗的である。私はすでにこの教会で一つの厄災を経験したことがあって、私が全教区民の手によって逮捕されてしまい、静かに満足して教会の椅子に座って、私の印刷前の訓戒を裁判官的に立派な文体に思考の中で吟味する羽目に陥っている今日は、昔日の厄災の反映でしかない。私は悪霊がまさにいつも私を追い落とすが故に、残念ながら何でもこなす役回りである。

私は以前詩句と係わってきた、 — これは今少なくとも私の文体の利となっている、 — それから宗旨を変えた。私は牧師となりたかったからで、地方長官ではなかった。話しというのは根本的には愉快なものである、もっとも私には面白くないけれども。つまり私は学生として、私の生まれた村で（まさにこの教会で）見習い説教をして錦を飾ろう

とっていて、それ故私の母の為に丈の高い髷の壁の付いた大きな鬘を被っていた。早速説教の導入部で、私は冒険をして、導入部同様、「尊敬する聴衆の皆様等」でやはり始まる教訓を語って、不幸にも導入部と取り違えてしまった。しかし私は――容易に、合理的変更を加えて、――聞き手の尻尾も、小先端の頭同様巧みに手に握っていた。千人もの他の者ならば説教壇から立ち去らなければならなかったことであろう。私は逆に大変快適に説教[前後の]賛美歌に到着して、こう言った。「それでは一緒に敬虔な歌を歌いましょう」。――これが私の厄災であった。というのは私は――大方の説教壇での慣習のように――頭を説教壇に置いて、跪き、自分では説教壇の燕尾服しか見えずに、――自分の方としては自分の柄頭、罌壁付きの鬘しか見られない具合であった。――かくて私は（愚かで、説教壇の布に向かって歌いかけたくないのであれば）視覚感受の欠如から、歌の間、考え込まざるを得なかった。――つまり私は説教壇で、終わりにしようと思っていた導入部を教訓へと色合いを変えようとした、――細かい分類が次々に浮かんで来た、――私は夢遊病者の如く考えごとに没頭してしまった。突然びっくりして気付いた、とうの昔にもはや歌は終わっていて、そしてすべての教会の一同が待ち受けている最中に熟考してしまっている、と。私が自分の鬘の中で長く驚いているほどに、一層時は経過して行き、こんなに遅くなってから髷の落とし格子を上げて、その下からまた教会の人々の前に現れてもまだ無作法と言えないか考えてみた。今や、――説教壇の砂時計は流れ続けて行ったので、――更に時間が経過した。教区民の異常な静けさが全く蒸し暑く私の胸に降りて来た。私は、結局耳と足とをそばだてている教会全員がとても滑稽に思われ、自分は毛髪うずくまの槍用[蛙形]兜の下、安全であったけれども、それでも永遠に蹲うずくまってはおれないし、みっともなく立ち上がることもできないと容易に察知できた。従って、私は、脱毛して、頭をゆっくりと鬘から卵のように忍び出させて、こっそりと剥き出しの頭のまま説教壇階段に隣接している祭具室へ下りて行くことが最も上品であると思った。私はそうして、中をくり抜かれた空の鬘に上のところで代理を務めさせた。私は隠すことをしないが、私が祭具室で羽毛のない頭のままあちこち歩いていたとき、今や（というのは私の暇な補佐人、代理人が絶えず、司牧の初心者として黙って人々を見守っていたからで）、告白すると今や、大人も子供も、男も女も、こう注目していたのである。頭用ソックスが起き上がり、彼らに朗読をし、説教師一同が我々皆に教え込むように、各人を啓発し始めるであろう、と。読者方に言うまでもないことであろうが、その空の鬘は起き上がらず、すべての内容物とその出撃とを奪われていた。幸い楽長が爪先立って来て、説教壇を覗き込んだ。――彼は遠慮なく下って来て、登り、私のフードを尾のところで高く持ち上げ、その中には啓発できそうなもの、魂の案内人はほとんど、あるいは皆目見当たらないということを経区民に見せた。――「中身はすでにパイから出ている」と彼は公にこの頭の裂孔の許で述べ、私の代理人を自らの許に収めた。――それ以来私はこの説教壇を見たことがなかったし、いわんや足を踏み入れたことはない。...

まことに私は今まさにこの説教壇に向かい合って書いている。私は今日見上げていた。しかし出られたらと願っている。私はもう長く書いたに違いない。それはそれとして、まさに、私が脱線しながら書いているこの話は或る悪霊の存在を証明するに十分であろう。この悪霊はどんな最良のことを孕み計画している人間をも鼠のように足許を狙って射てしまうものである。――しかし諸母斑はその後陣痛である。

当地の現市長が埋葬されるという時以来、私は多分もはや決して歓喜の海で泳いだことはないであろう。― それでも私の悪霊は私の葬儀のスープに汚物を投げ込む術を心得ていた。この自家製の悪魔は、処刑とか ― 戴冠とか ― 日食とかで私の邪魔ができるとなれば、ほとんどそのことを気にかけていないということを詳しく語ろうと思ったら、この葬儀の話しには片が付くことだろう。これらの事は残念ながら再生も、アンコールも、反復も許されないことであるので、普通類似性を互いにほとんど有しないこの三つの事に出会うことはなかった。これらは私がやって来るぞと思う前に過ぎてしまうのであった。

私は葬儀の際、その執行委員長となる予定であって、実際葬儀は始まった。死が砂時計をその目に振りかけた市長は、立派な執行委員長、指揮する葬儀比武長官を有するに値する男であった。というのは彼はこの一帯全体の中で自ら身分のあるすべての葬儀の際、一般的な請負人、死を想え教団の大十字勲章、骸骨踊りの娯楽の親方であったからである。彼は ― 上手に重荷を背負っていたので ― マグナ・カルタの葬儀の際、それが単なる冗談でないものでありさえすれば、ロンドンで葬儀委員長となれたことだろう。そして仮に老公法学者の帝国慣習氏の首都での葬儀が真面目にいつか行われるのであれば、この市長は、自らが棺の中に納まっているのでないかぎり、棺を支えることができることだろう。

私は更に前もって語らなければならないが、葬儀前の夕方、私はこの市長と同じ気質であって、彼を手本にしていって、春の治療を、つまり一スプーン半の本物の大黃を服用したのであった。私はぼんやり[放心]していて事を次々と忘れてしまうかの学者達のまねごとを若干したいと思っていた。葬儀にかまけて治療を忘れてしまうような些細な放心なら、翌日が都合良かったであろう。いずれにせよ多くの方に晒した若干のことを多くの方に読ませることになるのはほとんど恥ずかしい思いがする。多分根本的に不可避なことであって、真の内臓学的事実であったろう。というのは私は喪の家で大いに飲んでしまい、 ―

ゆっくりとしめやかに運ばれる棺架の隣を徒渉し、その上吹き付ける風に向かわざるを得なかったからである。この風は立派な男達の喪の外套を寒羊風に解いて、(風は男達の右側に皺の寄った起床紐、古着を鏢のように差し込んでいた)、その上私は更に悪魔的春の下剤を胃の中に有していたのである。...しかるに、私に目をやる者は、愚鈍でなければ、すぐに気付くに違いなかったが、私は十分に長く私の生理学的状況を自分の義務の最善のために歯をくいしばって堪え、逸らし、黒い飛翔する蜘蛛の糸、帽子の紗の十字の旗[ローマの軍旗]の後を、包み込んだ高い委員長の拍子の杖を持って、全ての葬儀の進行を十分上手に指揮し、同伴して行ったのである。もっとも私は涙と緩下剤の洪水の中であって、死刑判決を受けた者[折れた棒]のように見えたけれども。 ― というのは(市長に関して)かくも多くを喪失し、かくも多くを服用したことが辛かったからである。 ― 仕方ない。我らの国が皆悟ることになる。要するに共に歌う風がほとんど我々を教会の玄関の手前十歩ほどの所まで押し込んだとき、私は本当に、自由意志もなく、ウェスパシアヌス皇帝[下痢で死亡]のように ― やはり同じ所で、 ― 私の不幸な王笏を落としてしまったのである。...

多分多くの者が笑ったろう。

他の場合よく私は薬に対処する術を心得ている。例えば私は関係を悪化させてはならない先の森林長官と、聖マルティヌスの日に彼の狩りの館で食事すると手紙で約束していたのであるが、幸い、同じ日に当地の牧師との食事を口頭で承諾してしまったということが

生じた。この時不都合から守られたが、それは聖マルティヌスの日は牧師館では上を下にの騒ぎであったばかりでなく、私の胃の中もそうであったからである。ただ私は立派な嘔吐剤でブラシをかけたのである。 ― というのは私に十二時に牧師が「すべて冷めてしまふ」と知らせてきたとき、何時になったかまことに良く分かって、十五分して着いた町で、宿駅で急行馬に乗って、スープがまだ私の馬よりも熱く蒸気を発しているとき丁度に、森林長官の許に飛び込むことになったからである。

読者に更にまことに珍しい出来事を紹介しようと思うけれども、しかし読者は今きつと拍手してくれないことだろう。 ― 他の人々にはもっと頻繁に生ずるに違いないことである。というのは私は選び抜かれた図書全体を盗みで得る一方、他の図書全体を失ったからである。私に先の図書を貸した人々と、私から図書を借りた人々は、誰とやり取りしたか忘れてしまっているからである。 ― そうなると私もその人々を忘れてしまうのである。

今度は皆が喝采してくれよう。次のような次第であった。私がまだ弁護士の頃、私にとってどの裁判でも判決猶予は毒砂、殺鼠剤であった。私の控訴は（すべての多年生の植物のように）決して十日間で決着しようとはしなかった。それでも私は邪悪な悪霊の十分に考え抜かれた奸計により良い奸計で応答した。そもそも裁判官は弁護士同様判決猶予を恐れるべきではなかろうか。当事者達が失うことになる最良のものは、しばしば「時間」ではなかろうか。何故時間を有罪な者も無罪の者も同時に失わなければならないのか。 ―

弁護士達の飛脚の靴は（その上裁判規定の狼鞭があるというのに）すべての文書がそこ宛に裏書きされることになるより高次の裁判官達が枷の靴、輪止め鎖の中で動き回っているとき、何の役に立とうか。 ― 要するに弁護士達や、より高次の審級は（というのは我々下位の者はすでに手綱をかけられていて、ほとんどこれ以上話せないし、そのように人々は下級審に要求しているからで）同じ延期の消耗に、同じ書記達の亀甲文字に、同じ金の強請りと顔の渋面に悩み、衰弱しているのである。... 私はここでひょっとしたら脱線しているかもしれない。しかし告白すると、何故書いているとあちこち飛ぶのか分からない、考えるときはそうではないからである。

しかし申したように、結婚式の日のことであった。 ― その日は過ぎて、十五分を残すのみであった。 ― 黒々とした結婚式の夜になっていた、 ― 私は時計の針と弁髪をすでに鐘の下にかけていて、最後に二番目の明かりを消して、最後の明かりの許、十一時四十五分を読み取り、他の誰よりも私の愛しい花嫁、私の魂のドアと壁の隣人のことを考えていたとき、所謂結婚生活カレンダーを覗き、これは最近では九ヵ月分の教会簿と誕生日を予告しているものであるが、今日の日付に下線を引こうとした。すると私はこのカレンダーで、これは同時に私の司法的判決猶予や諸期日が書かれているもので、自分は二日以内に控訴しなければならないことに幸い気付いた。そして十二時を告げる最後の十五分の槌が八日を打ち殺したのである。私は取りかかり、書類を切って（バイエルンではそれは不必要であるが）立ったまま記入すべき控訴状を記して、それに封をした。

「私はただ」 ― と凍えたまま花嫁に告げた、「ある下級審から上級審へ控訴しただけだ、これは控訴制度として予期されていることであることが分かるだろう」と。 ―

悪魔は不和に対して独自の好みを有するので、丁度私が凱旋門を通って行くときに私の友人達の怒りを買うよう私に求めている。私は覚えているが、しばしば色々な会合で、極

めて明確にラーヴァーターの観相学的シュヴァーベン鑑からその動物図鑑を反復し、家畜の頭や昆虫の頭を人間の頭へ応用することを、銅版画の参照なしにできるよう容易にやっていたので、覚えていると申し立てるように、私が若干の賛同を求めて見回してみると、縮れた鼻や、皺のある唇や、星々の記された額の致命的にうんざりした顔つきの人々の円周や台形で囲まれていることに気付くことになった。――そしてその次の週、その会合から私に足をかけて転がす能力のある人は、それを実行したのであった。私が時に会合で眠り込まなければ、皆無礼に思えることは私には何も見いだせないであろう。私が会合で敢えてすることすべては、ツィンマーマン[Zimmermann(1728-95)]が彼らの頭の中で彼の哲学的小作品を講義することとは違って、彼らの頭の中で若干の司法的小作品を仕上げてみせることである。ニュートンはあるレディーの指をパイプのストッパー用の小形麝香鹿の足と見なした。しかし私の勘違いはただ、一度パイプを叩きだしたとき、丁重に何度か、「お入り」と叫んだことくらいである。外で誰かがノックしたと思ったからである。

かくて私は一年のうちに私の名親と告解の神父とを同時に怒らせてしまったことを私自身のせいとするよりは邪悪な悪霊のせいになっている。私はとても重篤となって、三日の日曜日の間に治癒のために教会の大願を申し込ませた。三日目の日曜日、私は代願の間、自ら人々の間に混じって、――牧師が上で私の回復を祈っているとき、――下の方で私の格子席から戯けた顔をして快癒したまま覗いていた。しかし私は何故自分が回復者として公然と姿を現しているのか最も良く承知していた。教区民は、いかに代願は効き目があるか知るべきであろうし、第二に再発に対する代願へと勇気付けられるべきであろう。

私の名親、行軍官に関しては、私は彼の許に私の妻の最初のお産のとき馬で行き、彼に、彼は私の昔からの大学のヨナタンでありオレストであるし、近くに住んでいるので、名親を依頼しようと思っていたが、丁度彼は旅の用意をして馬小屋でハンガリア人達の行軍[1790年10月ホーフを通過、オランダでの乱を鎮めるため]を待っていた。彼の最初の言葉は、一緒に馬で行き、馬上で話そうということだったので、私は半日旅して、洗礼児から四マイル離れた所で初めて、連隊のある或る養魚池の側で名親のことを持ち出した。翌日私と彼とは、その騎乗している二頭の立派な狩りの馬と共に、容易に洗礼盤に間に合うことができた。

私は前もって私の悪霊の企みについて聞いて貰わなければ、どれほど私が私の名親を怒らせ、彼と不和になることになったか、お話しできない。つまりこの悪霊は私が生涯誕生日に出会う限り、まだ一日も誕生日を祝わせてくれなかったのである。要するに誕生日の前後に私は大いに準備し、先駆けの騎手や先駆けの食事[前菜]を用意するのである。しかしその年の誕生日となると、その日を失念してしまう。それでその日を祝って過ごせないのである。ようやく私は考えた、鞍の上に乗って、すでに四週間前に私の名親に聖バルナバの日[六月十一日]のために、――これが私の誕生日で、――七人の愛する子供達と一緒に、私に好意を示すよう招待したら、少しばかり達成でき、賢いことではないか、と。

――私は騎乗し、行軍官を不意に訪ね、招待した、しかし誕生日祝いのことは打ち明けなかった。私が足を鐙に乗せたかと思うと、彼はすでに、――半ば料金前納で、逃げ出すより他に大して金のかからない行軍の旅装を解いたばかりであったが、――しかし私の目の前で四人乗りの馬車を聖バルナバの日用に賃借していた。そこで私はすべてを済ませて、これ以上更に考える必要はなくなった。行軍官は決して忘れないということを私は

知っていた。 ― この期間、私は立派な建築日和を再びやり過ごすことのないようにし、一度本気で私の脆い家の主要な修復と再建築に取りかかった。さて聖バルナバの日、早朝老行軍官が彼の若い妻と七人の生きた、私のためにおめかしした、楽しげな子供達と一緒に本当に私の家の前で、すでに御者席から降りていた案内人、御者同様、喜んで降りようとしたとき、それは全く不可能なことであった。家の周りに幾つかの瓦礫の連なりが取り囲んでいて、特に足場の足や杭が乗り入れの邪魔をしていたからである。私自身は足場の上で、短縮され、吊り下がっていた、ガムびきのナイトガウンを着ていて、新鮮な空気を吸うために散歩していて、びっくりして大きな馬車の荷物箱を見下ろしていた。この箱から何が飛びだしてくるかはなはだ興味津々であった。しかし御者は再び馬車に飛び乗ると、一家を安い旅館の前に連れて行った。旅館は私の足場の向かい側にあつて、そこで初めて私は、一行が降りて、旅館に入る際に、私の名親とその家族であると、容易に書類同様、確認したのであった。私はまず彼らに旅館で彼らだけで食べさせた。私は食客となりたくはないからで、それから急いで参上した。私は冗談を言って、彼らのテーブルクロスの前に進んで行った。今日自分は彼らを四本の柱[家]の中に招くことはできず、二十本の柱の中に、 ― 足場のことで、 ― 招くことになる、と。「しかしこの家では」と私は付け加えた、「絵刷毛を持った左官の親方がほとんど向きを変えられない状況だ」。 ― 私は感謝して告白するが ― 今では私の名親は私に立腹しているけれども、 ― 一緒に彼と過ごしたこの最後の午後が、私の最も快活な午後の一つであった。私は夜ずっとというように強いた。私は真夜中前から朝方少し前まで行軍官の許に留まっていた。彼は、睡眠の途中で彼の周りに倒れている子供達同様眠たかったのであるが、ぼんやりしていて何時か気付いていないのに相違なかったからである。この男はとてもぼんやりした頭の持ち主で、彼の脳髄は天辺まで行軍規則が一杯に敷き詰められていたのである。... 私はこのような楽しい一日が、その上私の誕生日であると更に承知しておくべきであったろう。

しかしそもそも私は普通の食事宴会に賛成ではなく、それに参加することを好まなかった。私はただ一回参事会の食事に出たことがあるが、参事会員選挙の後、地方長官として会食せざるを得なかった。というのは私がすでに語ったように、私が葬儀委員長を務めた先の市長が埋葬され、新市長となったからである。我々の町のような市場町では、市の権利上、市長や参事会員が大事というのでなければ、私は一切から身を引いていたことだろう。ローマでは執政官は鋤を国の舵と取り換えた。 ― ここ我々の許では人々はその両方を容易に一つの手に有する。我々の有する参事会員は、投票するも鞞^{なめ}すも同じこと、草を刈るも処罰するも同じこと、記録するも署名するも同じこと、従って白墨を使うもペンを使うも同じことなのである。

ただ戯けた参事会員で鞞皮工のランツは会員一同に弱点をもたらしている。彼はこのような議会選挙の食事の際とてつもなく食べるからである。私が仕事上同席しなければならぬ参事会員の食事について、殊にこの鞞皮工について、或る未知の男が原稿にして送っている素敵な諷刺が出回っている。それをそのまま手を加えず、ここに挿入することにする。

「まず読者の空想は領事達の会食を思い浮かべ、その会食からすべての人間的肢体を切り取り、噛みきり、取り去って、ただ食道と胃だけを残すようにしなければならない。こ

の二つはこの件ではいかなる時も欠かすわけに行かないのである。この後我々、私と読者は、食道という結合されたピペットの付いた様々な胃を、最新の参事官に選ばれた胃によって提供される参事官会食が湯気を立てている食卓の周りに、肩書に合わせて椅子に座って貰い、それからこれらの吸収する胃の容器が互いにかぶりつき、―― 浸し、―― 飲み干し、―― 切り分け、―― 突く様を、―― そして胃の中、腸管の中、皿の上で運び去るものを見守り、記述しなければならない。―― しかし鞣し工の親方ランツは、食卓の一同に長い影を投げかけ、自らを除いて、誰をも圧倒して、誰よりも食べる。私は記録する前に、前もって六つのビールの栓を源泉のようにこの長い池に向け、この池を一杯にして、そしてかわかますを―― ビールの下に置くことにしよう。それでは泳ぐがいい。

――

我々を最も驚かし、最も我々の興味を引く者は、単に参事会員でタンニン鞣し工のランツで、自然に似て、驚異に満ちており、そして活動し始める。...彼は、恐水病者の逆として、自分の体の中に堅牢なものを運ばない。しかし体そのものが堅牢だからではない。そしてカトリック教徒の逆として、この晚餐を一つの形姿の下で、つまり流動的形姿の下で享受する。しかしこれは堅い形姿がすでにその中に納まっているからと思うからではない。

―― 彼は自分の手のポンプ胴ですべての湿ったものを汲み上げ、その水車のボンス用スプーンで自分の食道の側溝と胃の盥の中へ引き入れる。それで下剤を流し込もうというのではなく、この下剤では明日になって今日の分を流そうと思っているのであって、

―― 彼はパンの海綿ですべてのスープを拭き取り、自分のフォークの吸い上げ針をすべての辛子、西洋わさびの水溜まりの上に置く。それは自分の胃をこの鞣皮用樹皮でまず鞣すためではない。―― 彼は黴のようにパンの上に座り、パンに一噛みして根を下ろす。自分がフランス人とか馬であって、パンが好きだからではない。―― 彼は自分の測り得ない胃をすべての瓶詰めの第二の保存瓶とし、すべての野菜の二番刈り干し草の瘤胃とし、すべてのサラダ菜の植木鉢とする、それに合わせて一噛みの肉を鋸引きするからではない。

―― 彼は自分の胃の怒りの容器、坩堝を粥で満たすが、しかし胃に割れ目があって、ビロード張りを必要とするからではない。――

そうではなく、彼がこの水と陸とのこの創造的区別を遂行するのは、彼が自分の皿と胃との間のこの溝を堅牢にするのは、単にその両者の中で、同じ量を持ち上げ、運び去るため、単に皿の部屋で、食事道具を用いて、肉の直方体からなる果実倉庫と食料ドームとを自らと子供達のために築くためである。...誓って。彼は更に座っていて、脚や骨や外皮からなる食料の逆茂木の背後で壁を築く。彼はなお食卓の上に日照りの年のように漂い、すべての濡れた箇所を乾かすことだろう。かくて我々は彼と一緒に家に帰ることができる。そこでは流出する水から出された食料の鉱石山が着きさえすれば、まさにこのシャチのナイフはまさに逆に単に肉状のものに取りかかるのである。親方と―― 職人―― 鞣し工夫人―― そして鞣し工の子供達―― それにダックスフントが今やもたらされた山の踝まで穿孔して、我々は彼らが囁く物音を聞くことができる。むさぼり尽くすがいい。

―― 哀れなランツは、この腐食剤は、十分に苦しんで、カリエスのようにはすべてに襲いかかることができないのではないか。彼はすべての、その食道の蠕動運動で、胃の気球を単に突風で満たして持ち上げ、一つの竜巻で膀胱を排出したのではないか。―― しかし私は異常なタイプを必要とすることになって、異常な混沌を説明し、照明を当てなけれ

ばならなくなったら、尼僧院とか劇場の一座とか神聖ローマ帝国とかの混沌や喧嘩を説明する必要に迫られたら、――私は単に君の硬直して張り詰めた胃の球とそのスープや気体と共にタイプとして紹介することにしよう、ランツよ」。...

――いやはや、全く素晴らしい――愛嬌があって、――まことに願わしく、くだらない。――しかし私はここで更に一文字書くとなると、執筆の腕を切り取って貰いたいところである。やっと寺僕が見えた。とんでもない大食らいのせいで、彼を取り逃がすところだ。...

草案、現地方長官フロイデル。

3.

利己的な愛もなく、自己愛もなく、ただ利己的な行動が存在するのみである。

I. 私は、遺言の公開の後、けちな単独相続人が遺言者に対して感ずる愛は、―― その程度に従ってではなく、その種類に従って判ずるに、プルタークにおける人類の偉大な恩恵者達や、『トリストラム・シャンディ』におけるトウビー叔父に対して穏やかに我々の心を温める愛と同様に、純粹で、非利己的なものであるということを説明したら、私の第一の命題を証明したことになろう。偉大な恩恵者達はもはやいないし、トウビー叔父は実在しなかったのであるが。

もし単独相続人が、遺産の額と同程度の黄金を、ある彫像の空洞の頭部に見いだしたら、だからといって、熱狂的な芸術家がひょっとしたらその彫像に対して抱いたかもしれぬ程の愛を、その彫像に対して抱くことは決してないであろう。―― もし相続人が同じ額を被相続人の棺で見いだしたら、これまた相続人は被相続人に対して決して愛を抱かないであろう。いや被相続人が間違いであって、相続人にこの額を贈るとしたら、それでも、プレゼントは再来することになる見込みにもかかわらず、この狂人に対しては相応の愛を感じないであろう。というのは難破したときの救いの板に対する、また古い家具に対する、またその遺言がなくても自分に有用な人間に対する擬人化の錯覚を通じて人間に吹き込まれる愛のささやかな動きを私は計算しているからである。従って相続人は恩恵者の許で、その貨幣的な有益性を愛しているのではない、―― この有益性を好むのはすでに贈与以前からである。―― そうではなく、相続人に対する被相続人の思い、即ちその人の愛、つまり他人の魂の状態を愛しているのである。利己心を満足させるのは、単に、かの愛を打ち明け、他人の魂の前に明らかにする必須の手段にすぎない。

しかし今や私は更に話しを進める。遺言者に対する相続人の愛は、穏やかな叔父トウビーに対する我々の愛とは、種類において異なるのではなく、程度において異なる。私は種類においては異ならないと言う。すべて愛はただ愛だけを愛する。愛は愛自身の対象である。我々の諸情熱はそもそもいわば習俗的衝動の具体化である。そしてその諸情熱の中に衝動の形姿が、動物の中に人間的形姿が表現されているように、表現されている。しかし単にアナグラム風で、交互に入り組んでおり、快適なリズムはない。怒りはいわば倫理的憎悪の多血の感情であり、嫉妬は我々あるいは他人の運命と価値の間の不均衡の感情であり、そんな具合に名誉心、愛等が続く。かくて女性的美人に対する愛すらも、―― 結局は単により冷静な愛に過ぎないその美人への美学的満足から抽出されて、―― 色彩の魅力と線の魅力によって象形文字的に描かれ、人間蠟人形として象られた愛、あるいは倫理的的美に対する愛に他ならない。

我々は隣人愛の他人の状態を模倣している。我々あるいは他人は隣人愛の対象となることを好む。つまり恩恵者に対する我々の愛は、恩恵者が愛するのは他人に対してであろうと、我々に対してであろうと、同様に純粹であるが、しかし同様に強くではない。我々の愛はその対象を他人の自我の状態の中に有するので、それで少なくとも愛は感受あるいは情動として、かの他人の状態が自分を目標としているか他人を目標としているか、反省的計算を試みることができない。

勿論他人の隣人愛は自分の中で、自分がその愛の対象であるとき、他人がその対象であ

るときよりも、より大きな愛が生じてくる。しかしこの理由は単独相続人の愛からその純粹さを奪うものではない。愛されるという自分の長所、自分の尊厳に関して、私は他人の長所に関してよりも、[自分のこと故]千倍も生氣ある表象を抱く。第二に私は他人の愛とその作用に関して、私がその愛、その作用を知ると、一層生氣ある概念を抱く。第三に私の自己愛は私の隣人愛を、偽造することなく、強化する。衝動は他の衝動を直接生み出したり、高めたりできない、ただ衝動の対象がそうできるだけである。しかし劣等な衝動でも、より良い衝動をより明るい、あるいはより多くの諸対象で取り囲み、煽ろうという我々の空想を焚き付けることができる。従って利己的な空想は、非利己的な愛を競り上げるのである。我々がかのガレー船の奴隷の価値に関してばかりでなく、つまり或る神々しい僧侶[Vinzenz von Paul(1576-1660)]が解放してやって、自らがその鎖の中へ収まったという話しの奴隷のことだが、解放後の快適さについても、奴隷本人同様にこの二つに関して明確な概念を有するならば、我々はこの僧侶を、この奴隷同様にその美しい心に対して負い目を感じることなく、それでもこの奴隷とほとんど同様に愛するに違いない。いやより繊細な魂は、自分達の恋人がその魂に対して抱く愛を、はるかに自分の自己から分離して、あたかもその恋人が別の自我の恋人であるかのように、その恋人をととても優しく、大切に愛することができよう。

Ⅱ. 自己愛というものは自己憎悪同様有り得ない。愛する自我が愛された自我へと溶けてしまわないようにするためには、私は二重に存在しなければならないであろう。愛は単に愛に対して燃えるので、自己愛は自らを愛する前に、自らを愛しなければならないであろう。すると結果が原因を生み出すことになって、これはあたかも目が視覚を見ているようなものであろう。 — 勿論我々の頭の中には我々の自我の双生児の兄弟がいる、つまりこの自我の一つの像である。我々は勿論我々の自我のこの石盤模写を愛している。しかしこれは我々が別人の、我々にすべての点や線に至るまでそっくりに模刻された人物を好きになることが、自己愛であるとするような、ほとんど自己愛とは言えないようなものである。 — ただ属性のみが愛されて、ただ実体のみが愛する。しかし我々の所謂自己愛は、実際は我々の長所と一緒に生長はせず、 — せいぜい我々の欠点と一緒にである。

— 自己愛は我々が自らを軽蔑しなければならないときも、 — さもないと我々は自らを罪の沼に引き入れてしまうことだろう、 — 我々が我々自身の性質の一部分を尊重しなければならないときと同様に温かい。

先の命題を逆にして、単に実体のみが愛されると言っても、これは更に私の意見に叶うことである。剥き出しの羽毛のない空気のような属性は、それ自体、語彙集や概説書での属性に好意的な言葉同様、私の愛の温かい対象とはなり得ない。 — どの属性も或る自我の許で、 — この自我はまた我々にとって、得体は知れないが、或る別な属性よりも何かましなものであり、 — 愛されるためには、輝かなければならない。この生氣ある自我、このすべての精神的諸属性の条件を、それだけを我々はこの諸属性の中で愛している。この規定に従えば、自己愛は更により不可能なものとなる、つまり自我に対する自我の愛である。我々の自己蔑視は我々の全本性へと向けられない。自己蔑視の存在することになる部分は、自己蔑視に値しないからである。かくて自己愛は単にいつも単なる諸属性を覆うだけであらうし、決して本性そのものを覆うことはないであらう。自己愛は実際この本性そのものから若干を得るのであるから。案ずるにこのことは実際よりもあざとく見

えるかもしれない。しかし自己愛という悲しい深淵には、カント的諸太陽を投入して、深淵を明るくしなければならない。

愛は、この愛でもって我々を善良な他人が捉えるのであるが、何か神秘的なものがあって、我々は全くこの他人の魂になって考えようとは思わない。我々は我々の自我についてのその好意的概念を共有できないからである。 — 我々は（我々の価値の意識にもかかわらず）、どうして他人が我々を愛し得るのか分からない。しかし他人も他人の側では他人に対する我々の愛をほとんど解することができないであろうと考えるならば、その点納得は行く。 —

更に一つの「敬具」あるいは可愛い遺言補足諸を私に許されたい。他ならぬプラトナーに責任があるだけに尚更である。プラトナーは主張している。「感受は利己的である、感受は感受として単に我々自身の状態だけを表現しているから。我々の理性の他に非利己的なものはない」と。しかしまず第一に非利己性の概念は、それが空ろな紛いの言葉でないのであれば、単に我々の中の何らかの非利己的な状態の模写に過ぎない。第二に利己心の感情はその逆の感情を前提としている。盲人が光ばかりでなく、暗闇も知らないように、我々は非利己なしには利己について何も知らず、自由なしには隷属を知らず、同様にひょっとしたら多くの事柄がその反対との交換欠如のために我々にとってこの世で闇のままであるかもしれない。第三に私は尋ねる。例えば他人の状態が痛みで一杯に我々自身の状態に対応するが故に、同情はそれ故利己的であると言わなければならないとすれば、一体いかなるより高貴な非利己心が考えられようか。人が他人の自我を自分の自我よりも熱く配慮し、自分の自我を忘れ、蔑し、突き飛ばすというような一つの思考可能な非利己心を私は知っているにすぎない。 — しかしそうになったら実際本来の意味で他人の自我が私の自我へ転じて来るであろうし、 — 衝動は単に移植され、高貴化はされないであろうし、 — 私は単に諸自我を交換しただけであろう。というのはまさに次の点に非利己は存するからで、つまり私の性質がその自立性にもかかわらず、他人の性質の状態に入って行き、一つの自我が幾多の自我を追感するということである。申したように、他人の至福を全く、自らの至福への願望なしに切望することが、そして他人の自我を自らの自我とは別の自我で愛することが可能であれば、 — これは神自身の許でも不可能であろうが、 — 何も奪われるものはないであろう。というのは私は単に他人の衝動を有するのみであろうし、私の利己心は単に私の自我から別の自我へと引き抜かれたことになろうからである。...

*

私はこの論文を二回[1790年夏と1795年3月]書き直したので、私は頭が心の願いを査証し、保証するとき、我々を元気付かせてくれるかの強壯化の満足を二回味わうことになった。しかしながら、かつて — 若い魂が動物達を経るように哲学者達を通じて輪廻して行き、あるときはかの頭の中、あるときはこの頭の中という風に進んで行く若い時でさえも、 — エルヴェシウスの肉体の中に入って、彼と共に全ての人間の、 — 証明は同一であるが故に、最後には全創造物の、 — 一般的な利己心という汚い信仰の中を潜って — 転がって行くという不幸な思いを感じずに済んだ。まことに私は自分の許で、他人に対するかの愛を除いてなお愛すべきものがあるか、自らの利己心よりも耐え難い何らかの利己心があるか知らない。成熟した心と自分と同様に立派な人々と嵐のない地平線

とがようやく次のような確信を贈ってくれた人は幸いである、つまり ― 磁氣的電氣的素材が、雲や電気魚や磁石を引き付ける同じ普遍的精神であって、極光では穏やかな微光として、雷雨のときは稲妻として、人間の中では後光として、魚の中^{*1}では震動、瞬動として、神経の中では生命精神として作用するように、申し上げるがこう信ずる人は幸せである、即ち愛は、この人間的磁気は、いつも同一の精神的な電気、解体として残り続けるものである、この愛が性愛の稲妻として、 ― あるいは隣人愛の穏やかな極光や後光として、 ― あるいは友情の中の光磁石として、 ― あるいは母胎内の神経精神として出現しようとも、と。 ―― 私がこの人を幸せであると称えるのは、そのときこの人は人間を兄弟のように愛するであろうからばかりでなく、兄弟をも人間のように愛するであろうからでもある。つまりこの人は、親族友愛の段階で精神友愛の頂きにまで運ばれて、そうになったらまた親族友愛を精神友愛で高貴化して、父とか息子とか恋人とか友人の中にそう呼ばれる者の他に何かより高貴なものを、 ― 即ち人間を愛するであろうからである。 ― この高貴な名前の背後には更に高貴なものがあって、これは我々が全精神世界の許で愛し得るものである。即ち神である。 ―

＊

電気ウナギについての物理学的注

電気魚は、磁氣的素材と電氣的素材を結び付けた、いわば最初のパラグラフであった^{*2}。電気魚は（ハンターによると）同時にプラスとマイナスの電気を帯びていて、それ自体正規の電池を有するからであり、電気魚は、ウナギや、ヤツメウナギ、カワメンタイ、鯉、鮒のように磁石で気絶するからである。ひょっとしたらこの魚は、人魚オアネスよりももっと良いやり方で、 ― この人魚はベロッソスの断編によると人間にすべての学問を与えたそうであるが、 ― 物理学の教師となるかもしれない。この魚の許でこの素材に関して組み合わせの単純さのせいで、磁気を帯びた人間の許で学ぶよりももっと容易に何かを学べるであろうからである。丁度まさにそれ故、私がこう信じているようなものである。つまり植物は低級な動物よりも、生殖の教義に関して鎧戸や窓のカーテンをもっと大きく開けることができるであろうし、また動物どもは我々人間よりももっと大きく開けることができるであろう、と。かくて動物電気は動物磁気学の松明持ちとなろう。

私は、物理学者達が大抵、講義されたもの、観察されたものを組み合わせる代わりに、単に観察し、講義するばかりであることにしばしば腹を立ててきた。しかしそれ以上に博物史学者には腹を立てている。彼らの頭の周りにはしばしば内的学問上の後光よりも、もっと多くの後光が見られる。彼らは自分達の学問という一本の枝、葉柄に限定して、容易にその光学的顕微鏡的勤勉さに見せかけの明察を与える術を心得ているからである。 ―

*1 ここに必要な注を私は、人間は注をより素早く、より冷静に読む必要があると思うが故に、後でテキストの中に埋め込むつもりである。

*2 第二のあるいは第二十のパラグラフは、磁石を引き付け、そして自ら、擦られると乳香を引き付けるダイヤモンドであろう。オリエント産のダイヤモンドは導体ではないが、ブラジル産のダイヤモンドは導体である。

私は自分がフランクリン以前の偉大な物理学者であつたら、恥ずかしく思うことだろう。

ー というのはその場合他の物理学者同様に恥ずかしいことに気象や雷雨を電氣的素材の明察なしに照明し、説明していたであらうからである。かくて今やすべての講壇の前に積み重ねられた電氣的経験のモンブランの山が聳えている。そしてこの山を持ち上げるには皆にまだ信仰の辛子粒[マタイ 17,20、ルカ 17,6]が欠けている。

私は時に願ったものである、何も気にしないでいいから、ただ物理学的飼料を混ぜ合わせて組み合わせればいい、と。レッシングが哲学的資料を[様々な理念を偶然に組み合わせるやり方で、詳しくはベーレントの注参照]、あるいは他の者達が楽譜を混ぜ合わせた具合に、と。例えば電気魚を解体された人間の許とか、避雷針の許とか、磁針の許で、午前とか午後に（針は日中の時に従って、様々に逸れるから）持つ場合とか、ーあるいは電気魚に関して、水は一つの導体であり、ライデンのコンデンサーであると分かったり、あるいは魚は稲妻の落ちた池では死に、従って関係のない者が触れる絶縁した人間のよう

に冷たく感じられるということが分かる場合、何故かが良く分かるであらう。ーーー

要するに物理学者は医師同様に余り書くべきでないが、多くの学問的機知を物理学的結合の為にーリヒテンベルクほど有しない場合のことで、リヒテンベルクには、彼は彼として、もっとまた多く書いて貰いたい。ー

4.

フローリアン・フェルベル校長とその一級生達のフィヒテルベルク山地への旅。

私が好んで読むもので数頁の本にしくものはない。ただ二つの安楽椅子の上で開けられるようなかの昔のフォリオ判の金の延べ棒は、幾つかの金の粒に砕かれるべきであろう。つまり各頁が一小巻に製本されるべきであろう。そうなったら誰でも読み通せるであろう。しかし今は学者は諸四つ折り判を市の図書館からとてつもなく長く借りなければならぬ、分冊にして戻せないからである。いや風変わりなフォルティスはその旅で前もって切り抜いた最良の箇所だけを所有していて、去勢した本はその後売却したそうだが、それで私は大学評議会にこのような抜粋頁の正規の大学図書を計画的に提案するものである。

さて、最大の作品には欠ける矮小さの長所を、ここで私が世に紹介する校長殿のプログラムは所有している。それは学校教師がその魂の乳呑み児や苗木と一緒に旅することになったとき、お手本となるような旅についての記述された報告書となっている。昔の分別ある学校教師達もそのように旅したものである。私は最初このプログラムをドイツ語から一ドイツ語へと翻訳しようと思った。しかしラテン語的キケロ的文体を全くドイツ語から追放したら、学校学識の白鳥の歌、最後の幕を意図的に早めることになる。いずれにせよその文体はラテン語の諸作品からは夙になくなっているのだから、と思った。

まずはただ旅行者達自身について一言。

私は犬をその中に数えるつもりはないので、一犬は一級生達の二頭のスピッツと三頭の鶉獵犬、それに校長の猪狩り獵犬から成り立っていた、一単に行軍者は十四名を数えるのみである。つまり一人の大学教師と、十二人の生徒、それに学校総督の娘である。この女性は、アテネの女性のように、ただ一人軽二輪馬車に乗っていた。両側には一緒に歩く歩兵がこの馬車に付いていて、干し草馬車に拘禁された逮捕者の衛兵のようで、御者席には一級生用ベンチがあって、レーゲンスブルクの選帝侯席の如く、百姓踊りの際、若者達が交互にコントラバスの音色やがらに合わせて離れるように、交代で座っていた。軽二輪馬車では馬用の餌箱の背後に旅の会議一同のための箱があった。教師は多くの料理店主の意地悪さを十分に心得ていた。それで彼の助言に基づいて、彼の言を聞き、同伴する一級生（一級兵）によって燻製のソーセージの幾本かが集められていた。その上彼は娘を連れて来ていた。娘が一切を、おやつも一緒に料理した。

それぞれの左の腰には、一容易に戦争は学問と組み合わせられるもので、一鉾が、鋭アクセントが据えられていた。十二人のしゃち[刀の魚]は、これで、必要とあらば、老蜜蜂の女王を意地悪く倒せたことであろう。この学校市長は、その腰には趣味のいい美服しか纏っていなかった。腰に有するものは少なかった。

校長については私は何も言わない。彼のプログラム自身が、いかに彼は教え、学び、書いたか語っている。旅館で彼は紙のリンパ液の乳糜管によって、一つの旅が調理するすべての学術的牛乳を吸収した。そして途中で彼は自分の写字板を偶然と鉛筆の最も重要な排泄物の下に置いて、生じて来るものを受けとめた。しかし十二人のミューズの息子達[学生達]を観察することが、私には許されよう。彼らは同様にすべての珍しい事の十二の羊皮紙の排気鐘と貯蔵器を用意しており、すべてをホガースのように[人に気付かれぬようこっそりと]親指の爪の上にスケッチするというよりはこの爪でもってスケッチするので

ある。私がこう考えても誇張であろうか、つまり十二のこのように広げられた張り網、引き網の中に、およそ学的舌や口蓋に提供すべきものの一切が、実際すべてのトガリネズミやすべてのホテルの蚤に至るまで捕らえられるに違いない。たとえ十一の網を逃れても、十二番目には引っかかって残るであろう、と。――六頭の犬でさえ全く観察能力に欠けて旅したわけではなく、何か顕著なものにぶつかり、早速いつでも及ばずながらそれに触れ、注を付け、誓うように後脚を上げたのである。――いやこれほど気の利いた旅行は、地球の存する限り、もはやなされないかもしれない。

ここにその旅そのものがある。私はただ時折個人的に平土間から演技者達の間に入って、話しかけることにする。そうでないとプログラムを清書することは退屈すぎるし、プログラム製作者も、私の方がよく知っていることをあれこれ語っているからである。私が吟味させ、同行している哀れな悪魔が、私の典拠である。

ミカエル祭[九月二十九日]のプログラム等

「すでに最古の民や人間達が、殊に族長達や古典の作家達が旅行してきたこと、――この古典の作家達についてはただ二人の最も勇敢な文体家、クセノフォンとカエサルとその軍と共に私は再び引用するが、――このことを証明すべき私のラテン語の復活祭プログラムは、ひょっとしたら何人かの権威を披露しているかもしれない、この権威が、自分の教え子達と一緒にドイツの圏に短い遠足をする学校教師の後押しをしてくれよう。私は現在のプログラムに進む前に、先行のプログラムの中で私の学校遠足を前もって正当化することを適切と見なした。この現在のプログラムについては幾つかの拾い上げた宝物のちょっとした財産目録と見なして欲しいものである。

しかしミカエル祭のプログラムの狭い平面積の中にはより重要な地形測量学的統計学的等々の立体面積は収められなくて、それにそもそも私は私の立体幾何学的その他の発見物をもっと大きな作品のために取っておくことにしているので、読者はこれらの紙面では巡礼者達の発見よりはむしろ物語を探したら良からう、――多分両方とも読めるであろうが。

ザルツマン[Salzmann(1744-1811)]氏とヴァイセ[Weiße(1726-1801)]氏は――他の人達は言うまでもなく、――世間に（事の成果は決めずにおくが）、教師が生長半ばの教え子達をいわば旅の放牧に追い立てなければならない次第を描こうとした。しかし彼らは他の学校教師が歩行補助車に立っているというよりは引いている年を重ねた学童との巡礼を明るみに出す権利を教師達から奪い去ったことは絶えてなかった。

時間と金の消費については我々の学校の管理者達やパトロンの殿方達に、私の鉛筆を披露しさえすれば、全く勇気を持って話しかけてよからう。私はこの筆を行軍の間ずっとポケットに入れていず、鵜竿のように差し出していて、名所と見えるものは容易に付着するようにしたのである。同様に珍しい事の硝石は、私の生徒達の十二の硝石の壁に結晶したものである。生徒達が準備させられた十二枚の記録用の写字板を硝石の壁と呼んで良ければの話であるが。生徒達には知識という真の語頭音添加、語中音添加、語尾音添加を通じて、十分に豊かに快樂の若干の語頭音省略、語中音省略、語尾音省略が許されたのでは

なかろうか。私は我々がいかにあれこれの若い貴族の男^{*1}と異なっているか、明確に定めようとは思わない。この貴族の男は、単に享樂のためにヨーロッパを旅し、しばしば旅行馬車で騎士団領地を次々に移りながら、一枚の写字板も携帯しないし、いわんや取り出すことはない。この男がその五感でかなりの知識をすべての国境の町や首都から吸収し、納棺し、しかしその知識をすべて旅行中きれいにまた滴らせ、落下させてしまうとすれば、この男はかの人間の魂に似ていよう。この魂が（ピタゴラスの体系によれば）動物や人間を通過して大旅行をし、それでも最後の人間の中に入ったとき、すべてのその学校遠足に関してまだ頭に残しているものは、まさにわずかの、この魂が最初の動物に侵入した瞬間に所有していた分だけなのである、つまりただの皆無なのである。[ピタゴラス学派は循環し反復する輪廻を考えていた]。

偉大なカエサルがその注釈のとき、フリードリヒ二世がその自分の注釈のとき、謙虚に自我を第三者に代えているのであれば、私にはここではむしろ、私の自我の代わりに単に私の官職名を置くのがふさわしいことであろう。

七月二十日校長は（現筆者であるが）自分の遊牧者達と共に出発した。その前に彼は彼らに簡単な演説をしていて、その中で彼はそもそも旅の優美さについて言及し、学校遠足に関して、夜学とは座席に座っている点でしか異ならないように特に要請した。この行軍規則と回状については、後に彼はその全行程で引き合いに出した。可愛い香箱、――文献学上のものではなくて、――台所のものが、つまり四輪の糧食船が、その上に乗り込んだ料理人と共に、これは校長の娘であったが、それに十二フローリン・フランケン貨幣の科料が給食費として楽しい曙光であって、それを旅の一行が玄関で希望を抱いて見上げていたというのは、地方視察というよりは都市視察に近い。どの一級生も惨めな散歩用杖や天才の杖の道化笏の代わりに、有益な測量竿を持っていた。――というのは測量用平板と測索は数人の著者達と一緒にすでに軽二輪馬車に積み込まれていたからで、――実際フィヒテルベルクとそこへ至る道路は測量のための最上の対象物が蟬集しているのである。

最初の朝は二つの旅を一度に行うことになった。つまり道路上の旅と道路地図上の旅で、これははなはだ面倒で勉強になるものである。小使番^{*2}が前に広げた特製の地図を持って行き、フェルベルが皆にその地図で、今どこの村にいるか、その村を楽々と示すのであった。このようにして足[フィート]を指で（地図は四フィート高い所にあるが）後追いした。かくてひょっとしたら動作が地理学と巧みに連結していたかもしれない。勿論その地図に記載されていないで、それでもまさに通り過ぎて行く一帯や、名所や、建物は、ビュッシングから取り出されて、教えられる必要があった。このビュッシングは某氏の活気ある養

*1 フェルベルのような博物館の穴居人や甲殻類はすべての人間を広大な支部に分割する。――例えば上流貴族、底流貴族、田舎貴族、都市貴族、奉仕の貴族、宮廷の貴族、官職の貴族を単なる貴族の人々と分割する。

*2 これはどのクラスの生徒達の間でも「奉仕の兄弟」に当たる。

子^{*1} のフェクサー[挿し枝の意味の名]殿が一行に、まさに通り過ぎて行く土地に関して朗読するのであった。校長は大方の村々に関して、衷心から近世の地理学の隣に、これに関してこの中世の地理学、古代の地理学が得られるのであれば、これらの地理学も携帯しなかったであろう。しかし残念ながら単にわずかなヨーロッパの国々が、例えばトルコ等が、地名を二重の名前で示すのみである。ちなみに校長はそれ以来、ホーマン[Homann (1663-1724)]的地図は何の役にも立たないと完全に確信している。ー 実際地図上では(その一帯ではないが)、荒野全体や皮剥人の小屋、岸辺の凸角は全く欠けるか(例えばホーフ近郊の火薬庫と若干離れた所にある紡績工場)、あるいはあるとしても全く間違った所にあるという場合、こう尋ねることができよう。この一帯を針穴写真機で輪郭を写し取って、それから地図をこの輪郭の上に置いたら、二つの等しい△のように両方が互いに重なり合うだろうか、と。

夕方教育学上の侍臣一同とその店主はフォークトラントの貴族の教区村テーペン[ジャン・パウルの、若くして亡くなった友 von Oerthel の父の所有地]に着いた。皆が泊まる所は旅館で、これは貴族の騎士領所有者のヴァティカン、あるいはルーブルが常に見守っているのである。ー 私はルーブルを、大きなローマの小さなローマであったネロの宮殿と比較してのことではなく、町の中の町と呼ぶが(Vossius の『様々な観察』参照)、これはあれこれの学校教師の小部屋からなるカルトゥジオ修道院、四つの杭[家]、ハットンの鼠の塔と比較してのことである。言わずもがなであろう。

校長が彼の娘と彼の息子達の後から入ったとき、不幸な目に遭って、彼は宿の主人に挨拶できなかった。旅行者達のすべての犬が二頭のテーペン犬の(これは亭主のスピッツと猟師のしゃこ狩り猟犬であったが)毛と耳に噛みついていて、動物どもの狩り立てが生じていて、どの犬ももはや見境がなかった。亭主は、度胸と明敏な頭の持ち主で、まず噛みついていての勢力の間に仲裁者として入って行き、まず自分の犬の尻尾を掴もうとし、この柄で犬を忌まわしい事件から引き抜こうとした。幾人かがそれに倣って、誰もが自分の犬の尾を握った。この混乱の中、校長の娘が叫び声を上げて、ー 猟師が帝国執行の鞭で人々と犬に打ちかかって、ー 所有者達がそこに立って、さながら六本の尻尾の音栓を引き出して、それ故いわばオルガンのリード系の管が作動して、騒擾者どもが吠えたとき、

ー そして校長自身がこの和平会議の際、講和の文書を、つまり彼の猪狩り猟犬の尻尾を手にしたとき、彼はかろうじて挨拶を取り戻すことができ、亭主に向かって『今晚は』と言えたのである。ー 些細なことを通じて自分の主人公達を最も上手に描くブルタークは、そして犬を有していたオデュッセイア[Odyssee, X VII.290ff.]とトビアの書[トビト、6]は両方とも、些細な冗談の猫戦争[ロペ・デ・ヴェガ作、Gatomachia]と驢馬の影戦争[ヴイーラント作品中の Onoskiamachie]の現受容を後押しするに十分であろう」。

*1 これは私の養子である。しかし私は、私がギムナジウムのためにわざわざ一人の生徒の学費、年金を払っているとして、校長殿が多分に単に私の身分と偶然とに対して敬意を表している賛辞をここでは正当に消してしまうことにする。私が登場するこのプログラムのすべての先の頁で私はフェルベルの称号付けを消し去って、その代わりテキストにこう記入する。フェクサー殿の養父様。

ー フェルベル氏の言う通りである。私は人々が「些細」という名で叱ると、立腹する。一体他に何があるのか。人生全体か、ー 単に最初の瞬間と最後の瞬間を除いて、ー 瑣事から紡ぎ出しているのではないか。そしてすべての重要なものは幾つかのバガテル[瑣事]の一本の撚り合わせられた縄に解かれるのではないか。ー 我々の考えを除いて、すべての偉大な人生は、時間部分の塵に砕かれる。ー しかしすべての偉大なものは、些細なこのかなりの数に他ならないし、それで摂理は些細なことと個人とを、あるいは皆無を、我々の地球では配慮しなければならない、些細なことと個人とが単により長い名前の下、全体であるにすぎないが故に、まさにそういう次第であるので、それで我々はこう確信するに至る。つまり超現世の精霊は宇宙の弾み車とその為の奔流とを創造しているばかりでなく、諸車輪の個々のすべての歯も創造している、と。...

「夕方何人かの生徒は山へ行こうと欲し、何人かは村を散策したい、二人はそれどころか平凡極まる人々の許へ行こうと欲した。しかし校長はそれに反対した。彼は夕方自然を眺めようと思っていた者達に述べた、明日はいずれにせよ(彼の作戦と旅行計画に従って)自然の許での自然神学と享受とが講義され、要点おさらいがなされなければならない、と。校長は、教師たる者は、旅行中生徒達を楽しませるよう心がける必要があると好んで思っていて、丁度黒人の奴隷商でさえ奴隷達に踊りや、歌や、笑いを強いるように、校長は笑うように命じて、生徒達を自分の周りに座らせ、卵形のテーブルの許で出来るだけ冗談を言った。冗談は許して良いと私は告白する。自ら冗談好きのキケロは正しく述べている、まさに真面目な男達が好んで上手に冗談を言う、と。それ故多分幾人かの埃を被った学校教師は、多くの髪粉を付けた冗談屋よりも笑う諷刺[Satura]^{*1}への真の素質を秘めている。同様にビュフォン伯爵も述べている。大抵の夜鳥は、殊に鷺木菟のフクロウ(ミネルヴァとアテネの鳥)、その族長風な外見にもかかわらず、「ぶつぶつ、お喋り、癖の強い性格」が溢れている、と。

夕方は支障なく経過した。ただフェルベルが取って来るように命じて、キャラバンがさながら晩餐のもぎ取りのための果実の枝のように座ることになった密輪のレバー・ソーセージの棒全体を見ると亭主の顔を自ら丸く縮み、皺を寄せることになって、一つのソーセージの先端となった(原因はそれ以外には考えられない)、ー 要するにフェルベルはその顔つきのことをほとんど気にせず、皺が寄るに任せていた。彼はむしろ自分と自分の一同の紳士方のために床全体を夜の臥所に注文した。ただメルゼブルクの荷馬車御者だけが、彼の娘の隣に、藁の隣人として横になっただけであった。

それでも全員に翌朝亭主は清算のとき、二、三クロイツァー分のわずかな金を高く付けてきた。それも校長が自然の満喫を説く予定の当日の朝であった。しかしフェルベルは生徒達に許される儉約の手本を示そうと思って、亭主と喧嘩を始め、何も上乘せないヘルンフト派やロンドンの小物商達との彼の違いを長く人々の目に晒したので、彼は本当に

*1 そのように私は諷刺[Satire]を書く。諷刺はカサウボヌスによると Satura という言葉に由来する。つまりまだ斑点の内容の文書のことであるそうであるからである。それ故果物皿[lanx satura]はあらゆる種類の果実の皿である。

一グロッシェンまけさせて、疲れた亭主は毒づいて、悪態をつき、誓った。自分は校長とその群に、彼らの焼き串にもかかわらず、彼らがまた燻製を彼の許で食べようとしたら、干し草用熊手と穀竿で向かって受け止めようと思う、と。滑稽な男だ。

教育効果のある学校遠足のフェルベルの方法は、毎日別の学問をそそくさと執り行うことである。今日一行は呪っている旅館亭主から四アッカーの間、美しい自然を自然についてのシュトゥルムの考察の手本[Christian Sturm:Betrachtungen über die Werke Gottes in der Natur. 1772]の許、その第一巻を観察することになっていた。シュトゥルムが荷解きされ、開けられた。今や目を満足げに辺り一帯に投げかけることが必要になった。しかし全く致命的なことになった。雨雲が太陽と一緒に生じたからといったことではなかった。また校長が六月三日と太陽についてのシュトゥルムの観察を、つまり次の美しい言葉、『私自身太陽の活気付ける力を感じる。太陽が私の頭頂に昇ると、私の魂に新しい快活さが広がる』を読み終えたたん、突然また閉じなければならなかったからでもない。 ― というのはこれは余り役に立たなかったからである。実際幸いなことに、同じ巻の中で四月十六日と雨についての観察も結び込まれていて、これを瞬時に開けて、読むことになったのである。そうではなくて、真の不幸は次の次第であった。つまり（長いプログラムを簡潔にするために校長はこれから先『私』と言うことになるが）私が次のような文を紹介していたとき、即ち『最も本来的理解では、雨は天の贈り物と呼ばれるに値する。誰が雨のすべての恵みを描写することができよう。諸君、その恵みのほんの幾つかを観察することにしよう』 ― そのとき私はやめてしまった。そうせざるを得なかったからで、 ―― まことに生徒達と雨についてのシュトゥルム[嵐]と自らの考察を舗装道路上で述べようと思っていた教師の前を、そのたびに臭い鱈の荷馬車がぎしぎし通り、その間にはいつの間にかうるさい犬が飛び込んで来て、 ― 更には新兵のよろよろした歩兵隊が、これらは教師を、もっと洗練された徴募士官達自身よりも更に一層強く笑いものにし、歌い上げるもので、更に教師が挨拶すべき特別郵便馬車が車道を越えて踊りかかって来るとなると、雨が降ろうと降るまいと、教師は牧師のシュトゥルムを仕舞い込まざるを得なくなるであろう。

仕方なく我々はツェトヴィッツへ降りて行った。美しいイギリス風なポプラ島が、 ― 領主所有のもので、 ― 色付き木製の橋を越えて行くよう我々を誘っていた。しかし校長は、先に紹介したフェクサー殿がこう請け合わなかったならば、他人の敷地へのこの侵入をためらったかもしれない。「大丈夫です。料理人を知っています」。島ではいわば育つ限りの外国産の植物が植えられていた。私は生徒達と木々の間を回って、木々を大方分類した。植物学の授業がひよっとしたらシュトゥルムの授業の償いとなったかもしれない」。 ―

― 分類の間、彼の娘コルドウラは、好きな所に行けた。偉大な教育参事官、あるいは教育会長は、彼女あるいは女達を大して気にかけることはなかった。「女達は」と彼は言っていた、「自然の真の不具者であり、自然ノ輝カシイ欠点、百姓訛、あるいは生来のコルムビーネ[道化女]、あるいは眠れるモナドだ」。哀れなコルドウラはどうに自分の母親を、母親は同時に彼の父親であったが、死の天使によって彼女の心から連れ去られる目に遭っていた。老いたシュトゥルムの観察者[父]は、彼女を最後の小屋に、 ― さながら

将来の神殿の幕屋のように[歴代誌上、28.11]、　ー　うるさく言って追いやっていた。コルドゥラはほとんど知らず、日曜日の歌しか読まず、汚れた洗濯物に名前を記すときの文字しか書けず、ただ罪もなく、寄る辺もなかった。彼女の父親は、大方の学校教師のように、　ー　ローマ人によって甘やかされて、　ー　女性には、ただ肉体が料理人のようになることと、魂が料理女のようになることしか許さなかった。彼女は今日自分の虐げられた心と共に、その心には真の受難の他には何の受難もなく、その心はまだ技巧的な感傷で麻痺し弛緩するまでに育ち、閉ざされてはいなかったが、学生の一同からそっと離れて行った。そして水の輪の岸辺に腰を下ろした。その輪は美しい島を、靄の多い暈が月を取り囲むように、囲んでいて、彼女は水辺の向こうのピラミッド[多分トイレ]を墓碑のように見つめていた。棺の上にあるピラミッドより他のピラミッドは知らなかったし、今朝夢を見たのであった。彼女の母がまた元気な唇で微笑んで、腕を愛しそうに彼女の方へ差し出したのであったが、その腕は余りに短いものであった、腕からは手が落ちていたからである。技巧を知らないコルドゥラは、何の圧迫装置によって自分の心が搾られているのか分からなかった。　ー　血の色の朝焼けによって注がれた天と、自然の神殿の中のウグイスの教会音楽、それにポプラの静かなそよぎと揺れと、その動きでさながら流れ出る雨粒、こうしたものすべてが、彼女の孤独な魂をより陰鬱にし、さみしい心をより重苦しくし、冷たい目をより熱くしていることに気付かなかった。　ー　ー　彼女はエプロンに目を留めた、母親はエプロンの襷の縁取りの所でその裁縫を打ち切ることにしたのであるが、そのエプロンの間近に目を持って行き、今日何故その編み目がはっきり見えないのか分からず、目から滴を吹き去ったとき、滴はポプラから落ちたものであろうと考えた。...しかし彼女がびしょりになってしまうと案じなければならなかった老父は、この憂愁な心の女性をそのエプロンから一級生のテントの中へ口笛で追い戻した。　ー　ー　私は今、すべての汝らの家々を覗き、聞き取っているような思いがする。そこでは汝ら、四角な心と太い幹の心の父親達と夫達とが、汝らを憎むべきなのに、汝らを愛そうとしている優しい魂を支配し、叱りつけ、苦しめ、困らせている。　ー　そこでは汝らの汚い胼胝だらけの拳が扱う消え入るような心が、　ー　汝らが、ひょっとしたら永遠の涙のために穿ってしまう懇願する目が見られる。...君達、穏やかな、優しい花々、重く暗い雲の下で屈み込んだ花々よ、私が君達に望むものは他にあらうか、君達が汚され、色褪せ、砕かれた花弁と共に朽ちる前に、悲哀が君達を蕾のまま折り曲げ、別な大地の春のために折り取らんことを、と。

　ー　君達のせいで、私は時折華奢な、永遠の太陽の下で、花咲く君達の姉妹を一人、つまり歓喜の月[五月]に息づく花を見いだしながら、格別私は喜べない。というのは君達の仲間、その荒涼たる人生は、陰鬱な果物貯蔵庫で凍えてしまった十二月の夜となってしまう者達のことを考えざるを得ないからである。　ー　ー　それでも君達の心は死よりも何か素晴らしいことを行えることだろう、　ー　身を捧げることができることだろう。　ー　ー

私は軽二輪馬車の隣を歩いて行き、静かなコルドゥラをずっと見ていたかった。　ー　ー

「ホーフへの路上で私は一級生達に言った。バイロイトのフォークトラントは幾つかの産物で豊かである、つまり穀物、燕麦、馬鈴薯、若干の果実（新鮮なものと干したもの）等と注記しなければならない。しかしどれほどかは提示できない、と。

私と私の一行がホーフの舗石の露地へ入るのが目撃されて、まさに塔からラッパが吹か

れた。私はこう述べるからと言って、他の人々のように自慢に対するわざとらしい恐縮を押さえ付けることをしない、――というのはまさにそうすることによって最大の自慢を明らかにしているからである。――我々が進軍したとき、すべての窓が上がり、その奥からすべての頭が出て来たというのは、実際必ずしも追従的理由からではなかったに相違ないのである。ドイツの学校の若者、ラテン語のギムナジウムの若者が我々を振り返って見て、店の若者は帽子を取って店の戸口に立っていた。そして家の中へ入ろうと思っていた者は、玄関で立ち止まった。私は苦勞して荷馬車の御者用の旅館を尋ねた。私はそこに宿泊することを、スウィフト同様最も好むからである。私がザクセンの郵便局の前で軽二輪馬車とその衛兵を止めさせたとき、そこで料金前納の手紙を預けようと思っていたからで、より安い料金の所を探そうとそれまで私自身運んでいた手紙であったが、そのとき、申し上げると、緑色の琥珀織りの前掛けの快活な美丈夫が我々の間に寄って来て、彼は、

――我々を残念ながら新規の客と見なして、というのは郵便局は同時に大きなブランドンブルクの旅館の中にあるからで、――私の娘を降ろして、我々皆を歓迎しようとした、そしてそのことで私は狼狽しそうになった。しかし私は左程我を忘れず、冷静にもっと庶民的な旅館への私の問い合わせを繰り返した。そして結構なことに、その若者は好意的に笑って、門から再び出るよう指示してくれて、――我々はそのように行った。

私は私の髭を広い旅館の部屋の中、ものを噛む荷馬車の御者達の岩の裂け目[口]の下、一人の一級生に剃って貰い、私の髪を小使番に縮らせて貰った。我々の世襲台所管理人は我々の燻製の腸を火にかけた。天の計らいがあれば、私はこの仕事好きな子供をやがて立派な貴族の屋敷に侍女として働かせたいと願っている。

ポンタク酒商店からの旅の従者が、窓際で尋ねられもしないのに最良のドイツの政治的新聞の悪口を言い、罵り始めて、殊にその名ギルタナー[Girtanner(1760-1800)反動的]氏とホーフマン[Leopold Aloys Hofmann(1746-1806)悪評高い]氏をはなはだ味噌糞に、言葉の中傷で貶して、――これについては阿呆とか時代の偽造者とか精神的ミュルミドーン人[蟻族の噂]といったわずかなことしか真似て言えないが、――私はシャボンを付けながら願った。私の代わりに帝国検事が髭を剃られていて、刺激され、検事がこのような馬鹿の裾をつかめばいいのに、と。このフランス至上野郎は、あたかも私や私の旅のシュネプフェンタール学園[Salzmann 設立]は全く目に見えず、見るに値しないかのような振りをしようと努めていた。もっとも私の郎党の最も取るに足りない者でさえ、このフランス人よりももっと反乱や政体について――殊に古代のそれについて――心得ているに違いなかったけれども。私はただ残念ながら髭剃りのナイフの下で顎を動かせず、この彼のナンセンスを論駁できなかった。しかし私はナイフから出て来るや、この人間に丁重に近付いて、彼の迷い道を正し、彼の民主主義的目的のそこひを取り除き、彼を啓蒙するに吝かでなかった。私は隠さずに述べた。自分は決して国民議会を買い被ったことはなかった、私が私の部下達に現今のフランス人集合について教えた概念は全く彼の概念とは異なるものである、と。『しかしながら私は認めます』(と私は言って、この大食家に意に反して一廉の学者に対するように付き合った)『フランスの徒党化は集合という名前よりは形式上反乱に値する。この徒党化は法律が暴動とか騒動として要求しているだけの数、つまり十五人[正しくは十人]を(第四巻、第三節、暴力により強奪された財産の[訴権について])本当に数えるばかりでなく、もっと多いのであるから、と。しかし貴方もまた処罰

を容認しなければなりません、この処罰は古代の、共和主義ではあったローマ人達が反乱に適用したもので、磔刑、流刑、動物どもの前への投下です。いや貴方がキリスト教徒としてそれを緩和しようと思って、我らの法制定者のユスティニアス皇帝のように、単に絞首台を利用しようと思って、―― これはドイツ人でさえ、普通殺人や路上強盗には死刑とせず、それでも暴動者には絞首刑ですから、貴方はそうせざるを得ませんが、―― 単にヘルフェルト[Hellfeld(1717-82)]を参照しさえすれば分かることで、―― しかしまだ穏やかさでは貴方は連合諸国軍に及びませんな。これらは国民を、彼らが暴兵に化けたというわけで、やはり単に戦時国際法に則って、ただの銃殺にしようします。これは旅の従者には難し過ぎる話になったと私には分かったので、徹底性を犠牲にして明確さを求めることにして、こう指摘した。つまり子孫はその父親を(あるいは最初の所有者を)、ギムナジウムの生徒は彼らの校長を、従って領民は領主を支配することはできない、いわんや廃位させることはできない、と。私は彼にこう尋ねた。各人がフランス人の哲学者達の代わりに古代の作家達を編集し、注を付与していたならば、一体このフランスの倒逆法は可能であったろうか、と。そして何故まさに私には恵み深い領主様に対する反逆的思いが決して生じなかったのか、少しでも私に対して解いて欲しいと頼んだ。『その理由は』と私は自ら言った、『私は私の古典作家を追求し、ペイン[Thomas Paine(1737-1809)]と彼の一味徒党を全て軽蔑しているからです。―― もっとも私は彼らを皆読んでおります。』

―― 私はこの道化師にこう更に非難しようと思ったのは腹の立つことである。つまりすでに動物どもの王達、黒禿鷲、鷲、ライオンが自身の家臣どもを食っているのだとか、―― 侯爵というものは、全民衆に好意を抱いていなくても、その中からの若干の個人の面倒は見えて、従って常にまさにかのフランスの哲学者達によって考え出された摂理、即ち個人ではなく類のみを幸せにする摂理の真逆のことをしているのだ、―― それにそもそもまさに雷が鳴り稲光がする政府の下、忠実な辛抱強い領民は最も鍛えられるのであり、キリストがまさに受難の際に出現するようなものだ、と。要するに私は公の新聞の執筆団の人間を大切にしようと思ったのである。しかしこの共和主義者の兎は口笛を吹いて、私の教化に歌を吹き込み、散文の言葉すら言わずに、ドアから出て行ったので、私は彼が私の演説と私とを軽蔑しているかのように思われた。しかし私はこの教化を私の若者達のいる所で吹き込んだ、彼らにはもっと効果があった。私はそれどころか、我々がカティリナ[古代ローマの陰謀家]に反対する演説を開陳しようとするときには、彼らにもっと明確に、パリ人とは古い国体に対するその城壁破壊器を投入するカティリナ達や、カエサル達、ペイストラトゥス達に他ならないと示すことに決めている。...

次のような脱線を目に見て頂きたい。私は半日かけて私の図書館で、当地のギムナジウムの公の教師達についての報告を調べてみたことがある、彼らの中で誰が領主に対して反抗したか、と。しかし無上に嬉しいこととして知らせることができるが、最も偉大な文献学者でも人文学者でも、―― カメラリウスやミネリウス、ダンツ、キケロの音声器官とローマの音声を有していたエルネスティ、ハイネ氏にしる、詞華集選者のシュトロート、それに他の者達等々にしる、―― それにまた殊に校長から五級教師達(これを含む)に至る当地の教師達の物故者の部門にしる、決して反乱を起こしたことはなかったのである。男達は決して国父や国母に対する謀反を演じたり、擁護したりしていない。男達は全員勤勉に、病になろうとも、様々なクラスで、八時から十一時に至るまで講義し、確かに

共和国を称賛しているが、しかし公然と単に二つの周知の古典の土壤、大地の上の共和国で、それも単にラテン語とギリシア語故のことなのである。

講義と食事は終わった。我々は立派に帽子を取ってホーフの公の建物を見物してよかったことであろうが、そのとき一つの原動力に対する、――つまり身振りに対する心配が生じてきた。私は亭主に彼の上の部屋の拝借を申し出た（数分間のこと故支払いには値しなかったであろう）、その上の部屋ではわずかな軽いエレガントな動作をするだけの予定であった。

つまり私はすでに長いこと私の生徒達の一人を通じて（最大の印象を残すようにする為に）公開の演説練習の際、外的優美さは全く欠かすわけに行かないとはっきり言明させていた。見知らぬ人間というものは、バッハ[Emanuel Bach (1714-88)]的指や足の運用なしには上手に働きかけることのできないいわばペダルや手鍵盤である。私はいの一番に申し上げるが、この点でこのような外的肉体的詩的フィギュアを推奨しさえしない、いわんやそれで自ら範を示すことのできない普通の学者達とははなはだ異なるのである。しかしセネカは『心の平静さについて』の第三章で全く的確にこう言っている。『立派な市民的な努力は全く無益ということはない。というのは単なる傾聴、凝視、外見、合図を通じて、黙した頑固さを通じて、それどころか歩き方そのものを通じて実を上げることができるのだから (prodest)^{*1}』。常に自分の頭、帽子、杖、肉体、手袋を巧みに持って、そのクラスがこの古典を手本にしたとき、何も非の打ち所がない具合にすることを時に思い付く教師はいないのである。『我々は今日』と私は上の部屋で模倣者達に言った、『最も上品な階級の人間に会わなければならないだろう、我々は学校にもビリヤードにも赴くことにしよう。――そもそも我々は長いこと外面的洗練さの名声を主張している町をあとこち歩くことになる。この町では私は、汝らが失敗する所を見たくない。――例えば汝らが社交界を訪ねて何かに微笑を浮かべなければならないとき、どんな風に微笑するか。フェクサー殿、諷刺的に笑って見給え』。彼は必ずしも的確ではなかった。――そこで私は彼らにかの洗練された、多分に二つに分かれた、いつも通用する通常の微笑を演じてみせた。その後私は彼らに嘲笑の高笑いを教えた。まずは垂直な高笑いで、冗談で口は、猪刈り馬車上の猪の長鼻を木釘がそうしているように上に反らしているもので、第二に水平な高笑いで、これは口が耳たぶまで割れると、その限りで不完全なものとなるものである。

私の聴衆は私の微笑を模倣した。この微笑は正しいものであったが、甲高過ぎるように思われた。さてお辞儀の要点おさらいがなされて、私は丁重さのすべての体育的練習をごく微細な揺れに至るまで徹底させた。私は真の作法の男は尻をめったに見せてはならないと示した。これは勿論途方もなく疲れるものである。それ故私はドアから出て、また入って来て、ドアを空の手で、何も見せないという統語法に従って、閉めた。――『人間の末端は』と私は言った、『庭園の末端同様に全く隠してしまわなければならないので、むしろ末端そのものでドアを閉めることだ、あるいは開けたままにしておくべきで、これは

*1 しかしここにもっと良い原典がある。Nunquam inutilis est opera civis boni; auditu enim, visu, vultu, nutu, obstinatione tacita, incessuque ipso prodest.

多くの者がそうしている』。今や分遣隊が出て行き、私の顔をずっと覗き見て、また入って来なければならない。『私が若い頃は』（と私は言った）『私はよく数十五分、歩くことにして、逆向きに歩いて、この後ろ歩きのかつを足に覚えさせるようにしたものだ』。

かの自惚れたフランス人は、我々が一部屋全体に対して一般のお辞儀を容易に優雅に示していることに気付かない。しかし私は少なくとも一般のお辞儀を範例として手短に呈示して、私の郎党が単に特別なお辞儀を、より気付きやすい個々の各座った椅子に対し、ほどのほどの程度に真似ていることに安堵していた。こうした統語論的フィギュアの後、皆は急いで階段を降りて行き、私の模倣者達は亭主の前を通るとき（冗談で）先の身振りの要点おさらいをし試演した。

下の部屋では亭主の二人の子供が一個の八の字形パン[ブレーツェル]に噛み付いて、戯れながら引っ張って、どちらが噛み裂きながら最も大きな弧を得るか遊んでいた。少女の方はすでに噛み付く前に、右手の指先に左手を載せて示して、『これだけあの男の人（私のこと）が好き、でも女の人（コルドゥラ）はこれだけ好き』と言い、左手を肘の上に置いた。私は教育者として亭主に、彼の子供達には一般的な隣人愛が欠けていることを隠さなかった。ブレーツェル食いは全く子供らをだめにし、放心と利己心とくだらぬ事柄への嗜好を養うと述べた。『おまえらは筆記帳、メモ帳をどこに置いているのか。腰掛けて宿題をなさい』と私は命令口調で言った」。 —

— 大人達は、殊に女達は、普通、子供達に絶えず禁じてしまう傾向がある。 — 少なくとも子供達にそのことを許す前には禁じてしまう、 — そしてすべての子供達のさやかな試みを叱る、殊に喜びを叱る傾向がある。

しかし子供達自身は喜びをぶちこわすことはないので、喜び給え。たった一つの口から引き千切った喜びを後に君達は繰り返すことができようか。それができるにしても、以前すべての甘い果実に食い付き、吸い付いた若い渴した口と口蓋とを再びもたらすことができようか。すべての後の満喫をより大きなもの、より賢明なものと見なし、春には単に夏の控えの間にいるかのように待ち、現在にあっては未来の近さしか気に入らない永遠に節約好きな人間は、この人間は跳ねる子供達の頭を脱臼させる。子供は前方も後方も眺めることはできないけれども、単に前方を向いて、後方を向いて、享受すべきものである。両親が法の槌と鞭とを持って、黄金の子供時代の幕屋祭を灰の水曜日に変えてしまい、自由な[ウィーンの公園]アウガルテンを不安なゲッセマネの庭に変えてしまうとき、消耗性の青春の思い出が殉教物語のように眼前に居座るのであれば、誰が私に色彩を砕いて、私の陰鬱な頭に青春のタヒチ島の新鮮で爽やかな風景画をかの干涸らびた男性的時間に描いてくれよう。この時には人々は職責を担う評価される奴となつて、きちんとしたまともな男となり、自分のパンの為の学問の他になおかなりのパンとそれに少しばかりの名誉を貰い、世間での単なる出世と生計の余り、ただの — 悪魔にしかならうとしないのである。

— 「私は一時に私の郎党を幾つかの主要道路を通ってホーフのギムナジウムに案内した。我々は幸いなことに、休暇のせいで、我々を案内してくれる寄宿生を除いて誰もいなかったもので、それだけ一層容易に正確に、すべてのクラスの、ベンチや講壇の、全建築様式を視察することができた。この伝記的旅行日誌で一般的に、この町は一つの市役所と四

つの教会を有すると知らせても、私の統計学的旅行日誌の大きな章からの浪費はまだ大した量ではないであろう。この五つの慈善財団の周りを我々は単に行進して見回した。それらは全く立派なものであった。我々が入ろうと思った最後の公共の建物に関しては、廃墟さえないことを残念に思った。晒し台のことである。

大きな社交界が若者に及ぼす影響への対処を練習によって鍛えることを私は好む。この原則に従って、私はためらわず私のささやかな学的一行、しかし当惑した一行をビリヤードに連れて行った。教師という者は聴衆を籠絡するかの簡単な方法に欠けざるを得ないのか私にも分からない。無上に嬉しかったことに、私は私のつまらぬプログラムの昔からの読者に出会った。つまり当地の印刷所の先の植字工である。何人かのギリシア商人がビリヤードのキューを手にしていて、現代ギリシア語で数えていた。私は後に頼み込んで一緒にプレーすることが許されたので、それで私はギリシア人同様に私の球を現代ギリシア語で数えた。少なくともドイツの中ではフランス語よりも分別のあることであろうからである。

私はホーフから別れる前に、亭主と更に部屋のことで執行訴訟、中傷訴訟をしなければならなかった。我々がお辞儀したり微笑したりした部屋のことで、彼がその部屋の貸しを記帳しようとしたからである。しかし私は彼に挑戦状しか投げかけなかった。このような状況のときは、打ち倒せという罵声を浴びながらも、評判の女神ファーマの二番目のトランペット[悪評]を吹かれながらも、悠然とその場から離れて、打たれた後のテミクレスのように[殴るがいい、しかし私の話も聞けとエウリビアデスに言ったとされる]、綽名の方へはもっと高貴な意図に従って、振り向かないことが最良である。

我々と一緒にザーレ河畔のシュヴァルツェンバッハまで付いて来た落下する洪水はシュトルム牧師を過失から棒鱈のように水浸しにした。この全行程は勉強もままならず厭わしい進行であった。私は私の軍の疲弊をクセノフォン軍のはるかに大きな疲弊で慰めた。それでも私は、我々が一夜を過ごす市場町のシュヴァルツェンバッハに何人かの一級生を送って、市場町に萎えた惨めな脚を有して、その脚で雨が降り続くか否か感知する住人とか異邦人は住んでいないか隅々まで調べさせた。というのはウオノメや凍えた足先はさながら将来の天候の触角、指針となるからである。しかしどの地にもこのような予言の足は欠けていた。私はフェクサー殿が、フィヒテルベルクから戻って来なければならない自分の養父殿に会う可能性があって、彼は海燕よりももっと上手に天候を予言すると私に打ち明けなかったら、多分引き返すことまでしていたことであろう。気象学的答弁を期待して、私は修学遠足の継続を決めた。

夕方私の許に何人かの勤勉な一級生がカルタ遊びの特例の申請を申し込んだ。私は条件付きで、特例を認めた。このようなことは単に旅のときに許している（わずかな教師がカーニバルのときそうするようなもので）、例えば火酒を許すようなものである。カルタを全く知らないような者達を私は更に評価していて、それを守り続けるよう勧めている。いやいわば報いるために、私は彼らと一緒にテーブルに着いて、彼らに、――ここでは理論的知識は啓蒙的であること、実践的練習が退廃的であるようなものである、――通常の遊びの類いを教授した、ポーカー、全部頂き、カルタ、賽子遊びの飲んだくれ、牛の尻尾である。――その後で私は宿の女中から右の濡れた長靴を引き抜いて貰わなければならなかったが、その際、左の長靴は彼女の背骨にあてがうことになった。それほどに

天候ではひどい目に遭った。

朝方私は、安い金でフラシテンの帽子を求めた後、――冬のせいですべての帽子の値段が上がっていた、――当地に住んでいる貴族を表敬訪問した。私の娘をいわば奉公人部屋の港に降ろすためであった。娘はどこにも就職できなかった。当地の貴族が一人の学校教師と面会する際の気さくな態度に対する私の賛辞はそれだけに一層純粋なものである。――私は忘れることができないが、――私が自ら居間に引き入れられ、私の勤務年数や歳入、子供の数について注意深く問い質され、必ずしも不快げではなく（丁重ではなかったが）傾聴された。私は時折かの諷刺的作法で返答したが、この作法は私がヴァレリウス・マキシムス[Valerius Maximus、一世紀の歴史家、技巧的文体]の本から立派なアッティカ風塩の切片[機知]として味わい、舐めたものである。実際、高貴な貴族、低級な貴族は常に、学者を恭しく顕彰して面会するよう心掛けている。ただ学者達の肉体は（貴族が要求したら）貴族のサロンで、肉体に束縛された魂の晒し台や晒し柱となる必要がないだけであり、また服装がバステューユの甲冑に似ている必要もない、これらは肢体のことごとくを硬直させ、不動にしてしまうものであった。私は貴族が、本から汲み出せるような礼儀作法の他に、市民階級の客人達に次のようなことを要求することに少しも反対ではない、つまり客人達が柔軟さと賛辞のわずかな蠟を（蜂が自分達の下半身のすべての継ぎ目から蠟の扁円塊を押し出すように）表情や言葉の中にけちくさくなく呈上することへの要求である。そもそも今は丁重なドイツ人が以前のさばっていたフランス人の粗野な者を打ち負かす時代となっている。

我々は風の強いひどい天候の下、市場町を後にした。それでも――今日はラテン語の会話がなされる予定で、そのために私は夕方前もってテレンティウスとプラトゥスを準備のために渡していたのであるが、――キルヘンラミッツの森全体を通じてラテン語を話すことに邪魔するものは何もなかった。しかし私のように議論の素材を、近代言語の文法学者達が現実に行っているように、独自に切り取り、分離しなければ、人文主義者にとって単なる講義を通じては成果は余り得られない。教師というものは、具体的なフレーズの宝角をその先端に至るまで振りまきたいときには、今日は例えば単に神性や神々への畏敬について、明日は単に衣服について、明後日は古代人の立派な国家言語や宮廷言語における家畜について話す必要があり、すべての他の今日のフレーズにとっては馴染みのない思考を追放する必要がある。この規範に従って、我々は今日、――卑俗な生活における最もありふれたインタビューの章からの一つとして、――ラテン語で呪いや誓いを行い、片付けることにし、これに更に私は罵りを結び付けた。フェクサー殿は立派な呪いを発し、彼がプラウトゥスを古色蒼然たるものとしていないことをよく示していた。再び他の者達が誓いによって、幾人かが罵声によって際立っていた、それぞれ記憶がしっかりしていたり、勤勉さを保っていたり、この両者が揃っていたりしたためであった。

キルヘンラミッツでは豪雨のため我々は旅館に入った。そこで呪いは続けられた。私は旅館の人々のような平民の人々が示した驚きの反応を若干面白いこととして観察した。私が私の生徒達に、――古代人が本当にバッカス祭や一月二十二日のエフェソス祭に行われたような、今でもなお近代人がワイン収穫祭やテムズ河畔で行うようなこのような罵声祭で、――ザクセンハウゼンからの次のような難しい罵りや呪いの翻訳を課したときのことである、『悪魔が汝を引き裂いて、雷が汝を九百万マイル離れた大地に投げ落とすが

いい』と。その際教師は絶えずフレーズで生徒の世話をしなければならないのである。私は、二人の生徒が冗談の罵りのせいで本当に仲違いしたことをこれ幸いにして、互いにぶつかり合うのを喜んで許した、勿論単に死んだ言葉[ラテン語]によるものである。

天はすっかり天のダムを決壊させた。雨水のため我々は包囲されたオランダ人のように旅館に留まることになった。そこでは最初一文も飲み食いされず、十八時間に及んだ。私は熟慮して単に十八時間と書く。我々は次第に亭主に、我々の呪詛や我々の『隠語やユダヤ人訛りのドイツ語』で疑わしい目で見られるようになった。私が娘に ― 彼女は若干ラテン語の書き方を解し、 ― すべてをラテン語の方言で命じ、 ― それを彼女が ― 生きた行間注釈として、 ― 旅館の亭主にドイツ語の方言で要求することになっただけに尚更のことであった。この男は我々がまともであるか疑念を抱いた。モペルテュイ [Maupertuis (1698-1759)] が建築を推奨したラテン語の町に市民権を有して、一軒の家を有する男は、三倍浄福である。学者が一つの露地に、最も愚鈍な男の隣に住まなければならないドイツでは、これは三倍惨めである。旧約聖書では四十もの自分達の町がレビ人達には住まいとして与えられたというのに [民数記、35.6f.]。 ― 私のヘロドトスの旅の目的は統計的なものであったので、私は全く当然なことにキルヘンラミッツの民衆の数、平民の数をも探りたいと思った。しかし料理店主にそのことを尋ねなかった。 ― 今やあれこれの用心を無事に済ますことを願っていて、 ― 私の連隊を（しかし人目を引かないよう、前哨中隊に分割して）市場町へ行商に送らせて、各家庭の身上書を遠回しに調べさせた。それでも人目を引くことになった。夕方百姓達が旅館に集まって来た。 ― 我々の移動する犬小屋や我々の地理学的矢来やランタン of 支柱が嫌疑を招き、人々は見守り、 ― 全く耳をそばだてていた、私が彼らの耳を（見せかけで）同じように集まって来るフランス人の武運についての追従的情報で籠絡したときのこと、 ― そしてその場から離れなかった（私はそれを空しく期待していて、待ち続けた）。私は我々用に一部屋借り受け、私の郎党に小声で伝えた。『この部屋に上がったのは他にもない、こう伝えるためだ。我々は殺害されなくなかったら、最初に寝入るときの真夜中になお出発しなければならないぞ』。要するに我々はそれを敢行して、真夜中過ぎに全員十分大胆に出発した。ビールの客達は ― 我々の数学的武器のせいであれ、あるいは私が偉大なマリウスのように見えて、単に顔つきで殺害者を遠ざけたからであれ、 ― 少しも我々に襲いかかる勇氣は持ち合わせていなかった。

我々がマルクトロイテンに入ったとき、暗闇の中、私は、我々が通り過ぎる橋は六つのアーチを描いていなければならないと ― ビュッシングに基づいて知っていた。しかし印刷されている事柄が後に本当であると眼前にすることははなはだ嬉しいことである。我々はある上品な旅館で九時まで麦藁の上で眠った。雨が屋根の上に音立てて降ったからで、別の物音 [太鼓] で目覚めることになった。つまりあるハンガリー人が射殺されることになった。[オランダの乱の平定のため 1790 年秋皇帝軍がホーフを通過した]。彼は分離派のオランダへ派遣される連隊から何度か脱走したのであった。私と私の一団とが来て来たとき、すでにサーベルからなる一つの円周、あるいは棘帯が罪人の周りにできていた。私は上級の将校に冗談の意見を述べた。此奴は今占領された自分の生命の要塞から全く榮譽礼を受けて去る、つまり鳴り響く演奏、燃える火縄、仮に命中したら口に一つの弾を含んで、と。その後犯罪者はラテン語で述べた。縛られ、脱がされる前に、若干の衣服を自ら脱ぐ

ことを許されたい、連隊の老いた洗濯女に支払いの代わりに洗濯賃を遺贈したいから、と。私は告白すると、古典語の浄化主義に賛同する男にとって、自分が訂正を許されないドナトゥス文法違反は独自の具合に応えるもので、それで私は、犯罪者が自分の軍隊での遺言を出来損ないのハンガリーラテン語で仕上げたとき、激昂して一級生達に語ったものである。『すでにこの行商人風訛りのせいだけでも彼は銃殺に値する。飾られた文章とか慣用語法について私は要求しない。しかしプリスキアヌス[Priscianus von Caesarea,500年頃]に対する重罪は誰もが避けなければならない』。その後すぐに三発の弾が彼を打ち倒した。これを私はさながら授業の穀粒、あるいは撚り糸星形具として利用して、古代の軍罰についてのあれこれの考古学的見解とそれとを結び付けようとした。かくて私は幸い犯罪者に対するかの同情を消し去った。この同情に対してはすでにストア主義者が明確に反対を表明していて、ただ女性が抱くことは仕方ないと私は見なしている。それ故公正な方は私の娘が被告人のせいで目に涙を浮かべていたことを大目に見て頂きたい」。――

―― 私は当時フィヒテルベルクから戻って来たとき、マルクトロイテンで自ら哀れなハンガリー人の手短な殉教物語を肉屋の許で問い質した。この肉屋は五年前小ローマあるいはティルナウ（この不幸な男の父祖の町）で屠殺業をしていたのであった。この不幸な男はすでに銃殺ということで私の関心を引いていた。銃殺は私の空想にとって最も残忍な死に方である。私はこのような跪いた哀れな者の姿を思い描くことをほとんど好まない。銃殺されたヴァルリミニ[ハンガリー風ではない]の最大の違反は三回敵から逃走したのではなく、自分の味方から逃走したということで、味方の人々は彼をまさにそのせいで倒さなければならなかった。私が思うに、下々の者は自分の軍事上の誓いに対する違反を少なくとも自分が將軍とかそうした者になるまで延期すべきであろう。侯爵とか將軍にとっては、自分が降伏したらそれは利点はない。降伏とは連隊を失うに等しいことであるからである。これに対し、軽歩兵とか擲弾兵等々にとっては、自分が降伏することは真の利益がある。彼はこのことを通じて、執行する弾の三度当りのより高貴な諸肢体を免れるわけであり、かくていつでも自分の胸と頭蓋とを敵の名誉ある銃弾から、打ち倒されると榮譽札に至る銃弾から守ることになる。

ヴァルリミニは善良な阿呆であった。私と肉屋は、我々が彼を称賛し、彼の砕けて、萎えた頭になお若干の月桂樹の敷き藁を敷いたところで、得るものは何もない。しかしこの善良な奴が毎週自分の恋人から一、二文貰って安煙草を得ていたことを、学者達や軍人達に何故隠すことがあろう。―― というのは動産の全ては温かく実直に脈打つ心臓の中にあつたのであるから。―― 彼が自分の給料を注ぎ込んでいた飲み屋の亭主は彼に一文も余計に高く記帳することはなかったのであり、―― 連隊の軍医は彼の刀傷に包帯をするたびに、まことに立派な煙草で一杯の手を差し出したのであり、―― 彼は自分の全生涯で自分に対するより他に人に対して呪いを発したことは一度もなかったのである。銃を彼に向けなければならなかった者すべてが辛い思いをしたと肉屋は語った。「向こうの」（と彼は言った、というのは彼は少しばかり私と一緒にマルクトロイテンから出たからである）、「彼の墓に羊飼いの少年が座っていて、笛を吹いている。すぐその隣で彼は射殺されたのだ。―― 我々が前日の夕方彼のことを残念に思っていたとき、彼は言った、頭に弾を受けるよりも自分にとって何も良いものはない。しかしそれでもと彼は誓って言った、

千グルデン貰ってももはや長く連隊に留まっていることはできなかったであろう、と」。私は一緒に居合わせたかった。私はこの哀れな奴に垂れ込めて、悪臭のするペストの雲を通じて、最後の人生の旅で、惨めな安煙草の代わりに、あるいは今でも惨めに圧迫している香煙の代わりに、真の高級パイプ煙草を渡したかった、私は煙草を吸わないけれども。しかし次の日は待てなかったことだろう、そして高台から見おろしていたかもしれない、この哀れな奴がきらきらする円周の中、たった一人っきりで自分の衣服を洗濯女のために脱ぐ様を、永遠の十五分前に、――そして人々が彼の目の周りに白い包帯をして、今や包帯のため緑の全地球と照らし出された天とはさながら彼の前に深く掘られた墓の中へ前もって投げ出され、すべてをしっかりとした夜とで墓石のように覆っている様を。――そして人々が今やまさに彼の荒く脈打つ、苦悩の血で高まる心臓の上に紙製の冷たい心臓を掛けて、より確実に紙製の心臓の背後で温かい心臓を射抜くようにしたとき、そのとき、いやどの優しい人間もよろめきながら丘を反対側へ下って行ったことだろう、この射殺された者の転落を見ないようにするために、そして両耳を閉ざしたことだろう、落下する雷鳴を聞かないようにするために。――しかし想像は私の中でこの哀れな者をそれだけに一層陰鬱に描き出したことであろう、彼が広大な夜、跪いたまま、生きた者達から引き裂かれ、死者達から離れて、暗闇の中ただ嗅ぎつける死に神だけに取り囲まれて、死に神が人知れず鉄のような両手を広げ、それを打ち合わせて、両手の間で血まみれの心臓を砕くのである。...いや永劫の後、人間はこの墓地を出ることがあっても、この不安な瞬間はなおも陰鬱な雲のように、それだけ明るい楽園の許に掛かって、溶け去ることはないに違いない。

こうしたすべての暗い空想が再び私の許に、私が外に出て、耳を澄ますとやって来た。ここで彼らは彼を射殺したのだ、あちらでかの戦闘が生じたのだ、と。時代が地球の墓場の山を掠って行き、戦場の墓地を押し込み、花々の下に沈めているのは幸いなことである。さもないと我々は皆散歩から溜め息で一杯の胸と共に戻って来ることになるであろうからである。

目に対し私の地球の影からフェルベルの明かりの許への道をより容易なものとする半陰影を自ら描き込むことを私は読者にお任せする。我々の人生では「時」は、喜びと痛みの間の半陰影であり、暴風と微風の間の中間の風である。

「天は相変わらず雨続きであったので、私は出発し、フェクサー殿の養父殿に、ティエルスハイムまで、そこで会えるに違いなかったので、出迎えに行って、一日でも早く彼が天候についてどう思っているか知ろうとした。更にその他に当地で吊された郵便盗賊を目撃しようと思っていた、この者から我々の生徒のために若干の倫理教訓を引き出そうと思ったからである。しかしティエルスハイム郊外では絞首台を求めて空しかった。悪漢はまだ牢屋にいて、ただ鎖につながれていただけであった。

さてここで我々は最も大きな痛手となったことに、丸十五日間犬も馬も動かないまま、高い食を摂り続け、乾いた天候とフェクサー殿の養父殿を空しく待ち続けなければならなくなった。それでも私はさながら私の損失への感謝として、ここで読者を前にして、私が私の行った商売帳簿を広げて、抜粋して見せるべきであろう。何人かの者が（私にとっては何とも奇異に思われるが）聞くところによると、こう非難したからである。つまり私は

私のシリウス[夏季]休暇日に当たり、それでもクラス同様に講義をしなければならなかったかの十五日間の代わりに、夏季休暇を更に十五日間拡大して、私の損失を取り返さなければならなかった、と。このような舌先の揚げ足取りに対しては、ある男の十五日間のレッスン・カタログを提示して恥じ入らせることにしよう。人々は喜んでこの男の夏季休暇の半分の削減を認めたのである。

夏季休暇の第一日目、クラスは我々の旅の人々の行状や現実について作文レポートを書かなければならなかった。――二日目、私はレポートを訂正し、――三日目、訂正を続け、――四日目に検閲を終えた。――

五日目、私はティエルスハイムの植物誌を書かせ、六日目、同様の動物誌を書かせた。七日目はどこでも休みで、主の安息日である。八日目は、さながらディドーの牛の皮[牛の皮を薄く切って巡らし、カルタゴの土地を得た]、六役諸村の新たな方言辞典の計画が吟味され、どんな取るに足りない百姓も唯一の田舎訛りの提供によってその共同編集者に採用された。このような白痴は、彼が学者達に利子を付ける単なる博知訛りによってまた少しばかり自らの惨めさを救い出している。私は教区民全員の前で我々のくたばった鶉猟犬を嫌がらずに掴み、運び出して、埋葬したので、――丁度死体解剖者が首を刎ねられた腐肉を扱うような具合にしたので、――それで私は私の大胆さに皆が驚愕していることに気付き、同時にまた皆の眩惑にも気付いた。しかし偏見と啓蒙との間のこのような距離は、しばしばこの距離を感じる学者にとって、想像以上に、謙虚であることを難しくするものである。

九日目、私は単にギムナジウムに対する愛から私の人生を賭ける、あるいは賭博金の皿に置くことになった。月は午後、天底にあったとき、豪雨を少しばかり抑えた。[月が天頂、天底にあるとき、天候が少し変わるとジャン・パウルは信じていた]。そこで私は急いで私の逍遙学派の聴衆に、幾何学的武器で武装して、ティエルスハイムから出て、田畑を測量する計画を立てた。さて外ではどの畑でも収穫されていなかった。意地悪な者達がそもそも長いこと敵意ある注意深い視線で私を見守っていた。――それで私はプラトンの格言を思い出していた、正直者には遂に世界中が謀反を起こす、と。――それ故私は杭を打ち込みたくなかった。幸い二人の肉屋の下僕が離れた木々の下、畦で眠っていた。私は私の幾何学の生徒達に言った（そして肉屋を示した）『我々は二つの箇所、あるいは二人の大食家の距離を測ることにしよう、二人のそれぞれに近付けられないけれども』。我々は共有牧草地ですべてを二人の無作法者から雲居はるかに離れて測りし（大目に見られたい、立腹ハ詩ニ至ル[Juvenal:Satiren II.79]からである）。遠くから静かに私は自ら測量竿を突き刺して、二番目の立脚点に測量用平面机を置いた。私は棒の照準を定め、眠っている粗野な丸太Aと別な丸太Bの照準を定め、棒と机の間の距離を測量し、その距離を正確に机上で縮尺した。要するに（というのは測量の素人には私の言うことは理解できないであろうからで）我々はヴォルフ[Wolf(1679-1754)]やケストナー[Kestner(1719-1800)]、すべての偉大な測量士達に正確に従ったのである。そしてようやく本当に二人のいびきをかいている粗放者のAとBに対して、彼らの間の射程距離、焦点距離を綿密に（ケストナーは我々の翼兵ではなかったか）測量するという栄誉を与えた。不幸なことに私は私の生徒達に実例についての感覚的吟味を思い付き、フェクサー殿に、測量紐を持って肉屋Aに忍び寄るよう命じて、私は紐の端を持って肉屋Bの方へ向かった。私のフェクサーは（人間

だから責任を負えないことであるが）紐で粗野な奴の頭Aに紐を持ってしゃがんだとき、刀でその鼻に触れるか何かしたのかもしれない。要するに其奴は銃の発射のように跳ね起きて、彼の盗賊の一味に叫んだ。私が眠っている仲間の上に、その顔に応用しようと思っている測量紐で屈み込んでいるのを目撃したのである。『ミヒェルよ、誰かがお前の首に紐をかけているぞ』。―― 即刻暴君Bが目覚め、―― 拳の杭打ち機を私の余りに低く覗き込んでいる顔に放ち、―― 別の爪で鉄菱でのように私の長靴を掴んで、その根上げ機でもって私のバランスを崩し、必然的に畦の上へ投げ飛ばし、―― 私は実直な生徒達がこの暗殺者に対し私の加勢をしなかったならば、多分お陀仏となっていたことであろう。

この人非人には（私は彼の倫理性のことを言っている）私の受身の殴打が、私自身よりも応えたことであろう、私は幾何学の殉教者として、大プリニウスが物理学の殉教者としてそうであったように[ヴェスヴィオ火山噴火を間近で観察しようとした]、―― それで栄誉しか得なかったからである。それに私は途中、私の郎党の平手打ちに対する考え方も浄化してやった。私は彼らにこう示したのである。平手打ちは単に最大の祭事、身分上昇の際に、―― 証人のとき、奴隷解放のとき、芸芸徒弟の卒業のとき、小姓身分からの昇進のときに―― よく行われたもので、今でもそうである、と。

しかし学界は、私が後に―― 同じような虐待を当然恐れて、次のことに慎重になったことを、（私ではなく）この砕かれた肉屋のせいにするかもしれない、つまり家から家を視察し、土地の歴史の利点となるべく（そこから引き出せる最重要な結論は言うまでもなく）、紡車とか馬車の車輪の幅や、攪拌機の歯を数え、更に打穀穀竿や日曜日の杖の円筒を立体幾何学的に測ったりすること、―― こうしたら勿論それらを動かす人々の力を探し出すことができるようになるからで、―― それに脱靴器のフォークの幅を測定器で、スプーンやスプー皿の深さを計量竿で探究し、先の場合からは足のサイズを、後の場合からは胃のサイズを最も容易に推量するに至ることに関し、慎重になったのである。殴り合いがなければ、白状すると、全く確実にこうした労を取っていたことであろう。しかし先の種類の事件や、次に話すような些細な事件は、実際学者にとって土地の歴史研究に余り鼓舞するものではない。私は亭主に、彼の娘の亜麻の糸巻き竿を見て、こう助言したのである。糸車の軸で歩数計に似た車輪を回して、大きな糸車の回転を正しく円盤上に合計を記させるといい、と。『そうしたら』と私は付け加えた、『貴殿が家に帰ったとき、どれほど娘さんが紡いだか、怠けていなかったか容易に分かるはずです』と。すると若い小娘は私に面と向かって笑い、言った。『阿呆な、父は糸を見れば分かるわ』。しかし学者方に先の計画を検討するよう私は提案する。

そもそも肉屋の拳の殴打で、学問に対する私の熱意ははなはだ冷めてしまった。私は重要な理由から、逮捕された郵便盗賊のメルグエンタールを訪ねる計画を有していた。しかし私は諦めた。つまり私は私の力に応じてすでに数年前から土地の歴史の中で、処刑場と絞首台という全く未開拓の分野を耕作しているのである。即ち私は地方の悪漢と地方の殺人者に最も肝要な歴史的視線を注ぎ、犯罪調書や盗賊名簿の刑法的ポトシ銀山からあれこれの収得ターラー銀貨を供しているのである。こう思っているからである。自分の土地あるいは町について何も出版しない教師は皆、恥としなければならない、と。どの教師も個別歴史の分野に分け入るべきではなかろうか。校長は悪漢どもを、首を刎ねられた者、絞首刑にされた者についてまとめ、供することができないであろうか。それぞれの下級教師が

その特別の土地の苦しみを分担できないだろうか。教頭はペストや単なる伝染病を、――
三級教師は獣疫を、―― 楽長は水害を、―― 四級教師は饑餓を、―― 五級教師は
大火災を分担できないだろうか。

従って、犯罪者のプルタークとしての私にとって、歴史的主題を、それが絞首刑に処さ
れる前に視察することは大変ふさわしいことであつたろう。しかし私はそのことを助言す
る人々にこう紹介している。つまり私は自分が筆を執っている刑法上の回想記の中で、哀
れなホーフの学校教師の話を採用しているが、この教師は自分がかつて叱りながら喜捨
を渡したある盗人から、ライブツィヒでその仲間であると偽証され、その偽証に基づいて
この正直な学校教師は連行され、ライブツィヒで拷問され、かろうじて絞首台の鳥罠から
逃れたのである、と。このことは幾人かの正直な人々に生じ得ることである。―― 例え
ば私を犯罪者のメルゲンタールは、私が彼の許を訪れ、私のチップや酒手、あるいは私の
顔で彼を怒らせたなら、意地悪く密告し、こう証言するかもしれない、私は彼と一緒に盗ん
だ、と。このような郵便盗賊、名誉毀損者が無実な校長を拷問台と絞首台に送り込んだら、
誰が私にその反対を保証してくれようか、誰が私の無実を信じてくれようか。――

午後によく待ち焦がれていたフェクサー殿の養父殿がフィヒテルベルクから下りて
来て、私が天候のせいで登れるか、教えてくれることができた。彼は最初自制していた。
この学者様は結局ただこう表明された（余りに謙虚なことであつた）『自分は意志に反し
て、自分の祖国で、（天候）―― 予言者となっている。自分は予報できる。しかし翌日
よりはむしろ全四半期の開始日に関してである。丁度四人の偉大な予言者が、別人の、数
世紀後に生ずる処刑を、自分達の存命時に生じた自らの処刑よりも容易に見通していたよ
うなもので、あるいは丁度（この学者の固有の表現によれば）人間は数十年にわたるより
も数千年にわたる摂理の道をより正しく予言するようなものである。その上我々は（カン
トによると）自然に法則を適用するように、自分にとっては道德家同様天候が（最も単純
な原理に従って）現実はどうあるかよりも、どうあるべきか定めるのがもっと大事なので
ある。自分が定める最良の規則を天候が踏み越えても、自分の責任とは言えないであらう』
と。―― しかし今は晴れるとこの天候の鳥占師は私に隠さなかった。最も微小な雲を除
いて、実際当たっていた。これは幾ばくかのことであろう。しかし今は晴れると、この天
候の鳥占師は私に隠さなかった。最も微小な雲を除いて、実際当たっていた。これは幾ば
くかのことであろう。

しかし登ることにはならなかった。フェクサー殿の養父殿が私に打ち明けられたのであ
る、ある別な学者、つまりホーフ出身の教頭ヘルフレヒト[Helfrecht,1752 年生まれ]殿が、
私が旅立ち、記述しようと思っているフィヒテルベルクをすでに完全に文字通り描写し、
銅版画に写している、と。私は他の誰よりも他人の凱旋車から車輪を取り外すことをしな
いので、私は即刻、今や私がもはや描写できないフィヒテルベルクには一歩も足を踏み入
れないことにした。ひょっとしたら運命はどこか別の山を私の筆の台座、ピンドゥス山[北
ギリシア]として彫り上げるかもしれない」。――

―― フェルベル校長殿が先のことを記述して以来、私が彼に語ったかの実直な学者が、
自分の作品の冒頭を供することになった。しかし私は、彼がかくも勤勉な、真実に基づい
た、認識豊かで、無私の正確さに裏付けられた崇高な自然の要塞作品の図像学を、これは

私の拍手よりももっと重要な拍手に値するものであり、最後まで全体にわたって読者の目に届けて欲しいと願っている。少なくとも読者と或る町の違いで彼が勇気付けられて欲しいもので、町では個人的安寧は（殊に教育学的な）全体の安寧への貢献を通じてしかもはや害を受けなくなるのである。...私は同様にどの他のドイツの町もそれに賛同しているとすることができよう。というのは単に貢献によってのみ、貢献は認識されるのであり、貢献に報いることは貢献することよりもしばしばもっと愛国心が必要であるからである。

「更に私はフィヒテルベルクから引き下げたものは、我々の金属的弾み車の装置、つまり金が止まり始めたことである。旅の金[逃げ出す]を得るためには、その前に、すべての連隊が知っているように、支度金を得なければならない。我々は前進することばかりでなく、後退することすらできなくなった。私が亭主に私の握手を動産抵当として、私の誓いの言葉を正直な支払いの期待教令として申し出て空しかったとき、彼が私の娘を抵当として、質物の地所として受け入れ、保持してくれたことを、私はただ喜ばなければならなかった。私は幸い、かのエジプト人（今日のコプト人）に似ていた、彼らの間では[ミイラに]樹脂処理された血縁の者達を担保に人は立派な個人的借金を申し込めるのである。そこで私は空の軽二輪馬車で私の馬とクラスが走れる限り早く進んで家へ帰った。それ故早さと物音のせいで思っていた程の講義はできなかった。ここでフェクサー殿の養父殿は思いがけぬ好意を示されて、我々の労多くかつ教訓に富むクラス旅行についての私の微力な描写に対し、彼の立派な作品の中で場所を用意され、挿入して下さり、私にその謝礼をすでに見本市前に送ってくださった。この贈り物で私は担保の娘をティエルスハイムの亭主の許から請け出すことができた。ご用心のこと、さようなら」。 —

5. 追伸

まことにまず私は、この書の結末カットと消灯号砲のかくも間近で、なおも読者とやり合いたい。数百ものことで腹が立つのである。私はそのうち二つだけを挙げよう。第一に、読者はすべての本を祈祷書のように単に困ったときにのみ手にするということであり、ドーヴァー海峡の旅館が、都合の良い風が吹かない日の間だけそこでただ読む人々のために立派な蔵書を用意するようなものなのである。第二に、読者は笑い方が下手であるということである。北極は大方の冗談を駄目にするとは私は承知している。物理的冷たさが笑いを害すること^{*1}、倫理的冷たさが笑いに益があるのと同断である。しかしここではドイツ帝国の名において、何か私を侮辱するものがある。私は誰よりも良く、こう承知している、滑稽なものへの立派な素材の何という豊かな貯蔵庫をこの帝国はそれと知らずに保有していることか、そしてこの諷刺的素材の何という積み荷が全く原料のまますべての国家経済に反して外国に送られていることか、外国は後に我々自身の生の産物を諷刺に加工して、我々にまた途方もない金と引き換えに売りつけているのである。我々は我々自身に対するこれらの諷刺をここドイツで自ら仕上げて、造幣費を自ら着服できるのではないだろうか。

ー しかし諷刺的造幣局長は格別勇気付けられはしない。銅合金[Semilor]の樽の工場主はこれと純金とを区別するために「s」の印を付けなければならないように、このような造幣局長は諷刺[Satire]の頭文字を（これも「s」）至る所彫り込まなければならない、読者は（カントさえ理解しても）冗談なんか理解しないからである。この文字通りの印付けが（読者が冗談を本当と取らないようにするため）すべての主題を台無しにしている、羊毛であれ、諷刺であり、人間の額であれ。ー この点に関し、私は読書界のエンソフ[カバラの最高神]と、その頭蓋は（タルムードのラビ・イシュマルによると）ラビの神の頭蓋同様に三万マイルの長さで幅であり、頭蓋の脚がまた全頭部に当たるそうであるが、ー この点に関し、申し上げるように、ここ追伸の中でこの神話的巨体と臆せず喧嘩したかったことであろう、私の涙脆さが許すならば、...

涙脆さのためできなかった。私の本の晩鐘が鳴るここの敷居で、私が仮に、御機嫌ようとは何か別の、例えば、良く読みなさいと読者に向かって言ったら、心の中に砕けた鉛弾が残ることだろう。ー 誓って、私は好まない。荷物をまとめて或町から別の町へ移る人間でも、郵便馬車に乗り込む前にほとんどすべての露地と和解している。その上なお馬車の中で考えるのである。公の天水桶とダナイデス達[穴のあいた桶で水を汲む]を見ながら、もっとそのことを考えていたら、残っていたことだろうに、と。

それでは御機嫌よう。ー 許して欲しい、私のプシュケの馬車[プラトン『パイドロス』]では様々な馬が、英国産の馬、ポーランド産の馬、ロシナンテ、それどころか道楽馬がつながれているので、私が王侯の厩全体にとって多すぎる手綱のため時にしくじった

*1 フレーゲルの注解によると、人間が極地に間近に住むほど、ますます笑いは減少する。それ故二人のカトー、大カトーと小カトーが極地にいることができよう。しかしグリーンランド人とカムチャッカ人の風変わりを考えると先の命題は怪しい。[Flögel: Geschichte der komischen Literatur. 1784. Bd. 1. S. 124]

り、草臥れさせたりしていたら、大目に見て欲しい。　ー　また私の将来の表題紙の前に喜び勇んで来給え。　ー　本や人間や自らに耐えること。　ー　とうに過ぎ去った不幸の棘がまだ思い出の中で刺すので、砕かれた雀蜂の取り出された針のようなものだから、
ー　ただ著者達だけを記憶に留め給え。　ー　ちなみに私は諸君に人生の冷たい、しかし青い朝を、一つの花も閉じたままではない朝を、　ー　十時頃にかけては温かい雨粒で一杯の一片の雲を、　ー　正午の暑いときには海風を、　ー　午後には人生の午睡を、　ー　そして夕方には、夕方には雷雨ではなく、穏やかな太陽と長い夕焼けを、ハナダイコン[夜堇]の背後に、そして暗闇の中誰か人影を願っている。...

しかしすべての本の終わりに私が語りかける愛しい友よ[クリスティアン・オットーのこと]、君に対して、今の終わりのこの気分のときどう語りかけたらいいのだろう。あるいは、君は私に何を願うかねと尋ねるであろう声にどう答えたら良かろう。　ーー

従軍牧師シュメルツレの
フレッツ紀行
絶えず続く注と共に
ついでに
或る政治家の
許での
悪魔の告解

序言

思うに、三言で序言は書かれよう。人間とその悔悛が丁度その程度のものであるようなものである。

1) 最初の言葉は従軍牧師シュメルツレの回状についてであって、その中で彼は、序文で自分の勇気について若干の証明と保証とを先に述べた後、首都フレッツへの自分の旅行について自分の友人達に描写している。本来旅そのものが、噂では疑問視されている自分の度胸について、その中で語られる事実そのものによって実証するためのものにすぎない。しかし読者の中には嗅覚の鋭い人がいて、彼の胸は必ずしも堅牢なものとは言えない、少なくとも左側ではそう言える、と若干の事実からまさにその逆を推測される方がおられるかもしれない。その点に関しては私は判断を保留しておく。

ちなみに私は芸術通の方に、並びにその後衛の審美家の方に、この紀行を、この紀行の内容には私が編集者として文責を担うものであるが、単に（フランス語の意味で）肖像画、人物描写として受け取るようお願い上げたい。これは意図的にしろ非意図的にしろ喜劇作品で、私はこの際しばしば笑い、将来類似の性格画を描きたいと思ったものである。一重たい貨幣と軽い哄笑とがほとんど消え去ったまさに今の時ほどにこのような喜劇作品がより適切に世間に呈示され、贈られる時があるろうか。殊に我々は今トルコ人のように単に様々な財布で勘定し支払っていて（中身は空で）、つまり心囊[心の財布]（中身はそこにある）で支払っているからである。一

どこかの粗野な三文文士が、どんな風にして私がシュメルツレのこの自己陳列作品に突き当たったか咎めるように問い質したら、私には忌々しいものに思えよう。私はその次第を承知しているが、言わない。この見慣れぬ喜劇作品は、これに対して私は無論（私の出版者が証言してくれるだろうが）自ら謝礼を払うのであって、合法的に入手したものであり、従軍牧師が出版に対し、黙っていずに抗議しても、私はいとも冷静に対処するものである。私の良心は、私が少なくともこの所有に至った経緯そのものは、学者達が耳にして盗んだやり方よりもまっとうなものであったと保証してくれている。学者どもは精神的聴講室のこそ泥、大聖堂の追い剥ぎ、海賊船として書籍界に講義を盗み取るために出航して、内陸で自らの生産物として商っているのである。まだ私は私の生涯で、若い頃、時に一窃視を行った以上のことをしていない。

2) 二番目の言葉は、顕著な、注の地下室で透かし彫りにされたこの小品の形態へのお詫びとなろう。この形態は私自身にさえ気に入っていない。世間は頁を開けて、覗いて見て、同じように判断するが良からう。しかし次のような偶然のせいで、この本全体を通じて見られる分割線が生じてしまった。私は自分の思念（あるいは脱線）に従軍牧師の思念の支障とならない程度に、単に線の下に注として編み込むことにして、満足げに特別なついでで原稿にまとめて書き上げて、注のそれぞれをきちんと御覧の通り、数字を付与して、この数字は別の主要原稿の頁数と関連していたのであった。しかし私はこの主要原稿を複写する際に、このテキスト自身にそれに相当する頁数を記入することを忘れてしまった。それ故誰も、善良な植字工に石を投げつけるべきではあるまいし、私もそうしてはならないだろう。植字工は一 下に注が注の順番通りにではなく並んでいるように、注をテキストの下に置いて、それでも立派な人為的計算の下、少なくともそれぞれのテキス

トの頁の下に何かこのように輝かしい注の沈殿物が生ずるように配慮しているが、――それは仔細あっての私の手法であろうと思つてのことかもしれないのである。――さてさて、この件はとにかくなされ、いや永遠化され、つまり印刷された。結局私は本来ほとんどそのことを喜んでいいのであろう。実際、それに何年も続いて（これまで二十年間してきたように）私の脱線の彗星の核のために、中心の太陽ではなくても、新たな明かりの莢を、私のエピソードのために新しい叙事詩を考案することを考えていたとしても、私はこのような罪のために、ここに偶然植字工が仕上げて呈示しているよりももっと上等の広々とした[脱皮用]罪の皮を発案することはほとんどできなかったであろう。私が本格使用する以前にこの件が印刷されてしまったことを残念に思うしかない。いやはや、（印刷される前にこのことを承知していたら）何という至上の当てこすりをすべてのテキストの頁、注番号に秘めることができたことであろう。一見したところの不似合いさを本当の適切さ、カードの注下欄に収めることができたことであろう。下のより安全な砲郭や坑道から何と敏感に意地悪く、高く、また側面に斬りかかることができたことであろう。何とテキストの過半の傷を諷刺的傷で満たし、補足することができたことであろう。

しかし運命は私にこのような具合を欲しなかった。私は諷刺にとってこの黄金の職人芸の土壤について序言を書く三日前に初めて若干知ることになったのである。

しかしひょっとしたら執筆界は、――偶然の微光の許で、――遺憾ながら私が取り上げたものよりもより重要な収穫物、より大きな埋蔵品を取り出すことになるかもしれない。というのは今や、一つの大理石の巻に全く別々の作品を収めること、一頁に同時に二つの種族を、それらを混ざることなく、いや五つの学部[経済学部の新規追加]のためにその境界をずらさずに書くという方法が著者に対して示されるからである。著者は、誰のためのもでもない反吐の出る発酵混ぜ物の代わりに、単に注の線、あるいは分割線を引いて、同じ五層の頁に極めて不似合いな頭脳を住まわせ、もてなすよう働けばいいのである。そうなったらひょっとしたら何人かの者が一冊の本を四度読むかもしれない。読むときにはいつもただその四分の一を読むことになるからである。

3) 三番目の言葉で言うことはただ、ある政治家の許での悪魔の告解は告解の秘密を破ることのない、この本の無邪気な暦の付録にすぎないということである。

少なくともこの作品の価値は、小品であつて、十分に小さいという点である。それで望むらくはどの読者もほとんどすでに書店で素早く目を通し、読み終えることができ、厚い本のようにはずまずその為を買う必要がないことになって欲しい。――そもそも物体界では、物体界に属さない精神界に限るのとは、若干別に、大きく[偉大で]なければならないものでもあるまい。

バイロイト。一八〇七年、干し草の月、和平の月[七月、ティルジットの和平、ナポレオンの勝ち]。

ジャン・パウル Fr. リヒター

教理問答教授予定のアッティラ・シュメルツレの友人達宛ての回状。フレッツへの休暇旅行を含むもので、一つの序文と共に、先の従軍牧師として彼の遁走と度胸とに関するもの。

立派な友の方々よ。ひょっとしたら一頭のライオンというまさに正反対の欠点を有して戦っているのかもしれない一人の男を臆病兎と形容することほど多分滑稽なことはありますまい。もっとも今やスパルマン[Anders Sparrmann(1747-87)]の紀行以来、アフリカの獅子は臆病者として出回っているけれども。しかし、友の方々、私はこの場合に該当している。これについては私の紀行について描写する前に、お話ししよう。勿論貴方は皆御承知のように、私はまさにその逆で勇氣と豪胆者とを（その他に田夫野人でさえなければ、崇拜しており）、例えば私の義兄の輕騎兵を崇拜している。彼は多分生涯で一人の人間だけを叩きのめすということはしたことがなく、いつも同時に集団一同を叩きのめしたものである。私の空想はすでに子供時分恐るべきもので、牧師が黙した教会の中、引き続き話しかけている最中、しばしば次のような考えに襲われ、「いままさに教会席から、牧師さん、私もここにいますよと叫んだらどんなものだろう」と如実に思い描いて、私は魂消て、外に出なければならなかったものである。 — 例えばルーゲンドス[Rugendas(1666-1742)]の戦闘画、 — 恐ろしい殺害の騒ぎ、 — トゥーロン近郊の海戦や陸戦、 — 疾走する艦隊、 — それに子供時代はピアノでのプラハ侵攻の曲、 — 要するに豊かな戦闘場面の一つ一つといったもの、ひょっとしたらこうしたものが、はなはだ私の愛用品となっているのかもしれない。私がこれほど好んで読み、買うものはない。私の立場が引き留めなければ、しばしば幾多の誘惑に駆られることであろう。しかし正しい勇氣は単なる思考や意欲よりも何か高貴なものの筈であるならば、大事な方々、貴方は、たとえ私の勇氣が、いつか自分の将来の教理教師達を、講義によって可能な限り、キリスト教徒の英雄へと鍛えることで実行の言葉に移そうとしているとしても、まずはお許し頂けよう。 — よく知られているように、私はいつも少なくとも十アッカー水浴びや水泳客で一杯の岸边から離れて散歩するようにしていて、自分の命を保っている。ただ単にその客の一人が溺れようとしていたら、私はすぐさま（というのは心の作用が頭の作用に上回るであろうから）この阿呆の救助に飛び込むであろうからで、どこかの底なしの深みにはまって、我々両人が溺死しかねないからである。 — 夢が覚醒時の反映であれば、忠実な方々よ、貴方らにお尋ねするが、貴方らに私の夢を語ったことをまだ覚えていらっしゃるであろうか、カエサルであれ、アレクサンダーであれ、ルターであれ、恥ずかしいと思わないような夢のことである。私は — 単に若干の夢のことを思い出してみても、 — ローマを襲撃して、教皇や、枢機卿の団の[デンマークの]巨象教団と同時に決闘を

*1 103) 立派な侯爵達は容易に立派な臣下を得る（臣下が立派な侯爵を得るのはそれほど容易ではない）。アダムが無垢の状態で動物達の支配を得ていたようなもので、動物どもは皆、ただ彼と共に野生化して、墮落してしまうまで従順であったし、従順であり続けた。

しなかっただろうか。私は馬上に観兵式の観客として座って、四角の大隊に襲いかかり、アーヘンではカール大帝の鬘を、町が毎年十帝国ターラーの美容金を支払っているその鬘を、その後ではグライムのハルバーシュタットではフリードリヒの[偽の]帽子を征服して、両者を重ねて被って、その後更に、まず襲撃した防塁で大砲を砲手達自身に向けた後、自分の向きを変えて去ったのではなかったか。ー 私は割札を受けて、ユダヤ人として自分を数えさせ、ハムを振る舞って貰わなかっただろうか、もっともそれは（フンボルトによれば）オリノコ川の猿のハムであったけれども。そのようなことは千にも及ぶ。というのは例えばフレッツの宗教局長を私は窓から投げ出して、ー ゴータのハインリヒ・バックオーフェンの警告、警報の紙紙繕り[付け木]を、六グラムずつ一ダース、それぞれを大砲のように鳴らして、それでも私は平然と聞いていた、この紙紙繕りで私は目覚めることさえなかったのである。ー 更にある。

しかし十分であろう。些細な計らいで、私の従軍牧師職への中傷に対して、これは残念ながらフレッツでも流布しているが、カエサル[アウグストゥスのこと]のような人がアレクサンダーに対してするように、つまりただ手で触れることで碎いてしまう時が来ている。その点何が正しくとも、構わない。それはいつも大したことではないし、何ほどのものでもない。フレッツの偉い大臣や將軍は、ことによるとそもそもこの至上の大臣はー 多くのシャーバッカーはいないのだから、ー 勿論すべての偉い男のように私に敵対する意見を有したかもしれない。しかし真理という大砲を得ていたわけではなかろう。というのはこの真理の大砲を、各々方、貴方らに呈示するのは、私であり、貴方らは私のためにそれを発砲するがいいからである。つまりフレッツでは私が重要な会戦からとんずらした（とそう庶民どもは語っているが）、そしてその後従軍牧師を感謝と勝利の説教のために探したとき、見当たらなかったという不当な噂が広まっているのである。この点の滑稽さは、私が自分の会戦に居合わせたのではなく、会戦から数時間分離れた距離に退却していて、味方が敗北したとき、必然的に私と遭遇するに違いない所にいたと、私が証言すれば、明らかなものとなろう。退却が最も立派になされるのは、ー 立派な退却というのは戦術の傑作と見なされるもので、ー これが立派な秩序、力強さ、確実さと共になされるのは、まさにまだ敗北していない会戦の前に行われるものである。

確かに私は教理問答の予定教授として、私の勇気のこのような中傷に静かに座って微笑んでいることができよう。というのは私は自分の将来の教理教師達をソクラテ斯的問答で更なる問答に鍛えて行くからであり、かくて私は彼らを英雄へと鍛えて行くことになる、子供ほど子供同士戦いを挑むものはないからである。ー いずれにせよ、教理教師は、

*1

*1 5) というのは上手な医師は、必ずしも病気から救い出さなくても、劣等な医師から救い出すからである。

100) 本は千年王国と樂園のフェニックスの灰で一杯になって横たわっている。しかし戦争の風が吹き、多くの灰が散る。

102) 親愛なる政治的あるいは宗教的審問官殿。トリノの小さな明かり[自動発火蠟燭]は、それを汝が吹き消すと、初めてよく照らす、それからその上点火する。

炎を恐れていいが、[啓蒙の]明かりを恐れてはいけない。今日ではロンドンでのように窓を照らし出していないと、壊されてしまうのである。以前とは違うのであって、以前は人々は明かりを恐れること犬が水を恐れる具合で、犬は長いこと水を与えられずにいると、遂には恐水病になるのであった。――それにそもそも教理教師にとってはどの公園も、硫黄臭の砲兵場よりも、良い香りがするもので、時代が頼みとしている戦時体制は教師にとっては人類の真の悪魔的馬脚である。――

しかし私は別様に――あたかも洗礼名のアッティラの代父の精神が必要以上に私の中に侵入して来たかのように考え、いつもただ私の度胸を証明することが私にとっては大事であって、ここでこのことを再び数行で行って見たいと思っているのである。大事な友の方々。私はきっとこの証明を単なる推論と学的引用で行うことができよう。例えばガレヌス[二世紀の医師]が、大きな尻の動物は臆病であると述べているとき、私は単に向きを変え、敵にただ背中と――その下のものを見せさえすればいいのであって、敵は私には勇気が欠けているのではなく、ただ肉が欠けているのであると、見ることになる。――周知の経験に従えば、肉料理は元気にするのであれば、私はこの点で、料理屋で大きな焼き肉の注文をするばかりでなく、勘定をしないままにして、いつ何時でも、敵自身(亭主)の許でさえ、自分は自分の分(それに他人の分)を食べて、卑俗な肉のことで臨戦体制にある将校、つまり他人のように勇敢さによって生きているのではなく、勇敢さのために生きているという公然たる記録[請求書]を残している将校に遅れを取っているわけではないのである。同様に私はかつて従軍牧師として、ライオンのようにであって、従ってどんな掠奪をもする連隊のどの将校にも遅れを取ろうとは思わなかった。ただこの将校は、この獣達の中の王のように、火を恐れるだけであったのであるが。――あるいはイギリスのジェームズ一世[実はヘンリー八世]のようなもので、この王はむき出しの剣に対しては逃走しながら、それだけ一層大胆に全ヨーロッパの前で、本とペンを持って襲って来るルターに向かって行ったのである。同様に類似の個人的性癖で口頭でも文書でもすべての軍隊に因縁を付けて行ったものである。ここで私は満足して、私の許で告解した正直な陸軍少尉のことを思い出している。...もっとも彼は私に告解料の借りがあって、更にはもっと料理屋の女将に多額の借りがあるのであるが、彼は度胸の点でひょっとしたらかのインドの犬に若干似ていたかもしれない。アレクサンダーが犬のアレクサンダーとして贈って貰った犬である。このマケドニアの王はこの奇蹟の犬に他の英雄的動物あるいは紋章の動物をけ

*1

*1 86) 誓って。青春に人々は不似合いな友を、晩年に最も類似した友を愛し、楽しむよりも、ほとんどもっと愛し、楽しむ。

128) 愛には夏季休暇がある。しかし結婚生活には冬季休暇もあると私は期待している。

143) 女達は毎週少なくとも活動的、受動的、嫉妬の一日を有する。聖なる日、日曜日である。――ただより高い身分では、もっと多くの日曜日を平日よりも多く有する。丁度大都市ではその日曜日を、すでに金曜日にトルコ人と、土曜日をユダヤ人と、日曜日には自分達自身と共に有するようなものである。女達は象牙からの高価な細工に似ている。象牙ほど一層白く、滑らかになるものはない、またより容易に黄色く[嫉妬の色]なるものはない。

しかけさせた。 — 最初は鹿で、 — 犬は微動もしなかった。 — それから雌豚で、 — 微動もしなかった。 — 熊にまで及んだ、 — 微動もしなかった。今やアレクサンダーが見限ろうとしたとき、人々はとうとうライオンを放った。するとこの犬は起き上がって、ライオンを砕いた。同様にこの陸軍少尉もそうであった。決闘者とか、外国人の敵、フランス人とかは彼には単に鹿や雌豚、熊にすぎず、動ずることはない。しかし今や彼の最古の最強の敵、債権者がやって来て、彼の肩を叩き、長年の歓楽に現時点の慰謝料を要求することになり、彼から同時に過去と未来とを奪おうと欲しようとする。この陸軍少尉は激昂して、債権者を投げ下ろすのである。残念ながら私もまずは雌豚の許であり、勿論誤認されてしまう。

リヴィウスの[『ローマ建国史』]二十二巻五によると、ドイツ語では恐怖が少なければ少ないほど、ほとんどその際危険は少ないとある。私はこの命題を同様に正しく転倒させる。危険が少ないほど、一層恐怖は少ない、と。いや全く恐怖を感じないそうした状況が有り得よう。 — 私の状況はそうしたものの一つである。それだけに臆病についての陰口は私にはすべて厭わしく思えざるを得ない。

私は私の休暇旅行に対して、更に若干の事実を前もって送るが、これらの事実は、何と容易に用心深さは、 — つまり馬上の男に対してさえ反抗する愚かなハムスターに似た人間には見えたくないときに、 — 臆病と見なされるか証明するものである。ちなみに私はただ、同様に全く別の非難、つまり向こう見ずな男という非難を跳ね返せたらと願っている。次の文では、この非難を解除する立派な事実を提供することになっているけれども。

英雄的腕にとって英雄的視力がなければ、何の甲斐があろう。腕の方は容易に日々より強力に、より筋張って行くが、しかし視力の方はすぐにはガラスのように鋭く磨かれることはない。しかしまさに用心の功は度胸の功よりも、注目度が更に少ない（いやしばしばむしろ滑稽に映ずる）。例えば全くの青天に私が蠟引き布の雨傘と共に掛けるのを目撃する人にとっては、私が傘を青天の霹靂を（その例はこの話の中程の一つならず生じている）避けるために有しているということを知らない限り、滑稽なことと思うことだろう。この稲妻避けは全くライマールス[Reimarus(1729-1814)]発案のものなのである。私は長い散歩杖には蠟引き布の[弾避け]楯を載せていて、その切妻からは金モールが避雷鎖として垂れていて、その鎖は歩道上で引きずられることになる一つの鍵を通じて、どんな稲妻が来ても容易に地面全体に導き、分散させるのである。手の中のこの携帯避雷針によって私は何週間も青天の下、何の危険もなく散歩して行くつもりである。しかもこの潜水鐘は更に何か別のもの — 弾避けにもなるのである。というのは、どこかに獵師の阿

*1

*1 34) ただ小さな壁紙のドア、奥のドアのみが恵みのドアである。大きな門は不興のドアであり、両開きのドアは半ばヤヌスの門である。

21) シラーとクロプシュトックは太陽神の前の詩的鏡である。これらの鏡はとてもまぶしく太陽を反射しているので、その鏡には世間の絵が映っているようには見えない。

72) 四分の一学者は二分の一学者を崇拝する。 — 四分の一学者を十六分の一学者は崇拝し、 — 云々と続く。 — しかし二分の一学者が一人前の学者を崇拝することはない。

呆が潜んでいて、私が自然を享受し、散歩している最中に、その猟銃を四十五度の角度で放って、それでそれが落下して、ただ私の側頭部に当たって、脳の側面を射られたのと同じ具合になってしまうことはない、誰が秋に私に対し印刷してくれるだろうかとなるからである。

月に対して防ぐ術を我々が知らないのは、いずれにせよとても遺憾なことである。一月は現在半ばトルコの岩のように岩を放ってくる。というのはこの惨めな、小さな地球の衛星、飛脚、娯楽宮は、この反抗的な時代に、その偉大な国母に、そのダヴィデ[ゴリアトを倒した]の牧人袋から何かを投げつけなければならないと思っているからである。まことに今や若い感情の教理教師は、夜、真っ直ぐな肢体で月光の中さまよい出て、幾多のことを感受したり、憂えたりできよう。そして（感情の最中この不合理な衛星はこの者に投げつけるのである）再び打ちのめされて家に帰ることになりかねない。―― いやはや。至る所で度胸の刀身検査がある。苦勞して雷神の矢を溶解して、彗星の尾を短く切っても、敵は新たな大砲を月に導入したり、あるいは他の青天の中に築いたりする。

どんなに内心では度胸があっても、ごく真面目な用心深さがしばしば外見上平民にはどんなに滑稽に見えるか証明するには、更に一つの話しで十分であろう。騎乗者は進んで行く馬上での危険について夙に承知している。私は不運なことに、ウィーンで貸馬に座ったとき、これは確かに立派な白馬であったが、しかし老いて悪魔の如く御しにくいもので、この獣に乗って私は次の露地へ進んで行った、―― しかし残念ながらただ並足で進んだのであった。止まれも聞かず、向きも変えられなかった。とうとう私はこの自動馬上で、次々に遭難号砲を放って、叫んだ。「皆さん、止めてください。後生ですから止めてください。私の馬が通ります」。しかし単純な人々はこの馬が帝国議会の審議のように、正規の郵便馬車のように、ゆっくりと進むのを見て、私が狂ったように極めて激しく動いて、こう叫ぶまでは、この件を全く理解できないのであった。「下々の諸君、止め給え。私がこの馬を制御できないのが理解できないのかね」。今や愚民どもに御しがたい並足で進む馬が滑稽に思われるので、―― かくて私は馬の尾と私の弁髪の上に彗星の尾の如く、ウィーン人の半ばを引き連れることになった。―― カウニッツ侯爵[Fürst von Kaunitz(1711-94)]はかつて（先の）世紀の最良の騎乗者であるが、立ち止まって、私の後を付いて来られた。―― 私自身は相変わらず一步一步進む白馬の上に垂直な流水として座り、泳いでいた。―― 一人の角張った、上着の裾を翻した郵便配達人が左右に手紙を各階に配って、いつもまた私の後を諷刺的顔つきで付いて来た。白馬が余りにゆっくりと進んだからである。―― ホース掃除夫は（周知のように、二頭仕立ての水タンクで路上

*1

*1 35) 良く聞くことはほとんど返答に近いとマリヴォーは正当に集会について語っている。しかし私はこれを人々が報告し侯爵が開いている円卓会議や閣議に拡大する。

17) 名誉の床は、しばしば全連隊がその上にあって、最後の香油とその前の榮譽を受けるので、時々柔らかくし、埃を叩きだし、陽に当てるべきである。

112) ある種の世慣れた女性は、ある種の場合肉体上の失神をマホメットの如く利用する。

―― 失神も、癲癇同様に、―― 単に啓示や天国や靈感や神聖さや改宗者を得るためである。

を行き、三エレの長さのホースでブリキのロートから水を撒く男であるが)、私の馬の尻の後を付いて来て、自分の仕事の間、通りと私自身とに涼しい湿気を当ててくれたのであった。私は冷や汗を十分にかいていて、より涼しい汗は必要なかったのであるが。――私は私の地獄のトロイの馬に乗って(ただ私自身が騎行する没落のトロイであったのであるが)、マッツライン村(ウィーン郊外)へ向かって行った。あるいは私の混乱した感受のせいで全く別の露地であったかもしれない。――私はとうとう夕方遅く、プラーターの門限号砲の後、嫌なことに、それにすべての警察条例に反して、無法の白馬に乗ってプラーター公園の中を彷徨わなければならず、ひょっとしたらそれどころか馬上で夜明かしをしなければならなかったことであろう。幸い義兄の軽騎兵が逸走した馬にまだ乗っている私を見つけてくれた。彼は遠慮なく――馬を捕らえて、――陽気な質問をした。何故馬上芸を披露しなかったのか、と。その為には止まっている木製の馬が必要であったとよく心得ているくせに。――そして私を降ろしてくれて、――かくてすべての乗馬済みの者達は降りたまま無事家に帰り着いた。

しかし今はとにかく私の旅を語ろう。

フレッツ紀行

友の方々。貴方らは知っておられよう、私がフレッツ紀行をまさにしなければならなかったのは、単に家畜市がありそれにシャーバッカー大臣、将軍殿が住んでいたからばかりでなく、主に大臣が(秘密の筋から確実なものと私が承知していたように)毎年市の日の前日の七月二十三日夕方五時にはとても上機嫌で恵み深くなっていて、大抵の者達に叱りつけるというよりは傾聴し、聞き入れていたからである、と。上機嫌の理由を紙上に記すことは私の好みではない。要するに、無実なのに追放された従軍牧師の私を教理問答教授として救済し、報酬を与えて欲しいという請願書を夏季休暇[シリウス日]の最初の夕方の五時に渡すよりももっと一層良い季節、日時はないということになった。私は請願書を三日で書き上げた。私は請願書の概要も、清書も惜しまず、数えなかったので、すぐに比較的最良のものをすっかり完成して仕上げるということになったが、しかしその中に思案の際の三

*1

*1 120) 何人かの者は自由なディオゲネスになるが、それは樽の中に住んでいるときではなく、樽が自分の中に住んでいるときである。力学における滑車の強力な上昇力については、ほぼ瓶の貯蔵室において、別の種類の滑車[酒精]により反復され、よく貯蔵されているのが感じ取られる。

3) 文化は国々全体を、例えばドイツやガリア等々を身体的にはより温かくするが、精神的にはより冷たくする。

99) 模刻に対する私のあらゆる憤激にもかかわらず、模刻の際の特典の購入を、これまですべてのキリスト教の海軍が野蛮な国家に対して掠奪されないよう収めていた租税よりも何か別のもの、何か劣等なものとは見なしてこなかった。ただフランスだけが、まさに類似性のせいで、模刻の特典と野蛮な租税を廃止してしまった。

1) 弱さが募ると嘘が増える。力は真っ直ぐに進む。空洞や窪みのある砲弾は曲がって進む。

十以上のダッシュ[思索線]を付与していることにびっくりして気付いた。残念ながらこれらの棘は今日、雀蜂の尻からのように教養ある者のペンから無意識に生じて来るものである。私は確かに長いこと、私人としての一学者が、一人の大臣にダッシュの文で近付いて良いものかあれこれ思案したが、――確かにまさに思案のこうした平らな強調、詩的楽譜のこうした水平な縦線、あるいは哲学的絵画の階段紐、あるいはアキレスの腱は現今では必要かつ一般的なものであるが、――しかし私は結局最後に（剥除は身分のある人々を侮辱することになるので）最良の試作品を再び書き直し、そして再び十分半ほどアッティラ・シュメルツレの箇所でも苦悩せざるを得なくなった。この名前と共に手紙のアドレスに関し、手紙のこの二つの枢要な一帯、点に関し、十分に読めるように書けていないと思ったからである。

ノイザッテルからフィーアシュテッテンへの最初の宿駅

正規に運行する郵便馬車の乗客リストそのものによって、七月二十二日あるいは水曜日の午後五時が私の旅立ちの日時と取り消しがたく定まってしまった。従って私はおよそ半日程、私の家を整理する時間があった。私は今や二晩と二・五日間、私の胸を胸甲として、あるいは逆茂木として、私の自我と一緒に家を留守にする予定であった。私の善良な妻ベルゲルヒェンさえも、トイトベルガと私は呼んでいるが、その後の二十四日あるいは金曜日に是が非でも私の後を追って、年の市を見物し、利用することになった。いやこの誠実な妻は早速私と一緒に旅立とうとした。それ故私はささやかな従者一同を集合させて、彼らが私の出発の後、日中と夜に、まずは私の妻の旅立ちの前に、第二にその旅立ちの後に、極めて厳格に遵守すべき家訓と帝国法とを、それに特に大災の際や泥棒の侵入、雷雨、行軍の際に用意すべきことすべてを公布した。私は私の妻に我らの小さな登録船の最良の品々の目録を、燃えそうになったとき救い出すように渡した。――私は嵐の夜（本来の悪漢の天候のとき）我らの風奏琴を窓辺に立てかけて、どんな劣等な盗人も、私がハーモニーを空想していて、目覚めていると思ってしまうようにさせた。同時に日中は鎖に繋いだ犬を部屋の中へ入れて、眠ってしまい、夜間一層元気になるようにさせた。更に私は馬小屋のガラス窓のすべての焦点に、いやすべての置かれたガラスの水に注意するよう助言し

*1

*1 32) 我らの時代は、――何人かの者により良く衣装を着た者の檻褸でできているが如く、紙の時代と呼ばれているが、――すでに半ば改築されている。現今では檻褸は紙よりはリントのために碎かれるからである。檻褸粉碎機は（それに製紙工場も）まさに忙しいからであり、あるいは忙しいけれども。学的頭脳が本に姿を変えるとすれば、王座の頭も国家の紙幣に変身し、あるいは改鑄される。ノルウェーでは『一般報知紙[Allg.Anzeiger 1807 Nr.115]』によれば、紙の家々さえ見られるそうである。幾多の立派なドイツの諸国家では官房――団は、（いずれにせよ司法――団は）、自身の製紙工場を有していて、その風車の小麦のために十分な袋を準備している。しかし私は、我らの一団はマドリッドのガラス切り工場を手本にして欲しいと願う。そこでは（バウムゲルトナーによれば[Gotthelf Baumgärtner: Reise durch einen Theil von Spanien. 1793]）十九人の書記が採用されているが、それでも十一人の労働者がいるのである。

た。このような偶々の火鏡で太陽が家々全体に火を着けた例を彼女にはよくすでに語っていたからである。 — それに彼女が金曜日に旅立ち、私の後を付いて来ることになる朝の時刻と、その前に従者に厳命すべき家訓とを一層厳しく伝えた。私の愛しい、髓から健康な花盛りの蜜月の妻ベルガは、蜜月の夫に、思うに、とても真面目に答えた。「御老体、お出掛けなさい。すべては遺漏なくなされることでしょう。 — あなたが先に出さえすれば、後は何とでもなります。でもこれでは永遠に続きます」。 — 彼女の兄、私の義兄、軽騎兵は、この人の為に私は愛想から乗車賃を支払って、郵便馬車のクッションにそれ自体勇敢な刀と勇士とをいわば肉体的精神的親戚、嫁方縁戚として目前に有することにしたが、この人は私の指示に対して（私は容易に勇猛なこの独身年配者に許容したことであるが）彼の日焼けした顔にかなり嘲笑を浮かべて、最後に言った。「妹よ、おまえの立場であれば、わしは好きなようにすることだろう。そして夫が指示書で何を意図していたか、覗いて見ることだろう」。 — 「いやはや」と私は答えた。「災難はサソリのようにどこの隅に隠れているかしれません。私どもは子供に似ていると言いたいものです。子供は素早く立派に描かれた小箱の引き出しを開けて、 — そして囁く鼠が飛び出すものです」。 — 「鼠よ、鼠、出て来い、出て来い」（と彼は、馬をあちこち速歩させながら答えた）「義弟殿。五時になるところだ。帰って来られても、万事は今日と変わらないことに気がしましょう。犬は犬のようで、私の妹は美しい妻のようで。それでは出発」。

— 私は彼が誤解する恐れから前もって一種の遺言は作成しなかったが、これは本来彼のせいであった。

私は二つの可能性に備えて、更に対照的な薬を包んでいた。和らげる薬と熱くする薬である。 — 更に馬車が転倒した際の腕や脚の骨折に備えて私の昔からの副木と — その上（用心から）本来必要であるのと同額の為替の金を包んでいた。ただ私は保持していることの不便さから、頬嚢を有する猿、有袋類であればいいと願った。もっと安全で敏感なバッグ、袋にこのような人生の貴重品を確保するためである。異郷の殺害好きな床屋を恐れて私は普段いつも旅立つ前には髭を剃って貰っている。しかし今回髭はそのままである。たとえ剃ったとしても、途中で髭はまた立派に伸びるであろうからで、そんな髭面で大臣の前に出られはしないであろうからである。

私は激しく私のベルガの力強い心臓の許に飛び込んで、また一層激しく離れた。しかし彼女は我々の最初の結婚生活の別離に、悲嘆に暮れるというよりは歓声を上げているように、取り乱すというよりははるかに自足しているように見えた。単に別離には、再会や後追いの旅、年の市の見物の半分ほどにも注目していなかったからである。しかし彼女は私の若干細くて長い首と体にほとんど痛みを覚えるほどに肉付きの良すぎる頑丈な荷物のよ

*1

*1 39) エピクテトスは旅を勧めている。昔馴染みの者達は羞恥心と影響力とで高い徳操への移行を妨げるからである。 — 例えば土地を離れると方言を恥じらって使わず、それから完全に浄化されて土地の者達の許に戻って来るようなものである。今でも身分のある徳操の人々は逆の意味であるが、この助言に従っていて、旅している。昔馴染みの者達は、羞恥心からはなはだ新たな罪に踏み込ませないからである。

うに抱きついて言った。「元気に旅立ってね。可愛いアッテル（アッティラ）、ーそして途中考えごとをしないことよ。変わり者のあなた。ー心配することがあるかしら。打撃の一つや二つ何てことないわ。私の父は乞食じゃないのだから、ーでもね、フランツ」と彼女は自分の兄にはきちんと怒って続けた。「あなたに私のアッテルを預けます。分かっているでしょうね、阿呆なことをしてこの人を途方に暮れさせたら、どんな目に遭うか。へなちょこさん」。私は彼女の善意からの言葉をここでは大目に見ることにする。友の方々にも彼女の富と気前の良さは珍しいことではないであろう。

私は感動して言った。「ベルガよ、再会することがあるとすれば、きっと天国かフレッツであろう。叶うことならフレッツがいい」。ー直ちに敏捷に進んだ。私は馬車の背の窓から私の立派な小都市ノイザッテルを見回した。あたかもその塔の先端は全く、私の人生の上、あるいはひょっとしたら亡くなっている私の死骸の上の墓碑として高く聳えているかのように思われた。さて遂に二日後あるいは三日後におまえが戻って来たとき、すべては何と変わっていることだろう。今や私のベルゲルヒェンがマンサード屋根から私どもを目で追っていた。私は馬車の扉から身を乗り出した。彼女の鷹の目はすぐに私の頭部を見つけた。彼女は谷に向かって進んで行く馬車の私に、両手で多くの接吻を投げ寄越した。「気立ての良い妻よ」と私は考えた、「おまえの卑しい生まれをどんなに精神的生まれ変わりで償っていることか、いやそうないことだ」。

勿論郵便馬車のパーティー、ピクニックは余り私の気に入りそうになかった。全くいかかわしい、見知らぬならず者達で、フレッツ人がその嗅覚で（通常、市の場合見られるように）誘い込んでいる者達であった。馴染みのない者と馴染みになるのを私は好まない。しかし私の義兄、軽騎兵はいつものように一切構わず語り出していた。私の横には十中八、九娼婦と思われる女が座っていた。ー彼女の膝には小人がいて、年の市で見世物になりたがっていた。ー私の向かい側では鼠捕獲人が私を見つめていた。ーそして下の谷では更に赤い外套の不正乗客が乗って来た。私には義兄を除いて気に入る者はいなかった。娼婦が私と知り合いであることを誓って申し立てをしないか、乗客の中の悪漢が私や私の癖や偶発事を調べ上げて、拷問されたとき、私をその一味に巻き込みはしないか、

ー誰も保証できないことであった。余所の土地ではー用心からー私はどこか上の牢獄を長く眺めていたくない、格子の中の悪太郎がただ意地悪さのせいで叫びかねな

*1

*1 2) 一人の兵士は自分の侯爵に忠誠を誓い、従うとき、同時に自分の侯爵と將軍にそうしている。市民は単に侯爵にそうしている。

29) 法学の中には、いかに多くの法的不思議が含まれていることか。不当な学者の場合は例外である。

39) 過半[より大きな半分]は幾何学に反する表現であり、幾何学者は結婚生活以外には遣えない表現である。いやそれどころか自らの結婚生活にしか遣えない表現である。

45) 現今の著作者は自分達が乗っかっている両肩について、大方肩をすくめる。そして自分達を頼って這い上がって来る者達を最も称える。

14) かなりの詩人達が劣等な登場人物達を描きながら、しばしばその人物の模倣に陥っている。子供達が小便をしている夢を見ているとき、本当に小便をしてしまうようなものである。

いからである。「その下にいるのは我が輩の仲間のシュメルツレだぞ」と。 — あるいは邪道な刑吏が、上の仲間を私が奪おうとしていると思いかねないからである。それ故それとほとんど変わらない用心のせいで、私は椋鳥が私に後から、泥棒と呼びかけても、決して振り返らない。

小人そのものに関しては、彼がどこへ向かおうと、一緒に進むことは私には構わなかった。しかし彼は自分のポルックス、同僚たる珍しい巨人が、同じように市の見世物になるべく、真夜中頃間違いなくその象の歩みで我々の許に追い付き、乗り込むか、後ろに立つであろうということを知らせて、我々に格別な喜びをもたらそうと思っていた。つまり両阿呆と一緒に市へと対称的なサイズの相互測量協力者として向かっているのである。小人は巨人の凸レンズの拡大鏡であり、巨人は小人の凹レンズの縮小鏡なのである。誰も小人の鏡同僚の到着の見込みに大きな喜びを見せなかった。しかし私の義兄は例外で（言葉遊びが許されるならば）彼は時計のように単に打つためにできていると思っていて、私に本当にこう言ったのである。「いつか上方の永遠の至福の中で、時に誰かを殴ったりとちめたりできないのであれば、むしろ地獄へ行きたい、そこではきっと十二分に喧嘩を堪能できるであろうから」。 — 郵便馬車の鼠捕獲人は、鼠どものこの友ハイン[死に神]やこの鼠の運命の女神パルカのように単に毒殺で生きている者は、歓迎されないということや、このような者は、更に悪いことに、自分が鼠の捕獲を許されないとするとこの有害鼠の領国を拡大させかねないということの他に、そもそもそれ自体いやなものを有していた。まずはヒ首のような鋭い眼差しであり、 — それからそのかなりの毒の品の算段と結び付いた痩せて鋭い骨張った顔つきであり、 — それから（というのは私はますます熱く彼が嫌いになったからであるが）あたかも一人の人間に似て、どこかの隅に一匹の鼠を見ているかのような、彼の秘かな静謐、秘かな微笑である。まことに私はいつもは全く別な人々の味方をするのであるが、とうとう彼の喉は[ナポリ近郊の]犬の穴に思えたし、彼の頬骨は浅瀬や断崖に、彼の熱い息は煨焼炉に、彼の黒毛の胸は干し炉、乾燥炉に思えたのである。 — —

私は — 大して誤っていなかったと — 思う。というのは直に彼は一人の小人と一人の娼婦がいた一行に、全く冷静にこう報告し始めたからである。自分はすでに十人もの体を短剣で、快楽を覚えないわけではなくて、突き刺した。 — 一ダースもの人間の脚を落ちていて切り落とした。四人の頭部をゆっくりと割って、二人の心臓を取りだし、更に同様のことをしたが、 — その中の誰一人として、普段は勇敢な人間なのだが、少しも自分に抵抗しなかった、と。「何故かなれば」と彼は毒々しく付け加えて、醜い禿頭から帽子を取った、 — 「わしは不死身だからで、 — 一同の中でその気のある方は、好きなように私の禿に火を乗せ給え、わしは燃え尽きて見せよう」。

*1

*1 103) 偉いさん達はひょっとしたら自分の子孫達を蟻のように熱心に配慮しているのかもしれない。卵が置かれると、雄蟻と雌蟻はそこから去って、卵を忠実な働き蟻に任せている。

10) 人生は我々の理想的希望や計画に関して、散文的、リズムのない、韻のない翻訳より何か別なものを供するであろうか。

私の義兄、軽騎兵は早速燃えている煙草の火口を頭蓋の上に置いた。しかし鼠獵師は、冷たい炎であるかのように静かに収まっていた。彼と軽騎兵とは互いに待機して見つめ合っていて、二人ともはなはだ滑稽に微笑していた。――「立派な霜焼け香油のように」と彼は言った、「ただ気持ちが良い、これはそもそも自分の体では北側に当たるからで」。ここで私の義兄は少しばかりむき出しの頭蓋を撫でて、びっくりして叫んだ。「膝蓋骨のようにとても冷たく感じられるぞ」。するとこの男は突然ちょっと準備してから四分の一頭蓋を外して我々をびっくりさせ、我々にそれを差し出して、言った。「たまたま自分の頭蓋が壊れたとき、殺害者の頭蓋を切り取ったのだ」、そしてこう説明した。「突き刺したとき腕を切り落としたという話はむしろ冗談と考えるべきで、自分はただ解剖の教室で助手として行ったのだ」と。――しかしこの冗談屋には我々の誰もが飽き飽きして、彼がカプセルの頭、代理の頭蓋を、また被せたとき、私は黙ってこう考えた。この温床の鐘はきっとその居場所を変えただけで、それが覆っている毒の頭[イヌサフラン]を変えたわけではあるまい、と。

最後にそもそも、彼が全ての一行同様に（不正乗客も含めて）まさに私自身が向かおうと思っているフレッツへ進んでいるのではないかと疑念を抱くようになった。こうなれば格別な幸せは期待できなかった。私が未来に対して反抗するのを好むのでなければ、実際進行同様に退却も好ましかったであろう。

とうとう私は赤い外套の不正乗客に目を留めた。大方亡命者、移住者で、（というのはドイツ語をフランス語より下手に喋っていないからで）、ジャン・ピエールか大体ジャン・ポールという名か、あるいは全くの名無しであった。彼の赤い外套は、死刑執行人のと同じ色合いにもかかわらず、――死刑執行人は多くの地方で的確に恐い男と呼ばれるが、

――それ自体全く気になるものではなかったであろうが、しかし彼は私とすでに五回、五つの町で（大都市のベルリン、小都市のホーフ、コーブルク、マイニンゲン、それにバイロイトで）、全く有り得ないことであるが、出会っているという特殊な事情があった。その際彼はその都度私を十分意味ありげに見つめて、それから我が道を進んで行ったのである。彼が私を敵視して追跡しているのかどうか分からない。ただいずれにせよ、偵察隊と共に、銃眼からひょっとしたら銃を構えて、狙っているという人物は空想にとって好ましくない。その人物は銃をどこでぶっ放すか分からないまま持ち歩いているのである。この赤い外套は、はっきりと自分の柔和な魂の優しさを称えるということで、私には更に不

*1

*1 78) 女達はすべてのリンネルを白いと見なす。ただ本だけはそう見なさない。もっとも女達は多くの論争的フォリオ判を、それが製紙工場に行く前に、体に花嫁シャツとして身に着けたかもしれない。男達はただそれを逆にする。

7) 甲冑を付けたドイツの帝国本体は動くのが難しい。これは羽根がまことに翅鞘によって、――それと一緒に生えたものによって、――築城されている甲虫が飛ぶことができないようなものである。

8) 国家の施設は舗装道路を作るようなものである。どの馬車も道路建設に関与し、土整備の加勢をする。全く新しい、通ったことのない路上で、穴ぼこだらけの全く古い使い古しの路上同様に、踏んだり投げつけたりしなければならない。従ってここでなすべきことは何か。進み続けることである。

快になった。これはほとんど迂回探査、油断狙いを暗示しているように見えた。私は答えた。「御主人、私は丁度ここの私の義兄同様に、戦場から来たところです（最後の合戦はピンペルシュタット近郊でした）、それ故ひょっとしたら渾身の力、胸の嵐、憤激の熱さに余りに強く肩入れするのかもしれませんが。心の渦巻く[海上の]竜巻、本来は陸上のものですが、それを有する多くの者にとって自分の宗教的素質が（私はその中にいますが）、激させるよりも和らげるものであれば、結構なものかもしれません。しかしどのような優しさにも鉄のような柵の格子が必要です。どこかの無分別な犬が私に噛み付いて、重大な傷を付けたら、私は勿論本気で怒って、踏み潰し、その後私の後で義兄がひょっとしたら更に二度そんなことをやってくれることでしょう。それに打ってつけの男ですから。ひょっとしたら性分なのでしょうか。私は（告白しますと）今日もなお残念に思っているのです。つまりかつて少年の頃他の少年から三回平手打ちをくらったのですが、粗放に殴り返すことをしなかったのです。しばしばそのお返しを奴の孫達に後払いしなければならない気分になります。まことに私は一人の少年が同じような少年のか弱い威力の前に臆病に逃げ去るのを目にしてさえ、その遁走が理解できずに、きちんとぶん殴って気合いを入れたい思いです」。その乗客は微笑した。しかしからかいの笑いではなかった。彼は公使館参事官を自称していて、それに十分したたかな狐に見えた。しかし狂った狐は狂った狼同様仕舞には噛み付いて狂犬病にするものである。ちなみに私は悠然と度胸の称賛を続けていた。ただ私は意図的に滑稽な大言壮語の代わりに、これはまさに臆病を告げるもので、確固と、冷静に、明瞭に語った。「私は」と私は言った、「単にモンテーニュの助言に[『エッセー』、第一巻、第十八章]賛成です。恐れを恐れさえすればいいのです」。

「私ならまた恐れますな」（と公使館参事官は無闇にいたずらっぽく答えた）「自分が恐れを十分に恐れているのではなく、余りに臆病に恐れているのではないかと」。

「この恐れにも」と私は冷静に答えた、「私は境界を設けます。男たる者、例えば皆目幽霊を信じたり恐れたりしないものです。それでも夜にびっしょりと冷や汗をかきます。それも単にこう不安を抱くからです。つまり単なる迫真の空想のせいで、何らかの熱病時の像、惑わしの像が空中に描かれてしまうとき、自分は何と驚いてしまうことだろう、（殊にとんでもない卒中や癲癇等の追加を蒙りながら）と」。「それ故」と私の義兄は、いっになく教訓的に述べた、「哀れな羊のような男は幽霊現象と付き合ってはなりません。臆病兎は即刻その場に倒れてしまいましょう」。

郵便馬車の後追いの甲高い雷雨で議論は変わってしまった。友人の貴兄らは多分皆、
一 私を少しも物理学の欠けていない一人の男として御存じであろうから、
一 雷雨に対する私の対策を察知してくださることであろう。つまり私は部屋の中央の安楽椅子に腰掛け（しばしば私は由々しい雷雲の際には一晩中そこに座っている）、すべての導体、指

*1

*1 3) 裁判ではしばしば殺された胎児が死産の胎児と称される。批判の反論では、死産の原稿が殺害された原稿と称される。

101) ロードス人がその巨像[コロス]故にコロサイ人と呼ばれるばかりでなく、無数のドイツ人がルター一故にルター主義者と呼ばれる。

輪、バックル等々を外して、すべての閃光から常に離れているようにして、それで私は冷淡に雷のティンパニーの天球の音楽に耳を傾けるのである。 — この用心が私に害を及ぼしたことはない。私は本日も存命なのであるから。私はかつて、市の教会から、その前日に告解をしたのであったけれども、即座に、まず聖餐を受けることもしないで、納骨堂へ逃げ込んだことを今日でも幸運なことと喜んでいる。重大な雷雨が（実際教会墓地の菩提樹を襲ったのであるが）迫って来ていたからである。 — 私は果たして雲の放電の後、納骨堂から教会に早速戻って、幸い（最後尾の）獄吏の後に付いて、愛餐を享受することができた。

私としてはそのように考えている。しかし一杯の郵便馬車の中では目にするのは、物理学についてまことに阿呆な者達である。というのは雷雨がすさまじく我らの馬車の天蓋の上に蝟集してきて、蛍であるかの如く爆ぜる炎の塊が天空に舞ったとき、そして私がようやく、汗ばむ郵便馬車の密室教皇選挙一同にはせめて時計や指輪、貨幣等々を集めて貰い、それらを例えば馬車の備え付け袋に投げ入れ、誰一人体に導体を有しないようにして欲しいと懇請しなければならないと思ったとき、誰一人としてそうしなかったばかりでなく、私自身の義兄、軽騎兵は、それどころか剥き出しの刀を引き出して、御者席に登って、避雷針となると誓ったのである。この自暴自棄の人間は気が利いているのか、そうでないのか私には分からない。要するに我々の状況はすさまじいものであった。誰もがお陀仏になりかねなかった。結局私は馬車の粗野な人間荷物の二人、つまり毒殺者と売春婦の二人と半ば喧嘩になった。二人は問いかけながらほとんどこう言っているように見えたからである。つまりひょっとしたら私は貴重品の持ち寄りを称えながら極めて不正な提案をしているのではないかと。そのようなことは名誉心をはなはだ傷付けるものである。今や私の中では上方でよりも雷鳴が轟いた。それでも私はやむを得ぬ憤激の言葉の遣り取りをできる限り小声で、ゆっくりと行い、穏やかに論争して、仕舞に激昂した馬車が暑く汗ばむ状態にならないようにし、我々の真ん中に馬車の天蓋からの蒸気に間近の雷神の矢[稲妻]が落ちて来ないようにした。結局私は一行の電氣的主題全体を明瞭に、しかし小声でゆっくりと、 — 汗をかきたくなかったので、 — 説明した。そして特に恐怖を抱かないよう脅しつけようとした。というのは実際恐怖の余り、誰もが卒中[雷]に — いや二重の

*1

*1 88) これまで私はいつも現今の哲学的審美的理想の論争打穀棒の論争文書を、ここには勿論若干の嘲笑の言葉やペテンと嘘の推論が生じているのであるが、むしろより美的な面を受容してきていて、私はその文書を単に古典古代の模倣と見なしてきた。つまり古典古代の闘士の模倣であって、彼らは（ショットゲンによると）、掴まえられないように体に糞を塗ったのであり、他人の体を掴むよう、両手に砂塵を満たしたのである。

103) あるいはすべての回教寺院や監督教会やパゴダや支部教会や幕屋や、パンテオンは、見えない神殿やその至仁の者へ至るための異教徒の前庭といったものに他ならないのではないか。

40) 民衆は物語るときにのみ冗漫であるが、理屈づけのときは冗漫ではない。学者はただ物語るとき簡潔で、理屈づけのときは簡潔ではない。まさに民衆はその根拠を単に情感として、現在同様にただ観照するからであり、これに対して学者は両方をむしろただ考えるからである。

卒中、電氣的卒中[雷]は卒中性のものと言えるからで、一 襲われかねなかった。エルクスレーベンとライマールスによれば十分に証明されていることだが、強い恐怖は蒸気によって稲光を誘導するからである。それ故私は私や他人の恐怖に対して正しい不安を抱きながら、乗客にこう提案したのであった。つまり今や我らの汗ばむ状況の中で、御者台に稲妻を突き刺す刀が置かれている許で、雷雨に覆われている下、それに募り始める恐怖のかくも多くの発汗そのものの許で、要するにかくも目に著き危機の許で、何も恐怖を抱いてはならない、一行全体がことごとくやられたくなかったら、と。「いやはや」と私は叫んだ、「勇気を抱くことです。恐れてはなりません。恐れを恐れることすらなりません。

一 押し込められた兎としてここに座っていながら、我らの主に射殺されたいと思いますか。この馬車から外に出ているのであれば、誰でも好きなように、別な場所で恐れてよらしい。そこは余り恐れることはないでしょうから。しかしここではいけません。

百万人の中で、雷雨が基で死ぬ人間はほとんど一人もいないが、しかし雪雲や雨雲、薄い霧が基ではひよっとしたら百万人が死ぬかもしれないので、一 私の馬車で説教が人間救済賞に値するものであったか、私は決めかねるのであるが、ともかく我々は皆無事小都市フィーアシュテッテンの虹に向かって進んで行った。そこでは宿駅長はその地が有する唯一の路地に住んでいた。

フィーアシュテッテンからニーダーシェーナへの第二の宿駅

宿駅長は粗野な男で、喧嘩好きであった。私がいまいちようもなく憎む類いの人間である。私の空想はいつもこう思い描くからである。ひよっとしたら偶然あるいは意志に反して、奴らにまことに馬鹿にした無礼な顔を仕向けかねないし、虫酸が走るし、その後すでに顔が引きつる思いがするのである。幸いこのたびは（仮に私が嫌みな顔を浮かべていたとしても）、私は頼みの私の義兄、軽騎兵と一緒にあった。義兄の巨大な力にとっては、このようなことは朝飯前であった。というのは彼は例えば、殴り合いが派手な所では中に割り込んで、早速ドアの下で、「仲良くしろよ、犬どもめ」と叫ばずには通り過ぎて行くことのできない性分だからである。その後彼は見せかけの和平の説教をして、遠慮なく、あたかもアメリカインディアンの平和の煙管であるかのように間近の椅子の脚を手にとって、それで殴っている人物の上に当てて、引いたり押したりし、あるいは当事者達の固い頭を（彼はどの人の味方もしない）互いに力尽くで、両の手にそれぞれ相手の後頭部を掴んで、近寄せるのである。そうなるこの変わり者はご機嫌なのである。

私個人としては、各人各様の一行を求めるというよりは避けることにしている。死人や

*1 9) エジプト人は国の厄災があるたびに、その厄災の原因と見なされる神ティフォンに、その神の寵児たる驢馬を岩から落として復讐とした。同じように歴史の中では異なる宗教の国家も復讐し合ってきた。

70) 詩文は哲学の中に、哲学が詩文の中に隠れるように隠れるべきであろう。しかし詩的散文の中の哲学は居酒屋のかの飲みグラスに似ていて、これらは互いにしばしば厭わしく反撥し合う多彩な絵模様で覆われていて、飲むことと絵模様双方の享受を妨げるものである。

殺された者達をすべて避けるようなものである。 — 用心深い男なら、それでどうなるか容易に予見できる。不快な嫌な証言をすることになるか、あるいはしばしばそれどころか（状況が示し合わせて）共犯についての刑法上の尋問になるかである。

フィーアシュテッテンで私にとって重要な出来事はただ、 — 恐ろしいことに、 — 町中や路地を走る尾のない一匹の犬との出会いであった。私は憤激してまずかっとなつて、通行人にその犬を示して、問いかけた。医学的警察は立派に機能していると言えるのか、警察はフィーアシュテッテンの人同様に尾のない犬が公然と飛び跳ねているのを許しているぞ、と。「尾が切り取られていたら」と私は言った、「そしてこのような獣がすべて私に向かって来て、巻かれた尾からも、起き上がった尾からも、全体尾がない以上、この獣は狂犬かそうでないか推論できないとき、何を頼りにしたらいいのかね。単に尾の羅針が欠けるだけで、どんな利口な男も腹が立ち、噛まれてしまい、失敗してしまう」。後から来た不正[盲目の]乗客は、（彼は今や目明と称しているが、一体何のつもりだろう）、今まで耳にしてきた私自身の言い分を私の前でほとんど滑稽な具合に引き延ばし、結局私の中に次のような疑念を抱かせた。つまり彼は私の語り方の一種の、しかし強力な追従の模倣で私をからかっているのだ、と。「犬の尾というものは」と彼は言った、「多分我々にとっては、号火、道標で、精神病院に入ることのないようにするためのもので、さながら憤激の外的前哨に当たります。 — 彗星の尾を切るとか、トルコ総督の権標を切るとか、蟹の尾を切ってごらんない（延びた尾はくたばった状態を意味しますから）、人生の危険な案件の際に導きの糸、警報器、欄外の注のないに等しいものです。 — 前もって何故か分からずにお陀仏です」。

ちなみにこの宿駅は喧嘩も苦境もなく通り過ぎた。皆が十時頃には寝入った。私を除いて、御者までもが。私は例えば立派な理由があつて誰が単に寝ている振りをしているか観察するために、確かに眠っている振りをしていただけれども、しかし皆がいきびきを立て続けていた。月はその神々しい光線を単に閉ざされた瞼に投げかけていた。

今や私は立派に、眠っている者達に主に観相学的尺度を当てるというラーヴァーターの助言に従うことができた。眠りは死と同様に真正な形式をより赤裸々に刻印するからである。郵便馬車以外の他の睡眠者に対しては上述の尺度を当てて余り推奨しない。絶えず若干の懸念が残るからで、つまり単に寝ている振りをしているだけの男が、私が十分間近に来た際に、夢の中でのように飛び起きて、観相学的測量師の自らの顔の形態にかなり策謀的鉄拳を振るって、その形態はもはや観相学的断編には、自らが断片になってしまって、点描法でも凹版でも掲載できなくなりかねないからである。そもそも世の最も正直な睡眠者でさえも、まさに丁度貴方らがその観相学的死体公示に取りかかっているとき、喧嘩の夢の中名誉心から急き立てられていて、跳びかかりかねないのではないか。そして貴方らをひよっとしたらわずかばかりの手の介入と足の踏み込みで、この者が目覚めた眠^{*1}

*1 158) 国家はよく詩人達の口琴[大口叩き]、子供用太鼓を陣太鼓や火事太鼓と混同するが、そうすべきではない。逆にまた市民は多くの名誉太鼓[鼓腸]を単にある種の病気とみなすべきであろう。つまりこの病気のとき患者は単に皮の下へ侵入してきた空気でもとも膨張しているだけなのである。

りよりもはるかにもっと長い永遠の眠りに導きかねないのではないか。

私の所謂影絵切り風影絵芝居では、眠っている郵便馬車の顔の目次そのものが生じている。まず最初にくださしく説明したいのは、何故殺害のドーム頭蓋を持った毒殺者は、悪魔的に見え、

— 小人はませた子供っぽく — 娼婦は草臥れて、弛緩して生意気に、

— 私の義兄は復讐とか食事によって穏やかに満ち足りて見えたかということである。

— しかし公使館参事官のジャン・ピエールは何故か知らないが、半ば天使に見えた。もっとも半分の天使というのは有り得る話で、単に美しい肉体だけが私に作用していて、他の半分、つまり眠り込んでいる半分の魂が作用しているのではなかったのであるから。

しかし私は、両義兄が、つまり実の義兄の軽騎兵と義兄と普通呼ばれる御者が飲んでる間に、ちょっとした恐怖を無事切り抜けたことをほとんど忘れそうになっている。運命は二度私の味方をしたのであった。猟の館から遠からぬ地で、美しい木の群れの傍らに、黒い文字の銘のある白い板を私は見つけた。そこには小さな棺の工芸品、名誉の柱、何らかの死者に対する表彰状、馬上試合褒賞状、遠征顕彰状が期待された。足を踏み入れている曲折した道を通して、私は白地に記された黒い文字の前に立ち、月光の中で読んでびっくりした。「ここでは誰もが自動発砲に注意すべし」。それでは私はひょっとしたら撃鉄から足指の爪の幅の所に立っていて、踝を動かしたら、私自身を慌てた阿呆、柵杖としてあの世の浄福者達の許へ射殺しかねないところであった。私はとりわけ足の爪で大地の中へ食い込ませ、入れ込むように努めた。

— 私がしっかりとそこにある運命の三女神の一人アトロポスの鉄の横、処刑台の横で立っている限り、少なくともその間は優しい生命の許に留まっておれたからである。

— その後で悪魔が私に発砲することなく導いてきた小道はどれかと思い出そうと願った。しかし不安の余り、私は汗だくになり、何も分からず、

— 間近の地獄の村では私を水中から救い出すような犬一匹も見えず、吠えていなかった。そして両義兄は幸せに飲んでいた。しかし私は勇気を奮って、決心した。

— 羊皮紙に私の遺言と、私の偶然の死去の様子を書き留め、ベルゲルヒェンへの死去の際の御礼を書いた。

— そして帆掛けて運を天に任せて、真っ直ぐに最短の道を飛んで行った。歩くたびに射殺されかねない、自らの手で私の長い生命の明かりに灯火消し蓋を置きかねないと思い込んでいた。しかし射殺されることなく着いた。勿論居酒屋では一人の阿呆よりも多くの者が私のことを笑った。ただ阿呆のみが知り得ることであったが、その警告の板はすでに十年前から射撃なしに残されていたのであった、丁度しばしば警告の板なしに射撃の方は見られたように。友よ、我らの狩猟の警察のやり方はそんなもので、これは何にでも警告するのであるが、警告板に対してだけは警告しないのである。

*1

*1 89) 大都市では異郷人は到着後の最初の日々を単に旅館で自分の金を使って生活し、その後ようやく自分の友人達の家で無料で過ごす。これに対して、地上に生まれたときは、例えば私の場合、まさに最初の数年は丁重に無料で賄われる。しかしその他のより長い年月においては、

— というのはしばしば六十年間いるのだから、

— まさに（私は両手に記録を有するが）一滴飲むたびに、一口嚙むたびに支払わなければならない。あたかも地上亭という大旅館にいる具合であって、その上これは真実のことなのである。

ちなみに私はほとんどすべての宿駅で、御者と軽い諍いとなった。私が小便をするために降車するとき、十五分ごとに御者は停車したくなかったからである。勿論残念ながら御者に対して尿の予言者を期待できない。学者でもハラーの『大生理学』からこの件を我慢していると、悪魔的結石が生じて、最後にはこの結石の所有者そのものを倒してしまうことを知っているのは少ないのである。この石切場を膀胱結石の医師が片付けることは死が墓石で閉ざすよりも稀であるからである。ティコ・ドゥ・ブラーエ[Tycho de Brahe]は爆弾のように破裂して亡くなったと御者が読んだことがあれば、むしろ停車したことであろう。彼らが私には思いがけないこのような知識を有していたならば、一人の男は墓石たるものをいつかは自らの上に頂こうと思っても、しかし自らの中に有したいと思わないのを理性的なことと見なすであろう。私はそれどころかヴァイマルではしばしばシラーの極めて長い別離の場から目に涙を浮かべて出て行き、ただ、彼のミネルヴァが私をすっかり軟化させているけれども、その胸のメドゥーサの目で部分的に石化することのないように心掛けたのではなからうか。そして泣いている芝居小屋に戻って来て、皆の感動により快活に賛同したのではなかったらうか。ほっとするしかなかったのだから。

とても暗闇の中、我々はニーダーシェーナに着いた。

ニーダーシェーナからフレッツへの第三の宿駅

私が目を旅行カバンに向けて、郵便宿駅で物思いに耽っていたとき、夜警人のある家畜野郎がその夜のチューバを私の耳許の間近で思いがけず吹き鳴らした。それで私はまさしくのけぞった。私はすでに激しく素早く語りかけられることがすべて嫌いである。このような吹奏の時間ごとの騒音紙こより、騒音太鼓に対する医学上の取締はないのであろうか。これらのお蔭で実際の太鼓がなくて済まされるわけでもないのである。本来ならば夜警人のホルンは理性的男性を除いて、権標として授けられるべきではあるまい。すでに吹きすぎ、持ち上げすぎて、ヘルニアになったことがあって、自分の時を告げる詩行を、誰も聞き取れないほどに微かに歌うことのできる理性的男性を除いて。

私が夙に予期していて、小人が予言していたこと、そのことが今や生じた。高い宿駅の間から、深く身をかがめて、巨人が出て来て、野外で無分別に大きな体格と、同様の頭部をエレ程の高さの縁なし帽と羽根飾りを着用して聳えていた。私の義兄は彼の横では単にその十四歳の息子に見え、小人ときたら二本脚で待っている愛玩犬とまで見えた。「友よ」と私のからかい好きな義兄は、彼を私と郵便馬車の所まで案内して来て言った、「静かに乗車し給え。皆喜んで席を空けることだろう。自分を上手に折りたたんで、頭を膝に乗せたらいい。そうすれば大丈夫だ」。この無闇のからかい屋はこのほとんど単純な巨人に対して、この巨人の頭脳は抜け目のない客人ではなくて、その胴体の否定的なサイズである

*1

*1 112) 私は否と言う。人間は帽子同様、丁度自らと帽子とを使用しないときには、両者とも労るために、再び使用されるまで逆さにして置くべきである。

10) 世紀のエポックは、一 スペインの国王達や 一 統治就任や成年式や結婚式のように、よく賢人達や異教徒達の火刑やモール付き衣服の放火で祝われる。

と直に彼は気付いたのであるが、――我々の許で不安げな郵便馬車箱と避難小屋とを目にしていて、屈んだ背中を坩堝に丸めて、曲げて閉じ込めたかったのであろう。「これは駄目だ。これは全く駄目だ」と巨人は中を覗いて言った。「兵士殿はひょっとしたら」と小人が答えた、「巨人がどれほど大きいのか御存じないのかもしれませんが。私が入るからそう思われるのでしょうか。――しかしこれは別の話しになります。私なら、ここと言われさえしたら、どこでも入れますが」。――

要するに郵便局長とこの巨人にとっては、この巨人が背後の乗客の荷台に身を置き、腰掛ける他に策はなかった。自らを馬車の箱全体の上に枝垂柳として身をもたせかけながら。私自身にとってはこのような追い風、背もたれは格別喜ばしいものではなかった。友の方々、私は貴方らのいずれにも信頼できると（そう希望するが）、このような背中の訓令の背後では私同様十分立派に明瞭にこう概算したことであろう。自分の背後のこのような巨人野郎は、つまりすべての意味での追跡者は、何か殺人的なことを試しかねない、と。馬車の後方の窓から侵入して襲いかかることであれ、あるいはそもそも巨人的力で、上の馬車の天蓋に身を投げ出すことであれ、と。しかし上の方で腕を組んで箱の上に横たわっている巨象は、――この象は比喩的に言って、飛翔する精神の明かり[象は賢いと思われる]よりも圧迫する塊を有しているように見えたが、――やがて眠り込み、いびきをかき始めた。一頭の象で、これに関しては（私はますます喜ばしげに確信したが）私の義兄、軽騎兵が、容易にその象使い、調教師となり得たのであり、いや実際そうであったのである。

今や一人ならず眠ろうと思っていたので（正当なことである）、私は逆に目覚めていようと思ったので、私は私の名誉座席、前方視座席を、（それに乗客達の幾多の嫉妬を避けるためにも）、ここで少しばかり微睡もうと思う人々に提供することにした。公使館参事官はこの申し出と寄りかかりのクッションに素早く手を出して、その背後の巨人の背もたれの許で眠り込んだ。外交官上の代理公使たる者のこのような郵便馬車での眠りは私にはいささか不可解であった。赤の他人の、しばしば食欲な道連れの中でこのように眠り込むような男は、実際微睡みの中、馬車の中で語ったら、（七年戦争前のザクセンの大臣[Heinrich v. Brühl(1700-63)、賢臣ではなかった]のことを皆考えて見て欲しいものである）、数百もの秘密や自分がやってもいない数千の恥ずかしい行為を吐露しかねないのである。どんな大臣も、公使も、地位や名誉のある他の男性も、狂気の発作や高い熱病には用心すべきではあるまいか。自分がその最中、ひょっとしたら大半は嘘かもしれないこの上ない

*1

*1 144) 批評家はそのペンを本来執筆のために使用せず、ペンの焦げた臭いで無気力な者達を目覚ませ、剽窃者の食道を再び吐き出すようくすぐり、ペンで自分の歯をせせり出す。彼は全ての学者辞典の中で、書き尽くし、汲み尽くすことのない者である。インクの前に一世紀、一千年座っていようと、尽きることはないであろう。というのは学者や、哲学者、詩人が新しい本を単に新たな素材と生長物から創造するのに対し、批評家は見解と趣味の自分の古い尺度を千もの新たな作品に当てるだけであるからで、その古い明かりは、通過して行く、常に様々に磨かれた世界の許で、自分が照らすその世界の許で、新たな色彩へと屈折するのである。

スキャンダラスなことを吐き出すかもしれないと誰も保証できないのだから。 —

ようやく長い七月の夜の後、我々乗客はアウローラ[曙光]と一緒にフレッツに着いた。私は塔の先端を鋭く、穏やかに見た。思うに、ある町で何か決定的なことを探さなければならない各人、自分の希望の処刑場か希望の投錨地、あるいは屠殺場か砂糖畑と町がなる者は、その日を最初に最も長く町の塔に、自分の未来の秤の指針や目盛指しとして据えるものであろう。さながら建築上の山々で、これらは自然の山々がそうであるように、我々の未来の王座である。私がこのことを余りに詩的にジャン・ピエールに対して吐露したとき、彼は十分無愛想に答えた。「このような町の塔は、我々が未来のアルプスのチーズを求めて、搾乳する所になるアルプスの尖峰です」。公使館参事官のペーター野郎はこのような言い方で私をからかおうとしているのであろうか、それともただ自分を茶化しているのか。 — 決めて欲しいものである。

「ここがその地で、その町だ」と私は自分にこっそりと言った。「今日ここで多くのことが、未来に関して決定されるのだ。ここでおまえは今晚五時におまえの請願書と半ばおまえそのものを任せるのだ。 — 成功して欲しい、立派に行って欲しい。フレッツが、おまえのささやかな努力のこの戦場が、同時に二人の心、おまえの心と妻の心の別荘、蜃気楼となって欲しい」。

虎亭で私は降りた。

フレッツでの最初の日中

誰も最初は、私のような虎亭の状況では、間近の眺望に陶然となることはなかろう。私は自分に馴染みの唯一の人間として、とりわけ愛の面について承知している人間として(外出して来る女丈夫については後ほど触れる)、市の客人で一杯に詰まった旅館の窓から覗き見て、市の群れが押し寄せて来るのを見おろして、やがてこう憂えて思った。本来神と悪漢と殺人者の他には誰も正確には、悪漢と殺人者がいかほどその中に混入していて、ひょっとしたら何の罪もない市の客人達を身ぐるみ剥いだり、首をへし折ったりするか分かっていない、と。私の状況は何か不都合であった。 — 私の義兄が、彼は何でも無闇に語り散らすので、私が虎亭で降りることを漏らしてしまっていた(何ということか、いつになったらこのような人間どもが内密ということ覚え、人生のどんなに惨めながらも口実やヴェールの下に運んで行く術を覚えるのであろう。しばしば一匹のみずぼらしい鼠は、一つの山が一匹の鼠を生むよりも[大山鳴動して鼠一匹]、一つの氷の山、ゴルゴタ[キリスト磔刑の丘]の山を生むというただその理由を知らない)。 — 全員の郵便馬車のならず者が虎亭で降りた。 — 娼婦も — 鼠捕り屋も — ジャン・ピエールも降りた。 — 巨人は、これはすでに市門で降りて、小人の大きな頭を自らの頭として

*1

*1 107) ドイツは海の下の — 長く崇高な山脈である。

18) 自己授乳ということでは、人々は前足で父を飲ませる熊のように、自分自身を自らの胸元に置く意に解さずに、他人によっては他人に乳を飲ませない意に解している。自己愛の言葉も使用するときは、そう解すべきであろう。

外套を被って通りを運んで行った。本来金と引き換えに見せるよりも小人の半分分だけ無料で、より巨大に見えるようにしていた。――

旅館の紋章である虎亭で、その原型である虎となり、それからどの小羊を食らい、吸い尽くし、筆り取ろうとするかは今や降車した各乗客次第であった。私の義兄も私から離れ、一人の馬喰の後を付いて行った。しかしその妹のために自分の部屋を私の部屋の隣に押さえた。思うに彼女のために監視するものと思われた。私は孤独に私の勇気を頼りにしていた。

それでも私は、私を攻囲するとまでは言えなくても取り囲んでいる多くのならず者達の中で、温かい思いで、遠方の実直な魂、ノイザッテルの私のベルガ、真髓の力、力強い心のことを考えていた。この心はひょっとしたら幾多のか弱い配偶者に庇護されるというよりはむしろ庇護を与えるかもしれない心なのである。是非明日正午に丁度直に現れて欲しい、ベルガと私の心は言った。できることなら午前中にも、そうしたらおまえの年の市の楽園は早く着いた分だけ、それだけ一層長く時間が延びるわけだ。

聖職者は世間の嵐の最中、容易に自由の港、つまり教会へ駆け込むことになる。教会の壁はその狩猟小屋の壁であり、城砦である。そしてその奥には市の広場よりもより同等の気分の、より穏やかな人々が一緒にいるのである。――要するに私は宮廷教会へ行った。しかし私は敬虔に歌っているとき少しばかり一人の傭兵によって動かされた。この男は私の向かい側の身なりのいい若い紳士の鼻から二重柄付き眼鏡を外した。フレッツではドレスデン同様、縮小化し、間近に見せる眼鏡は作法に反するからである。私自身は確かに眼鏡を着用していた、しかし拡大するものであった。私は外すには至らなかった。ここでは案ずるにまた私は頑固者、向こう見ずの者と見なされかねない。ただ私は続けて眼鏡を付けたまま賛美歌本を眺めて、宮廷が雑然としているので、眼鏡が凸面に磨かれているとい

*1

*1 97) それ故私は、シュメルツレが上手に説教することを、すでに彼の多くの知識と言葉遊びから推定している。演壇の上の神学世界、いや更に説教壇の上の神学世界は、別の学問に由来する最良の光線や発見の、殊に哲学や詩文のそれのさながら光の収穫器、捕獲器、あるいは光のマグネットである。神学世界自身は本来まさに受動的な泥棒島[ラドローネス諸島]しか発見せず、そこで彼らは薬味を取り寄せている。かくて人々は説教に、例えばマレツォル[Marezoll(1761-1828)]の説教に、他人の発明の豊かな遺物を見いだしている。そもそも哲学や倫理の発見で、五年後あるいは十年後、その発見者が有名になった後、神学世界の模倣者が――その女中たる哲学の相続人たる神学者が、――他人の嚙ったもの(boli)を流し込むに十分な説教水を注ぎさえすれば、更に十倍も偉大なもの豊かなものになし得ないようなものは少ない。しかし私はここで大方のルター派の説教家と僧侶達とのある違いを指摘したい。この相違は全くルター派の説教家達の損とは言えないものである。僧侶は私有物を有してはならず、不名誉な埋葬という処罰を受けることになっている(「修道士の地位」第二章X)。どんな所有物も僧侶の場合教会からの泥棒と見なされる。しかし思うに、ルター派の説教家は、たとえより高次の精神世界においても、自分がなお立派に自由に選択すべきその精神世界においても、――物体界の所有に関してはいづれにせよ宗教局がその名前において清貧の誓いをなしているので、――要するに思考に関して何ら私物を有せず、有しようとしないのであれば、はるかになお謙虚で、断念していることになる。

うヒントを与えることすらしないことを無難と思った。 ― ちなみに説教は立派なものであった。必ずしも宮廷教会にふさわしく上品に考えられたものではなかったのであるが。というのは無数の悪徳を警告していたからで、その反対物、徳操に対して、別な説教者ならば容易に勧告を出し得たかもしれないからである。礼拝の間ずっと私は神に対して、また並びに私の崇高な領主に対して、真の深い敬意を明らかなものにしようと考えていた。この領主への敬意には更に私は個人的理由も有していた。つまり私はこのような敬意をまことに公然と強力に浮き彫りの活字の打印器のように私の顔に刻印しようと思った。宮廷での何らかの肉体化した他人不幸喝采氏シャーデンフローに対してそれは嘘と証明したいためで、この喝采氏というのは、例えばネロに対するランゲ[Henri Linguet(1736-94)]の称賛についての私の最近の反駁と、この真の暴君自身に対する私のドイツ語の自由な諷刺を、つまりフレッツ週刊新聞に送った諷刺を、こっそりと私の領主に対する性格描写へとねじ曲げようと企んでいる者である。残念ながら今日では地獄の悪魔自身に対する諷刺さえも、どこかの人間的悪魔がその諷刺を一人の天使に応用せずにはまとめることができない。

とうとう宮廷が教会から馬車に乗ったとき、私はとても離れた所にて、それで私の顔は、近くで恭順な顔ではなく、高慢すぎる顔をしていても誰にも見とがめられることはなかったであろう。ひょっとしたら一人のシャーバッカーの方に、その配下の従軍牧師によりもふさわしかったかもしれないかの狂的に大胆な空想や欲求に私が取り憑かれたのは何故なのか、神のみぞ知るところである。たとえ私に最初余りにどぎつい光が当てられることになろうとも、友の方々よ、その最も厚かましい空想の一つを貴方らに打ち明けないわけにはいかない。私が最初の復活祭祝日の聖餐に出掛けた折の従軍牧師の私の就任式の時のことであった。男達の一団全員と一緒に祭壇の手すりの前で優しく感動して、私が立っていたとき、 ― いや、私は戦役に赴く者として自分を半ば臨終者として見なすことが許され、今や絞首台に赴く者のように最後の魂の聖餐を受けていると思えたので、ひょっとしたら一団の中の誰よりも感動していたかもしれず、 ― かくて私の中でオルガンと歌による感動の最中、何ものかが生じて、 ― 所謂古代のキリスト教的哄笑に導く最初の復活祭祝日に起因するものであったにせよ、あるいは最も感動した状況に対する悪魔的状况という単なる対比であったにせよ、 ― 要するに私の中で何ものかが生じて、(それ故私はそれ以来、普通はそのようなことを悪魔のせいにするどんな単純な男をも擁護するものであるが)、 ― 私の中でこう疑問を発するに至った。「汝が聖餐を受ける最中、無頼に嘲笑的に哄笑し始めることよりも何か忌まわしいものがあるだろうか」と。早速私はこの思い付きの地獄の番犬と諍いを始めて、 ― ただこの犬を顔の中に留めて、追放する為に、最も強力な感動を疎かにしたが、 ― しかしこの犬で疲れ、同伴され、祭壇の床几の前に情けない確信を抱いて到着することになった。つまり私がどんなに内部で泣いて、呻こうが、すぐに躊躇なく哄笑し始めるであろう、と。それ故私ととても威厳のある老市長とが一緒に背の高い聖職者の前でお辞儀して、この聖職者が私の締められた口に(ひょっとしたら彼は低い祈祷時膝布団の私には余りに背が高く思えたのかもしれないが)聖餅を差し込んだとき、私はすでに口の隅々ですべての哄笑筋が発作的に収縮し始めて、この筋は実際長いこと無邪気な顔の肌で働くことはなかったのであるが、すでに肌の上に現実の微笑が生じていた。 ― そして我々が二度目のお辞儀までしたとき、私は猿のようににやっと笑った。私の隣の男、市長は全く正当なことに、我々が祭壇を後にして回ったと

き、私にこっそりと言った。「何ということです。あなたはまともな説教者ですか。それとも道化師ですか。 — 生きた悪魔があなたの中から笑っているのですか」。 — 「いやはや、悪魔の他にありましようか」と私は言った。その後ようやく私の敬虔さをより真剣にやり遂げた。

教会を出て、 — (フレッツの教会のことであるが)、 — 私は虎亭に行って、食卓で食べた。私は決して人嫌いではないのである。二番目の料理の前に給仕が空の皿を持って来て、その上に驚いたことにフォークでフランス語の詩が記されているのを見つけた。それはフレッツの司令官に対する落首に他ならぬものであった。遠慮なく私は食卓仲間にその皿を差し出して言った。私は皆が知っているように落首のある皿をたった今貰ったところだ、この件は私と一切関係ないことを皆に証して貰う、と。一人の将校が早速私と皿を交換した。五番目の料理のときには、食卓仲間の化学的医学的無知に驚きを隠せなかった。一人の殿方が、幾つかの霰弾粒を、つまり砒素を混合されて、温かい酢で今や溶かされた鉛をその中から公然と取りだして、給することになった一匹の兎というものを（私を除いて）見物人達が陽気に食し続けていたのである。

食卓の会話では私の弱点の面、私の名誉の面が私の心を強力に捉えた。つまりこの首都の慣習法が語られて、身持ちの悪い娘は、このような娼婦が選んでしまう男を誰でも、単に娘が誓いさえすれば、その胎児の父親に変えられるということであった。「恐ろしい」

— と私は言った。私の髪が山のように逆立った。 — 「こんな国であれば、妻や子供と一緒に家庭の父親は手当たり次第、あるいは虎亭に泊まる聖職者とか、残念ながら夕方たまたま出会ったばかりの最初の劣等極まるウェートレスによって、名誉も貞節も台無しになってしましましょう」。中年の将校が尋ねた。「むしろその娘は悪魔のせいと誓うべきではないでしょうか」。何という論理か。「あるいは仮に」と私は返事をしないで続けた。「ある男がかのウィーンの錠前職人と一緒に旅するとします。この錠前職人は後に母親となって、一人の男の子を産んだのですが、あるいはこの職人がしばしば一緒に泊まったどこかの変装した騎士デオン[d'Eon de Beaumont(1728-1810)ルイ十五世の外交官、両性具有]と旅するとして、錠前職人とかこの騎士は一緒に寝たと誓えるとして。そうすると実際どんな優男も結局はもはや他の男と一緒に騎行したら馬車で行けなくなります。いつこの男が靴を脱いで、女性の靴を着用して、それからこの男を父親と誓い、自分は悪魔だと誓えることになります」。

しかし食卓仲間の幾人かは私の熱い説教をはなはだ誤解し、私自身がこの点では正しくなく締めりがないと羊の如く信じていることを匂わせました。誓って、私はもはや何を食

*1

*1 71) 若者は気まぐれにより、奇妙で楽しげである。成人男性はこの点意図はなく、束縛を感じていて、立腹している。

198) 民衆とか家畜は深淵上の斜面で目眩を起こすことはない。しかし多分人間は目眩を起こす。

11) 利己心という黄金の子牛は直に、その父親と崇拝者とを灰にする白熱するファラリスの雄牛となる。[アグリジェントの暴君ファラリスは犠牲者をペリロスによって造られた青銅の雄牛の中で燃やした。彼は紀元前 549 年民衆蜂起で殺害された]。

っていて、話しているのか分からなくなった。幸い私の向かい側でまさにフランス人の敗北という嘘が陳述された。私の通りの隅でフランス語とドイツ語の布告を見ていたので、即ち戦況について、――つまり劣勢について、通報することなく耳にする者は戦時法廷に立たされるということであったので、覚えの悪くない男として、空耳と共に遁走するに如かずと思い、ただ亭主にだけ何故出て行くのか報告することにした。

不都合な時ではなかった。というのは意図的に、四時半に、私は髭を剃って貰って、五時頃都合良く、床屋のカミソリの磨いた刀で仕上げられた顎で、滑らかな羊皮紙の如く、顎の髭の地下茎なしに（髭の毛は過剰[重語]である）登場し、出現することになっていたからである。前もって私は、議会に臨む前のピットのように、忌々しく多くのポンタク[メドック産のワイン]をまことに反吐を感じながら、その酒のすべての治療処方、制限規定に反して私の胃の中に押し込んで、軽率で、余所者の床屋に備えるというよりは、大臣で將軍のシャーバッカーに備えていた。この將軍と私はあれこれの炎の言葉の遣り取りを計画していた。

ホテルの通常の余所者の床屋がやって来た。しかし早速その皺だらけのぎざぎざの顔つきにはそれ自身賢くなって行く男というよりは遂には狂気に陥る男が窺われた。狂人を私は尋常でなく憎んでいる。それ故精神病院には連れて行かれはしない。狂人が手当たり次第私に巨大な拳で引っ掴みかねないからであり、そもそも感染して、有していた分別を失ってまた出て来るかもしれないからである。――通常私は（シャボンを塗られたら）椅子に座っていて、それで両手を（視線を私は鋭く髭剃り屋の顔に向けている）太腿の上に置いて、床屋の横隔膜に向かい合わせて、殴りかかる用意を整えている。どんな些細ないかがわしい動作に対しても憤激して突き飛ばすためである。

どのような次第でそうなったか、ほとんど覚えていないが、私が床屋の戯けてねじれた顔を覗き込み、まさに長く研がれた屠殺ナイフを若干早まって私の剥き出しの喉に向けたとき、私は軍医にして床屋の臍に突然突きをお見舞いして、この男は倒れて、自ら自殺者の如く喉を切ってしまいそうになった。勿論私は費用を払うしかなくて、そのせいで私はいつもの原則に反して、取り残された髭を覆い隠すために、ネクタイを厚く巻くことになった。

今や私はとうとう將軍の許に出掛けて、ポンタクの残りを更に敷居の所で飲み干した。私の中では正しく答えること、いや尋ねることという計画が出来上がっていたと願う。請願書を私はポケットに、そして右手に有していた。左手にはその写しを有していた。私の熱気のため私は容易にすべての大臣家の生きた垣根を越えて行くことができた。私は直に思いがけずその最も高貴な従僕達の下、控えの間に達していた。従僕達は、察するに、何も見逃さないよう訓練されていた。私は最も貫禄のある従僕に私の請願の書類を、これを渡して欲しいという口頭の請願と共に渡した。彼はそれを受け取った。しかし無愛想であ

*1

*1 103) 女性的な薔薇や百合の許での男性的な寄生植物は（その追従を的確に捉えると）多分美しい者達の許のイタリア人やスペイン人達の習慣を前提としているに違いない。彼らはすべての貴重品を、これらを愛でる若者にプレゼントとして差し出すのである。

った。私は遅く六時まで待ったが、空しかった。その間にのみ陽気な將軍に幾多のことが報告され得るのである。ようやく私の先の従僕の従兄弟、同胞を見つけ、私の請願を繰り返した。この者は同胞あるいは書類を求めて、探し回ったが、無駄であった。――何も見いだせなかった。――私が請願書の写しをポンタクを飲みながら髭剃りの前に再度仕上げていて、従って、――単に次の原理の下、つまり体に一方の義足を有するときは第二の木製の義足をバッグに詰め込んでおかなければならないという原理の下、更に次の恐れから、つまり原本が虎亭からシャーバッカーへの途上で紛失したら、私の旅と希望のすべてが水泡に帰すに違いないという恐れから、――申し上げるように、私が原本の反復作品を忍び込ませていて、それ故いかなる場合にも何ものかを、――それも同様のものを手渡すことができたのは結構なことであった。私は同じものを手渡した。

ただ残念ながらすでに六時を過ぎていた。しかし従僕は長く不在ではなく、直に、――私はこの回状の説教のテキストを述べたいが、――ほとんど粗野な返事をもたらした（この返事は、友の方々よ、私とシャーバッカーに対する敬意から秘密とすべきものであるが）「私がシャーバッカー連隊のアッティラ・シュメルツレであるならば、ただまた臆病に遁走するがよかろう、丁度ピンペルシュタットでしたように」と。他の者ならばその場で倒れていたことだろう。しかし私は不敵に去った。そして其奴に答えた。「私は喜んでずらかることにしよう。糞くらえだ」。途中で私は、例えばポンタクの力を借りて話したのであるかと自ら調べてみた。――すでに調べるものがその反証となっているけれども、ポンタクは[飲み過ぎていたら]調べることをしないのだから、――しかし私は、ただ私が、私の心が、ひょっとしたら私の勇気が何か話したのかもしれないと思った。それにそもそも臆病は必要ない、私の良き妻の世襲財産が十もの教理問答教師職の力よりも私にとってより良き助太刀となっているのであるし、彼女は人生の私の本のすべての角を多くの黄金の金具で止めていて、私はその本を使い古すことなく、いつだって開けて見ることができるのだから。――妊婦ならばびっくりしたら尻に手を当てて、[怖い物を]見誤ったときの[胎児の]母斑をそこに隠そうとするかもしれない。私は勇気の際、心を掴んでこう言った。「勇敢に鼓動するがいい。誰が倒されようと構うものか」。私は全く意気軒昂で熱くなった気分であった。――私は自分が英雄として家に帰るかのような共和国の国を考えていた。――私はある英雄[テミストクレス]が他人から殴られたとき、それを忍んでこう言ったときのかの英雄的なギリシアの時代に憧れた。「殴るがいい、しかし私の言うことを聞け」と。そして我々の臆病な時代には飽き飽きした。人々は嘲りに耐えられず、いわんやそれ以上のことには耐えられないのである。――私はもっと幸運な環境下で、似而非王座の者達を投げ飛ばし、全民衆の前で偉大な行跡の上に神殿の上に登るかのように不滅に昇り、巨人的時代の中で、私の周りの現今のだにの平民とは全く別のよ

*1 199) しかし現在わずかな国家が、思うに、開頭するという口実の下、首を刎ねている。――あるいは(アレゴリーにこだわれば)、唇の兎唇を縫合するという口実の下、唇を綴じ付けている。

12) 個々人は修業時代を有し、諸国家は修業の世紀を有している。しかし両者とも卒業すれば、再び授業や日曜学校を取り戻せるであろう。

り偉大な男達を凌ぎ、圧倒するのを見いだすとき、そしてせいぜい、二、三人のヴルカネロ火山を見いだすとき、自分がいかなる思いになるか描き尽くした。私は考えて、――そしてますますより荒々しくなっていく、そして私自身酩酊して（従ってこれはポンタクによる酩酊ではない、これは周知のように飲むことによって、飲まないでいるときよりも更に増大するものであるからで）、そして公然と表情に表して、――自分にこう尋ねた。「汝は単なる国の愛玩犬になるつもりか、――一匹の犬の犬、――邪悪な願望の空しい[敬虔な]願望、――一つの除外の除外、――一つの無の無になるつもりか。――何たることか」。しかしこのことで私は自分の帽子を広場の糞土の上に投げ飛ばした。そして私がそれを拾い上げ、きれいにしたとき、帽子がいかに古びているか見てとって、早速新しいのを買い、まずは自ら手で運ぶことに決めた。

私はそのことを敢行し、極上の種類の帽子を購入した。奇妙なことに、この帽子で、あたかもそれが学士の帽子であるかの如く、山羊[ツィーゲン]路地ではきちんと私の頭は吟味され、審問された。つまりシャーバッカー将軍が、その路地を馬車で向かって来て、私は（自ずと分かることであろうが）、卑俗な粗放な振る舞いによってではなく、丁重に振る舞って復讐しようと欲したので、私は最も際どい課題の一つを解くべきことになった。つまり私はすでに手で運んでいた極上のフェルト帽を単に振って、古い帽子を頭に被ったままでいると、私は何も脱帽しない生来の野生児然と見えることになるのであった。これに対し、古い帽子を頭から取って、それで慇懃を尽くすと、二つのフェルト帽が同時に（私が別の帽子と一緒に動かそうと動かすまいと）この件を滑稽なものにしてしまうのであった。友の方々よ、更に読み進める前に、分別を失わないでいかにこの場を切り抜けるべきか、――票決し給え。...思うに、ひょっとしたら、単に帽子をなくしてしまうことで切り抜けられるかもしれない。思案即決である。私はすぐさま手の中のおめかしの帽子を糞土の中に落として、草臥れた帽子だけを脱いで、一点の滑稽さもなく、必要な丁重さで帽子を振ることができるようにした。

虎亭で私は、――何事かに決着を付けるために、――汚れの溜まった帽子、あるいは屑の帽子よりも先に、煌びやかな極上・極上・極上のフェルト帽子に対しブラシをかけさせた。

さて私は、私の重要な過去を貨幣検量秤、吟味秤の中で量りながら、熱くなって行き来した。ポンタクは――現世では単に純でないものしかないことを承知しているのであるが、――更にもっと純でないものであったに相違ない。それほどにポンタクのせいで私の空想は火から火へと次々に追いやられた。私は今や、職務なしにただ金によって生きる

*1

*1 67) もてなしの良い酒場の主人よ、汝の客人のことを調べたいか。その客人の伴をして別の酒場の主人の許へ行って、耳を傾けるがいい。――同様に汝の女性の恋人を、一カ月一緒に暮らしてみるよりも、一時間でもっとより良く知りたいと思うか。一時間彼女が自分の女友達や敵の女（これが重語でないならば）の下にいるとき観察し給え。

80) 人生の夏に人々は氷窟をできるだけ上手に掘り上げ、準備して、彼らの冬のために、冷やし続ける何ものかを拾い上げようとする。

先の輝くような人生を見入った。目にするその人生はさながら私が静かになし得るすべての学問のデルフォイの洞窟やゼノンの柱廊、ミューズの山々で一面に覆われているのであった。殊に私はもっとアカデミーでの褒賞文書に注力することができた。それらを（つまり文書を）著作者がいつか恥ずかしく思う必要はないのである。いずれにせよ戴冠させてくれるアカデミー全体が戴冠者のために味方し、赤面することになるからである。褒賞希望者が王冠を逃しても、その者は（その者の格言は暴かれず）別な著者よりも無名のまま匿名のままであるからで、この別な著者というのは確かに無名のまま本の長い耳[驢馬]を出版するのであるが、しかし直に驢馬の埋葬[不名誉な埋葬]を公然と世間の半ばの前で受けるのである。

ただ前もって何か私に残念に思われるものがあつた。私のベルガの苦痛で、明日愛しい、疲れた旅行者に対し、私の不首尾の知らせでその到着と短縮された市場見物とを苦いものにせざるを得なかったのである。彼女はノイザッテルで、――豊かな小作請負人の娘に遺憾に思えないことであるが、――いささか体裁を構えて、幾多の名士夫人を凌駕しなかったのである。――どの人間も自分の晴れの場を要求し、最期の名誉よりもそれ以前のより生氣ある名誉を欲する。――殊にこのような善良な、低い身分の出の女性は、自分の精神的宝や償却資金よりも貨幣的な宝や資金の方をひよっとしたらもっと自覚していて、それでも名誉の宴会では何らかの椅子、あるいは小椅子の[フリーメーソン]親方夫人でありたいと欲し、当地のどんな筆り取られた鷺鳥の誰を相手にしても抜き出たいと欲するものである。

その為には今や夫達が不可欠である。私はそれ故、計画を立てて、私と従って彼女のために、ドイツの諸宮廷が（さながらライプツィヒのアウエルバッハ旅館でのように）貴族や半貴族から下々の顧問官に至るまで絶えず安売りにされている最良の肩書の一つを購入し、この高貴化された女性に私の四分の一貴族で、八分の一貴族をこっそり渡して、（望むらくは）幾多の卑俗なライヴアルのノイザッテル女性が、嫉妬の余り半分弾けて、こう言い、叫ぶことになるようにした。「あら愚かな小作請負人風情で。何とまあおべっかの上手いこと。金もなく宮廷顧問官の夫もいなかったら、どうしようもないはずよ」。例えばこの宮廷顧問官に前もって私になっていなければならないことだろう。

しかし私は部屋の中に冷たく一人っきりでいて、熱い思い出に浸っていると云いようもなくベルゲルヒェンに憧れた。――私と私の心は慣れない余所の日中の営みに疲れていた。――私の周りの誰も、私に亭主の勘定のうちに数え入れて欲しいと思わないような愛しい言葉をかけてくれなかった。友よ、私は自分の心の血を喜んで相手の心のバルサムとして送り出す女友達に会いたいと願った。――私はこの善良な女性を早速引き受けるために、むしろ愚かな家政をすべての悪漢や火災に引き渡そうとしなかった私の賢しらな

*1

*1 28) 早速この場で、私の諸作品の当てこすりの水中枝の森の中で、――この当てこすりもまた一つの枝であるが、――抜け出して、私がかつてすべての宮廷や高貴さを（ブゲールの）ヨーロッパ雪前線と名付けたとか名付けなかったか思い出すのは、私にはできない。しかし私はこの点についての知識を願っている、厭わしい場合まだいくらか仕返しをしたいのである。

措置を呪った。 ― あちこち歩き回りながら、何にでもなることがますます私には容易に思えてきた。どんな財務官であれ、税務官であれ、他の顧問官であれ、彼女が着いたら、ただ彼女が命じさえすればよかった。

「町ではただ楽しい一日を過ごすことよ」とベルゲルヒェンはこの週ずっと言っていた。しかし彼女なしにそんな一日がどうしてできよう。我々の悲しい涙は男の友人達でも拭ってやって、自らの涙を添えて付いて来てくれる。しかし我々の喜びの涙を最も容易に再び見いだすのは、我らの妻の目の中である。 ― 友の方々よ、私の感動というこの神酒を許し給え。 ― 私は貴方らにただ私の心と私のベルガをお見せする。 ― 免罪符購入を私が必要とするときには、ポンタク購入を君達は勧めるといい。

フレッツでの最初の夜

それでもワインのせいで、ベッドに行く前にベッドの下を覗くという分別が私から失われることはなかった。その下に誰かが潜んでいないかと、例えば娼婦や、小人、公使館参事官が潜んでいないかとか、更にはドアのノブの下に鍵を押し込む分別とか、（これはとりわけ最良の封鎖規則である）、それから余計なことにドアに私の夜のネジ[錠]をねじ込む分別とか、遂にはドアの前に更に椅子を上下に築いて、ズボンや靴を脱がないでいる分別とかのことである。私は何も心配しなくなかったのである。

しかし私は更に別なことを夢遊病のせいでしなければならなかった。多くの人がベッドに行き、安んじて、こう心配せずに横になれることが私にはそもそも以前から不可解であった。つまりひょっとしたら最初の眠りの中で夢遊病者として目覚め、屋根を這って行き、首を折るとか、その他のものを折るとかするどこかで目覚めるかもしれないという心配のことである。いや、どこかの非の打ちどころのない男、従軍牧師といった者が、自らのベッドで眠り込み、例えば町で最も高貴なレディーの寝室の絹のクッションの上で目覚め、その女性からひょっとしたら幸運を期待できかねないというとき、それは私にとっては確かに十分な危険と言えるであろう。家にいるとき、眠りに関してはさほど恐れない。 ―

私の右の足の指は毎夜、三エレの長さの襠褌紐で（私は冗談で私どもの結婚の絆のことをこう称しているが）私の妻の左手に結ばれているので、私がベッド拘禁から出て行き、防止紐で彼女を起こすことになって、従って、生きた生け垣としても彼女から、この夜の紐を頼りにまたベッドへ引き戻されるであろうという確信を私は有しているからである。しかし旅館では、自分を数回ベッドの脚に結び付けて、さまよい出ないようにするしか手

*1

*1 36) それで私はいつでも最初の男でありたい、殊に物乞いをするとき。最初の戦争捕虜、最初の不具者、最初の焼け出された者（最初の消防ポンプを導入する者に似ている）は主要な額と心をぶんどる。末裔はただ義務を主張する。 ― そして同情のメロディー的なアンカンド[消えるように段々弱く]と共に段々と沈んで行き、最後の者は、 ― 最後の手前の者は少なくとも豊かな「お大事に」と言われながら引き下がるが、 ― 思いやりのある手からその拳しか受け取らない。物乞いするとき最初の者でありたいように、与えるときは最後の者でありたい。人は次々に償却して行く、殊に最後の者は最初の者を償却する。しかしこの世はそんなものである。

はなかった。それで悪魔が侵入して来たら、新たな困り事が生じかねなかったのであるが。いやすべて睡眠というものはとても危険なもので、残念ながら死体のように仰向けに横たわるわけではない各人は、全体眠ると、一、二の肢体も一緒に眠り込むことになり、一本の足、一本の腕が眠り込むことになるという心配をしなければならない。――医学史ではこの点に関して見本が欠けているわけではなくて、――微睡んだ肢体が、――朝には切断のために十分化膿して横たわっていかねないのである。それ故私は、何も眠り込まないよう、しばしば起こして貰っている。

私がベッドの杭に十分に結ばれて、ようやくベッドの掛け布団の下に来たとき、私は私のポンタクの砲火の洗礼を受けて、新たに、私の予期されるべき力の夢、嵐の夢に対して恐れを抱き、臆した気分になった。――これらの夢は残念ながら後にやはり英雄や君主の行為や、要塞の突撃や、岩の投擲より何もましなものにならないものであった。――しかしまだ私はこの点医学的に考慮が及んでいるとは余り思わない。衛生参事官やその相談者は皆平静にベッドで手足を広げていて、彼らの誰一人として一つの荒々しい憤怒が(殊にその後夢の中で冷や酒を素早く飲んだら)、あるいは心引き裂く悲痛が、夢の中で何という代物を体験するか分からないが、そうしたものが生命に危害を及ぼすか知れたものではないと心配したり調べたりもしない。白状すると私が女性であって、従って女性的に臆病であり、その上妊娠していたら、この妊娠時、もし私が眠っていて、それ故夢の中ですべての、医学上の警察によって禁じられている怪物や、野生の獣や、不具者や、同様なものを目にするようになったら、腹の中の胎児のことで絶望的気分になることであろう。奇形児どもの一つを見るだけで、(過失の見誤りという証明された教義が本当であるならば)、妊婦の私は惨めな子供をお産することになって、その子供は兎のように見え、その上兎唇で一杯であるのであり、あるいは背後にライオンの鬣を、あるいは両手に悪魔の爪を、あるいはその他更に不具者どもの有するものを有することになりかねないのである。ひょっとしたら何人かの不具者は夢の中でのこのような過失の見誤りによって生まれてきたのかもしれない。夜十二時直前に私は重苦しい夢から目覚めて、私の空想にとっては余りに幽霊的な幽霊話を体験することになった。幽霊話を私に千切って入れてくれた私の義兄は、その塩気のない料理の責任があって、私は彼のことを気の抜けたビールの醸造技師と容赦なく呼ぶことにする。邪推は大胆不敵さとより親和性があるのであれば、ひょっとしたら私はすでに途中からこのような類いのことに対する彼の倫理的格言からとそれに彼が隣室にこだわり続けたことから、この隣室の中央ドアの所に私の臥所があったのであり、

*1

*1 136) 君達の時が余りに高く昇ったら、君達が君達の時の下、余りに低く沈む時よりもはるかに君達の耳に関して(名声の面で)結構な具合に行くわけではない。実際全く同じ具合にシャルルは上の気球の中で、ハリーは下の潜水鐘の中で耳に同様の格別の痛みを感じたものである。

25) 青春時には人々は丁度手術を受けたばかりの生来の失明者のように見る。――助産師や助産婦も手術することの他に何をすることになるのか、――つまり近くを遠方と身、星空を手の届く部屋の道具と身、絵画を対象物と見る。全世界が青年の鼻先にあって、何度か包帯を結ばれたり、除かれたりして、ようやく盲人同様に目せかけと遠方とを区別する術を学ぶ。

容易にすべてを推論していたことであろう。つまり私は冷たい幽霊の呼吸に吹き付けられたかのような思いがしたのであり、これは遠くの閉ざされた窓からその由来を導くことはできないものであった。――それは実際私の思った通りであった。義兄が鍵穴を通じて鞆からその呼吸を吹き込んだのであった。夜にはすべて冷たいものは死や霊の冷たさをもたらす。しかし私は奮起して、待機していた。――さて何と掛け布団が、動き始めたのである。――私は布団を引き寄せた。――それは更に遠ざかろうとした。――素早く私は突然ベッドの中で起き上がって叫んだ。「これは、何だ」。――返事はなかった。旅館はすべて静寂であった。――部屋全体月光で満ちていて、――今や私の発疱硬膏たる掛け布団は何と上昇して行き、私に風を送った。私は硬膏を素早く剥ぎ取られた人間のような気がした。そこで私は悪魔の大玉縁から騎士の跳躍を行って、飛びながら夢遊病者導きの綱を引き千切った。「どこに阿呆の人間道化はいるのか」と私は叫んだ、「崇高な目に見えない幽霊世界の猿真似をする奴だ、即刻出現しかねない幽霊世界を」。しかしベッドの側、上下では何も聞こえず、見えなかった。私は窓から外を眺めた。至る所に霊的な月光と街路の静寂が見られた。動くものはただ（多分風のせいで）遠くの絞首台の山の上で新たに絞首刑となった者だけであった。

どの人であれ私同様にそれを自己錯覚と見なしたことであろう。それ故私はまた私の受動的法のベッド[パリ高等法院の玉座]、大気のベッドの中に包まって、その中でどれほど恐怖で冷たくなることか、そうならないことか待つことになった。

数分後掛け布団は、この悪魔的ファウストの外套はその飛行を、船曳を（私一人が判決を受けた者であった）再び始めた。交替のせいで再び目に見えないベッド起床用革紐も上昇して行った。忌々しい時だ。――私は全ての教養のヨーロッパ世界で、そのような場合霊的悪魔騒ぎに思いを致さないような教養人、あるいは非教養人がいるものかどうか知りたい。――私は（自ら）動く掛け布団の動産の下、そのことに思い至り、ベルガが死んでしまって今霊となって私のベッドを掴んでいると考えた。それでも私は彼女に語りかけることはできなかったし、ここで紛れ込んでいるかもしれない悪魔にも語りかけられず、ただ神だけに向かって声高く祈った。「御身に私をすべて任せます。御身のみがこれまで弱い下僕の私のために配慮してくださった。――私は別様になると誓い申し上げます」。

――これはそれでも私が守るべき一つの約束であった、万事が単なるペテンにすぎなかったとしても。

私の祈りは、私をとにかく掛け布団の引き綱の中に捕らえている非キリスト教徒の軽騎兵の許では何の効果もなかった。――客用ベッドの豪華パレード棺台にしようと棺桶にしようと、あるいはそうしまいと頓着せずに、――彼は私の神経を黄金の針金のようにより狭くなって行く穴を通じて、消尽と消滅となるほどまでに、ますます細くして行った。というのはベッドは遂には中央ドアの所まで下って行ったからである。――

*1

*1 125) 最後に人々はなお不安と困窮から、私の知る限り最も熱い世界市民となるに違いない。それほどに船々は織機の梭のようにあちこち行き来して、諸大陸と島々とを織り合わせる。というのは今日、南アメリカで政治的晴雨計が下がろうと[天気回復]、明日はヨーロッパで雷雨嵐となるのである。

今やためらいなく崇高になり、もはやこの世では何も気にかけず、ただ自らを死に委ねる時となっていた。「私を拉致するがいい」（と私は叫んで、無闇に三度の十字を切った）
「私を素早く叩きのめすがいい、霊どもよ。私は千もの暴君や無神論者よりも無実の罪で死ぬ。霊どもは暴君や無神論者に対してよりも頻繁に罪のない私の前に残念ながら出現するものだ」。このとき私は一種の哄笑を聞き取った。路地か隣室からであった。この温かい人間の調子を聞いて私は突然春を前にしたかのように、すべての梢がまた花咲いた。私は今やドアからもはや離れることのできない巻き取られた掛け布団全体を馬鹿にした。私は剥き出しのまま、それでも十分に温かく、汗ばんでいて、直に眠りに陥った。ちなみに私はすべての啓蒙化された諸都市に対して、―― それらが私の前の立っていようとも、―― 私が私の悪魔への信仰、それに私の悪魔への語りかけで、最大のドイツの獅子たるルターと若干の類似性を有していることについて皆目恥ずかしいとは思わない。

フレッツでの二日目

早朝私は馴染みの掛け布団で目覚めさせられたことを感じた。布団は夢魔のように私の上に置かれたのであった。私はぼかんと口を開けて目覚めた。隅の方に静かに一人の赤ら顔の、丸い、丈夫な、着飾った少女が座っていた。生命の新鮮さで一杯のチューリップのように花咲いて、多彩なリボンを微かに揺らして、さながら花卉が揺れているようであった。「誰だい、どうして入ったのかい」と私は半ば盲いて叫んだ。―― 「ただこっそりと掛けてやったのよ。まずは十分に眠って貰おうと思って」、―― とベルゲルヒェンは

*1 19) 後向きに登って行くと、山に登るのはより容易であると人々は気付いている。このことは国家の上層にもひょっとしたら応用できるかもしれない。人々が上層に対して指示して、ただ自分が身を置くときの体の部分に向けて、顔の方は下の民衆の方に向けるようにさせ、絶えず民衆から遠ざかり、高く登るようにさせたら話しである。

26) 仮に（少なくともすべての民族用語法に従って）単に自分自身の考えを呈示し、他人の考えを呈示しないという各人に独自性を認めることが許されるのであれば、何人かのドイツの学者は独自性がないとは言えない。というのは読んだものとか他人のものとかが住んでいる彼らの記憶と、記述されたものと独自なものが生ずる彼らの空想とか、生産力の間には、十分な中間地と境界石とがとても良心的にしっかりと設置されているので、何ら他人のものが自分のものに、混入し、またその逆が生ずるということはなく、それで彼らは本当に百もの作品を読みながら、自身の作品の地上の味覚を喪失することはないし、自らの作品を他に変えることもない。かくて、思うに、彼らの独自性は確保されている。そして彼らの精神的栄養物、彼らのワッフル、パン、クラッペン、キャビア、スープ用団子は、ビュフォンが物的なそれらについて言ったようには、生産物の有機的団子とはならず、純然と変わらずにまた出現する。しばしば私はこのような学者を木製のヴォーカンソンの工芸鴨の生きた、しかし千杯も芸術的な雄鴨として考えている。というのは実際彼らはヴォーカンソンのに劣らずに工芸的に合成されているのであり、これらは食しながら、後にまた食べ物を出すように見えるのであり、―― 鴨の繊細な模倣である。彼らは食べ物を血と液とに変化させたように見えながら、単に工芸家によって臀部で立派に準備された排泄物、食事と消化とは全く関係ない排泄物を紛らわしく世界に置き、出すのである。

言った。 — 「私は夜通し歩いたの、丁度早朝に着くようにね、これを見てよ」。彼女は私に長靴を、唯一の旅の道具を（アキレスの踵を）見せた。彼女は市門の前で、化粧室で身支度をしたとき、その泥を落とせなかったのである。「何か」 — と私は尋ねた、私は一晩中妙な具合であったし、今は自ら彼女の得体の知れない侵入のことでそんな状態であったので、それだけに一層彼女の六時間早まった到着にびっくりしていた、 — 「新たな嘆きが我々の身に生じたのか。火事か、殺人か、盗賊か」。 — 彼女は答えた。「ねず公は」（彼女は鼠と言おうとしていた）「昨日くたばったね。あなたが長いこと罌を仕掛けていた奴よ。その他は全く何もないね」。 — 「万事は家での私の点検書通りにきちんとなっているのだろう」と私は尋ねた。 — 「勿論」と彼女は答えた、「でも私はそれを全く読まなかったの、無くなっていたわ、多分あなたが一緒に荷の中に入れたのよ」。

—

しかし私はすべてをこの花と咲く大胆な女性騎士、あるいは女性歩兵に許した。 — 彼女の目、それから彼女の心は、実際新鮮な涼しい朝の風を曙光と共に私の先ほどまでの鬱陶しい時にもたらしした。それにいずれにせよ私は後で、好意的な、人生の中に希望を抱いて愛しながら進んで行くこの女性の今日のこの甲斐ある天を、失敗した教授職という悲しい知らせで暗いものにせざるを得なかったのである。それ故私はできるだけ大目に見て、引き延ばした。私はドアにまだ椅子の防御柵のすべてがしっかりあるのに、どうして入って来たのかと尋ねた。彼女は甲高く笑った。その際田舎風に屈み込みながら、言った。一昨日兄と約束していて、自分はあなたの防御用心を知っているの、兄の部屋を通って行けるようにした、こっそりと起こせるように、と。その時軽騎兵が声高く笑いながら部屋に入ってきて、言った。「よく休めたかい、義弟殿」。

しかしこんな具合で、勿論、幽霊話の半ばが、ビースター[Biester(1749-1816)]やヘニングス[Hennings(1731-1815)]の作品を読むように解決され解明された。私は早速、軽騎兵の実行した幽霊プランの全てを見通せた。若干辛辣に私は彼に私の推測を、妹に私の出来事を述べた。しかし彼は嘘をついて、笑った。いや彼は更に十分厚かましく、私に明るい朝、幽霊のことで二度目の騙しを行い、それを押し付けようとした。私は冷たく答えた。この点で彼は私を不当な男と思っているが、しかしすべて霊を見、恐れたというルターとかホップスとかブルータスに私は一層似ているということになろうとも、不当である、と。彼は答えて、 — そして幽霊の動機から事実を取りだしてきた、 — 「自分が言えることはただ、夜にどこかの哀れな罪人が全く情けない声で、わめき、嘆き声を上げるのを聞いたということだけだ。それ故自分はこう思った。それは幽霊に責め立てられているどこかの哀れな絶望的なナイトキャップの男であろう」と。とうとう彼の妹も、彼が私に対して計画していた遊びの卑俗な役目に合点が行った。彼女は兄を乱暴に叱責して、両手で兄を素早く私と彼のドアから追い出して、背中に声をかけた。「そこで待っていなさい。他人をいじめて喜ぶ人、忘れないからね」。その後すぐに向き直って、私の首筋にすがって、場違いに笑い声を上げて、言った。「馬鹿な兄、でも笑いをかみ殺すことができなかった。でも阿呆に何も気付かれたくないわ。学のあるあなた、頓狂な兄を許してね」。

私は彼女に、追って旅するとき幽霊に出会わなかったか尋ねた。 — もっとも彼女にとっては動物どもとか、川、深みの大方は何でもないと思っていたけれども。 — 出会わなかった、でも着飾った町の人々には、朝方気持ちちが臆したと彼女は言った。私は女性

的気後れのこうした優しいハルモニカの震えをいかに愛することか。

とうとう私はコロシント[うり科]の林檎[下剤]に噛み付くか、切り割って、その半分を彼女に手渡すこと、つまり教授職についての請願の失敗の伝達をしなければならなくなつた。しかし私は喜ばしげな心を完全に粗野な真実と直面させることをためらい、むしろ男性の肩にふさわしい重荷の若干を切り取らなければならなかったもので、私はこう始めた。

「ベルゲルヒェン、教授の件は、別様の、しかしそれ自体は結構な進行を見せている。

― 将軍は、この人については糞くらえと思っているが、総攻撃を仕掛けています。―
したければすばいい、見ての通り、私はナイトキャップを被るだけだ」。― 「それでは何の甲斐もなかったの」と彼女は尋ねた。「差し当りは確かにない」と私は答えた。

「でも土曜の晩までは、どう」と彼女は言った。「そうは行かない」と私は言った。「手痛い敗北だわ。窓から飛び降りたい気分」と彼女は言って、薔薇の顔、朝の顔をそむけて、潤んだ両目を私に見せないようにして、そして長いこと黙っていた。それから痛々しく震える声で始めた。「偉大な救世主様、日曜日ノイザッテルで私の加勢をしてください。高慢で上品な女達が教会で私を見かけて、恥ずかしくて私が真っ赤になったときに」。―

今や私は嘆きを同じくしてベッドから愛しい女性の前へ飛び込んだ。明るい涙が美しく花咲く彼女の頬の上に流れていた。そして私は叫んだ。「忠実な心の妻よ、私をそんなに全て砕かないでくれ。シリウス[夏季]休暇日のうちにおまへの望むようなものの一切に私がならなかったら、神様の罰を受けて構わない。― つまり、おまえが鉱山監督官夫人とか、建築監督官夫人、あるいは宮中顧問官夫人、戦争顧問官夫人、財務顧問官夫人、商業顧問官夫人、公使館参事官夫人、あるいは獄吏か悪魔の監督官夫人になりたいなら、私も同じで、それになり、請願しよう。明日私は騎乗の使者をヘッセンとザクセン、プロイセンとロイセン、フリースラントとカッツェン・エレンボーゲン[猫肘]に送り、辞令を求めよう。いや、私は更にそのような者の一人として行い、同時に一切の者、フラクセン

*1

*1 15) 立派に磨かれたイギリスの折り畳みナイフとの類似性によれば、折り畳み戦争剣、あるいは― 別の言葉で言えば、― 講話条約締結がある。

13) すべての聖人は同一の浄福に達する。しかし彼らの名声は様々である。即ち、― 神学者達はかつてこう書いていた、― 聖パウロによれば我々は天国では皆同一の浄福を有するが、しかし様々な名声の位階を有する。すでに現世で作家界の天国に、これについての一つの見本を見いだしている。つまり批評によって列福化された著者達、天才的な、善良な、平凡な、機知に乏しい著者達の浄福は皆の許で同一であり、彼らはすべて総体としてほとんど同一の財政学的幸福、同一の弱い儲けを得ている。しかし何ということか、これに対して名声の階段に関しては、― 同じような報酬、売り上げにもかかわらず、― すでに生前に所謂阿呆は天才の下に何と深く置かれずにはいないことか。― しばしば機知に乏しい作家は一回の見本市の間に忘れられないか、一方機知豊かな、それどころか天才的な作家は五十の見本市を通じて、花咲き続け、そしてまず二十五年の祈年祭を祝ってから、後に忘れられて没落し、ドイツの名声の神殿に沈められる。この神殿はナポリのパードリ・ルケーゼ教団の諸教会の周知の独自性を模しているもので、これは周知のように（フォルクマンによれば）その屋根の下に一つの埋葬地を認めるが、しかしそこに記念碑は認めないのである。

フィンゲン[『ヘスペルス』の地]の宮中顧問官、シェーラウ[『見えないロッジ』の地]の税務官、ハールハール[『巨人』の地]の建築顧問官、ペスティッツ[『巨人』の地]の財務顧問官になるのだ（我々には金があるのだから）、そして一人っきりで独自にたった一つの臀部と体とをもって選抜された諸顧問官の顧問会議全体を代表し、そして単なる二本脚の上に申し分ない名誉兵団、名誉セットとして立っているのだ。 — このようなことはまだ誰もなしたことがない」。

「おや、あなたは天使のように素敵」（と彼女は言って、より喜ばしげな涙がこぼれてきた）、「この世で一番上品な顧問官達はどんなか、私に自ら助言してね、そうなれるように」。 — 「いや」（と私は熱くなって続けた）、「そんなものでさえつまらない。きちんと牧師夫人の許でおまえが建築顧問官夫人と名乗り出ることができるとか、都市説教師夫人の許で公使館参事官夫人と、現市長夫人の許で宮中顧問官夫人と、国道税務官夫人の許で商業顧問官夫人とか、その他おまえの望むものに名乗り出ることができることも私には十分ではない」。 — 「あら素敵すぎる、アッテルヒェン」と彼女は言った。「そんなものより」（と私は続けた）「様々な最良の首都の（どこにするかはただ私が選びさえすればいいのだが）様々な最良の学的協会の通信会員にもなるのだ。それも普通の本当の会員ではなく、申し分ない名誉会員なのだ。それから私はおまえを名誉会員の私と共に生長する名誉会員として推挙しよう」。

友の方々よ、このパップとか欺瞞のバルサム[香油]は、その血が余りに純粋で、得難いものであって、蜘蛛の網から美しい心の中へすべての可能な鎮静剤により押し戻そうと考えないわけに行かない傷付いた胸のためのもので、大目に見て欲しい。

今や素晴らしい、最も素晴らしい時がやって来た。私は時に対して、私やベルガに対するように勝利していた。私のように一人の勝者が同時に勝つ当事者と、負けた当事者とを幸せにすることは稀である。ベルガは昔からの天国を取り戻してきて、埃っぽい長靴を脱いで、花柄の靴を履いた。得難い朝の酩酊である。愛する心は何と陶醉していることか。私はきっちりと（低俗な比喩を許されれば）勇気の二重[度の強い]ビールを自分の中に感じていた。自分の周りに守らなければならない人物を更に有してからのことである。そもそも私は、 — 立派な将軍はすっかり把握しているようには見えないことであるが、他人のように勇敢な者達によって更に勇敢になるのではなく、臆病兎達によって最も勇敢になる。私の場合悪しき例が反対のものに逆転するからである。ちょっと絵筆を添えるところでは男と女の区別が、薄暗くなるよりも、もっと明瞭になるかもしれない。緑色の絹の前掛けの親切的な給仕が朝のブレードを運び上げて来たとき、 — 私がヨーハン、二人分と言ったからであるが、 — 彼女は彼に言った。「恐縮に存じます」、そしてヨーハン様と言った。

ベルゲルヒェンは — 首都よりも小さな市場町で育っていて、 — まさしくコーヒ一盆、洗面台、壁紙、壁の燭台、エジプト風絵文字の付いた雪花石膏の筆記用具、誰もがねじったり仕舞い込むことができる金鍍金された呼び鈴・針金付き・ボタンにびっくりしていた。それ故彼女はシャンデリアで一杯の広間を通って行く勇気がなかった。単に咎めるような上品な羽根飾り帽子の者がその中を行ったり来たりしていたからである。いや、彼女が窓から外の多くの着飾った馬車で行く都会人を眺めたとき（私は元気よく下に向かって大言壮語の小唄を口笛で投げ込んだのであるが）、 — そして彼女が私と一緒に後

でこの眩惑する控えの間の雑踏の中を割って行かなければならなかったとき、哀れな彼女の胸は全く縛られた胸となってしまった。ここでは推論は例を挙げるより余り役に立たない。私は私のベルゲルヒェンを私の夜の夢の巨大仕掛けの若干で持ち上げようと思った。――例えば、私が、鯨の上に跨がって、三叉の戟のフォークで三羽の鷺を突き刺し、食べるという巨大仕掛けとか、更に同様なことを通じて持ち上げようと思った。――しかし何の効果もなかった。ひょっとしたらまさに臆病な女性の心の眼前に、勝利者よりも戦場を間近に、深淵を飛び越える者よりも深淵を間近に引き寄せたからかもしれない。

今や私の許にただ勇壮極まりない勝利で一杯の一束の新聞がもたらされた。この勝利はただ一方の頁だけで生じていて、他方の頁では同様に多くの敗北が生じていたけれども、しかし勝利は敗北よりも大いに私の血を奮い立たせ、――そして以前シラーの『群盗』のように、誰かを即刻打擲し、叱りつけたいという奇妙な気分を私に焚き付けた。給仕にとって不幸なことに、彼は丁度、一軍勢のように、行軍への三回の呼び鈴命令を受けていて、動員され上がって来たのであった。「おい」――と私は始めた、戦場で頭は一杯で、彼を叩き払いたい衝動で腕はみなぎっていた。そしてベルガはすっかり恐れていた。私が彼女には馴染みの怒りの印、警告の印を示していたからで、つまり奥の後頭部で縁なし帽を高く突きだしたのである。――「これが客人に対する作法かね。何故急いでやって来ないのか。二度とこんな真似は許さないぞ、去るがいい、友よ」。彼の退却は私の勝利であつたけれども、私はなお、選んだ地で元気よく砲撃をし続けて、彼が幾多の階段を駆け下って行くにつれますます声高に（彼に聞かせたくて）ぶっ放した。ベルゲルヒェンは、

――私の憤激に全くびっくりして、殊に全く余所様の家の中で、絹の前掛けをした上品なおめかし野郎を相手にしてのことだったので、――雑兵の如き雄叫びを発する野蛮な言葉に対する彼女の穏やかな言葉をすべて言い募って、危険を察知させた。「危険は」と私は答えた、「望むところだ。男にとっては危険はない。危険に対してはいつも打ち勝つか、逃れるかであり、額を差し出すか、背を向けるかだ」。――

私は憤激をほとんど止めることができなかった。それほどに憤激は甘美で、怒りの炎で私はとても元気になったと感じ、胸の中は禿鷹の皮によるかの如く穏やかに温められた。荒れ狂い憤怒の時ほどに自分の天国、我が喜び亭(Monplaisir 別荘)にいる時はないということは、やはり勿論知られざる善行の一つであり、――善行についてはかつて説教されたものである。いやはや、憤怒の時ほどに重要な男にとって得難いものがあるうか。胆嚢は我々にとって最大の浮き袋で、モンゴルフィエ気球であり、二、三の他人の悪態とか、愚行が有りさえすればいいのだ。激しいルターは、彼とは私は比較にならないが、その卓話において告白していないだろうか。自分は怒っているときほど上手に説教し、歌い、祈

*1

*1 79) 弱くずれた頭脳は、再度ずれたり、変わったりすることが最も少ない。その内的人間はほとんど着替えをしない。同様に去勢雄鶏も決して換羽しない。

89) 古代人は不幸の時節には哲学とかキリスト教の教えで自らを治した。しかし近世人は、例えば恐怖の時節、快楽に手を伸ばす。これは例えば傷付いた水牛が治療や包帯のために泥土の中を転がるようなものである。

ることではない、と。　―　まことに幾多の者を怒りへと刺激するには、彼のことだけで十分であろう。

さて午前の朝はすべて見物や行動で過ごされることになって、それも最も長く過ごされたのは我々のホテルの路地であった。ベルガはまず市場の雑踏に狙いを定めることになった。彼女は、数百人の他の、自分と異なる者達とは、彼女の語り方で言えば、自分をもっと「流行に従って」着飾っているか、まず調べることになった。しかし直に彼女は家政のことで化粧のことを忘れ、陶器市のことで寝室用サイドテーブルのことを忘れた。

私の方としては、全く退屈な思いで、彼女の市場での長いあれこれの交渉を見守って付いて行きながら、自分の中で隠れた賢人の役をただ演じていた。私は空虚な人生と、人々がそれに対して抱く重大な重さを量っていた。そしてこの人生、地上のこの最も軽い綿毛の羽毛が飛び去り、人間に羽を付けて拉致して行くという人間の日々の不安を量っていた。ひょっとしたらこの考えが浮かんだのは通りの男の子達のせいかもしれない。彼らは私の周りで互いに石を投げ合って、市の特権としていたのであった。つまり私はその際、戦争に行ったことのない一人の男のことに思いを寄せていた。即ちこの男は、しばしば千もの弾が放たれても、誰一人にも当たらないということを自ら経験しておらず、こんなわずかな石合戦でも、自分の鼻や目に当たるのではないかと案ずるものである。そう、戦場のみ度胸の種を蒔き、肥やしを与え、育て上げるものである。日々の、家庭的な、最も些細な危険に対する度胸すらも育て上げるのである。というのは人間は戦場から帰って始めて、カナリアに似て歌い、砲撃するのであるからである。カナリアはとてもメロディー的で、臆して、小声で、優しく、孤独で、優しい羽毛で覆われているが、それでも大砲を　―　より小さな口径からではあっても、　―　ぶっ放すように仕向けられるのである。

昼食の（我々の部屋での）後、ベルガが屋台ごとに何かを注文し、自分の女中のために何かを買い上げるという大市の雑踏の煉獄からようやく我々は天国に、所謂犬の旅館に着いた。町の外の最良のフレッツの旅館や行楽の家はそう称しているのであるが、そこには大市の期間、数百人が、数千人の者が通り過ぎて行くのを見守るために、入って行くのである。すでに途中私の肘の木蔭としての私の妻の勇氣ははなはだ増大していて、それで彼女は市門の下で、市門では私は、周知の軍事的行進規則に従って、歩哨の間近を通り過ぎてはならず、それ故反対側に身を置いたのであるが、平然と市門の見張りの鉄砲や銃剣の間近を通り過ぎたのである。外で私は彼女に柱に鎖のある、格子を付けられた、すでに外部も階段で上昇して行くシャーバッカーの宮殿を指で示した。そこに私は昨日留まってい

*1

*1 108) ゴットハルツタールの挨拶は「アレグロ」[速く]であると読んでびっくりしたことがある。というのはヴェッツラー[帝国大審院の地]とかレーゲンスブルク[帝国議会の地]あるいはウィーン[帝国事務局の地]では次の挨拶した経験したことがなかったからである[いずれも仕事が悠長であった]。アンダンテ・ディ・モルト[歩くような速さでかつ元気よく]。　―　しかし時にはアレグロ・マ・ノン・トロppo[速く、しかし余り速すぎないように]。いや昔の将軍達はしばしば互にこう挨拶していた。ポコ・ヴィヴァーチェ[少し活発に]。私はこのことを、ドイツ人は、他の民族が足[フィート]や靴をその尺度としているのであるが、むしろ会議の尻やズボンをもって測ることから説明している。

て、（ことによると）突撃したかもしれないのであった。「むしろ私は巨人を見てみたい」と彼女は言った、「それに小人を。何のために一つの屋根の下にいるのか分からないわ」。

行楽の家では十分な行楽があった。花と咲く顔や沃野に囲まれていた。そこで私はこっそりと絶えずシャーバッカーの拒絶のことを考えないようにして成功しており、そもそも真夜中頃まで上機嫌であった。私は上機嫌に値したのであり、ベルガはそれ以上に値していた。それでも私は夜の一時に一つの風車が回転する目に遭うはずで、それは勿論、ドン・キホーテがそのような風車として見たがったであろうような巨人よりも若干長くて、強い、幾つもの腕で回転する風車である。つまり私は市場で、言うよりも容易に察せられる事情によって、ベルゲルヒェンに、二、三十歩先に歩いて貰い、私は上述の事情で何の気なしに隠れた屋台の背後に行った。この屋台は多分ある粗野な小売り商の銀器精錬所と銀器用戸棚であったかもしれないが、その前で私は勿論事情により留まった。――すると、おやおや、槍や投げ槍とを持って振りながら屋台監視人が駈け寄って来て、いつの間にか瞬時に私を彼の屋台路地の追い剥ぎ、盗人と決めつけ、刻印したのである。この薄ら頭は私が隅に立って、――取り出すことしか何もしていないこと以上は目撃していなかったのであるが。胼胝[傷]のない名誉心というものはこのような攻撃に対して決して鈍くなるものではない。しかし頭に何も浮かばない、――せいぜい今は脳みその代わりにビールを有するこんな男に対して、真夜中[真実の]明かりを点せるものであろうか。――

私は私の剛胆法を隠さなかった。私は[追従の]狐の尾を掴んで、つまり私は演技して、所謂ほろ酔いであり、酩酊して勝手が分からず、上手く振る舞えないことにした。――それ故私はこの件で見聞していることすべてを模倣して、あちこちよろめき、両足をダンス教師のように外側に押し出し、真っ直ぐに帆掛けて行きながらジグザグに陥るようにした。いや私は私の立派な頭を（ひょっとしたらこの夜最も明るくて空の頭の一つを）酩酊した頭として真の支柱にぶつけた。――

それでも屋台の警備人は、ひょっとしたら私より酩酊の経験が豊富であって、その特徴をもっと良く知っていたかもしれず、いやそれどころか酩酊していた時であったかもしれ

*1 181) 我々が地獄か天国でしか永遠に生きられないということはやれやれ有り難いことである。地上[現世]ではさもないと我々の中からの真の悪漢ばかりとなり、蹄鉄工(死刑執行人)や(絞首台での)排膿の髪の毛の網や反吐療法、鉄剤治療(処刑場)の不足により世界は度し難い者達ばかりの家となる。かくて我々はまことにその通りと思うのだが、つまり我々の倫理的巨大な力はまさに我々が支払うべき自然の罪[借金]に基づいているのである。丁度政治家が(例えば新たな『新リバイアサン』の著者[Buchholz(1768-1843)]のように)イギリスの強権はイギリス人の国債に基づいていると証明しているようなものである。

63) 民衆の明かり[啓蒙]を危険だと恐れる人々は、稲妻が家に当たる、家に窓があるからと案ずる人々に似ている。しかし稲妻は窓を通じて来ることはなく、単に窓の鉛の枠を通じてのみ来るか、あるいは煙突の煙雲を伝って下って来るかなのである。

76) 家政学的説教的詩は、多分外科的結石手術者は工芸的宝石彫刻者であろうと信じていよう。あるいは説教壇、シナイの山はミューズの山であろうと信じていよう。

ず、この偽装全体を単なるいかさまと見なして、恐ろしく叫んだ。「おい、護摩の灰よ、ほろ酔いじゃあんめえ、法螺吹き野郎さんはこのわしより酔ってないはずだ。ー お馴染みさんに見えるな。立ったままでいろ、追い付くまでな。市場で盗みの指[絞首刑の者の親指は魔力を有すると信じられていた]を使おうというのかい。ー 立ったままでいろ、犬め、さもないと力尽くだ」。

ここで自分の状況全体が分かった。私はできるだけ急いで、屋台の間をジグザグにこの粗野な酩酊野郎から逃れて行った。しかし彼は私の後をよろめきながら付いて来た。しかし若干のことを聞きつけた私のトイトベルグが走って戻って来て、酔った市場の守衛の襟を掴んで言った、もっとも(村の流儀で)余りに大声であったけれども。「馬鹿な人だね。寝て酔いを覚ましな。それとも目を覚ましてやろうか。あんたは誰を目の前にしていると思っているの。私の夫で、従軍牧師のシュメルツレ、ピンペルシュタット近郊のフォン・シャーバッカー將軍様、大臣様にお仕えしているのだよ。こら阿呆、恥を知りなさい、恥を」。番人はぶうぶう言った。「悪く思わんでくれ」、そしてよろめいて去った。「令獅子夫人よ」と私は愛に酩酊して言った、「全く落ち着き払っているね、夫としておまえに獅子然としたところを見せるまでもない」。

このように私ども両人は愛しながら家に帰った。ひょっとしたらこの素晴らしい一日に更に素晴らしい真夜中の晩夏というものを体験したかもしれないが、しかし悪魔がリヒテンベルクの第九巻、それも 206 頁[Vermischte Schriften 1800-06]を私の前で開いたのであった。それにはこう書かれている。「いつか化学者が、我々の大気を一種の酵素によって突然破裂させる手段を思い付くことは有り得よう。かくて世界は没落することになるう」。いや有り得ることだ。地球はより大きな大気球に閉じ込められているので、単に化学的悪漢がどこかの僻遠の悪漢島かニューオランダ[オーストラリア]で大気の破裂手段を発明し

*1

*1 115) スミスによると、労働は財政学的価値の一般的尺度であるそうである。しかしこのことは、少なくとも精神的価値、詩的価値に関して、ドイツ人達が更にそれより早く洞察していたものであり、ドイツ人達は私見によれば、常に博識の詩人を天才的詩人よりも上に、労働で一杯の[労作の]重たい本を遊びで一杯の軽妙な本よりも上に置いてきた。

4) 偽善者は旧来の方法を逆にして、つまり旧来、人は切断の片面に毒を仕掛けたナイフで果実を切って、その毒の染みこんだ半分の方を犠牲者に渡して、毒のないもう一方の方は自ら食したのであるが、自身に対して非利己的に振る舞って、まさに立派な倫理的半分の面を他人に示して、与え、単に自分だけの有毒な面を保持するのである。いやはやこのような男に比べれば、悪魔は何と劣等なことか。

66) 語句注解の著者の見解が正しいのであれば、つまりかなり大きな国々の郵便局長は同時にかなり粗野な局長であるとすれば、多くの小国を一つの大きなコリントの合金へとまとめて溶かし、焼き入れたナポレオンは郵便局長や郵便管理人を、例えば丁重なザクセンにおいて、更にもっと丁重なものとはきつとらなかった筈で、むしろお世辞学校から追い出した筈である。しかし彼らは丁重さに関して失った分、ひょっとしたら郵税でまた得るものがあつたであろう。神聖ローマ帝国護国枢機卿は、その手紙を周知のように昔はすべて郵税無料で神聖ローマ帝国中を発送していたが、今や何か伝えるべきことすべてに郵便前納なしで済むとは思われないからである。

さえすれば済む。例えば火薬荷台に対する発火装置に類するものだ。数時間のうちにフレッツや私や我々の喉を途方もなく喘ぎ出す世界嵐が襲うことだろう。私の呼吸やその類は窒素大気の中に拉致され、そもそも万物がそうなることだろう。――地球は絞首台のある大きな刑場となってしまう、家畜ですらくたばってしまう。害虫駆除剤、南京虫駆除剤、ブラドリーの蟻塚均し、粉末殺鼠剤、狼戾、獣疫保険組合はこの世界の悪性ガス、世界の死滅の中ではもはや格別に必要なものではない。そしてこのサン・バルテルミ虐殺の夜に、忌々しい「酵素」が偶然発明された夜に、悪魔がすべてを掠ってしまうことになる。

しかし私は忠実な魂の妻に対して、すべての死の夜の想いを隠した。妻は単に痛々しく私に倣って感受するか、それとも全く陽気に笑い飛ばしてしまうであろうからである。私は単に、(土曜日の)朝、帰りの田舎定期馬車のために準備を整えて待つように、仮に私が彼女の希望に従って、十分早くに彼女にとって気になる諸顧問官の過剰受胎に至りたいならば、その馬車を待つように命じた。彼女はとても喜んで私と意見を同じくし、喜んで年の市を諦めた。私も足の指を彼女の手の指に結んで、一晩中ゆっくりと休んだ。

軽騎兵は私を捉えて、朝こっそりと私の耳許をつまんで、耳の中にこう伝えた。自分は妹のために陽気な市の贈り物を準備している、それ故昨日馬喰から取り替えた馬車に乗って若干早めに出発する、と。私は彼に前もっての感謝を述べた。

朝方、私を除いて、誰もが陽気に市場から進んで行った。というのは私は相変わらず、最良の朝焼けを目の前にしても、私の脳髓球、並びに地球の夜中の悪魔の酵素、解体剤を発酵させながら頭の中に保持していたからである。夜の間、私と私の恐れは全く何によっても追い立てられなかったという一つの証明である。私にとって厭わしい不正乗客がまたしても割り込んで来て、いつものように私を見つめた、しかし何の効果もなかった。というのは、今回私が単に自分の転覆だけでなく、世界の転覆を、頭に入れているとき、私にとってこの乗客はむしろ一つの冗談、幽霊に過ぎなかったからである。誰も足が切除されるとき、心の連獣を感じないように、あるいは大砲が飛び交うとき、雀蜂に対して防御しないように、同様に一人の乗客は、例えばその不審気な顔で私の間近な未来や後の未来にどんな火急の催促状を投げかけようとも、「酵素」がフレッツからノイザッテルへの私の旅の途中で、全く無邪気に試みて混合するどこかのアメリカの男、ヨーロッパの男によつ

*1

*1 67) 個々人、いや個々の国体は有機的体に似ている。その体から内部の空気を引き抜くと、大気圏がその体を押し潰してしまう。鐘の下で外部の抵抗の空気を引き抜いてしまうと、鐘は内部の空気によって膨張して、弾けてしまう。従ってどの国家も内的外的抵抗を同時に有すべきである。

19) 一人ならぬ作家がヘルメスに倣って、こっそり入れたくたばった蛙や吐酒石によって飲み助に大好きな飲み物を永久に嫌悪させる術を心得ている妻達や医師達の例を模倣して、類似のやり方で熱く焦がれた長編小説の読者に長編小説を、その小説の中へ頻りに挿入された説教や、倫理や退屈な代物で（これがくたばった蛙というわけで）はなはだ味気ない思い、反吐の出る思いにさせて、それからもはや長編小説に手を出さないように努めてきた。――しかし反吐はほとんど役に立たなかった。ヘルメス自身にとってさえ少しも上手く行かなかった。むしろ彼の模倣者達がまだましで、彼らの場合酒[ワイン]は味の点で、彼らが添えた催吐酒と余り変わらなかったのである。

て、偶然発明され、放出されかねないと私が考えているこのような時には、全く滑稽な者に思われたのである。問題、いや懸賞問題となりえるのは、化学の民の啓蒙化された君主達が、容易に体を魂から分離し、地球を天国と娶せる彼らの化学者達に、すでになされてきた試み、これまで国家に害するよりもむしろ益してきた試みに他ならない化学的試みしか課さなくなったとき、リヒテンベルクの脅迫以来そのことは何と世界破滅的に、自殺的に思えるかということである。

残念ながら私は酵素のこの最後の審判日にすべての感覚と共に沈み込んでいて、ノイザッテルへ帰る途中ずっと、ノイザッテルに着いたということ以上のものは何も体験せず、気付かないでいた。ノイザッテルでは同時にまたこの不正乗客が自らの道を進んで行くのを見た。

ただ私は私のベルゲルヒェンを途中絶えず見守り続けた。生命と日のある限り、彼女を見続けるためであり、大きな危害であれ、あるいはそれどころか、崩落するゴルダウ[スイスの地、1806年9月2日山津波で潰滅]全体とか暴虐な最後の審判であれ、彼女のどんな些細な危害の際にも、彼女のためにではなくても、彼女の許で死ぬためであり、かくて彼女と結ばれて、苦しみ、かつ苦しめられる人生を投げ飛ばすためである。この人生ではいずれにせよ、彼女のための私の願いの半分も実現しはしなかったのである。

かくて私の旅はそれ自体終わることだろう。 — 若干の物語で飾られて、 — ひょっとしたら将来、フレッツ周辺の君達、友の方々よ、君達によってもっと報われることになるかもしれない。君達はもっと容易に、今まで実直なシャーバッカーの目に私を見えなくしている嘘の雑草を引き抜いてくれるであろう若干のよく研がれた草取りナイフを私の旅に見いだすことだろう。 — ー — ただまだ忌々しい酵素が私の頭に居座っている。まだ吸入する大気がある限り、ご機嫌よう。私は酵素を頭の中から叩き出したい思いでいる。

*1

*1 8) 大きな広間では本当の暖炉が可愛い見せかけの暖炉風に見える。それで乙女らしい愛がいつも美しい乙女らしい友情の姿をしているのは上品で、可愛いことである。

12) 諸民族は、 — 平原や安らかな時に最も多く不純物を沈殿させる奔流とは逆に、 — まさしく最も強い動揺の時にのみ劣等なものを沈下させる。諸民族は怠惰な平板な平野を更に長く忍び歩くほどに、より一層汚れたものになる。

23) 自然が古くて大きな丸い地球を、地球の塊を新たに捏ねて、このパスタの蓋の下に新たな詰め物や小人を入れて焼き上げるとき、自然は大抵、焼き上げる母親が小娘に対してするように、冗談でそこから若干のわずかなパスタの生地を（子供にとってはこのような生地の数千平方マイルで十分であろう）どこかの詩人や賢人、英雄に与えて、それでこの小さな子が母親の傍らで何かを象り、仕上げるようにさせる。この小娘の焼き物の若干をその兄弟姉妹が得たら、彼らは皆両手を叩いて、叫ぶ。お母さん、あなたもヴィクトリアちゃんのように焼き上げることができるの、と。

104) 無限の音色の、炎の、動きの精神が、永遠に長いこと内的鏡の中で、その轟く、燃え上がる、飛翔する像を見つめていた後で、とうとう一度素敵な静物画を描き、仕上げようと思った。 — 見よ、するとこの精神は突然宇宙を作った。しかしこの静物画は相変わらず神の前に懸かっていて、この精神は、これ、宇宙を見つめることが好きであるように見える。

君達の

アッティラ・シュメルツレ

追伸。私の義兄は彼の件を全く上手にやってくれた。そしてベルガは踊っている。委細は将来に。　ー

偉大な政治屋の許での
悪魔の告解

私は数年前に、博識で、それ以上に機知を有し、更にもっと強力な空想と最も強力な憂鬱症を有するある政治家と知り合いになり、彼の口から想像の告解を知るという幸運を得た。それ以来この病弱な聴罪師は死ななければならなかったが、―― 告解の息子が敬意から聴罪師を自らの許へ連れて来たのでなければ、―― 死んでどこへ行ったか分からないことだろう。健気な告解者は次の告解文のなかでは単に「非の打ちどころのない政治屋」という名前で引用される。彼のことを個人的に知っている者は誰でもその名前は分かるであろうからである。

リシュリユー枢機卿は、周知のように、自分を一頭の馬と見なして、馬のように駆けたり、飛び上がった等々のことをする時があった。また正気に戻ると、勿論誰を誰々と見なすべきか、どの国を自らの哀悼馬、駄馬、領主用馬と見なすべきで、どの国を自らの慶祝馬、パレード用馬と見なすべきか最初に承知していた。医学史、政治史においてはこのような固定観念で一杯の病身の政治家の例は多い。さて上述の悪魔の聴罪師、非の打ちどころのない政治家もそのような一人である。会議室の机や写字台、それらの後のテーブル、飲食のテーブルや賭博台に長いこと座っていて、仕舞には離別や不興があると肉体的にその男性は、少数の者達が有するよりももっと分別を失ってしまって、最後には他人に対して全く狂ったようになってしまい、それから自身の中、自身に対しても自ら狂ってしまう。

すでに現筆者が、―― 現筆者は、最近の言葉遊び依存症に従って、ある告解の告解を告解するものであるが、―― 詳細をこの政治家本人を通じて知る前に、この政治家の以前の知人達にとって、次の事情は憂わしいものに思っていた。つまり彼はミラノの医師カルダーノ[Cardano[1501-1574)]の才能を有していて、暗闇の中でどんな形象をも出現させるというよりは、―― これは健全な政治家にははるかにむしろ有り得る話しであろうが、―― まさに自分が見ようと欲する形象、創作したい現象を自ら眺めるのである。何としばしば彼は漆黒の夜、黄金海岸の黒人を見て、自分の―― 胃を嘆いたことか。

その後―― 外面的に嘆き、内面的に苦しめられた―― この男性は、金貨や貨幣の頭部像の伝説について長いこと読んだ後、とうとう後光や栄光の頭部像の伝説を読むに至った。

さて我々の中で彼のようにヤコブス・デ・ヴォラギネの伝説[黄金伝説]を両手にする者は、その中から容易に思い出すことだろう、つまり聖マルガレータは、彼女の許に（勿論不敬虔な意図を抱いて）やって来る悪魔を、長いこと打ちのめして、とうとう彼女の前で耳に入れる告解を述べるようにさせた、と。ひょっとしたら、告解者の悪魔は、告解するより先に懺悔の苦しみのために来ている、いつも被告人を白状する前に拷問にかけられるようなもので、とても優しい魂の人々が気の毒に思うのかもしれない。しかし刑法の教師は、しばしば些細な犯罪者でさえ、電氣的鞭を使ってするように、真理の火花のためには、半死の目に遭わせなければ、せめて半生を得られるほどに、その件の明かりが見えることはないとは承知している。

非の打ちどころのない政治家に話しを戻す。あるとき彼の誕生日の前日の夜に、彼ははなはだ病的で敬虔な気分になった。―― 誕生日は葬式を思い出させた、―― 人は自分

の一年の最後の夜に容易に死ぬという推測、自分の一年の最初の日に生まれたのだから完結するという推測が思い浮かんだ。 ― 彼は自分の死と悪魔とをいつもセットで考えていた。 ― 暗闇の中で好みのものを見るという彼の才能はそれに対する恐れで一層強くなった。 ― 多くの不安な思いの後で彼はとうとう跪くに至って、多分祈りを捧げようとした。

そのとき悪魔が現れた。 ― 上品な身なりで、つまり（非の打ちどころのない政治屋もそうであったように）黒づくめで、あたかも社交か宮廷か告解に赴く按配であった。 ― 明けの明星あるいは金星[ルシフェル、サタン]の形のか弱い勲章が暗い胸の地を全く可愛く飾っていた。 ― 角や、蹄や尾は勿論余りに無器用な戴冠式の権標として欠けていた。これらはどの侯爵も婚礼祭壇や告解席ではいつでも外すものである。要するに悪魔が全体出現していた。

彼を容易に見分けた偉大な政治屋、宮廷人は、彼を何かもっとましな者と思っているかのように見せかけて、跪いたままであったが、こんなに夜遅く十二時に拝謁の栄を得ているのはどなたであるかと丁寧に尋ねた。 ―

悪魔はお辞儀して、 ― とても真面目な、黒衣の、剃髪し、跪いた男をととても容易に聴罪師と見なすことができたので、次のように始めた。

「尊敬する閣下、喜んで白状致しますが、私は確かに悪魔の類いであって、格別の聖人ではなく、単にある政治家様の馴染みの精霊で、この人をかくかくしかじか導いています。ちなみに私は最良の世界と同様のもので、出現致しております。勿論私の祖母はその七世紀から十八世紀に至るまでに（フォークトの計算によれば[Voigt:Berlinische Monatschrift.1784. 9442994 人を数えているらしい]）九百万人の魔女を火刑台に導き、その齒のための粉末用に焼きました。もっともこれについては女性に対する最愚の故と弁解しています。祖母の言いますには、女性は他ならぬ女性達によって、それどころか老女達によって殊の外憎まれているのだそうです。しかしこの善良な祖母はイヴや私よりも先に年を取ってしまいました。祖母の夫、私の祖父は一八〇七の戦火を起こして、他人を冷たくさせて温まろうとしました。その孫、私ですが、名誉と化粧の騎士[地主と侍従]として私が務めている偉大な政治家様を通じて、単に三回の継承戦争と一回半の前承戦争を引き起こしただけでありまして、多分それ以上の回数ではありません。と申しますのは彼の点火用柴たる侯爵は短命すぎたのでしたから。 ― そんなわけで私は私の罪の告解に移りますが、この罪は私が犯したというよりは唆したもので、かの無実の意識がないわけではありません。この無実の意識を哀れな悪魔は他の誰よりも必要とするものでありましょう。

尊敬する、神の代わりにここに鎮座します閣下、告白致しますが、私は、残念ながら大胆不敵な、殊によると全く墮落しているとは言えない性情に従って、私の政治家様を、その侯爵のちょっとした誘惑へと誘惑してしまいました。しかしそれは砂漠への誘惑ではなく、社交への誘惑でした。実際この偉大な政治家様は直に ― マホメットが癲癇[落下癖]を得たように、 ― 上昇癖を得て、それを、マホメットが癲癇をそうしたように、かなり利用しました。彼は立派な鷹のように襲いかかるために上昇しました。悪魔が（ルターによれば）神の猿であるとすれば、この政治家様は神の似姿としてのその侯爵の許で、猿の小猿にしか実際なる他できないのでありました。

私とこの政治家様は直に、ローマ法によれば実父にとってさえ、子供達は単に物件に過

ぎず、人間でないのであれば、何故このことは更に領国父と領国民にとって反映されているか、その根拠を見いだすことになりました。それでもっと多くの推論がなされました。諸法によれば、いずれにせよ契約は前提されないのであれば、我々兩人は、最も重要な社会契約について、そのことは妥当すると結論付けました。部族法よりはるかにむしろ国際法が妥当することになると私ども三人は言いました。

尊敬する閣下、私は喜んで白状しますが、私は勿論この政治家を通じて宮廷の砂糖を、すべての砂糖の如く、戦争の血で濾過し、精製しました。しかし私が単刀直入に告解したくないのであれば、弁解したいと思います。確かに大方のオペラや戦争、狩、コンサートは単に、その際見るからに数と住人が増えた貧民達に振る舞うためになされます。――私は彼を通じて、より賢明な少数者の声のために手配して、それで卑俗な大多数は体に胃しか有しないようにしました。――私ども兩人は腹ぺこの三人の詩人に対して、彼らを模して歌い代理する一人のカストラートをいつも太って窒息してしまうようにしました。

――そして我々がまさに主要な件に怠惰な進行を決めたとき、それは確かに単にこう確信していたからでした。一人の人間は改善することがいかに難しいことか、いわんや一つの国家は難しい。それらを別な音色に変えようと思うとき、人間は弦のように張る必要があるが、しかし国家は、鐘のように全く溶かして、鋳直す必要があるのだから、と。尊敬する閣下、私は告解するつもりがなくても、こう申しましょと申し上げます。

喜んで白状致しますが、ひょっとしたら私はこの立派な政治家を、彼や私が弁解したくないほどに所有欲へと導いたかもしれません。ただ他に仕様は難しいのです。より高貴な身分では浪費と吝嗇は父と息子とに分割されています。兩人の各々がその一つの役割を引き受けなければなりません。亜麻は亜麻薺に対して、あるいは亜麻薺は亜麻に対して譲らなければならないようなものです。かくて古代には悪魔自身が金を運んで来たように、悪魔は近世では、――悪魔はその友人達には彼らの自我の中では目に見えず、その自我の姿でしか出現できずに、――悪魔は単に彼ら自身の体の両手で金を与えることが許されるという風に限定されて出現します。かくて、白状しますと、私は私の立派な上司、政治屋に多くを渡しました。騎士領、名誉職、不名誉職、銀行資本です。その際彼が眠り込ませていた彼自身の上司は、太って眠り込んだ穴熊のように目覚めたときには冬の眠りから再び痩せ細っていたものです。しかし多くのことで不穏な気分にいる侯爵は、平静な眠りはどんなに高くついてもいいのではないのでしょうか。侯爵は国家を、つまり象を愛玩動物として持ち運ばなければならないのです。――政治家の良心はより容易に安静状態に置かれ得ました。政治家は良心を、棒鱈がその胃をそうするように、取りだして、空にし、また飲み込んで、収めることができたのです。いや彼は週に二、三回改心して、自分が弾劾されようものなら、自分は他の者同様無実だとよく請け合いました」。

ここで悪魔の聴罪師、あるいは非の打ちどころのない政治屋はいくらかたじろいで、動揺して頭を振った。

「しかしこれは事実です」と告解の息子は続けた、「更に白状しますと、最も尊敬する神父様、私は、嘘の父親という肩書が私の肩書であり続けるべきなのであれば、この政治家を私の息子、外套の子[婚前の子]、相続人として実子の代わりに養子としました。我々のなす青い靄[瞞着]が国の最大の青色染料工場として行き渡りました。しかし彼はいつもすべての他の正直さの友として留まっていて、心から自分に告げられる全ての嘘を憎みま

した。というのはまさに真実への愛から彼は自分の真実を手許に置いていたからで、カムチャッカ人が煙草の煙を愛から飲み込むようなものです。それ故に他の者達は彼らの真実を彼の前で、ドイツ人が煙をそうするように、享受のために吐き出して、かくて共有することになったのです。それでもこのような誠実な男は、ただ約束、言葉通りの男でしたが、多くの者の間で曖昧、両義的に見なされました。まさにあたかも、接見の夕べは一つの色以上を有し、どの色をも有し、保つように考えているが故に、このような男は何の色も有しないかのようなものです。

更に一つの、それも最後の罪を、最も尊敬する老神父様、私はほとんど冗談の気分で告白したいと思います。この冗談は多分告解席には大きすぎるものかもしれませんが、しかし古代ドイツ喜劇の私の先の道化役には過ぎたるものではないことでしょう。所謂性に関するものです。所有に関し先の占有について言えるもの、これは所有する女性達の占有についてはもっと強力に妥当します。悪魔は男性や女性にとってもはや肉体的に売春婦や悪魔として出現しません。悪魔はその自我の形で現れ、そこでその自我を二重化します。さて今や常に三十二人の庶子の子供が（幸いなことに）一人の不自然な父親に対して出現しますように、私の政治屋もその庶子を首都だけで六十七人、ひょっとしたらその年齢の数に従って得たものです。田舎町や村々は彼にとって支部教会、別院というものでした」。

一 今や（と憂鬱症の政治屋は私に請け合った）自分は告解席でもはや跪いていることはできなくなった、頭を上げることにする、しかし悪魔が早速自分の頭をもっと深く押さえたと言って、それから若干微笑して続けた。

「申し上げたように、最も尊敬する方、この政治家様は、敏捷な礼拝堂司祭として、最も美しい海の女王、つまり女神が先に泳ぐとその後をびっこして付いて来る火の神の将来の主婦たる女神の祭壇で、自分の仕事を申し分なく果たしました。

私が嘘のときと同様、また科があるとなれば、私はまたこう引用しましょう。彼はそれでも、およそ最初の無垢の後・楽園の神が、つまり諸庭園の神がなし得る限りの、すべての女性的無垢の率直な友、愛好家であって、気の抜けた愛好家ではなかった、と。と申しますのは、すべての真の聖女の後を、お誓い申し上げますが、この立派な男性は付いて行って、尼僧院にまで入って行ったのであり、いやその政治の仕事にもかかわらず、神聖な永遠の乙女なら彼は毎日ニコデムスのように夜遅く訪れて、ただこのニコデムスのように、パリサイ人達の前では、後光を避けたことでしょう。善良なる悪魔の私がこのことを許し、いや支援したことは、願わくば最も尊敬する方、恐らく最も良く私の意図を表現していることでしょうし、ひょっとしたら神父様、懺悔を軽減してくれることでしょう。聖女の単なる聖遺物、周知のように私ども悪魔を以前から追い払っていたもの、このような逝った乙女達の単なる死んだ骨とか遺物は彼の心を捉えることは決してなく、彼は冷静になるのです。ただ純潔な女達を彼は目にすることを欲しました。そしてこの実直な男はよく言っていました。彼女達は金では得難い、と。そして半ばそのことを嘆いていました。それほどに彼は乙女の心を称賛する術を心得ていました。この心は（と彼はある適切な比喻で言いました）造られたばかりの船のように、円筒の上を滑って世界の海へ進むとき初めて真の炎を発するもので、しかし後の冷たい塩水、海水ではその心が作るわけでもなく、分かつものでもない燐光の炎を見せるだけである、と。

この政治家の二、三の夫婦生活上の子供を、庶子[自然]でない超自然の子供達と名付け

て言及しますと、彼はむしろ彼らのために余りに世話を焼き、余りに国父風で、彼らのために国を、[猥褻な箇所のない]皇太子使用版の古典出版よりも異なる様々な出版を通じて編集しました。しかしこれは他人の評価に委ねます」。ここで聴罪師あるいは政治屋は手を、免罪すべき罪の多い頭に置く代わりに自らの頭に置いた。

「しかしこれらは私の罪です」と悪魔は続けた、「大きな罪であると同時に最大の罪です。しかし我々兩人から遠いものであつて欲しいことは、最も尊敬する神父様、私が貴方を、永遠の死罪の罪も殺人の罪も御存じない貴方を、私の告解についての貴方の顕著な苦痛でもって何らかの甘美な懺悔へと買収するつもりはないということです。否。私は正しく贖罪するために、まさにここから最も敬虔な肉体と精神の仲へ、―― 貴方の中へ入って行きたいのです、神父様」。

悪魔は去った。悪魔の滞在の不確かさのために非の打ちどころのない政治屋はまさしく真の当惑に陥った。「良いですか。いずれにせよはなはだうんざりさせられることは」―― と彼は他人の前で好んで推測の形を取ろうとするかの憂鬱症の曖昧さを伴って、私に対して続けた。―― 「極めてかくも愚かな幻覚の後で、更に愚かな時間の中、自分は本当に体の中に悪魔を有すると妄想することです。最も立派な方。洗礼の悪魔払いを、その後でナントの勅令[1598 年]のように撤回[1685 年ルイ十四世]し得ると思うならば、自らの許で過つことになりましょう」。

ここで私はその出現の私の容易な説明で非の打ちどころのないこの政治家に私の敬意を示す機会を捉えた。私は彼にモーリッツやほとんどすべての心理学者の雑誌からの単に類似した錯覚を思い出すように頼んだ。そこには多くの病んだ人間が自分を二重化して見たという極めて否定し難い例が載っているのである。この場合、と私は続けた。彼は単に自分自身を悪魔と見なしたのであり、聴罪師と告解の息子、あるいは政治家様と政治屋、この両者から出現する邪悪な霊の三位一体は、単に一人の人物にすぎないという慰めを彼は得られるのである、と。

この老人は若干強くそのことについて熟考していた。しかし私が彼にもっと詳しく、所謂告解者はすでに彼が承知していた者とは何か別人であったか、彼自身顕著な関係に当惑したのではないかと尋ねたとき、―― そして私が彼に、彼は力と機知と冗談とを過剰に有していて、古代キリスト教の神秘劇の悪魔の道化役者の性格をいつでも保持して、即興的に演じていると説明し、―― また最後に、ただ暗闇のせいで彼と悪魔の顔つきの類似性を認識し得なかったのであろうと述べると、この老人は、ちょっと計算した後に、重苦しい夢から目覚めたように、喜んで私の手を握って、こう言いながらその手を振った。「まことに、友よ、今や貴方は赦免された、それも私を赦免された。私は何を見ていたのだらう、立派な方」。

『フィクスライン』も『シュメルツレ』も日本ではすでに翻訳紹介されている。まず『フィクスライン』は、鈴木武樹訳で『五級教師フィクスラインの生活』（ジャン・パウル文学全集6）として創土社より1794年出版されている。また『シュメルツレ』は岩田行一訳で『陽気なヴッツ先生』他一篇の「他一篇」に当り、「シュメルツレの大用心」として岩波文庫1991年という具合に翻訳出版されている。鈴木武樹訳の『五級教師フィクスラインの生活』はハンザー版、ベーレント版に基づいており、付録に見える部分、序言等もすべて翻訳されている。一方岩田行一訳では、拙訳を御覧頂ければ分かるように、ジャン・パウルの勝手に見える遊びの注がすべて省略されている。本来遊びの文学で遊びの部分が省略されているのは何とも合点が行かないが、とにかくジャン・パウルを紹介すればいいという方針であったであろうか。若い頃ドイツ語でジャン・パウルの『巨人』を読んで、読みやすかったと思って後書きを読むと、編者が勝手に書き直した本であった。『源氏物語』を現代語訳で読むようなものかと思って、少しあきれたが、今は名作なら漫画でも紹介される時代なので、ともあれ名が知られていないジャン・パウルのような作家はどんな形でも紹介されないよりは結構なことであろう。ともあれ、今回の『フィクスライン』と『シュメルツレ』で古見日嘉、鈴木武樹、岩田行一諸先生の試みられた翻訳はすべて九州大学のリポジトリでも読めることになる。（ただ鈴木武樹訳『ジーベンケース』上は紙の本の形である）。

まず『フィクスライン』、もちろんタイトルは『五級教師フィクスラインの生活』である。面倒なので『フィクスライン』と省略するが、この五級教師も説明が必要であろうか。五級、四級、三級、二級、一級とあるようで、一級生はまあ、日本の高校三年生、それ以下は二年ごとに下級生、従って五級教師は小学校四、五年担当、一年ずれるかもしれないが、大体的に見当ではこのようなシステムらしい。フィクスラインはこの教師に内定して喜ぶという話で、当時はこの内定を貰うのに、普通借金が必要だったとか、級が上がるごとに喜んだとか、教師より牧師になる方がはるかに嬉しくて、牧師に内定して、これまた貧しい零落貴族の娘と結婚して良かった良かったというお話しである。それに付随して、フィクスラインの父方は皆三十二歳で亡くなっていて、田舎のことで教会が焼けていて、フィクスラインの実年齢が分からず、三十二歳の誕生日を巡ってノイローゼになるが、幼児帰り療法で解消する。その他フィクスラインの学問は、聖書の真ん中の単語を探す研究であったとか、誤植は何が多いかという研究、村の廃墟、盗賊の館の平面図の研究といったもので、ギムナジウムの発表会では、ルターの末裔について考証するもので、細部に神は宿るといえばもっともらしいが、実体は瑣末な学問のパロディーに他ならない。格別論ずるまでもなく、「笑点」を聞いて、笑って、忘れるように、「フィクスライン」も読んで、笑って、忘れればいいお話しであろう。

しかしそれでは解説の代わりにもならないので、若干補足して行く。まずベーレント版でのベーレントの解説の一部を引く。＜『フィクスライン』一牧歌に取りかかったのは『ヘスペルス』の目処がついた一七九四年七月で、一七九五年五月終了。従って作中一七九四年五月執筆中とあるのは、作者の虚構。序言の、有名な幸福への三つの道は、一七九五年六月二十九日書かれた。出版はその年の末であるが、奥付は一七九六年。早速第二版に取

りかかるが、しかし出版は遅れ、第二版は一八〇一年になった。主人公の性格はマソラ学者風、『トリストラム・シャンディ』のトウビー叔父風で、素朴な敬虔さが見られる。主人公に幸運を与えるために、パトロンの夫人による遺産の遺言とか、間違いによる召命[辞令]が考案されている。死んだ兄の話は実の兄弟の川での死が想起される。フーケルムはヨーディッツと、フラクセンフィンゲンはホーフと、シャーデックはツェトヴィッツと思われる。その他の付録部分は以前から部分的に考案されていたものである。「想像力の自然的魔術について」、これはロマン主義的世界観の早期の表明。「地方長官フロイデルの自らの呪わしい悪霊に対する告訴状」、これはジャン・パウルの諷刺から諧謔的描写への移行を物語るものである。「利己的な愛もなく、自己愛もなく、ただ利己的な行動が存在するのみである」、これは本来エルヴェシウスの世界観に反対して書かれたもの。「フェルベル校長とその一級生達のフィヒテルベルク[山地]への旅」、修学旅行は当時博愛主義教育者達の特別メニューであった。しかしこれを博愛主義者達に対する単なる諷刺をみることはできない。フロイデルと比べても生氣ある描写が感じられる。結末でフィヒテルベルク地方史研究家 Helfrecht に公正に言及しているが、誤解をまねくことになっている>。

『フィクスライン』といえば序言の「有名な」幸福への三つの道であろう。テキストから引用する。(以下引用は主に拙訳頁)。

「私は三つの方法しか、(幸福にではなく)より幸福になる道として見つけることができなかった。高みに行く第一の方法はこうで、つまり人生の集雲のはるか彼方へ上って行き、外的世界全体をその狼罠や納骨堂や避雷針と共にはるか足許に単に縮んだ子供用庭のように横たわっているのを見ることである。 — 第二の方法はこうで、つまり小庭に真っ直ぐに落下して行き、溝の中に心地よく巣を作ることで、その温かい雲雀の巣から外を覗くと、全く狼罠や納骨堂や止まり木は見えず、単に穂先は見えるだけで、その一つ一つが巣の中の鳥にとっては一つの木であり、一本の日傘、雨傘なのである。 — 最後に第三の方法、 — 私が最も難しく、賢いと思う方法はこうで、つまり両者を互いに交替させることである」[4-5]。

この発想はジャン・パウルでは一貫して『美学入門』での長編小説の三つの分類にも適用できよう。崇高な身分の登場するイタリア派、卑俗な世界のネーデルランド派、それを交互に混ぜ入れるドイツ派の三分類である。

「ドイツ派の長編小説の主人公は、さながら二つの身分の中間にあり、仲介者としてあり、状況や言葉、出来事の面でもそうであり、そしてイタリア派の形式の諸形姿の崇高さも、対称的なネーデルランド派の形式の喜劇的な深みも、また真面目な深みも採用しない一人の性格、このような主人公は、詩人から二つの方向にかけて、ロマン主義的であるという手段を難しくし、いや奪うに違いない」[第七十二節]。

『フィクスライン』は長編小説ではなく、牧歌であり、上の分類とはずれるが、強いて分類すればネーデルランド派、あるいはドイツ派であろうか。しかし、しきりに「家にいること」と要請し、その西暦年一七九四年が言及されるのは、裏を返せば、外の世界が気になって仕様がないうことである。フランス革命とその動向が気になっているのである。動乱は嫌いであり、できれば目にしたくないが、しかし無視できないという中での牧歌である。「我々の世紀に対してなし得る最も必要な説教は、家に留まることという説教である」[6]。「宝籤に賭けないこと — 家に留まり給え — 大きな饗宴を催したり、

訪ねてはいけない」[114f.]。「牧歌は制限の中の完全な幸福」という定義が『美学入門』の第七十三節ではなされているが、動乱を意識的に排除しているわけである。

この牧歌では、主人公が教頭に抜擢されて喜ぶ場面、更には牧師に召命されて喜ぶ場面があって、その喜びようは現在の日本でも就職の内定を貰ってよろこぶ若者と変わりないであろう。しかし仕事となるとドイツでも日本でもやはり人間関係が煩わしい。

「彼は今やギムナジウムの嘆きの谷から救済されて、浄福者達の居場所に受け入れられた。 — ここには嫉妬も、同僚も、副校長もいない」[85]。

「ただ、学校教師は宮廷人のように決して仲良くしようとしなくてよろしくない。ただ磨かれた人間と磨かれたガラスのみが容易に密着する」[86]。

フィクスラインは「牧師職」に希望を託す。

「教授を目指す教師は牧師をほとんど気にかけない。しかし自ら牧師の家を自分の仕事場、出産の家に欲する者は、牧師館の住人を評価する術を心得ている」[43]。

「教授」も「牧師」もこの牧歌では牧歌の世界にあるようである。フィクスラインのその後の牧師生活は余り描かれていない。しかし人の世はどこであれ、例えば「宮仕え」に内定し、喜び、結婚しても、挙げ句、「すみじきものは宮仕え」と納得して、愛想笑いを浮かべて耐え、結果退職後のみが楽しいということになる。もっとも退職後元気のない向きもあるから人それぞれであろう。しかしそもそも牧師が必要とされるのは、「怨憎会苦」の世界を緩和するための「アヘン」装置としてであろうし、これをそうと見抜いたのはマルクスであるとすれば、牧師はマルクスに駆逐される運命にある。しかしマルクスもこけているので、僧侶も永遠の「怨憎会苦」の中、安泰である。

フィクスラインは誤植の研究をしているが、ここでは誤訳の一例を挙げておこう。誤訳は、共訳でないかぎり、単独訳ではやむを得ない面がある。誤訳を指摘することに生きがいを感じている方には、あらかじめこう言っておこう。「Wer noch nie einen Fehler begangen hat, hat noch nie etwas Neues probiert.決してまだ間違いを犯さなかった人というのは、まだ何か新しいことを試したことがなかったのである」(Einstein)。Möhrenkaffee という単語がある。(第三のメモ箱ハンザー版 Bd.4.S.89) これをカーライル先生は Mocha coffee と訳されている。鈴木武樹先生はブラックコーヒーである。Mohr 人からの類推であろう。しかしグリムを引きさえすればいいのである。焙煎人参コーヒー[54]で、代用コーヒーである。フィクスラインの生活の貧しさを反映しているわけで、拙訳にもフィクスライン的研究の一端はあろう。また経験的に数字の翻訳は間違ふことが多いと思う。注釈でも、この翻訳の最後の「悪魔の告解」の中の火刑の魔女はハンザー版では 9442944 人であるが、もっと信頼の置けるベーレント版では、9442994 人である。

付録について述べる。

1. 想像力の自然的魔術について

これはベーレントによれば、ロマン主義的世界観の表明ということであるが、随所にやはりジャン・パウルらしさが窺われる。まず、「真正の詩人」にとっては、貧乏生活でも、ゲイの『乞食オペラ』に見えるという擬態愛好の負け惜しみの論法がまことにジャン・パウルらしい。

「というのは彼自身市民的に不幸であり、例えば乞食ラザロ勲章[ラザロ教団]の佩用者で

あっても、あたかもゲイ[John Gay(1685-1732)]の乞食オペラの客演をしているかのような気分がしているからである。運命は劇作家であり、妻と子供は常備の一座である」[122]。

またジャン・パウルは子供時代の描写が好きであるが、その理由付けも行っており、これは聞いていると、まことにドイツ的、哲学的と言おうか、理屈っぽい。

「しかし幼年時代の思い出は、我々にとってどの年代になっても残っている思い出として爽やかなものとなるのではなく、その魔術的な暗がりと、ある無限な享受という我々の当時の幼年らしい期待の追憶とが、こう期待して全き若々しい諸力と人生への恐いもの知らずとで我々は騙されてきたわけであるが、果てしのなさへの我々の感覚にとって心地が良いから爽やかなものとなるに違いないのである」[124]。『フィクスライン』では幼年時代をこう形容している。「これは我々が決して忘れることがない、我々が永遠に愛し、我々がまだ墓場にあっても振り返って見る天上的時間である」[113]。

日本人は哲学的理屈よりも、例えば俳句の形を好むことだろう。

「泥川に小児つどいて泳ぎけり」 漱石。

記者はこれまで何千頁もジャン・パウルを訳してきたが、この世界が日本人にとって、「柿食えば鐘なるなり法隆寺」一句に及ぶものか、かなり疑わしい。そもそもドイツには柿がない。

2. ヨズアー・フロイデル地方長官の自らの忌まわしい悪霊に対する告訴状

ジャン・パウルは学者の特徴の一つに「放心」を考えているようである。「私はぼんやり[放心]していて事を次々と忘れてしまうかの学者達のまねごとを若干したいと思っていた」[129]。あるいは「ニュートンはあるレディーの指をパイプのストッパー用の小形麝香鹿の足と見なした。しかし私の勘違いはただ、一度パイプを叩きだしたとき、丁重に何度か、『お入り』と叫んだことくらいである」[131]。

このニュートンの逸話はジャン・パウルではよく使われる。例えば『フィーベルの生涯』くかくて彼はフィーベルに若干学者的にぼんやりするよう勧めた。「最も偉大な学者達は」と彼は言った、「その伝記の中で放心の最大の例を見せています — あるときは彼らはロンドンで女性の親指を煙草の充填具と思っており、あるときはパリで他人住まいを自分の住まいと思っており、あるときはパリで聖書の周知の著者達を知らずに、バルク書を読んだかと夢中になって尋ねています。...>[『ジャン・パウル中短編集1』152頁]。

要するに学者は自分の仕事に熱中していて、世事に構わず、「天然」、「放心」の一大特徴があるというわけである。ドイツ語では、Je gelehrter, je verkehrter「学が深いほど、いかれている」という成句があって、ジャン・パウルも婚約者の一人カロリーネ・フォン・フォイヒタースレーベンの母親から、この言葉で反対されたいから、馴染みの世界なのであろう[『ジャン・パウルの生涯』211頁]。筆者は「忘れて」いたが、筆者も一応学者の振りをしてこれまでジャン・パウルを訳してきた。ジャン・パウルの研究者としては自明の態度かもしれない。

この項の印象はコメレル先生にお任せしよう。

「この『告訴状』の描写も薬味が多すぎて、喜劇的なものは重苦しく、調子は時々間違っている、長官にはもはや信用できない分別の高みから迫ってくるからである。しかしたとえフーケルム教会に閉じ込められたぼんやり者の自己記述者が形姿となるまでに自らを

書けないとしても、彼が説教壇で跪いたまま立ち上がるのを忘れて、それから余りに長い敬虔の祈りに恥じて、鬢の下から静かに忍び出て、それで説教壇縁の鬢のために聴衆は更に長く畏敬の待機をせざるを得なくなると、彼は大きな諧謔的恵みに近付くことになる。かくてジャン・パウルは何か本当に難しいこと、上等の諧謔的状况に成功することになる」[Max Kommerell:Jean Paul. S.282]。

3. 利己的な愛もなく、自己愛もなく、ただ利己的な行動が存在するのみである。

この項はまたドイツ的哲学でよく分からない。誤訳が少ないことを祈るばかりである。「愛する自我が愛された自我へと溶けてしまわないようにするためには、私は二重に存在しなければならないであろう」。自我を分裂させて、分裂したものは自我ではないと言っているようなもので、ご苦労様と言う他ない。しかしジャン・パウルの世界が自己愛に満ちていることは、二重自我、仮死、作者ジャン・パウルの登場という仕掛けを見れば、一目瞭然であろう。すでにオットー・ランクが二重自我は死を恐れる自我の原初的自己愛と喝破している。シャルロッテ・フォン・カルプの伝記作家を引けば、「シャルロッテはジャン・パウルの自己愛をすぐに見抜いたけれども、用心することはなかった。彼を見いだした至福は余りに大きかった」[Ursula Naumann:Schillers Königin.insel.S.210]。

ただジャン・パウルの根本には独我論はなく、他者容認があるようである。

「つまり我々は肉体的な腋やかかとのくすぐりを、他人の指に委ねているときにのみ、半ば恣意的に感ずるのに対し、自分の指ではそのようなことは何も感じないし、いや自分の手で他人の指をもって触れても、その[他人の]指を自らの意志で動かしてみさえすれば、単に四分の一の効果しか生じないが、しかしその[他人の]指が、我々の手の中にあっても、自らの意志で動くときには全体的効果が生ずるという事情のことである。人間というものはそれがくっついていてそのもの同様にふざけた代物である」[『美学入門』第三十節]。

その他部分的に面白く感じたところを挙げると、「嫉妬は我々あるいは他人の運命と価値の間の不均衡の感情であり」[135]の箇所。何あれが校長に出世か、ただ愛想笑いだけの奴なのにとギムナジウムのフィクスラインは思うのであろう。彼が嫉妬に敏感なのは次の文に明らかである。「五級教師は単純さからその軽視を自分の教育学的才能に対する嫉妬と見なしていた」[60]。また輪廻についても言及があるが、次の「フェルベル」でも繰り返されている。そこから引く。「この魂が（ピタゴラスの体系によれば）動物や人間を通って大旅行をし、それでも最後の人間の中に入ったとき、すべてのその学校遠足に関してまだ頭に残しているものは、まさにわずかの、この魂が最初の動物に侵入した瞬間に所有していた分だけなのである、つまりただの皆無なのである」[142]。要するに魂は輪廻するが、先の世のことは失念するというわけで、これは正しいとも嘘とも決めつけられない論説である。筆者はニーチェの永劫回帰を思い出すが、思い出たびに、今、永劫回帰してこの説を永劫に反復して思い出しているのであろうかと思ったりするようなものである。

4. フローリアン・フェルベル校長とその一級生達のフィヒテルベルク山地への旅

これについてはまずギュンター・デ・ブロインの紹介を引用する。

＜『ヴッツ』に先駆けて諷刺から物語への過渡的作品として更に学校教師の話がある。『フ

ローリアン・フェルベル校長とその一級生達のフィヒテルベルク山地への旅』で、この中で、ドイツ・プロイセンの学校の歴史が今世紀に至るまでも生み出して来たような、教師の一典型が描かれている。彼の中では、銜学と学者の高慢さとが吝嗇と不寛容と混じり合い、反動的な考え方が世間知らずと臆病、残忍さと混じり合っている。フランス革命の徒をフェルベルは古代ローマ人が反乱奴隷にしたように処分することを欲している。「磔刑、流刑、動物どもの前への投下」によって、外国での兵役に就きたくなくて逃亡した兵の処刑に対して彼はからかいの言葉を投げかけ、生徒達が同情を覚えないようにしている。同情はせいぜい女性に許されるだけで、この女性をいずれにせよ彼は軽蔑していて、それで旅費がなくなったとき、旅館の主人に娘を担保として残しておくことも難くしてしまうのである。彼の最大の自慢は彼の部下の志操で、このためこの歴史的研究に駆られている。「私は半日かけて私の図書館で、当地のギムナジウムの公の教師達についての報告を調べてみたことがある、彼らの中で誰が領主に対して反抗したか、と。しかし無上に嬉しいこととして知らせることができるが、最も偉大な文献学者でも人文学者でも、...それにまた殊に校長から五級教師達（これを含む）に至る当地の教師達の物故者の部門にしろ、決して反乱を起こしたことはなかったのである。男達は決して国父や国母に対する謀反を演じたり、擁護したりしていない。男達は全員勤勉に、病になろうとも、様々なクラスで、八時から十一時に至るまで講義し、確かに共和国を称賛しているが、しかし公然と単に二つの周知の古典の土壤、大地の上の共和国で、それも単にラテン語とギリシア語故のことなのである」>[『ジャン・パウルの生涯』117頁以下参照]。

以上のコメントに尽きるように思われる。ただ若干補足すると、ベーレントも注で述べていることだが、囚人に目撃され、共犯と証言されかねないという不安が語られ、これが『シュメルツレ』でも繰り返されている。

「つまり私は自分が筆を執っている刑法上の回想記の中で、哀れなホーフの学校教師の話を採用しているが、この教師は自分がかつて叱りながら喜捨を渡したある盗人から、ライプツィヒでその仲間であると偽証され、その偽証に基づいてこの正直な学校教師は連行され、ライプツィヒで拷問され、かろうじて絞首台の鳥罟から逃れたのである、と」[158]

<娼婦が私と知り合いであることを誓って申し立てをしないか、乗客の中の悪漢が私や私の癖や偶発事を調べ上げて、拷問されたとき、私をその一味に巻き込みはしないか、
— 誰も保証できないことであった。余所の土地では — 用心から — 私はどこか上の牢獄を長く眺めていたくない、格子の中の悪太郎がただ意地悪さのせいで叫びかねなからである。「その下にいるのは我が輩の仲間のシュメルツレだぞ」と。 — あるいは邪道な刑吏が、上の仲間を私が奪おうとしていると思いかねないからである>[173-4]。

また測量をしながら、喧嘩に至る笑話は、ジャン・パウルらしい銜学と殴り合いの組み合わせで、お馴染みのものである。「私が眠っている仲間の上に、その顔に応用しようと思っている測量紐で屈み込んでいるのを目撃したのである。『ミヒェルよ、誰かがお前の首に紐をかけているぞ』。 — 即刻暴君Bが目覚め、 — 拳の杭打ち機を私の余りに低く覗き込んでいる顔に放ち、 — 別の爪で鉄菱でのように私の長靴を掴んで、その根上げ機でもって私のバランスを崩し、必然的に畦の上へ投げ飛ばし、 — 私は実直な生徒達がこの暗殺者に対し私の加勢をしなかったならば、多分お陀仏となっていたことであろう」[157]。

フェルベルは自分の娘を担保にして、旅費の工面をしている。フェルベル自身の女性観は当時の一般的な男性の男性中心の女性観であろうが、しかしジャン・パウル本人の女性観も、現代の女性研究家に言わせれば、性を「蛇の誘惑」視する旧態依然たるものらしい。

＜最初にシャルロッテがジャン・パウルをこのような不快な見解でびっくりさせたのは、彼の『五級教師フィックスラインの生涯』への第二版の「私の序言の話」に添えられたテキスト『月食』についての手紙であった。贈り物として彼はそれを女性読者としての投影ヨハンネ・パウリーネに語っている。彼女は愛していない男性との結婚を控えていて、それ故詩的慰謝を特に必要としている。勿論必ずしも『月食』は格別慰謝をもたらすものではない。十八世紀の邪悪な精神として誘惑の蛇が登場する。この蛇は無垢な少女達の魂、まだ生まれることなく人間達の母エヴァの許、月の上に安らっている少女達の魂に対して禍々しくこう描くのである、自分は娘達が生まれたら、いつか人生の中で娘達の美德を奪うことになる、と。 （中略）

この感傷的ポルノ的戦慄のメルヘンはシャルロッテには気に入らなかった。彼女の立腹した注釈は、一見したところ単に趣味の悪いものとして苛立たせるにすぎないテキストの内包しているものを明らかにしている。

「申し上げざるを得ませんが、この中には若干の優しい詩的特徴があるものの、しかし全体はキリスト教的カトリック的趣味のものです。私の死ぬ程嫌いな誘惑の話がその中で醜く出現します。お願いです、哀れな者達を大事にして、彼女達の心や良心をこれ以上不安にさせないでください。自然はもう十分に投石刑にあっています。この話題に対する私の考え方は決して変わることがありません」。... （中略）

この序言を印刷しないで欲しいという彼女の嘆願にジャン・パウルは従わなかった。確かに彼女の手紙に印象を受けている。手紙はオットーに宛てて次の注解と共に渡されている。「同封の手紙には彼女の全き、エキセントリックな力が見られる」。しかし彼は彼の美学的生活への彼女の介入に関して一度きっぱりと決定的な意見を言うつもりであった。このことを実際しているが、しかしテーマを無視した敬虔な告白と共に行っている。（「私は多くを犠牲にできます。しかし不死とその希望に対する私の熱望はできません」）。この件での彼の立場は攻撃されやすいもので、腹立たしいことにそう自覚している。「あなたのように見事に健康な性質の者は多分、関連する事柄に同じような意見でしょう。しかし弱い者にとってそれは砒素です」＞[Ursula Naumann:Schillers Königin. S.217ff.]。

参考までに『フィックスライン』の牧歌の末尾の行事をカレンダーでまとめてみる。お産を控えている女性にとっては、何とも窮屈な日程である。産後3日で洗礼というのは早すぎる気がするが、そんな習慣だったのであろうか。

(1974年5月)

Mo Di Mi Do Fr Sa So

1 2 3 4	4日 叙任式（前日ジャン・パウル到着）
5 6 7 8 9 10 11	15日 お産
12 13 14 15 16 17 18	16日 擬宝珠上棟式
19 20 21 22 23 24 25	18日 カンターテ主日（洗礼、フィックスライン命運の日）
26 27 28 29 30 31	25日 ジャン・パウル出発

『シュメルツレのフレッツ紀行』は『フィクスライン』とは違ってジャン・パウルの後期の作品群に含まれるであろう。一八〇七年五月に構想言及の手紙があり、政治状況のせいで発刊は遅れ、一八〇九年二月に勝手な注釈と付録の「悪魔の告解」を付けて出版された。『フィクスライン』を「牧歌」と分類すれば、『シュメルツレ』はベーレントによれば、簡潔に「滑稽譚」[Die Humoreske]となり、「悪魔の告解」も含めて、「彼の時代の象徴的に諷刺的な鏡像」[ein symbolisch-satirisches Spiegelbild seiner Zeit]となっている。『フィクスライン』では作品の外部に存在していたフランス軍（「同じように集まって来るフランス人の武運についての追従的情報」[153]）が、『シュメルツレ』ではすでに内部に存在し、「（「幸い私の向かい側でまさにフランス人の敗北という嘘が陳述された。私の通りの隅でフランス語とドイツ語の布告を見ていたので、即ち戦況について、――つまり劣勢について、通報することなく耳にする者は戦時法廷に立たされるということであったので、覚えの悪くない男として、空耳と共に遁走するに如かずと思い、ただ亭主にだけ何故出て行くのか報告することにした」[187]）、かつシュメルツレは戦争で逃げたとなっている。

『フィクスライン』の「フェルベル」では逃亡兵に関連して、将軍は負けるわけにはいかないだろうが、兵士はさっさと投降するが賢明と述べている。「私が思うに、下々の者は自分の軍事上の誓いに対する違反を少なくとも自分が将軍とかそうした者になるまで延期すべきであろう。侯爵とか将軍にとっては、自分が降伏したらそれは利点はない。降伏とは連隊を失うに等しいことであるからである。これに対し、軽歩兵とか擲弾兵等々にとっては、自分が降伏することは真の利益がある。彼はこのことを通じて、執行する弾の三度当りのより高貴な諸肢体を免れるわけであり、かくていつでも自分の胸と頭蓋とを敵の名誉ある銃弾から、打ち倒されると荣誉札に至る銃弾から守ることになる」[154]。

臆病鬼のシュメルツレの自己弁明は以下の通り。「つまりフレッツでは私が重要な会戦からとんずらした（とそう庶民どもは語っているが）、そしてその後従軍牧師を感謝と勝利の説教のために探したとき、見当たらなかったという不当な噂が広まっているのである。この点の滑稽さは、私が自分の会戦に居合わせたのではなく、会戦から数時間分離れた距離に退却していて、味方が敗北したとき、必然的に私と遭遇するに違いない所にいたと、私が証言すれば、明らかなものとなろう。退却が最も立派になされるのは、――立派な退却というのは戦術の傑作と見なされるもので、――これが立派な秩序、力強さ、確実さと共になされるのは、まさにまだ敗北していない会戦の前に行われるものである」[166]。いずれにせよ戦闘における勇敢さを鼓舞する発想とは遠い、人間的反戦思想に貫かれたもの、遁走を勧める諧謔的闘争[逃走]文と言えるものであろう。

『シュメルツレ』の言動は現代の一般的な神経症の症状に通ずるもので、ジャン・パウルの先見性の一例となるものを含んでいる。「私の空想はすでに子供時分恐るべきもので、牧師が黙した教会の中、引き続き話しかけている最中、しばしば次のような考えに襲われ、「いままさに教会席から、牧師さん、私もここにいますよと叫んだらどんなものだろう」と如実に思い描いて、私は魂消て、外に出なければならなかったものである」[165]。これはベーレントの注によれば、Karl Philipp Moritz:Magazin zur Erfahrungsseelenkunde. 1783からのものらしく、同時にモーリッツの先見性を物語るものであろう。「悪魔の告解」も「私は彼にモーリッツやほとんどすべての心理学者の雑誌からの単に類似した錯覚を思い

出すように頼んだ。そこには多くの病んだ人間が自分を二重化して見たという極めて否定し難い例が載っているのである」「209」とあるように、モーリッツへの言及が見られ、ジャン・パウルとモーリッツの親近性が明白である。また先の強迫観念はシュメルツレでは、
＜私の中でこう疑問を発するに至った。「汝が聖餐を受ける最中、無頼に嘲笑的に哄笑し始めることよりも何か忌まわしいものがあるか」と＞[185]という部分や他の部分で様々に変奏されて出現している。

この「滑稽譚」も臆病鬼の自己弁護を笑って読み、忘れればいい話しであろうが、これらの短編を読む中で、ドイツにおけるルターの存在感の大きさに改めて感銘を受けた。そしてルターという聖職者の政治闘争、ドイツにおける政教分離の不徹底、ルターとヒトラーの類似性に思いが至り、最後のシュメルツレの空気爆発の妄想が原子爆弾に思え、ルターが教皇に対し一線を越えて以来、フランス革命では国王に対し一線を越え、ヒトラーはユダヤ人に対し一線を越え、原子爆弾では日本人に対して一線を越えたのではないかと類推が及んだ。これらを論証するのは至難のことであり、かつただ印象のみを記すのは無責任であるようだが、合理的[科学]思考の追求が人間の幸福と必ずしも結び付いていないことは明瞭であるように思われる。

以上の印象を受ける直接のきっかけになったのは、勝手な注 101)である。「ロードス人がその巨像[コロス]故にコロサイ人と呼ばれるばかりでなく、無数のドイツ人がルター故にルター主義者と呼ばれる」[176]。ナチの時代であれば、ルターの代わりにヒトラーを当てはめれば、一般的なその時代のドイツ人のイメージであろう。

ドイツの政教不分離については次の文参照。「彼は私をこの挿話[アントレ]のせいで、この時代の第一級の神学者と受け取って、戦争を開始しなければならない目に遭ったとき、私からまず判断を取り寄せかねなかった、かつて戦争の指導者達が宗教改革の神学者達からそうしたような按配であった」[101]。

以下ルターの語で検索した箇所を列举する。

「長老は病状の教理問答よりはむしろルターの教理問答を頼りにしていた」[48]。

「しかし我々キリスト教徒はルターの聖書に対して示すことのできる同じようなマソラ学者をどこに有していよう」[50]。

「思うに教皇教会とルター教会の素敵な相違というものは、ルター教会の宗教局はひょっとしたら教師や牧師達から最初の官職の年収のほとんど三分の二も徴収しないということかもしれない、もっともその他は教皇と同じく職が空くことを当てにしているけれども」[75]。

「実際ルターの行状や、彼の卓話、収入、旅行、衣装等については、殊に同時に真なるものでなければならぬとなると、もはや目新しいことは何も述べられません」[80]。

「かくて私はルターの最後の父方の子孫、つまり弁護士のマルティン・ゴットロープ・ルターに関して、彼はドレスデンで開業し、一七五九年当地で亡くなっていますが、特別な宗教改革史の研究開始に挑戦することにしました」[80]。

「夢が覚醒時の反映であれば、忠実な方々よ、貴方らにお尋ねするが、貴方らに私の夢を語ったことをまだ覚えていらっしゃるであろうか、カエサルであれ、アレクサンダーであれ、ルターであれ、恥ずかしいと思わないような夢のことである」[165]。

「あるいはイギリスのジェームズ一世[実はヘンリー八世]のようなもので、この王はむ

き出しの剣に対しては逃走しながら、それだけ一層大胆に全ヨーロッパの前で、本とペンを持って襲って来るルターに向かって行ったのである」[167]。

「ちなみに私はすべての啓蒙化された諸都市に対して、――それらが私の前の立っているように、――私が私の悪魔への信仰、それに私の悪魔への語りかけで、最大のドイツの獅子たるルターと若干の類似性を有していることについて皆目恥ずかしいとは思わない」[194]。

「私は冷たく答えた。この点で彼は私を不当な男と思っているが、しかしすべて霊を見、恐れたというルターとかホップスとかブルータスに私は一層似ているということになろうとも、不当である、と」[195]。

「激しいルターは、彼とは私は比較にならないが、その卓話において告白していないだろうか。自分は怒っているときほど上手に説教し、歌い、祈ることはない、と。――まことに幾多の者を怒りへと刺激するには、彼のことで十分であろう」[198]。

「悪魔が（ルターによれば）神の猿であるとすれば、この政治家様は神の似姿としてのその侯爵の許で、猿の小猿にしか実際なる他できないのでありました」[206]。

『シュメルツレ』における原子爆弾の連想は以下の文参照。

くしかし悪魔がリヒテンベルクの第九巻、それも 206 頁[Vermischte Schriften 1800-06]を私の前で開いたのであった。それにはこう書かれている。「いつか化学者が、我々の大気を一種の酵素によって突然破裂させる手段を思い付くことは有り得よう。かくて世界は没落することになろう」。いや有り得ることだ。地球はより大きな大気球に閉じ込められているので、単に化学的悪漢がどこかの僻遠の悪漢島かニューオランダ[オーストラリア]で大気の破裂手段を発明しさえすれば済む。例えば火薬荷台に対する発火装置に類するものだ。数時間のうちにフレッツや私や我々の喉を途方もなく喘ぎ出す世界嵐が襲うことだろう。私の呼吸やその類は窒素大気の中に拉致され、そもそも万物がそうなることだろう。

――地球は絞首台のある大きな刑場となってしまう、家畜ですらくたばってしまう。害虫駆除剤、南京虫駆除剤、ブラドリーの蟻塚均し、粉末殺鼠剤、狼罾、獣疫保険組合はこの世界の悪性ガス、世界の死滅の中ではもはや格別に必要なものではない。そしてこのサン・バルテルミ虐殺の夜に、忌々しい「酵素」が偶然発明された夜に、悪魔がすべてを掠ってしまうことになろう>[201-2]。

勿論ジャン・パウルは基本的には合理的科学を信奉している。

「私は自分がフランクリン以前の偉大な物理学者であつたら、恥ずかしく思うことだろう」[139]。